

海外果樹農業情報 No. 133

2017-1

海外の果樹産業ニュース 2017 年度上期版

2017 年 9 月

(公財)中央果実協会

[JAPAN FRUIT ASSOCIATION]

本書の内容について、ご質問やお気づきの点がありましたら、
下記あてにご連絡下さるようお願いいたします。

公益財団法人 中央果実協会 情報部

〒107-0052 東京都港区赤坂1-9-13 三会堂ビル

【電 話】03-3586-1381 (代)

【F A X】03-5570-1852

は し が き

果樹農業を取り巻く国際化の進展に伴い我が国の果樹産業は、外国産果実及びその加工品等との競争が激化している状況にあります。このような我が国の果樹産業を取り巻く環境の変化に対応して、当協会では関係機関・団体等からの海外果樹関係の情報ニーズを踏まえ、海外における果実及びその加工品等の生産・流通事情等に関する情報の収集・提供を行うことにより、我が国果樹産業の活性化・振興及び果実の需給・価格の安定のほか輸出の振興にも資することとしております。

当協会では、これまで特定のテーマを対象とした調査報告書、果樹全般についての FAO（国連食糧農業機関）の生産・貿易統計データをもととした報告書を取りまとめ、刊行してきました。

加えて、海外の果樹産業を扱う雑誌、新聞、ウェブサイトから我が国果樹産業に密接に関係する記事や公表資料を翻訳し関係者に提供していますが、この度 2017 年度上期に提供したニュースを取りまとめ刊行することといたしました。

本書が最近の世界の果樹産業事情を理解する上で少しでもお役に立てれば幸いです。

なお、本書の翻訳責任は当協会にあることを申し添えます。

2017 年 9 月

公益財団法人 中央果実協会
理事長 弦間 洋

目 次

1	台湾の核果類事情	1
2	EUの核果類事情	4
3	米国のリンゴ生産予測	11
4	予測よりも更に少ない？EUのリンゴ生産量	12
5	トルコの核果類事情	13
6	オーストラリアの核果類事情	16
7	チリの核果類事情	19
8	世界の生食用ブドウ市場	24
9	ペルーのアボカド事情	27
10	米国のリンゴ生産量は前年対比7%減の予測	29
11	EUのリンゴ、ナシ生産予測	30
12	熱波の南部・東部欧州	32
13	ニュージーランドがカキを中国に輸出	34
14	オーストラリア政府、園芸分野で輸出促進	35
15	ペルーのブルーベリー事情	37
16	スペインのカキ 生産量は少ないが果実は大きい	39
17	EUの学校給食支援	40
18	ゼスプリが米国に新事務所開設	41
19	ワシントン州のサクランボ生産は史上最高か	42
20	世界のリンゴ、ナシ市場	43
21	2016/17年世界のカンキツ市場と貿易動向	47
22	中国の核果類事情	55
23	世界のブルーベリー市場(2)	59
24	ビタミンAを多く含む遺伝子組換えバナナ	62
25	EUがロシアの輸入禁止措置に伴う生産者支援を継続	63
26	米国の有機リンゴ	64
27	カンキツグリーニング病対策に1千万ドルを追加投入	65
28	世界に乗り出すリンゴ新品種コズミッククリスプ	66
29	世界のアボカド市場(2)	67
30	ブラジルのカンキツ事情	72
31	消費の不思議(リンゴ)	77
32	成長を期待するナシ産業	80
33	米国北西部のサクランボ生産見込み	81

34	米国農務省がカンキツの種保全のため冷凍保管	82
35	世界のレモン市場	83
36	オーストラリアがカンキツで日本との関係強化を狙う	86
37	欧州のリンゴシーズンは衝撃的(抜粋)	87
38	世界のバナナ市場	88
39	2015/16年産落葉果樹(リンゴ、生食用ブドウ、ナシ)の世界需給	91
40	リンゴ品種アンブロージアまもなく特許切れ	97
41	世界のマンゴー市場	98
42	米国の2016年有機農産物販売額は8.4%増	102
43	南アフリカの落葉果樹事情	103
44	カンキツグリーニング病に耐性があるマンダリン	108
45	オーストラリアのリンゴ新品種 Bravo が世界へ	109
46	タイ農業者会議が中国への生鮮パインアップル輸出を要請	110
47	世界のパインアップル市場	111
48	チリの落葉果樹事情	114
49	ニュージーランドの落葉果樹(リンゴ・ナシ)事情	119
50	世界のオレンジ市場	124
51	偽物 中国市場で優位に保つためのゼスプリの課題	127
52	ニュージーランドのリンゴ・ナシ生産量は事前予測より減少	128
53	世界のライム市場	129
54	米国北西部のサクランボ収穫予想	132
55	EUが対米カンキツ輸入規制を緩和	133
56	ゴールデンベイからリンゴ新品種が出荷	134
57	世界の生食用ブドウ市場	135
58	ニュージーランド産リンゴのソーニャが中国で販売	138
59	欧州でリンゴ、核果類に霜害発生	139
60	リンゴ新品種ルビーフロストは販売好調でシーズン終了	140
61	2016年カリフォルニア州のブドウ栽培面積	141
62	世界の青果物の貿易動向	142
63	米国の認定有機農業事業者数は増加が続く	143
64	チリは好調の下にサクランボの販売を終了	144
65	中国 大連のサクランボは盛り	146
66	ニュージーランドリンゴのジャズとエンヴィー	147
67	オーストラリア カンキツは収穫が遅れるも収量は平年並	148
68	世界のブルーベリー市場	149
69	2017年の中国リンゴ市場は回復基調	153

70	豊作を期待するカリフォルニア州のサクランボ	154
71	カンキツグリーニング病に対抗する遺伝子組換えウイルス の環境影響評価	155
72	チリ産果実が中国市場で成功する理由	156
73	ペルーの洪水で農業に 6.45 億ドルの被害	158
74	米国北西部のサクランボ収穫はシーズン後半が中心	159
75	世界のリンゴ市場	160
76	米国 有機食品が80%以上の家庭に	164
77	バイテクでカンキツグリーニング病と戦う	165
78	2017年世界のリンゴ競争力比較	167
79	世界のアボカド市場	170
80	米国 生鮮・有機ゴジベリー(クコ)の生産	174
81	韓国のブドウは巨峰とシャインマスカットにシフト	175
82	欧州市場はパインアップルの供給不足	176
83	カリフォルニア州カンキツグリーニング病に対応した規制を開始	177
84	有機褐変防止パウダーでカットリンゴの寿命を延長	178
85	米国では有機農産物に占める果物、野菜の割合が多い	179
86	チリのサクランボ輸出量は 14%増	180
87	世界のナシ市場	181
88	ニュージーランドのキウイ生産者が賦課金継続に賛成	184
89	ペルー 豪雨と洪水でインフラ被害	185
90	果実を巡る米国とメキシコの関係	186
91	リンゴ新品種 KORU が米国向け初輸出	187
92	カリフォルニアではナツメヤシの消費が増加中	188
93	中国のリンゴ市場は徐々に回復	189
94	ブラジルでカンキツグリーニング病により中小農場が減少	190
95	トルコでリンゴ生産が拡大中	191
96	高温で収穫が集中するチリ	193
97	世界のマンダリン市場	194
98	果樹収穫ロボットで労働力削減	197
99	キウイベリーは小さいけど人気は絶大(北米)	198
100	スペインで専門家がカンキツグリーニング病を警告	199
101	オーストラリアのリンゴ生産会社アジアで新品種を販売	200
102	米国の農業政策に関する議論	202

1. 台湾の核果類事情

米国農務省海外農業局 GAIN レポート (2017年8月30日)

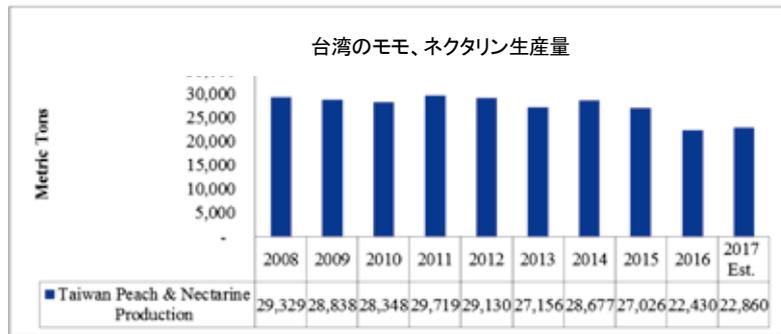
モモ、ネクタリン

栽培

台湾農業会議所によると、2017年の栽培面積は2,162ha で前年をやや下回る見込みだ。栽培面積は2008年以降連続して減少しているが、これは労働コストの上昇と後継者不足によるものである。

生産

台湾農業会議所によると、2017年の生産量は、好天に恵まれたことから22,860トンと前年を2%上回ると予測している。



年	ha
2008	2772
2009	2542
2010	2404
2011	2375
2012	2373
2013	2314
2014	2307
2015	2278
2016	2185
2017 推計	2162

ほとんどのモモ、ネクタリンは台湾の北部と中部で生産され、特に桃園は主要な産地である。亜熱帯気候はモモ、ネクタリンの生産に適しているが、近年は温暖化、降雨量の変動が生産に支障を及ぼしている。

消費

国内消費に占める輸入の割合は、2016年は47%であり、2015年の37%から増加している。消費者は果物を旧正月(通常2月)、端午節(通常6月)、中秋節(通常9月)に贈答用として友人や親戚に送ることが多い。その際、輸入品のモモ、サクランボ、リンゴは贈答用として人気がある。日本産のモモは高級品とされており、贈答用に詰め合わされ販売されている。

台湾産のモモには2種類ある。一つはハニー・ピーチで、低温要求性の高い品種であり、山間部で栽培され収穫時期は7月から8月である。香りがあり外観も良いのでプレミアム果実と見なされており、通常のモモに比べて10倍高い価格で販売されている。低地で栽培されているモモは低温要求性が小さく、甘さも少なく固い。このモモは通常4月から6月に収穫される。

台湾のモモ、ネクタリン統計(在台湾 農務省 農務官)

	2015	2016	2017
栽培面積(ha)	2,278	2,185	2,162
収穫面積(ha)	2,254	2,165	2,162
結果樹数(千本)	794	762	765
未結果樹数(千本)	9	7	5
総樹数(千本)	803	769	770
生産量計(トン)	27,026	22,430	22,860
輸入量(トン)	16,108	19,761	20,000
総供給量(トン)	43,134	42,191	42,860
輸出量(トン)	0	0	0
国内消費仕向量(トン)	43,134	42,191	42,860
加工仕向量(トン)	0	0	0
総出荷量(トン)	43,134	42,191	42,860

2016においては、台湾は米国のモモ、ネクタリンの輸出先としては第3位であった。米国産の核果類は、魅力的な外観、甘さ、香りから台湾の消費者に受け入れられている。台湾の卸売業者、小売業者からも核果類は収益性、多様性の面から評価されている。多くの輸入業者は、台湾の消費者向けだけでなく、中国本土

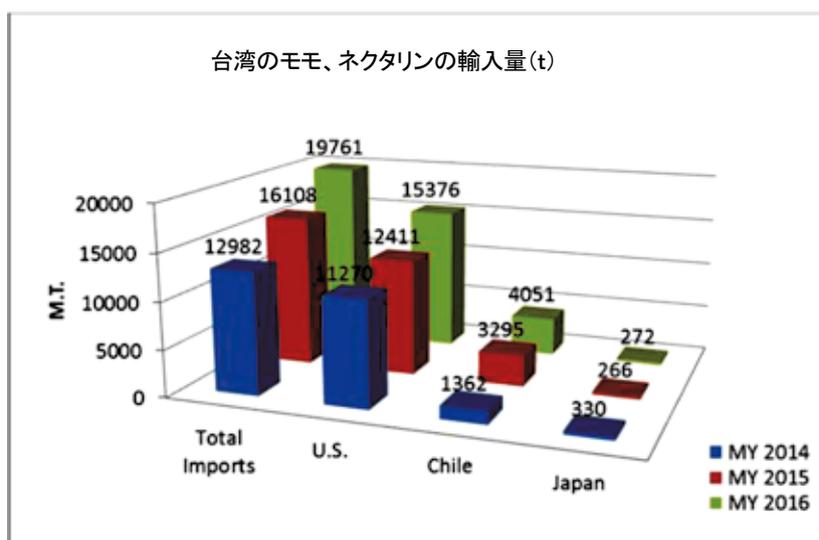
や近隣のアジア諸国の消費者向けに購入している。

2016年の台湾の輸入量は19,761トンで前年を23%上回った。米国が最大の輸入先で、75%以上のシェアを占めている。チリが第2位を占めているが、価格競争力があること、チリ産の果実が輸入業者に受け入れられるよう努力していることから、次第にシェアを拡大している。2017年の輸入量は2万トンと推測される。

なお、中国本土からのモモ、ネクタリンの輸入は植物検疫上の理由から認められていない。

モモ、ネクタリンの輸入量と米国のシェア

	全輸入量		米国からの輸入量		米国のシェア
	トン	百万ドル	トン	百万ドル	%
2014	12,982	36.9	11,270	30.7	86
2015	16,108	42.7	12,411	32.5	77
2016	19,761	49.4	15,376	38	77



マーケティング

生鮮果実は伝統的な生鮮市場の他、人気のあるハイパーマーケットのような近代的な施設で購入できる。小売チェーンでは、米国産果実のプロモーションのために、生鮮市場よりも安い価格で販売することもある。とはいえ、伝統的生鮮市場は、今後とも果実販売に重要な役割を果たすと見られる。また、店舗を持たない販売方式であるホームショッピング、E-コマース、テレビ/インターネットショッピングも人気が出ており、新たな流通ルートへ投資が行われている。消費者が輸入果実を購入する決め手は、価格、栄養、外観、味、原産国である。

サクランボ

生産

台湾は亜熱帯性気候であり、土壌も栽培に適さないことから、サクランボの生産は行われていない。このため、需要に対応するためには輸入に頼っている。

台湾のサクランボ統計(在台湾 農務省 農務官)

	2015	2016	2017
栽培面積(ha)	0	0	0
収穫面積(ha)	0	0	0
結果樹数(千本)	0	0	0
未結果樹数(千本)	0	0	0
総樹数(千本)	0	0	0
生産量計(トン)	0	0	0
輸入量(トン)	9,252	10,908	12,000
総供給量(トン)	9,252	10,908	12,000
輸出量(トン)	0	0	0
国内消費仕向量(トン)	9,252	10,908	12,000
加工仕向量(トン)	0	0	0
総出荷量(トン)	9,252	10,908	12,000

消費

台湾は米国から見て第5位の輸出先である。台湾の消費者は1箱9～10列のようなサイズの最も大きいサクランボに対してプレミアム価格を支払うことから、米国にとっては特に重要な市場である。サクランボは他の果実と違って、特別な輸入果実と認識されている。また、魅力的な外観と際だった風味から人気がある。消費者は濃赤色のサクランボの方が、レイニアのような淡赤色のものより、甘く、より風味があると考えている。このため、輸入されている品種はビングである。

貿易

2016年の台湾のサクランボ輸入量は10,908トンで、前年を18%上回った。輸入先は米国が最も多く、57%のシェアを占め、次いでチリ(19%)、ニュージーランド(10%)、カナダ(8%)、オーストラリア(5%)の順である。

サクランボの輸入需要は、他の生鮮果実の供給に依存している。消費者にとっては、国内産、輸入品とも生鮮果実の選択肢の幅が広いからである。サクランボの消費は、ブドウ、バナナ、スイカ、グレープフルーツ、オレンジのような国産果実との競争にさらされているため、減少することも考えられる。これらの果実はサクランボよりも安い価格で購入できるからだ。このため、輸入業者は米国産サクランボを注文する際、台湾消費者にとって価格が相対的に高い場合は慎重になる傾向がある。

サクランボの輸入量と米国のシェア

	全輸入量		米国からの輸入量		米国のシェア
	トン	百万ドル	トン	百万ドル	%
2014	11,744	92.3	6,581	48.2	52
2015	9,252	75.4	4,657	30.7	40
2016	10,908	87.4	6,309	43.8	50

マーケティング

サクランボは季節的な果実であり、特に夏に多く消費される。消費者は輸入されたサクランボに対して特別なものと認識している。しかし、台湾がニュージーランド、チリ、オーストラリア等南半球諸国との間で貿易関係を改善したことから、現在では消費可能な期間が拡大されている。

サクランボはデリケートで腐敗しやすい果実であることから、鮮度を保つためのコールドチェーン技術が必要である。このため、果実を適切に管理することが可能な大規模な業者により取扱われている。

政策(植物防疫上の要件)

核果類の輸入検疫は、保健福祉部(省)(MOHW)の下部機関である台湾食品医薬品局(TFDA)により行われている。主な制度は、食品衛生法、食品安全管理規則、残留農薬基準の3つである。核果類に関しては、現在いくつかの国に対して輸入の制限を行っている。米国からの輸入に当たっては、米国農務省動植物検疫局が発行する検疫証明が必要である。

台湾は残留農薬に関するモニタリングを行っているが、残留基準は事前の通告無しに当局により変更されることがある。米国の輸出業者としては、台湾の基準が米国のものと異なり、国際基準とも異なっていることに留意する必要がある。また、輸入禁止を通告されないようにするためには、輸出業者は台湾の輸入業者と密接な関係を構築することが重要である。

TFDA は食品安全検査における責任機関でありランダム検査を実施している。MOHW は残留農薬基準に関する再評価等を実施している。在台湾の米国機関や米国の業界代表部は残留農薬の評価等に関する業務に際し、台湾当局に協力している。

2. EUの核果類事情

米国農務省海外農業局 GAIN レポート (2017年8月28日)

モモ、ネクタリン

EU のモモ、ネクタリンの生産は、多い順にスペイン、イタリア、ギリシャ、フランスである。ハンガリー、ポルトガル、ブルガリア、ポーランドでも生産が行われている。かつてはイタリアが最大の生産国であったが、現在はスペインが最大の生産国であり、輸出国になった。これは、早生種の拡大、生産性の高い品種の導入による。ギリシャはEUの中で加工品生産が最も多い。

栽培

2016/17年の栽培面積は22.9万 ha であり、2017/18年の栽培面積は21万 ha と推測される。近年、生産性の高い新品種が導入され、品種が多様化し、収穫時期も拡大している。

スペインでは競争力を獲得するため、栽培面積を拡大している。低温要求性の少ない品種を導入することで南方に産地を移動し、早期栽培を行っている。産地は、地中海に沿ったカタルーニャ、アラゴン、ムルシアに集中している。アンダルシアとエストレマドゥーラも重要な産地である。スペインの栽培面積は約8.6万 ha である。

イタリアの栽培面積は、6.9万 ha であるが、過去2年間減少を続けている。エミリア・ロマーニャ州、ピエモンテ州ではプラムボックスウイルスにより栽培面積が減少している。ヴェネト州ではかつて栽培面積が大きく減少したが現在は安定している。北部(特にエミリア・ロマーニャ州、ピエモンテ州)及び南部(カンパニア州)では、核果類は地域の中で主要な作物となっている。イタリアの収穫期は6月と7月である。

ギリシャの生産者の規模は大きくても5ha であり、他の EU 諸国や米国に比べると小さい。業界の調べによると栽培面積は約4.8万 ha である。主要な産地は北部ギリシャに位置する中央マケドニアの4地域(イマチア、ペッサ、ピリア、コザニ)、中央ギリシャのテッサリアにあるラリッサの地域である。主要な収穫期は6月と7月である。

フランスでは、プラムボックスウイルスによる被害と厳しい経済情勢により、栽培面積は減少を続けており、現在は9,000ha である。

ハンガリーの栽培面積は6,600ha であり、大部分は南部ハンガリー平原に位置している。植栽密度は低く(350-500本/ha)、栽培面積の40%は樹齢が15-24年である。毎年100-150ha が改植されている。品種は Redhaven が最も多く16%を占め、次いで Suncrest が10%、Champion が7%である。Dixired、Early Redhaven も人気のある品種である。

ポーランドでは、経済的な理由から2015年、2016年に栽培面積が7.4%減少し、2,500ha となった。

生産

2017/18年の EU の生産量は400万トンで、前年に比べて6%増加すると予測される。これは以下の表の通り主要な生産国で生産が増加するためである。

	2015/16	2016/17	2017/18
スペイン	1,581,510	1,475,849	1,487,444
イタリア	1,408,504	1,262,127	1,362,749
ギリシャ	777,160	788,120	910,000
フランス	217,146	207,004	214,800

米国農務省海外農業局

スペイン

スペインが EU の最大の生産国になって4年がたつ。開花及び着果が良好であったこと、新品種が投入されたことにより、早生種、中生種で生産が増加している。新品種への転換が進んでいることでスペインのモモ、ネクタリン生産は大変有利に推移している。新品種は、より香りの良いもの、着色が良いもの選ばれている。

スペイン農業漁業食料環境省の公式数字によると、2017/18年の生産予測は約148.7万トンであり、EU

の生産量の40%を占めている。これは、前年よりも0.7%の増加であり、天候に恵まれたことによる。また、品質、果実の肥大も良好である。内訳は、モモは916,850トンで前年を2.5%下回り、ネクタリンは570,594トンで前年を6.4%上回る見込みである。

イタリア

2017/18年の生産量は前年を8%上回ると予測される。これは南部(モモ+15%、ネクタリン+19%)で生産が増加するため、北部(モモ-3%、ネクタリン-8%)の減収を補うからである。モモの生産量は589,342トン(+10%)で、ネクタリンは688,621トン(+5%)、粘核性のモモは84,786トン(+24%)である。果実の品質は優れており、肥大は良くないものの糖度は高い。

ギリシャ

2017/18年の生産量は、着果期に天候に恵まれたため、前年を15.5%上回る予測である。4月に発生した霜害は、他の果樹に大きな被害があったが、モモ、ネクタリンには影響がなかった。モモは前年を17%上回る予測であるが、ネクタリンは7%増加(約15万トン)する見込みであり、粘核性のモモは新規植栽園が結果樹齢に達することから25%増加(約40万トン)すると予測される。

フランス

生産量は、春の気象条件に恵まれたことから、前年を4%上回り、過去5カ年平均を5%上回ると予測される。生産量の伸びが小さいのは面積が減少しているためである。

ハンガリー

春先の霜害による影響は少なかったものの、7月の記録的な熱波と干ばつにより果実サイズが小さくなり生産に影響が出ている。2017/18年の生産量は4万トンと予測される。

ポルトガル

ポルトガルの産地は内陸部に位置している。公式データによると、2016/17年のモモの生産量は35,180トンであるが、2017/18年も同程度と見込まれる。ネクタリンの生産量はごくわずかである。

ブルガリア

2017/18年の生産量は34,000トンと見込まれる。

ポーランド

2017/18年の生産量は、春の開花期に襲われた霜害で大きな被害を受けたことから81%減の2,000トンと予測される。ここ数年モモの収益性は低下しており、2015年にはドルヌィ・シロンクス県で最大の果樹園が廃業した。ポーランドのモモの生産者にとっての主要な問題は、土壌水分が慢性的に欠乏していることと灌漑への投資のための資本が不足していることである。モモの価格の低迷もあり、他の果樹に転換する生産者もいる。2017/18年の被害で、モモの栽培面積は更に減少すると予想される。

消費

2017/18年の生鮮モモ、ネクタリンの域内消費量は、若干増加して300万トンと予測される。加工は、前年より供給量が増加することと生鮮果実の価格の低下から、前年を13%上回ると見込まれる。

イタリア、スペイン産のモモ、ネクタリンは生鮮果実として消費される。南欧の消費者は大きく、甘く、柔らかい果実を好むが、北欧の消費者は小さく、少し酸味があり、歯ごたえのある果実を好む。嗜好の違いがあったとしても、業界としては夏果実であるモモ、ネクタリンの消費拡大を課題としている。

ギリシャではネクタリンは生鮮果実として消費され、離核性のモモも生鮮で消費されるが、粘核性のモモは主に加工に向けられる。

フランスでは、晩春から夏にかけての天候が順調であったために消費は若干増加すると見込まれる。

ハンガリーでは年間の果実消費量は一人当たり37.5~48.5kgであるが、この中で核果類は大きな割合を占めている。

貿易

EUではモモ、ネクタリンの輸出量は輸入量を上回っている。

輸入

EU の主な輸入先は南アフリカとチリであり、輸入量の半分以上はシーズンが逆となる南半球からである。2016/17年の輸入量は31,172トンで輸入額は8,200万ドルであった。生産量が減少したことから輸入量は前年を10%上回った。2017年の上半期は、チリとトルコからの輸入量が減少し、前年を14%下回っている。2017/18年全体を通してみると、EU 域内での生産量が増加していることから輸入は減少すると見込まれる。

EUのモモ、ネクタリン輸入状況(t)

輸入先国	2014/15	2015/16	2016/17
南アフリカ	8,997	8,881	11,327
チリ	4,344	9,924	10,182
モロッコ	5,279	4,791	3,626
トルコ	1,679	1,580	3,363
その他	5,791	3,054	2,674
合計	26,090	28,230	31,172

GTA

輸出

2016/17年の EU の輸出量は225,822トンで輸出額は1億6,400万ドルであった。前年に比べ輸出量は24%減少し、輸出額は17%減少した。ロシアの輸入禁止措置の影響で、2016/17年の輸出額は、2年前の2914/15年から1億7,100万ドル減少している。2016/17年の輸出先は、ベラルーシが最も多く、次いでスイス、ウクライナであった。セルビアへの輸出は前年を257%上回ったが、スペイン、ギリシャからの輸出によるものである。

域内では、スペイン産果実が高品質で早期に収穫できることから市場を凌駕している。2016年のスペインの輸出量は822,646トンで、うち94%がEU 域内に輸出されている。主な輸出先はドイツ(219,629トン)、フランス(141,291トン)とイタリアである。スペインのロシアによる輸入禁止措置の影響は、EU 域内への輸出、EU 以外の市場(スイス、ブラジル)への輸出で埋め合わされている。なお、2016年7月にスペインから中国への輸出が解禁された。

2016年のイタリアの輸出量は252,591トンで、6%減少した。主な輸出先であるドイツへの輸出が減ったためである。一方、2016年の輸入量は101,654トンで前年を10%下回った。輸入の約83%を占めるスペインからの輸入量が11%減少したためである。

2016年のギリシャの輸出量は169,264トンであり、主な輸出先はルーマニア、ブルガリア、ドイツ、ウクライナであった。また、セルビアへの輸出が300%増加し、セルビアへの最大の輸出国となった。輸入量は2,670トンで主にブルガリア、スペインが輸入先である。

フランスは輸入が多く、輸入量は輸出量の5倍である。スペインからの輸入が90%を占めている。また、EU 域外ではモロッコが最大の輸入先である。輸出先はベルギー、スイス、ドイツである。

2017年の上半期の EU の輸出量は前年に比べて22%増加した。EU 域内の生産量が前年より多い見込みであるため、2017/18年の輸出は通常年の輸出量に回復する可能性がある。

EUのモモ、ネクタリン輸出状況(t)

輸入先国	2014/15	2015/16	2016/17
ベラルーシ	71,042	158,682	99,281
スイス	29,181	32,150	29,771
ウクライナ	37,828	15,838	21,774
セルビア	2,598	4,021	14,352
ブラジル	11,704	10,839	11,568
ノルウェイ	10,136	9,821	6,859
その他	194,509	65,326	42,216
合計	356,998	296,677	225,821

GTA

EUのモモ、ネクタリン統計(在EU諸国 米国農務省 農務官)

	2015/16	2016/17	2017/18
栽培面積(ha)	231,930	229,423	228,840
収穫面積(ha)	212,942	210,844	210,688
生産量計(トン)	4,042,754	3,848,242	4,085,993
輸入量(トン)	28,230	31,172	28,000
総供給量(トン)	4,070,984	3,879,414	4,113,993
輸出量(トン)	296,677	225,822	298,000
域内消費仕向量(トン)	3,021,614	2,903,530	2,962,707
加工仕向量(トン)	707,693	725,062	823,286
総出荷量(トン)	4,070,984	3,879,414	4,113,993

年産は1月→12月

サクランボ

EUのサクランボ生産の主産国はポーランド、イタリア、スペインである。かつてはドイツが第4番目の生産国であったが、近年、ギリシャ、ハンガリーが追い抜いた。ポーランドはEUで最大の加工品生産国で、生産量の75%を加工に向けている。スペインは収穫期が早い利点を活かし、最大の輸出国である。一方、イタリア

は最大の生鮮サクランボ消費国である。

栽培

2017/18年の栽培面積は、EU全体で15.5万 ha と推測される。

生産

2017/18年の生産量は、576,346トンで前年を21%下回ると推測される。これは2年連続の減少であり、イタリア、スペインで増加するものの、ポーランド、ドイツの減少をカバーできないためである。

ポーランド

2017年は核果類全般で昨年に比べて大きく生産量が落ち込むが、サクランボは4月中旬、5月の霜害で最も被害が大きかった。夜間に遭遇した突然の霜害により、開花期に大きなダメージがあったためだ。過去数年にわたる収益性の低下で、多くの果樹園では病虫害に対する対応も不十分である。長期に渡る経済情勢の悪化で、サクランボの栽培面積は更に減少することが予想される。

生産量の減少と生産コストの上昇により、加工業者による酸果の処理量は前年を64%下回ると見込まれる。

イタリア

イタリアの2017/18年の生産量は、105,000トンと前年を10.6%上回ると予測される。これは、開花期及び着果期に天候に恵まれ、特に生産量の30%を占めるプツリャ州で良好であったためである。果実の品質は良好である。栽培品種は、主に Bigarreau、Giorgia、Ferrovia である。主な産地はプツリャ州、カンパニア州、エミリア・ロマーニャ州であるが、トレント自治県でも植栽が進んでいる。

スペイン

スペイン農業漁業食料環境省によると、2017/18年の生産量は、100,946トンで前年を16.5%上回ると予測している。主な産地はエストレマドゥーラ州で、生産量の35%を占めている。次いでアラゴン州が20%を占めている。

スペインでは4月の下旬から収穫が始まり、8月中旬まで続く。主な品種の一つはナポレオンで生食用とジャム用に向けられる。Ambrunesa は晩生種でパリパリした食感が甘い。Burlat は早生種で収量が多く、赤くジューシーで甘い。その他、新しい品種としては、Starking、Lapins、Summit、Vittoria、Van (California)、Picota、Sandy が植栽されている。酸果の品種は、Richmond、Montmorency、Morello である。

ギリシャ

2017/18年の生産量は、前年を13.8%下回る予測である。これは、開花期の天候が不順で着果が悪かったためと収穫期の降雨による。北部ギリシャのペラ、イマティアが主な産地である。

ハンガリー

サクランボはハンガリーの果実全体の10%を占めている。2014年以降、酸果の生産量が増加しているが、生産量は年による変動が大きい。

2017/18年の生産量は、晩春の霜害により約7万トンと予測される。4月初旬は順調であったが、その後霜害に何度も遭遇し、強風や湿潤な天候の影響で開花期に被害を受けた。開花期間が異常に長く続き、授粉も不順であった。このようなことがあったため、果実の大きさが不揃いで、落果も通常より多かった。甘果の生産量は、霜害と落果があったが、例年と同程度の1.1万トンと見込まれる。品種はハンガリーで育成された Carmen、Rita、Vera などが人気である。主な産地は、バーチ・キシュクン県、サボルチ・サトマール・ベルグ県である。

ドイツ

2017/18年の生産量は、2.6万トンと前年を43%下回る予測である。平均収量を下回るのは3年連続であるが、今年の減収は、4月中旬に増遇した霜害によるものである。加えて酸果の栽培面積は引続き減少を続けている。過去10カ年で酸果の栽培面積は2006年の4,200ha から2016年には2,010ha に減少している。これは、酸果では他の EU 諸国との競争が激しいからである。一方、ドイツでは大部分の果実が生鮮で消費されるため、甘果の競争力は強い。消費者は高くても自国産のサクランボを選択するからだ。

フランス

2017/18年の生産量は、好天に恵まれたことから、生産量が落ち込んだ前年に比べて増加する見込みだ。フランスでは老木樹が計画的に改植されていないために栽培面積は減少を続けている。生産者としては、病

害抵抗性品種がないことと、生産コストが高いことに不満を持っている。

主産地のフランス南部では病虫害が問題であり、特にアウトウショウジョウバエ、モニリア病が深刻である。フランス政府はアウトウショウジョウバエの殺虫剤であるジメエートの使用を禁止したため、栽培面積の減少に拍車がかかる可能性がある。

ブルガリア

2017/18年の生産量は、不作であった前年よりは3%増加するものの、悪天候の影響はまぬがれない。前年よりは回復するものの、豊作であった2014年には及ばない水準だ。

ポルトガル

2017/18年の生産量は、不作であった前年から回復する見込みである。

EU主要国のサクランボ(甘果異及び酸果)生産量(t)

	2014/15	2015/16	2016/17
ポーランド	220,000	248,600	90,000
イタリア	110,723	94,888	105,000
スペイン	94,143	86,700	100,946
ギリシャ	88,370	98,570	85,000
ハンガリー	76,792	72,700	70,000
ドイツ	48,564	45,342	26,000
ブルガリア	52,848	42,032	43,200
フランス	41,726	33,991	36,200
ポルトガル	17,910	7,000	20,000

米国農務省海外農業局

消費

2017/18年の域内生鮮果実の消費量は39.1万トンと、前年を下回ると予測される。同様に加工仕向量もポーランドで大きく減少することから前年の61%となると予測される。

甘果は季節性の高い果物である。一方、酸果は通常加工処理される。酸果は、冷凍果実、濃縮果汁、ジャム、マーマレードとして利用される。スペイン、ポルトガル、フランス、イタリア、ギリシャでは大部分が生鮮果実として消費され、ごく少量が加工に回される。

ドイツでは生鮮果実は季節の果物として、7月、8月の消費時期まで保存されスーパーで販売される。一方、モモはドイツでは生産が困難であるが、年間を通して貯蔵され、消費される。このため、一人当たり消費量は、サクランボが2.2kgに対し、モモは3.7kgと多い。消費者は果実サイズの大きいサクランボ(28mm以上)を好むため、小さい果実は大きく値引きされる。

ハンガリーでは果実の消費量はEUの平均より少ない。大部分の果実は生鮮として輸出されるか、加工に回される。

貿易

2017/18年は、生産量が少ないために、EU28カ国では輸出量よりも輸入量が多くなると見込まれる。これは前年と同様である。最大の輸入先は世界最大の生産国のトルコである。米国は非EUの中で4番目に多い輸入先国であったが、現在は大幅に輸入量が減少している。この理由は、フランスが輸入規制を延長し(少なくとも2017年12月31日まで)、殺虫剤ジメエートを使用している国からの輸入を禁止したためである。この影響で、米国、カナダ、トルコはフランスへの輸出を行うことができなくなっている。

EU各国の輸出先の大部分はEU域内であるが、EU以外の輸出先としては多いのはベラルーシ、セルビアである。

輸入

EU28カ国の2016/17年の輸入金額は2億300万ドルで前年に比べて51%多い。輸入量は57,697トンで前年より57%多い。

グローバル・トレード・アトラス(GTA)によると、2016/17年の米国からの輸入量はわずか423トンで前年よりも47%減少した。輸入金額は300万ドルで、2014/15年に比べると1億ドルも減少している。また、2017年上期の米国からの輸入量は前年同期に比べて74%減少している。

ポーランドでは、国内の供給不足と高価格により、2017年の輸入量は相当増加すると見込まれる。ポーラ

ンドの輸入先国は、伝統的に、ハンガリー、クロアチア、セルビア、トルコである。2017年の輸出入価格は上昇するとみられる。

フランスのサクランボの貿易収支は赤字である。輸入先は大部分が EU 域内(スペイン、ドイツ)である。米国は、ジメエートによる輸入禁止措置が講じられる前は、EU 以外の輸入先としてトルコ、チリに次ぐ第3位の位置づけであった。かつては、EU からの供給が少なくなる7月～9月に米国から航空便で輸入され、主にレストランが購入していた。

ドイツのサクランボの輸入量は、中国、ロシアに次いで世界第3位である。2014年から2016年にかけては、国内消費量の54～68%が輸入品であった。輸入量は年間4.5万トンから7万トンの間を変動している。EU 域内の輸入先は、甘果がオーストリア、イタリア、スペインで、酸果はポーランド、チェコである。EU 域外からの輸入は甘果ではトルコ、酸果ではセルビアである。2017年はドイツの生産量が大幅に減少するために、トルコ、チェコ、スロバキアからの輸入が多くなると予想される。

イタリアの輸入量は、2015/16年に12,895トンであり、前年を46%上回った。主な輸入先はスペイン、トルコ、ギリシャであった。同年にスペインは949トンを入力し、前年より40%減少した。輸入先はチリ、アルゼンチンであった。

2017年上半期の EU28 カ国の輸入量は前年に比べて35%減少した。2017/18年を通して減少が見込まれる。

EUのサクランボ輸入状況(t)

輸入先国	2014/15	2015/16	2016/17
トルコ	25,294	28,284	43,168
セルビア	6,834	2,106	8,733
チリ	4,940	2,991	2,655
アルゼンチ	687	928	1,088
マケドニア	635	589	1,078
米国	2,155	795	423
カナダ	1,064	662	278
その他	728	370	274
合 計	42,337	36,725	57,697

GTA

輸出

2016/17年の輸出金額は3,500万ドルで前年を32%下回った。輸出量は、25,076トンで前年を47%下回った。EU28カ国の主な輸出先は、ベラルーシ、セルビア、スイスであり、ロシアへの輸出は、同国の輸入禁止措置により2年連続して皆無に等しかった。ロシアへの輸出停止による損失は4,100万ドルに相当する。セルビアへの輸出は2年連続して大幅に増加しており、主な輸出国はギリシャ、ハンガリーである。

ポーランドの2016/17年の輸出量は、前年に比べて11%減少した。2016年の生鮮甘果、酸果の輸出量は、EU 域内への輸出を含め16,388トンであり、輸出金額は1,510万ドルと前年を3%上回った。輸出量は減少したが、金額では上回る結果となった。ポーランドの輸出先は過去3カ年で変化をしている。2014年8月にロシアが輸入禁止措置を講じるまでは、酸果、甘果ともロシアが最大の輸出先で、全体の60%を占めていた。2016年には主な輸出先は EU 域内へ変わり、ドイツが最大となった。2016年にはドイツが酸果の最大の輸出先となっており、ベラルーシがロシアに代る甘果の輸出先となっている。2017年のポーランドの輸出は、酸果、甘果を合せて2016年に比べて80%減少すると見込まれる。国内の供給量不足と高価格のため、従来のポーランドからの輸出は他の国に代替されるとみられる。

イタリアとスペインはEU域内の輸出に焦点を置いている。2016/17年のイタリアの輸出量は、5,111トンで前年に比べて53%下回った。これは主な輸出先であるドイツ(輸出全体の45%を占める)への輸出が58%減少したことが主な理由である。

スペインの輸出量は23,827トンで前年を11%下回った。主な輸出先は英国、イタリア、フランスである。

2016/17年のギリシャの輸出量は16,776トンで、主な輸出先はオランダ(3,226トン)、セルビア、ブルガリアである。

ハンガリーでは酸果の販売先は主に缶詰業者で、少量が冷凍工場にも販売され、一部が生鮮として輸出されている。ハンガリーは EU の中でも最大の缶詰輸出国である。2016/17年は、輸入は無視できる程度で

あるが、輸出は19,950トンで前年を13%下回った。主な輸出先であるドイツへの輸出が8%減少したことが大きい。ロシアはかつて第2の輸出先であり、3,300～5,800トンの酸果が輸出されていた。現在ではロシアに代ってセルビアへの輸出が増加している。

EU28カ国の2017年上期の輸出量は、前年に比べて14%増加しており、金額では24%増加している。

EUのサクランボ輸出状況(t)

輸入先国	2014/15	2015/16	2016/17
ベラルーシ	6,681	27,560	13,235
セルビア	414	1,881	5,150
スイス	3,579	2,889	3,071
その他	28,076	15,260	3,620
合 計	38,750	47,590	25,076

GTA

EUのサクランボ統計(在EU諸国 米国農務省 農務官)

	2015/16	2016/17	2017/18
栽培面積(ha)	155,466	156,130	155,455
収穫面積(ha)	148,953	149,353	147,278
生産量計(トン)	751,076	729,823	576,346
輸入量(トン)	36,725	57,673	50,000
総供給量(トン)	787,801	787,496	626,346
輸出量(トン)	47,590	25,076	28,000
域内消費仕向量(トン)	424,516	423,816	391,116
加工仕向量(トン)	315,195	338,104	206,730
総出荷量(トン)	787,801	787,496	626,346

年産は1月→12月

3. 米国のリンゴ生産予測

The Packer 電子版 (2017年8月25日)

シカゴ発:

米国リンゴ協会は、2017/18年産のリンゴ生産量を2億4,830万箱(1箱42ポンド)と予測した。これは前年を8%下回り、過去5カ年平均と同じ数字である。

これを受け、「今年のリンゴ生産は楽観的に考えることができる」とニューヨーク州 Geneva の Red Jacket Orchards の共同経営者は語っている。

今回の予測は、数週間前に米国農務省が公表した予測値よりも、わずかに40万箱少ない数値であった。この予測は、8月24から25日にシカゴで開催された米国リンゴの展望及び市場会議の最終日に公表された。

ワシントン州は1億5,950万箱で、過去5カ年平均よりも1%上回るが、前年よりも8%少ない予測である。
ニューヨーク州は2,800万箱で、過去5カ年平均を1%上回り、前年と同程度の予測である。
ミシガン州は2,030万箱で、過去5カ年平均を12%下回り、前年より27%少ない予測である。

全般的に概観すると、東部諸州では前年を8%上回り、中西部では10%前年を下回り、西部では9%前年を下回るということである。

4. 予測よりも更に少ない？EUのリンゴ生産量

FreshFruitPortal 電子版 (2017年8月22日)

イタリアの果樹生産会社VOGグループによると、2017/18年は欧州のリンゴ生産量が大きく落ち込むために、前年に比べて市場環境は好転するとのことだ。

グループによると、昨シーズンは豊作で生産量は62.8万トンであったが、販売は過去数年見られた要因により「厳しい環境」であったという。つまり、ポーランド産のリンゴが、ロシアの輸入禁止措置及び北アフリカの政治的、財政的不安定により、欧州市場に溢れたためである。

しかし、店舗での販売が終了するにつれ、今年の春先から市場価格は上昇してきた。この原因は、リンゴの開花期に遭遇した霜害により、欧州の多くの産地で被害がでたとの信頼できる情報が広まったためとのことだ。

8月初旬に、世界リンゴ・ナシ協会(WAPA)は、春の霜害の結果、EUのリンゴ生産が昨年より21%減少し、生産量は930万トンとなるとの予測を公表した。しかし、VOGグループの Dichgans 氏は、実際はこの生産予測量に達しないだろうとの見解を示している。

「春先の霜害による被害は相当大きいものであるが、それに加えてここ数週間続いた悪天候と雹害により、生産環境は更に悪化したとみられる。残念ながら(当社の産地である)アルト・アディジェ地域も雹害に遭遇した」と語っている。

「7月末時点での予測では、グループの生産予測は57万トンと前年より10%減であった。しかし、その後、8月の第1週に遭遇した雹害で更に7万トン減少し、50万トンと予測している。前年に比べて20%少ない数字」とのことだ。減収はグループの全ての品種に及んでおり、ロイヤルガラ、レッドデリシャス、Morgenduft で15%の減収、グラニースミスで10%の減収だという。しかし、もっと酷いのは、ゴールデンデリシャスの35%の減収、ブレイバーンの25%の減収だ。昨年生育が悪かったふじだけは前年と同程度だそうだ。ブランド品種では、ピンクレディーとジャズが10%の減収だが、Kanzi とエンヴィイは栽培面積が増加したことから、前年と同程度だという。

「直近の数週間で気温が低下し、夜の温度が下がったため着色は良い。しかし、重要なのは果肉の品質だ。消費者が求める品質かどうか、日持ち良いか問題である。残念ながら一つ深刻な欠陥がある。それはイタリア、スペイン市場が求めるサイズの大きい果実が不足していることだ」という。「今年のリンゴ市場は遅れてスタートすると予想している。秋の収穫が終わった段階で、関係者は本当の生産量を知ることになるだろう」と付け加えた。

VOG にとって重要な市場であるイタリア、ドイツにおいては、主力品種のゴールデンデリシャス、ジョナゴールドで品不足が発生するだろう、と氏は語っている。販売が進むにつれ、既にこの数ヶ月間兆候が見られるように、品不足が価格の上昇に繋がるだろう、と見ている。

「生産者にとっては、春の霜害と夏の雹害で、今シーズンの収穫期には喜ばしいと感じないだろう。しかし、肝心なことは、市場が需給のバランスを回復することだ。この点から見ると、生産者にとっても『うまくいった』ということではないか」と締めくくった。

5. トルコの核果類事情

米国農務省海外農業局 GAIN レポート (2017年8月18日)

生産

サクランボ

トルコは世界で最大のサクランボ生産国であり、世界のサクランボ輸出のトップ3に入る国である。サクランボの生産量は年々変動しているが、トルコとしては輸出大国を目指しており、生産量は世界全体の10%を占めることを目標としている。

2017/18年の生産量は、6月に雹害があり着果数が少なかったことから、前年の52.5万トンから減少し、50万トンと予測される。このうち、35万トンが甘果であり、15万トンが酸果である。

サクランボは、地理的条件、気象条件が異なる様々な地域で栽培されている。このため、収穫時期は地域により40～45日程度異なっている。主産地はイスタンブール近郊のマルマラ、トルコ中央部の中央アナトリアである。2017/18年は、開花期の気候は良好であったが、収穫前に豪雨と雹害に遭遇したため、いくつかの地域では品質に影響があった。業界筋によると、ブルサの輸出業者は、品質の低下から中国などに新しい市場向けの輸出基準に合致しなかったことに不満を持っており、輸出ができなかった生産者は、国内市場の低価格に対して不安を抱いているとのことである。

トルコで栽培されている甘果は100品種以上である。このうち、Celeste、Kordia、Regina、Sunburst、0900 Ziraat (トルコのナポレオンとも呼ばれ、国内で開発された品種) が輸出需要に適していることから人気のある品種である。

トルコの公式数字によると、サクランボの全果樹数は3,400万本である。このうち2016年の甘果の結果樹数は2,100万本で、1995年に比べると300%増加している。甘果の植栽樹数は過去5カ年でも35%増加している。生産者は徐々に老木を改植し、輸出に適した品種に転換している。輸出需要の拡大、トルコ政府の支援措置により、植栽樹数は恒常的に増加している。

モモ・ネクタリン

トルコは世界のモモ・ネクタリンの生産量の3%を占めている。主な生産地は、ブルサ、カナッカレ(マルマラ地域)、イズミール(エーゲ海地域)、メルシン(地中海地域)である。収穫時期は5月下旬から10月初旬にかけてである。収穫時期が長いのは、品種が多様であること、地理的条件、自然条件が多様であることからである。主な栽培品種は、Early Amber、Spring Crest、May Crest、Red Haven、Cardinal、J.H.Hale、Early Red. である。

2017/18年の生産量は、前年をやや下回る50.5万トン(モモ44.5万トン、ネクタリン6万トン)と予測される。春の受粉期は順調に推移したものの、6月の雹害でマルマラ地方のレクツキ等で被害があったためである。しかし、他の生産地では、生産者は概ね今年の実産量に満足している。2016年の全果樹数は、1,825万本で、2007年の1,500万本から増加している。生産者は徐々に老木を改植し、輸出に適した品種に転換している。中でも、ネクタリンは輸出需要が強いことから、過去10年で植栽樹数が倍増している。

消費

サクランボの約6割は国内で生鮮果実として消費されている。トルコ果汁業界によると、果汁分野では毎年6.5%の成長を遂げているとのことである。2017/18年の加工仕向量は16.5万トンであり、前年よりも増加しているが、これは果汁業界の成長と軌を一にするものである。生産量の概ね3割が加工に仕向けられており、缶詰、マーマレード、冷凍果実、果汁が生産されている。加工製品の大部分は酸果を用いたものである。

モモ・ネクタリンでは約2割が果汁を中心とする加工に向けられている。果汁の他、缶詰、マーマレード、冷凍果実も製造されている。トルコで人気のある果汁はモモ、アンズ、サクランボ、リンゴであり、広範に消費されている。

トルコでは果実、野菜の輸出が増加しており、国境で残留農薬を超えるものは廃棄されている。この事案が

メディアを通じて広がり、消費者も目にする事が多いことから、食品安全に対して関心を寄せるようになってきている。この問題はサクランボ、モモ・ネクタリンに特有の問題ではなく、広く果実、野菜に関連するものであるが、トルコでは大きな問題になっている。

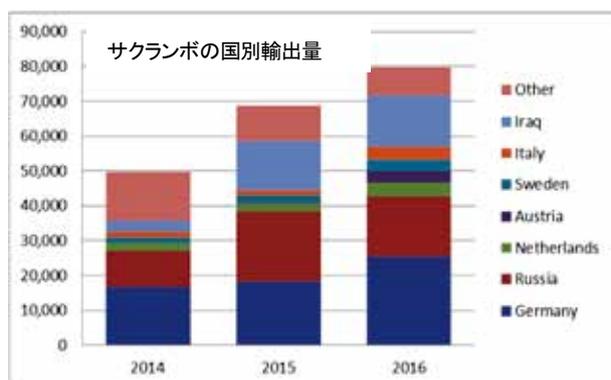
貿易

トルコはチリ、米国と並んでサクランボの輸出大国であり、世界の輸出量の15%を占めている。輸出量は5万トンから8万トン(生産量の15~25%)の間であり、主に EU、ロシアに輸出されている。近年、輸出量が増加しており、これに伴い国内で流通するサクランボの品質も向上している。輸出量は2016年には8万トンであったが、これはEU及びロシアからの需要が強かったためである。

(ロシアはトルコに対して一部の農産物の輸入禁止措置を講じたが、)トルコ政府は、ロシアとの間でこの問題の解決のための対応策を講じ始めている。一方、フランスは殺虫剤であるジメエートの使用を禁止していない国からのサクランボの輸入を禁止する措置を講じたため(2016年4月22日)、昨年以来フランスへの輸出ができない状態にある。トルコでは明らか通常では使用されていない薬剤ではあるが、トルコ食料農業牧畜省は、この問題が発生して以降、公式に使用を禁止する措置を講じた。加えて同省はサクランボ生産者にジメエートを含む恐れのある薬剤の使用を自粛するよう警告を発している。

トルコのサクランボ 輸出量(暦年)

	2014		2015		2016	
	輸出額(米ドル)	輸出量(トン)	輸出額(米ドル)	輸出量(トン)	輸出額(米ドル)	輸出量(トン)
ドイツ	67,039,214	16,790	52,345,608	18,167	82,078,889	25,392
ロシア	12,950,766	10,359	21,424,124	20,219	26,787,170	17,290
オランダ	9,554,344	2,040	8,888,394	2,274	16,300,822	3,772
オーストリア	434,017	113	559,624	227	10,601,468	3,517
スウェーデン	5,865,379	1,589	5,541,680	2,003	10,022,160	3,403
イタリア	5,845,696	1,691	3,347,295	1,526	8,923,507	3,498
ノルウェイ	8,505,808	1,548	6,549,630	1,608	7,754,224	1,761
イラク	1,929,393	3,142	5,014,302	14,135	4,126,344	14,592
イラクデンマーク	4,064,009	978	3,142,015	1,061	3,603,910	1,129
ベルギー	3,248,519	487	3,271,828	551	3,408,610	514
英国	5,178,902	1,107	4,418,713	1,546	3,166,016	1,338
その他	20,307,208	9,914	7,953,614	5,252	5,950,348	3,583
合計	144,923,255	49,758	122,456,827	68,569	182,723,468	79,789



サクランボに関しては、品質低下の問題から輸出に支障が生じている。このため、2017年上期の輸出量は前年に比べて25%減少した。2017/18年のサクランボの輸出量は5万トンと予測される。

1月から6月の核果輸出量(トン)

	2016	2017
甘果サクランボ	51,060	38,221
酸果サクランボ	101	51
モモ	33,290	44,956

トルコのモモ・ネクタリン 輸出量(暦年)

	2014		2015		2016	
	輸出額(米ドル)	輸出量(トン)	輸出額(米ドル)	輸出量(トン)	輸出額(米ドル)	輸出量(トン)
ロシア	21,022,938	19,178	26,463,208	26,276	0	0
サウジアラビア	2,798,531	4,237	2,907,421	5,376	6,325,142	9,104
イラク	2,770,797	6,564	4,273,508	12,237	5,921,937	21,326
ペラルーシ	239,419	285	144,138	197	2,870,539	4,679
ジョージア	47,603	82	99,466	259	2,548,384	4,692
ルーマニア	1,257,504	1,056	1,078,169	1,014	2,094,853	1,899
ウクライナ	554,905	1,022	115,930	188	1,227,602	2,130
その他	6,171,172	6,965	3,724,020	4,917	4,692,781	6,808
合計	34,862,869	39,389	38,805,860	50,464	25,681,238	50,638

モモ・ネクタリンの輸出は、ロシアが輸入禁止措置を講じたため、2016年のロシアへの輸出量は皆無であ

った。輸入禁止措置が解除されて以降、2017年の上期のロシアへの輸出量は禁止前に比べて25%増加し、3万トンであった。2017/18年のモモ・ネクタリンの輸出量は全体で6万トンと推測される。

政策

輸出需要が安定して旺盛であることと政府が支援をしていることから、生産者は新規植栽のための投資を行っている。中でも食料農業牧畜省に登録すると支援が受けられる措置が講じられている。2016年の公式発表によると、同省は肥料代、燃料費として、ha 当たり110トルコリラ(1トルコリラ=31.3円)を支給している。また、新規に植栽する場合は標準的な矮性の苗木代及び成園費として ha 当たり1,500トルコリラが支給される。さらに、政府が認証した矮性苗木により高品質な果樹を植栽する場合は ha 当たり4,000トルコリラが支給される。また、既存果樹園を改良し、品種を転換するために接木を行う場合は ha 当たり2,500トルコリラが支給される。この他、有機農業を実施する場合や適正農業規範を実施する場合も支援が行われる。加えて、政府は果樹園の保険制度も運営している。また、果樹の苗木園を開設する業者に対して50%の補助を行っている。

政府は、認証された苗木の導入に関する経費として、2017年に2,800万トルコリラを割り当てている(ただし核果類以外の落葉果樹、カンキツ類を含む)。

トルコのサクランボ統計(在トルコ 米国農務省 農務官)

	2015/16	2016/17	2017/18
栽培面積(ha)	95,000	96,000	97,000
収穫面積(ha)	—	—	—
結果樹数(千本)	23,000	25,000	26,000
未結果樹数(千本)	8,000	8,000	8,000
果樹数合計(千本)	31,000	33,000	34,000
生産量計(トン)	565,000	525,000	500,000
輸入量(トン)	0	0	0
総供給量(トン)	565,000	525,000	500,000
輸出量(トン)	68,700	80,000	50,000
国内消費仕向量(トン)	341,300	不明	不明
加工仕向量(トン)	155,000	155,000	165,000
総出荷量(トン)	565,000	525,000	500,000

年産は1月から12月まで

トルコのモモ、ネクタリン統計(在トルコ 米国農務省 農務官)

	2015/16	2016/17	2017/18
栽培面積(ha)	42,000	42,000	42,000
収穫面積(ha)	—	—	—
結果樹数(千本)	15,000	15,250	15,500
未結果樹数(千本)	3,000	3,000	3,000
果樹数合計(千本)	18,000	18,250	18,500
生産量計(トン)	500,000	560,000	510,000
輸入量(トン)	200	100	100
総供給量(トン)	560,200	510,100	505,100
輸出量(トン)	50,500	50,500	60,000
国内消費仕向量(トン)	389,700	335,100	335,100
加工仕向量(トン)	120,000	120,000	120,000
総出荷量(トン)	560,200	510,100	505,100

年産は1月から12月まで

6. オーストラリアの核果類事情

米国農務省海外農業局 GAIN レポート (2017年8月17日)

サクランボ 生産

2017/18年(11月→10月)の生産量は16,000トンと予測され、春先の豪雨を含む天候不良により生産量が10,000トンと落ち込んだ2016/17年に比べて大きく回復する見込みだ。

オーストラリアのサクランボ産業は、世界の1%を占める程度であり、大きな産業ではない。生産者数は500強であり、栽培面積は3,300haである。しかし、果樹園では近代的な生産システムが採用されており、新植園は開放型の樹形で仕立てられ、低流量灌水方式を使用している。一方、降雨、湿度、降霜等の自然条件が生産に大きな影響を及ぼしている。最近の動向としては、タスマニア州、ビクトリア州で温室栽培を始めたことがあげられる。これは、気象災害を回避するためと出荷期間を延長し、中国市場で旧正月期間中に販売を可能とするためである。

オーストラリアのサクランボの出荷期は、10月中下旬から2月にかけてである。生産は6つの州で行われており、ニューサウスウェールズ州、ビクトリア州、タスマニア州が3大産地である。西オーストラリア州、クイーンズランド州では比較的小規模な生産者により担われており、主に国内市場向けである。収穫はニューサウスウェールズ州、クイーンズランド州、南オーストラリア州、ビクトリア州から始まり、次いで西オーストラリア州、タスマニア州が12月から1月まで続く。

タスマニア州は比較的病虫害が少ないことから、輸出に焦点を当てており、ここ数年栽培面積が拡大している。タスマニア州では収穫期間が8週間と短い、その他の州の収穫期間は3~4ヶ月である。タスマニア州は全国の1/3の収穫量を占めている。

消費

2017/18年の国内消費量は、13,700トンと推測される。2016/17年は天候に恵まれなかったため品質が悪かったことから、国内消費量は9,700トンであった。

国産のサクランボの販売は主に12月から2月までである。一方、輸入品の販売は5月から11月まで続く。小売店での販売は、バラ売りとパック詰めがあるが、大部分はバラ売りであり、パック詰めはプレミアム商品と位置づけられている。

一人当たりのサクランボ消費量は、0.5~0.8kgである。季節により入手が限られていることから、消費量にも制約がある。サクランボは伝統的にクリスマスの果実と見なされているが、消費者は価格に敏感で、他の夏果実と競合関係にある。サクランボは、通常は家庭でデザートとして消費されている。

サクランボ業界のマーケティングは、衝動買いを促す方式を用いるとともに健康に良いことを唱っている。また、国産品の消費を維持するために、「一瞬を大切に」というキャンペーンを行っている。サクランボの購入の20%はクリスマスの週に行われるが、輸入による周年供給が可能となっているため、徐々にこの割合は低下する可能性がある。

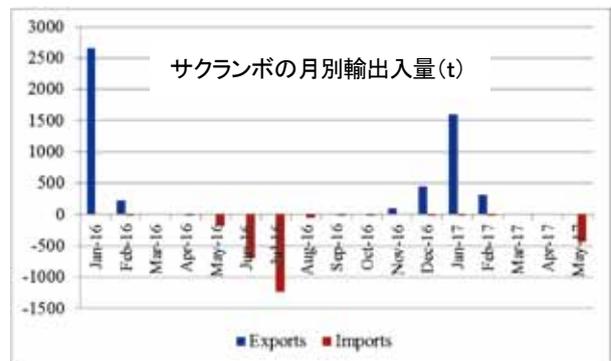
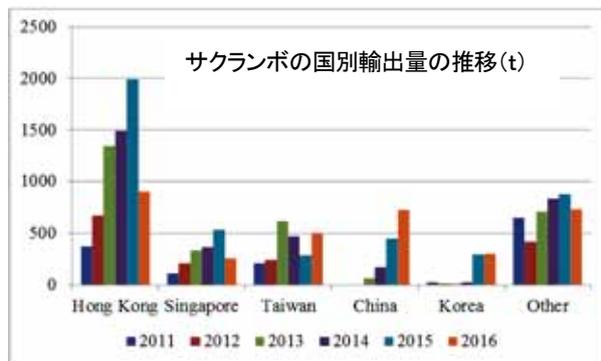
消費者調査によると、サクランボは大部分が衝動買いによるとのことである。購入の動機は、第一に品質と価格であり、次いで、痛みがないか、色合いが良いか、果実がしっかりしているか等である。業界の調査によると、サクランボの90%は生鮮の形で消費されている。大部分は国産品が出回る夏に消費され、冬に消費される量は少ない。購入先は、通常スーパーである。

貿易

2017/18年の輸出量は5,000トンと予測され、2,500トンと大きく落ち込んだ前年から回復すると見込まれる。国内市場向けの出荷は、全体の2/3であるが、輸出の方が儲けは大きい。2016年の調査によると、国内向けの価格が7オーストラリアドル(注:単位は不明)であったのに対し、輸出は17オーストラリアドルであった。大部分は11月から3ヶ月間に輸出されている。収穫すると直ぐに冷却され、市場ごとに異なる仕様に応じて2kg又は5kgの箱に梱包される。

タスマニア州は輸出に力点を置いており、生産量の90%が輸出される。同州は国際的にミバエが存在しない地域と認められていることから、多くの国に対して輸出が可能となっている。この結果、タスマニア産のサクランボは燻蒸処理を行う必要がなく、日本、韓国、台湾市場などに容易にアクセスすることができる。輸出先は香港が最大であるが、その理由としては厳しい検疫条件を課されていないことが挙げられる。近年では香港と中国を合せると輸出量の約半分を占めている。中国市場は新たな輸入プロトコルの下で直接輸出することが容易となり、重要性が増している。韓国との間では自由貿易協定(KAFTA)により関税が撤廃され、輸出量は300トンとなった。

オーストラリアから米国への輸出は、検疫条件上は可能ではあるが、航空輸送によるコストが大きいと商業的には成り立たない。一方、輸入に関しては、大部分が米国からであり、特にカリフォルニア州が多い。輸入時期は7月から9月にかけてであるため、国産品とは競合せず、周年供給の役割を担っている。



	2015/16	2016/17	2017/18
栽培面積(ha)	3,300	3,300	3,300
収穫面積(ha)	3,100	3,100	3,100
結果樹数(千本)	5,900	5,900	5,900
未結果樹数(千本)	800	800	800
果樹数合計(千本)	6,500	6,700	6,700
生産量計(トン)	16,000	10,000	16,000
輸入量(トン)	2,700	2,200	2,700
総供給量(トン)	18,700	12,200	18,700
輸出量(トン)	6,000	2,500	5,000
国内消費仕向量(トン)	12,700	9,700	13,700
加工仕向量(トン)	0	0	0
総出荷量(トン)	18,700	12,200	18,700

年産は11月から翌年の10月

モモ・ネクタリン 生産

2017/18年の生産量は、このまま天候が良好であれば、92,000トンと前年をわずかに上回ると予想される。生産量が若干増加するとの見込みは天候の要因の他、灌漑水のコストが低く抑えられているからである。前年は、東部オーストラリアにおいて春先の天候が不順であったため、生産量とともに品質への影響があった。特に春の豪雨は果実の生長を遅らせ、糖度の増加が妨げられた。この時期は中国へのネクタリンの初輸出の時期と一致したため、市場での販売活動に影響が生じた。

近年、モモ・ネクタリン業界は、天候不順、輸出市場の不足、高いオーストラリアドル、缶詰からの消費者離れの影響を強く受けている。国内価格の低迷による収益性の低下から、小規模生産者は生産から撤退するものが多く、生産コストを切り下げるために樹齢の古い木を伐採するものもいる。さらに、これまでの輸出先であったベトナム、マレーシア市場から閉め出され、規制の強化により香港市場への輸出が制約されている。このような輸出機会の減少により国内市場価格がさらに低下をしている。

2000年頃までは、モモの約半分は加工に仕向けられてきた。しかしながら、加工仕向量は2006年の60,000トンから2016年には10,000トンと大幅に減少している。加工業界は、消費者の嗜好の変化と、輸入製品を自社のプライベートブランドで販売しているスーパーにより二重の責め苦を負っている。このため、加工向け品種が生産者により伐採されている傾向にある。

モモ・ネクタリン生産の3/4はビクトリア州の Goulburn Valley, Sunraysia 地方で行われている。その他の産

地は、ニューサウスウェールズ州の Young、Orange である。収穫は、先ず亜熱帯に位置するクイーンズランド州、西オーストラリア州北部から始まり、次いでニューサウスウェールズ州、ビクトリア州の一部地域、南オーストラリア州へと移動する。生産量は年により大きく変化する。これは一部品種で隔年結果があることによるが、他にも灌漑用水の利用可能性、土壌条件、気象条件、病虫害の発生等も影響している。

消費

2017/18年の国内消費量は、前年と同程度の73,000トンと予測される。民間の調査によると、オーストラリアの約半分の家庭がモモ・ネクタリンを購入し、一人当たり平均消費量は3.4kgであるとしている。

小売段階では、夏果実を対象に、キロ当たりの価格がほぼ同じ果実を袋に詰めて販売する傾向にある。こうすることで廃棄量が少なくなり、売上も伸ばすことができるとのことだ。また、注目すべき変化としては、加工製品の生産、消費から生鮮果実の消費や輸出へのシフトがあげられる。この理由は、国内で加工するよりも輸入加工品の方が安価であること、消費者が加工品から生鮮果実に嗜好を変えていることによる。

2002年から2015年にかけて、一人当たりの加工品の消費量は40%減少したが、生鮮サクランボ、モモ、ネクタリンの消費量は10%以上増加している。加えて、貯蔵、輸送方法の改善も生鮮品の消費を拡大することに寄与している。

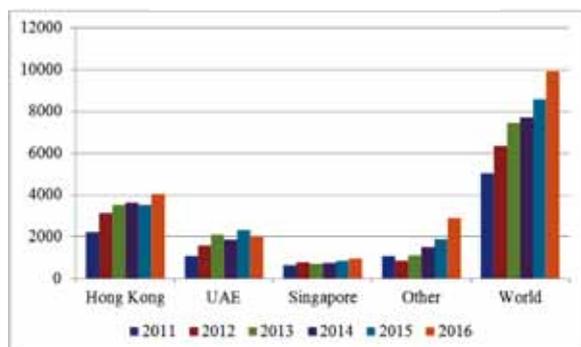
貿易

2017/18年の輸出量は、天候不順から品質が悪化した前年の9,000トンを上回ると予測される。オーストラリアから輸出されるモモ・ネクタリンの大部分は果肉が黄色の品種であり、果肉が白いものの輸出は特定の市場向けにシーズン当初及びシーズン末期に限定されている。過去5カ年の輸出実績では60%以上の輸出先は香港とアラブ首長国連邦であり、その他シンガポール等に輸出されている。

2016年には、13年間に渡る交渉の末、中国へのネクタリンの輸出が解禁された。2016年末には、厳格な輸出プロトコルの下で中国への輸出が開始された。中国はミバエが存在しないという理由で、タスマニア州及び南オーストラリア州の Riverland 地域で生産されたネクタリンについては、未処理のまま輸出を認めている。一方、これら以外の産地からは、厳格なミバエ処理を行わねばならず、東部の州から輸出される果実は3℃に18日間冷却するか臭化メチル処理をしたものに限定されている。なお、中国の植物検疫当局は、果実への損傷を小さく抑えることができる低容量の臭化メチル処理方式に合意した。この方式とは、生産者の賦課金により開発されたクイーンズランドミバエの臭化メチルの低容量処理方法とのものである。また、中国-オーストラリア自由貿易協定に基づき、2017年1月からネクタリンの関税は6%から4%に引き下げられ、2018年1月からは2%に引き下げられることになっている。

2017/18年の輸入量は、近年国内市場が低迷していることから、3,000トンと予測される。輸入品の大部分は米国产である。輸入は空路により行われるが、主にカリフォルニア州産で、9月中旬まで続く。オーストラリア国内では大手小売業者の Coles、Woolworths を通じて10月中旬まで販売される。調査によると、核果類に対する冬期間の需要は夏季に比べると相当に少ないが、次第に拡大することが期待される。

モモ・ネクタリンの国別輸出量 (t)



オーストラリアのモモ・ネクタリン統計(在豪 米国農務省 農務官)

	2015/16	2016/17	2017/18
栽培面積(ha)	1,700	1,700	1,700
収穫面積(ha)	-	-	-
結果樹数(千本)	3,400	3,400	3,400
未結果樹数(千本)	250	250	250
果樹数合計(千本)	3,650	3,650	3,650
生産量計(トン)	90,000	90,000	92,000
輸入量(トン)	6,000	3,000	3,000
総供給量(トン)	96,000	93,000	95,000
輸出量(トン)	10,000	9,000	12,000
国内消費仕向量(トン)	76,000	74,000	73,000
加工仕向量(トン)	10,000	10,000	10,000
総出荷量(トン)	96,000	93,000	95,000

年産は11月から翌年の10月

7. チリの核果類事情

米国農務省海外農業局 GAIN レポート (2017年8月17日)

サクランボ

生産

チリのサクランボの栽培面積は、過去20年間、平均で9%ずつ増加しており、2016/17年は27,397haである。リンゴや生食用ブドウに見られるように、他の品目の果樹園は収益性の高いサクランボの植栽に転換している。サクランボの新植園は密植栽培が行われ、生産性の高い品種が植栽されている。

サクランボは主に Maule 州、O'Higgins 州で栽培されており、それぞれ44.3%、36.2%を占めている。

オウトウの州別栽培面積 (ha, %)

州名	面積	シェア
Valparaiso	259	0.90%
Metropolitana	2,306	8.40%
O'Higgins	9,910	36.20%
Maule	12,145	44.30%
Biobio	1,692	6.20%
Araucanía	811	3.00%
Los Ríos	19	0.10%
Los Lagos	48	0.20%
Aisén	207	0.80%
合計	27,397	100

2017/18年(11月→10月)の生産は、降雨も順調であり、干ばつもなかったことから、順調な気象条件に恵まれ、特に問題がないと予測される。新植園が結果樹齢に達することから、生産量は6.8%増加し、123,870トンと推測される。

2016/17年の収穫は、例年よりも10日早かった。これは冬期に十分な寒気に遭遇し、春は高温であったため生育が進んだことによる。しかし、この年は冷蔵保管に問題があり、遠距離市場への輸出に難点があった。2016/17年の生産量は前年を13%上回る116,000トンであった。これは結果樹面積

の増加と、単位当たり収量が5%増加したことによる。

降雨による被害を防止する雨よけ施設を利用することで、チリ南部の Biobio 州や Araucania 州での栽培面積の拡大を可能としている。これら地域では、他の作物に比べて収益性の高いサクランボは有利な作物であるが、生育期間に降雨があることから、設置が必要な雨よけ施設には高いコストがかかる。しかし、輸出による利益が大きいことから、コストが高くついても雨よけ施設の整備は経済的に見合った投資である。

消費

チリでは国内消費に関する公式データはない。しかし、チリ政府のデータから推測することは可能だ。これによると、83.7%が輸出され、12%が国内消費に向けられ、4.3%が加工に仕向けられていると見られる。国内消費に向けられるものは、主に輸出規格に達しないものである。これらは、品質的に問題があるか、日持ちがしないものであり、主要な海外市場への輸出に向かないものである。2017/18年の国内消費量は、前年と同程度の14,864トンと推測される。

貿易

2016/17年の輸出は、生産量の増加から、前年に比べて輸出量で14%、輸出金額で16%増加し、それぞれ、95,392トン、438,385,883ドルであった。

オウトウ輸出量(2015年11月-2016年5月と2016年11月-2017年5月の比較)

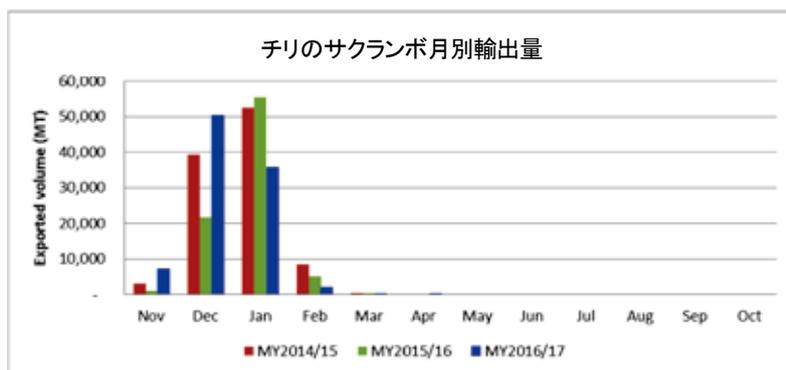
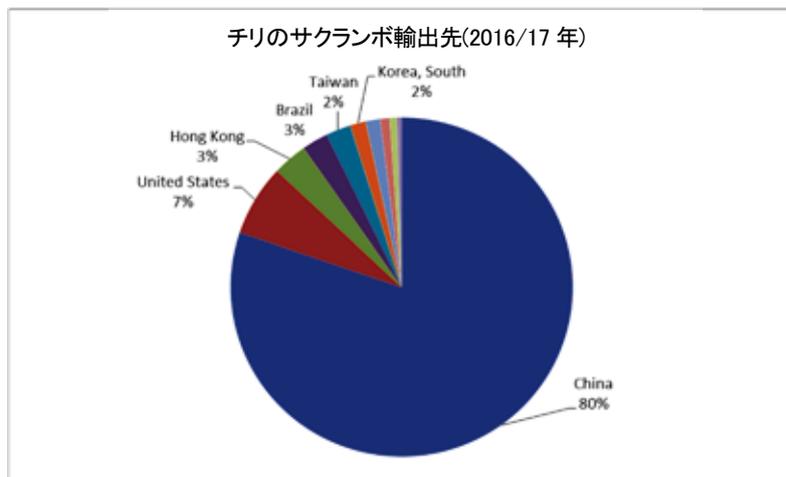
	輸出量(トン)		変化率(%)	輸出金額(米ドル)		変化率(%)
	2015/16	2016/17		2015/16	2016/17	
合計	83,558	95,392	14%	378,938,721	438,385,883	16%
中国	67,868	74,820	10%	304,762,549	338,132,327	11%
米国	5,761	6,316	10%	23,977,013	27,547,029	15%
香港	2,007	3,079	53%	7,636,171	13,241,625	73%
ブラジル	1,852	2,299	24%	8,834,540	10,663,585	21%
台湾	1,693	2,230	32%	9,424,281	11,980,612	27%
韓国	25	1,365	5360%	175,753	9,903,607	5535%
英国	1,326	1,286	-3%	8,391,821	7,189,975	-14%
エクアドル	530	836	58%	1,033,468	1,808,257	75%
タイ	333	633	90%	2,129,720	3,907,617	83%
スペイン	270	405	50%	1,629,072	2,313,155	42%
その他	1,893	2,123	12%	10,944,333	11,698,094	7%

アウトウ輸出量(2014/15年産と2015/16年産の比較)

	輸出量(トン)		変化率(%)	輸出金額(米ドル)		変化率(%)
	2014/15	2015/16		2014/15	2015/16	
合計	103,374	83,562	-19%	486,779,338	378,953,829	-22%
中国	77,135	67,871	-12%	371,633,723	304,773,478	-18%
米国	9,056	5,761	-36%	34,260,418	23,977,013	-30%
香港	4,372	2,008	-54%	21,716,363	7,640,351	-65%
ブラジル	2,840	1,852	-35%	11,374,873	8,834,540	-22%
台湾	2,604	1,693	-35%	14,001,823	9,424,281	-33%
英国	1,981	1,326	-33%	9,668,597	8,391,821	-13%
エクアドル	1,413	530	-62%	2,611,191	1,033,468	-60%
オランダ	1,442	493	-66%	7,172,446	2,989,801	-58%
タイ	333	333	0%	2,155,585	2,129,720	-1%
スペイン	307	270	-12%	2,047,055	1,629,072	-20%
その他	1,891	1,425	-25%	10,137,264	8,130,284	-20%

輸出先は中国が最大で、輸出量の80%を占めている。2016/17年の輸出量は、前年を10%上回り、74,820トンであった。第2の輸出先は米国で、全体の7%を占めている。輸出量は前年を10%上回る6,315トンであった。2016/17年に最も輸出が増加したのは韓国であり、1,365トンに達し、全体の第6位となった。輸出のピークは通常の年は1月であるが、2016/17年は収穫が早まったため12月がピークとなった。

2017/18年の輸出量は、生産量が増加することと、天候が順調であったため品質が良いことから、前年に比べて8%増の103,680トンと見込まれる。



政策

2016年1月、韓国政府は同国の動植物検疫庁の調査に基づき、チリ産サクランボの輸入を解禁した。

チリのアウトウ統計(在チリ 米国農務省 農務官)

	2015/16	2016/17	2017/18
栽培面積(ha)	25,443	27,397	29,500
収穫面積(ha)	23,000	25,000	27,000
結果樹数(千本)	19,573	21,175	23,000
未結果樹数(千本)	2,078	2,039	2,000
果樹数合計(千本)	21,651	23,214	25,000
生産量計(トン)	102,862	116,000	123,870
輸入量(トン)	0	0	0
総供給量(トン)	102,862	116,000	123,870
輸出量(トン)	83,562	96,000	103,680
国内消費仕向量(トン)	13,186	14,800	14,864
加工仕向量(トン)	6,114	5,200	5,326
総出荷量(トン)	102,862	116,000	123,870

年産は11月から翌年の10月まで

モモ、ネクタリン

生産

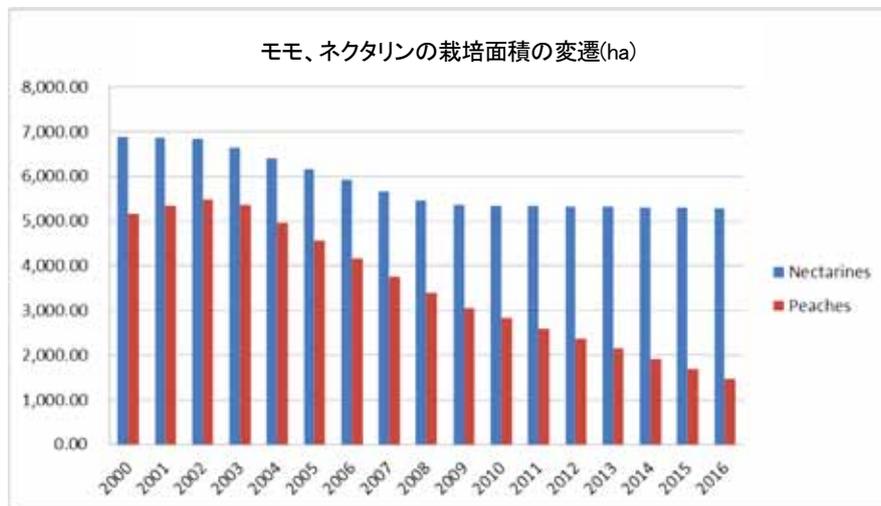
2017/18年の生産量は、前年を2%下回る145,000トンと見込まれる。栽培面積はネクタリンでは前年と同程度であるが、モモは減少すると見込まれる。

ネクタリン・モモの州別栽培面積 (ha, %)

州名	ネクタリン	モモ	合計	シェア
Parinacota	0	0	0	0%
Atacama	2	0	2	0%
Coquimbo	5	17	21	0%
Valparaíso	314	250	564	8%
Metropolitana	1,238	481	1,719	25%
O'Higgins	3,688	716	4,405	65%
Maule	36	4	40	1%
Bío Bío	9	1	10	0%
合計	5,292	1,470	6,761	100%

2016/17年のモモ、ネクタリンの栽培面積は6,761haで、うちネクタリンが5,292ha、モモが1,470haである。生産地は主に O'Higgins 州と首都圏州であり、前者が65%、後者が25%を占めている。2016/17年は春に高温に遭遇したため生育が早かったことから、例年に比べて10日収穫期が早まった。

ネクタリンの栽培面積は、2008年以降は約5,300haで変動はない。ネクタリンの新植が行われているのは、栽培適地である O'Higgins 州に限られている。一方、モモの栽培面積は2003年以降減少が続いている。これは主産地の O'Higgins 州と首都圏州でより収益性の高い作物への転換が進んでいるためである。



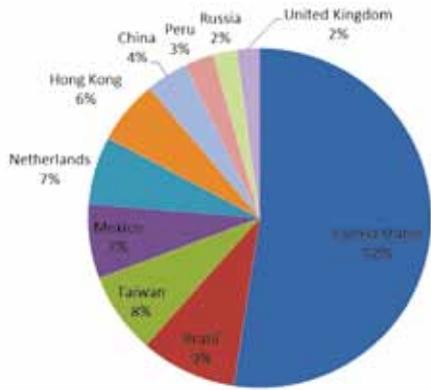
消費

モモ、ネクタリンの国内消費に関する公式データは存在しないが、チリ政府の資料から推測することは可能である。これによると、59.3%が輸出され、37.6%が国内で消費に、2.6%が加工に仕向けられている。生鮮ネクタリンはその甘さ、歯ごたえから国内で人気がある。一方で、モモに関しては一部で消費者離れが進んでいる。2017/18年の国内消費量は、前年から若干減少し、55,000トンと見込まれる。

貿易

モモ、ネクタリンの最大の輸出先は米国であり、2016/17年では全体の52%を占めている。次いでブラジ

チリのもも、ネクタリンの輸出先(2016/17年)



ルが9%である。その次は台湾が8%を占めているが、前年より41%増加した。次いで、メキシコとオランダが7%を占めている。2016/17年の輸出量全体は、前年を2%上回った。これは、新市場である中国向けの輸出が前年の109トンから3,091トンへと大きく増加したことによるところが大きい。また、台湾、ロシア、ペルー向けの輸出も前年より大幅に増加した。米国向けの輸出は前年を2%下回り、ブラジル向けは28%下回った。

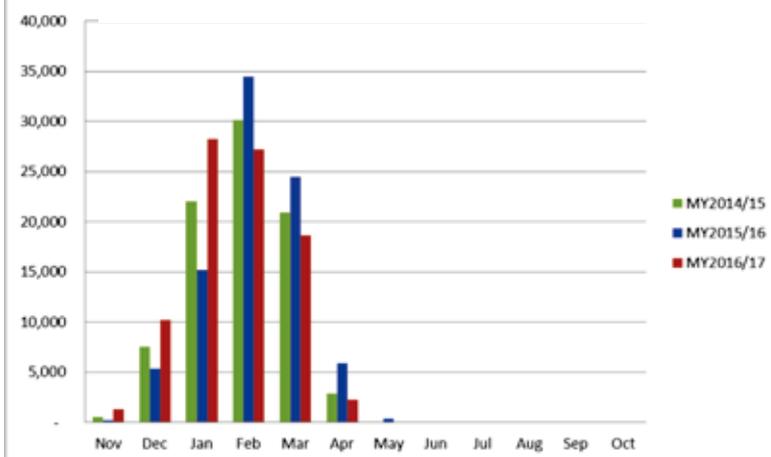
もも、ネクタリン輸出量(2015年11月-2016年5月と2016年11月-2017年5月の比較)

	輸出量(トン)		変化率(%)	輸出金額(米ドル)		変化率(%)
	2015/16	2016/17		2015/16	2016/17	
合計	85,940	87,890	2%	94,449,778	96,851,687	3%
米国	41,586	40,856	-2%	44,988,904	43,421,129	-3%
ブラジル	9,904	7,111	-28%	10,549,297	7,682,687	-27%
台湾	4,226	5,979	41%	4,849,953	7,266,286	50%
メキシコ	6,668	5,526	-17%	8,828,752	7,231,721	-18%
オランダ	6,342	5,043	-20%	4,841,534	4,461,305	-8%
香港	5,066	4,749	-6%	6,319,832	6,055,547	-4%
中国	109	3,091	2736%	163,000	3,341,884	1950%
ペルー	1,738	2,178	25%	1,726,280	1,937,050	12%
ロシア	927	1,743	88%	1,072,756	2,281,532	113%
英国	2,008	1,675	-17%	2,273,962	1,734,042	-24%
その他	7,366	9,939	35%	8,835,508	11,438,504	29%

もも、ネクタリン輸出量(2014/15年産と2015/16年産の比較)

	輸出量(トン)		変化率(%)	輸出金額(米ドル)		変化率(%)
	2014/15	2015/16		2014/15	2015/16	
合計	84,124	85,987	2%	102,802,702	94,510,094	-8%
米国	40,279	41,596	3%	45,831,649	44,999,320	-2%
ブラジル	9,278	9,904	7%	10,457,424	10,549,297	1%
メキシコ	6,418	6,668	4%	9,265,559	8,828,752	-5%
オランダ	6,575	6,342	-4%	6,089,820	4,841,534	-20%
香港	4,861	5,066	4%	7,214,040	6,319,832	-12%
台湾	4,677	4,226	-10%	6,999,794	4,849,953	-31%
英国	984	2,008	104%	2,525,674	2,273,962	-10%
ペルー	1,024	1,771	73%	1,140,399	1,770,857	55%
コロンビア	2,359	1,693	-28%	3,581,113	2,326,736	-35%
ロシア	703	927	32%	839,418	1,072,756	28%
その他	6,966	5,786	-17%	8,857,812	6,677,095	-25%

チリの月別もも、ネクタリン輸出量



輸出のピークは通常は2月であるが、2016/17年は天候の影響で生育が進んだためにピークは1月となった。2016/17年の輸出単価は、12月から2月までは前年を下回ったが、3月以降は前年を上回った。

2017/18年の輸出量は、栽培面積が減少し生産量が少なくなることから、前年に比べて2%減と予測される。

政策

2017年1月にチリ農業省は中国へのネクタリンの輸出解禁に関して交渉を行った。中国市場への輸出機会の獲得は、チリの輸出業者にとって高価格で販売できることから大きなチャンスとなる。

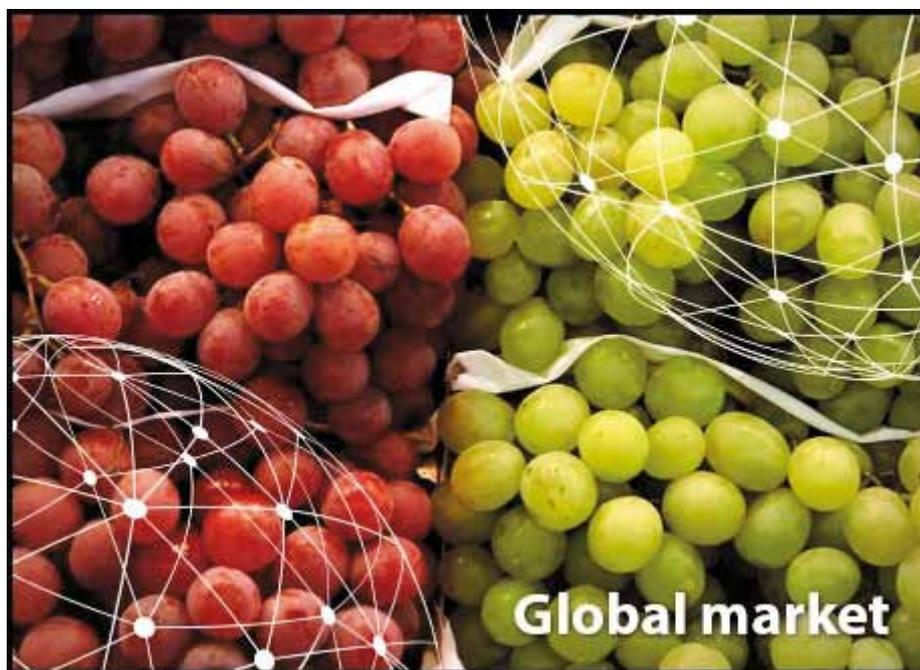
チリのもも、ネクタリン統計(在チリ 米国農務省 農務官)

	2015/16	2016/17	2017/18
栽培面積(ha)	6,996	6,761	6,500
収穫面積(ha)	6,296	6,084	5,850
結果樹数(千本)	5,946	5,747	5,525
未結果樹数(千本)	595	575	637
果樹数合計(千本)	6,541	6,322	6,162
生産量計(トン)	146,000	149,212	146,000
輸入量(トン)	0	0	0
総供給量(トン)	146,000	149,212	146,000
輸出量(トン)	85,987	87,890	86,000
国内消費仕向量(トン)	54,442	55,727	55,000
加工仕向量(トン)	5,571	5,595	5,000
総出荷量(トン)	146,000	149,212	146,000

年産は11月から翌年の10月まで

8. 世界の生食用ブドウ市場

FreshPlaza 電子版 (2017年8月11日)



インドからの輸出は量も多く長期間に渡ったため、イスラエルとエジプトの輸出業者は迷惑を被った。というのも、両国とも多くの量をさばかなくてはならないためである。エジプトにとって更に悪いことには、スペインとイタリアの収穫期が早まったことで輸出が重複した。このため、販売価格は相当に下落した。スペインとイタリアの生産者も困難な市場に直面しているが、依然として楽観的である。中国ではブドウ栽培のための投資が行われ、輸出量の拡大をもたらしている。オーストラリアのシーズンは終了した。フロリダ州では需要が旺盛であるため、業者は高価格に満足しており、楽観的である。

エジプト: 厳しいシーズン

エジプトの輸出業者は、主要な輸出先である欧州大陸、英国で厳しい局面に遭遇している。業界では三つの問題点がある。一つはインドがインドの輸出時期が延長され量も増加したことである。伝えられるところでは、種無し白ブドウ8,000コンテナが欧州に出荷されたとのことである。この結果、エジプト産ブドウの最盛期にはインド産で欧州市場が飽和状態であった。

第二は、エジプトの収穫時期が低温のために通常より10日遅れて始まったことである。この結果、収穫期間が10日間前後に集中し、輸送手段が飽和状態となった。

第三は、スペインの収穫時期が早まったためエジプト産を押しやったことである。スペイン産のブドウは7月には小売店で販売された。消費者は欧州産を好むため、スペイン産の出回りはエジプト産の販売の終了を意味している。このため、エジプトの業者は投げ売りをしなければならない羽目に陥った。

スペイン: 市場に挑む

シーズンの始めは種無し白ブドウがエジプト産と競合したため困難に直面した。イタリア、スペイン産の出荷が早く始まったため、エジプトが投げ売りを始めたからだ。オランダではキロ当たり1ユーロを下回った。

その後、熱波の影響で収穫が遅れ、糖度が十分なレベルに達するまで時間がかかった。現在、輸出業者は十分な量を確保していないという。焦点が国内市場に向けられているからだ。しかし、需要は限定されており、ブドウが不足状態で観光客が多いにもかかわらず価格は低迷している。加えて他の夏果実との競合があ

る。核果類、メロンは品質が良いにもかかわらず価格は安い。

一方、最近になって気温が急速に約10度も低下した。この結果、需要は改善するものと見られる。輸出業者、生産者は残りのシーズンに希望を抱いている。

イスラエル：インドによる影響を受ける

今シーズンに関しては、業界は失望している。天候不順と病害のため生産量が減少したためだ。このことは、欧州市場における低価格と併せて、輸出業者に海外での販売に対する興味を失わせることとなった。この結果、多くの量が国内市場に回り、価格が押し下げられている。

イスラエルでは3,000haのブドウが栽培され、大部分はラキシュとヨルダン渓谷で生産されている。後者では輸出用のブドウが栽培されている。渓谷は乾燥して暖かい気候のため、収穫時期は早い。輸出期間は5～6週間であり、インド産の出回りと同じくエジプト、スペイン産の出回りの谷間の期間に輸出が行われる。通常はインドの輸出は5月に終了するが、今年はこれを過ぎてもインドから欧州に輸出が行われた。このため、イスラエルの輸出時の価格は安く、量も平均より少なくなった。

イタリア：品質は良いが量は少ない

既に幾つかの地域では収穫が始まっている。これら地域では品質は良いが量は少ないとのことだ。品種別にはレッドグローブとクリムゾンシードレスの収量が少ない。熱波に襲われたが、これまでのところ、灌漑施設のお蔭で影響は小さい。

生産者によると、市場はまだ静かな状態だそうだ。しかし、8月15日までには需要は拡大し、価格は上昇すると期待している。とはいえ、他の地中海諸国との競争が見込まれる。直接の競合国としては、イスラエル、トルコ、エジプト、モルドバだ。生産者は新しい顧客を獲得するために懸命である。主な輸出先は欧州各国（オランダ、英国、ポーランド、ドイツ）及び欧州以外のブラジル、アラブ首長国連邦、南アフリカ、パキスタン、ナイジェリアである。

フランス：南東部で霜害

温室栽培のブドウの収穫が第28週から始まった。他の果実と同様に収穫時期は、例年より10日早まった。8月以降に出荷は本格化する。とはいえ、全体的に生産量は少ない見込みだ。特に南東部では4月に霜害に遭遇したことによる影響が大きい。いくつかの産地では50%の被害があったとされている。ただし、最初に出荷された地域は霜害に遭遇していないために影響は現れていない。南東部の産地からの出荷は、昨シーズン相当に遅くまで出荷された実績に比べれば早く終了すると見込まれる。

ベルギー：イタリア産が支配的

ベルギー市場で販売されているブドウの大部分はイタリア産だ。業者によると、「品質が優れており、シーズンのスタートは上々だ」とのことだ。「イタリアのブドウが一般的だと認識されているが、種無しブドウがもっと欲しい。イタリアでも種無しブドウに転換されつつある」との反応である。

中国：生産量は引続き増加

中国ではブドウの栽培が盛んである。栽培面積が拡大しているお蔭で、生産量は前年より60万トン増加し、1,020万トンに達する見込みだ。これは輸出業者にとっても朗報であり、輸出量は昨年より3.3万トン増の約26万トンになると見込まれる。輸出先は近隣諸国だが、特にマレーシア、インドネシアへの輸出量が多い。輸出用の品種としてはレッドグローブが多く、主に雲南省、新疆省で生産されている。雲南省では例年より2週間早く6月から収穫が始まった。その後、新疆省が続いている。雲南省では生産量が40%減少したため、20～30%の価格の上昇に繋がっている。

中国ではブドウの輸入も増加する見込みだ。予測では、昨年より1.6万トン多い、26.5万トンと見られている。ブドウの需要は増加を続けており、チリ、ペルー、南アフリカ、オーストラリア、米国から輸入されている。今年、アルゼンチンも中国との間で輸出協定を締結した。

米国:カリフォルニア州のブドウ需要は好調

カリフォルニア州では5月に収穫が始まった。業者によれば収穫開始日は例年通りとのことだが、昨年と比べると収穫時期は遅い。もっとも、近年は収穫開始が早まる傾向にある。本年1月のシーズン終了時まで、1億1,140万箱(1箱19ポンド=8.6kg)が出荷され、前年よりも300万箱増加した。米国では85品種が栽培されており、人気のある品種はスカーレットロイヤル、オータムキング、フレイムシードレス、クリムゾンシードレス、Sugraone である。昨年は、全体の93%が種無しであった。

輸出向けは比較的少なく、収穫量に占める割合は36%である。主要な輸出先は、カナダ、メキシコ、中国、フィリピン、台湾、日本である。業者によると、需要は多く、価格は堅調とのことだ。

オーストラリア:困難だったシーズンを振り返る

シーズンは既に終了しているが、多くの生産者、輸出業者は「出荷が遅れて始まったことで問題があった」、とシーズンを振り返っている。オーストラリアのブドウは他の輸出国の出荷時期の狭間に出荷されている。しかし、出荷時期が遅れたことで、チリ産との間で重複が生じた。一部の輸出業者には早期輸出を断行し、必要な水準に達しない果実を出荷してしまったものもある。また、オーストラリアにとって新しい市場である日本と韓国で、チリとの競合が生じた。中国市場も難しいシーズンであった。

著者:Rudolf Mulderij

9. ペルーのアボカド事情

米国農務省海外農業局 GAIN レポート (2017年8月9日)

生産



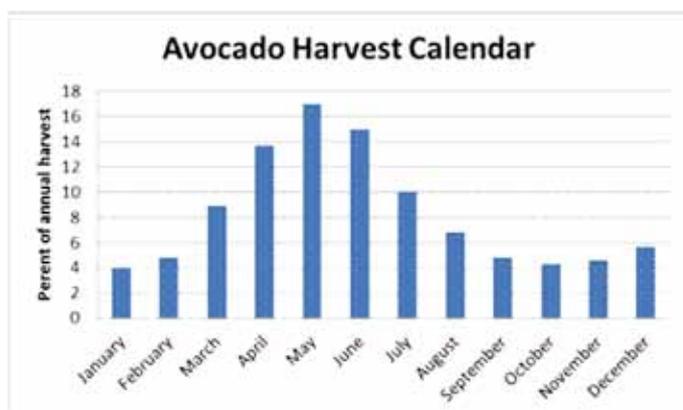
ペルーのアボカド生産は砂漠の海岸沿いに位置している。大規模な生産者は灌漑用水をアンデス山脈から連邦が建設した水路を使って利用している。水はドリップ灌漑、センサー、関連ソフトウェアを利用することで効率よく使われている。

ペルーの農業灌漑省によると、エルニーニョの影響が出る前は2017年(暦年)のペルーのアボカド生産量は、前年に比べて30%の増加が見込まれていた。エルニーニョにより収穫が遅れ、道路や水路に被害がでたものの、アボカド生産に及ぼすさほど影響は大きくはなかった。

ペルーで栽培されている品種はハスが95%で主に輸出に向けられ、Fuerte は主に国内消費に向けられている。

栽培面積は23,279ha で、ha 当たりの収量は12~15トンである。ラ・リベルタ地域とリマ地域が主産地で、全国の40%を占めている。

図に示すとおり、主な生産時期は4月から6月にかけてである。



消費

アボカドの国内消費量は、年間17万トンと推計される、一人当たり消費量は5kgである。ペルーでは Palta Fuerte のように果皮が緑色の品種が好まれる。ペルーのハスアボカドの生産者協会である Prohass は、現在国内でのハスアボカド消費を拡大するための販売活動を実施中である。

貿易

2017年1月から4月までのアボカド輸出量は44,018トンであり、前年を若干上回ったが、収入は12%増加した。生産量がそれほど増加していないにもかかわらず収益が伸びたのは、メキシコの生産量が減少したためである。

過去5カ年で最大の輸出先はオランダである。オランダの統計によると、輸入されたアボカドの4/5が欧州各国に再輸出されている。このため、オランダの輸入数量はEU 需要を代表すると見なすことができる。

米国もペルーの輸出先のトップ5に入っている。米国のアボカド消費は増えており、一人当たり消費量は2014年から16%増加し、年間7ポンドに達している。2016年の米国のアボカド輸入量は、世界最大の450,163トンであった。一貫した品質、健康な食生活志向、販売活動の促進、ヒスパニック人口の増加が、米国の継続的な需要の拡大に結びついている。

ペルーは、メキシコの生産量が減少すると米国市場に輸出を振向けている。恐らく、メキシコ及びカリフォルニアの生産量が通常よりも少ない場合、米国市場での高価格による利益を得ようとして米国向け輸出に転換しているものと見られる。

中国やトルコのような新興市場は世界のアボカド需要を増加させた。アジアはペルーにとって高い成長機会をもたらす市場である。量は少ないものの、ペルーからの香港、日本、中国向けの輸出は急拡大しており、

2015年に比べて2016年はそれぞれ、268%、3,000%、3,700%増加している。

新規植栽園が結果樹齢に達すること、気象条件が回復することにより、業界は2017年の生産量に関しては楽観的であり、前年に比べて20%増加すると見ている。この結果、2017年の第2四半期、第3四半期の輸出量も増加すると予測している。

ペルーのアボカド輸出量(1月-4月)(単位:トン)

	2015年	2016年	2017年
合 計	29,794	43,479	44,018
オランダ	18,205	25,852	25,281
スペイン	6,801	11,876	10,018
英国	3,167	4,042	5,064
米国	190	27	855
ロシア	296	464	762
チリ	294	179	582
中国	0	79	542
コスタリカ	0	418	508
ベルギー	193	156	128

アジア諸国のアボカド輸入量の変化
2015年に対する2016年の増加率(%)

マカオ	115.89
香港	114.73
マレーシア	93.12
韓国	92.34
台湾	89.98
中国	57.16
シンガポール	40.75
日本	28.35

政策

米国ペルー貿易促進協定に基づき、ペルーのアボカドは無税で米国に輸出することができる。EU との間でも自由貿易協定を締結し、無税で輸出することができる。ハスアボガド協会は、マーケティング活動費として、1ポンド当たり0.025ドルを徴収している。この徴収対象は輸出向け及び国内出荷向け双方に適応されている。

10. 米国のリンゴ生産量は前年対比7%減の予測

The Packer 電子版 (2017年8月11日)

米国農務省の作物生産報告によると、2017年の米国のリンゴ生産量は、前年よりも7%減少するとのことだ。

農務省によると、米国のリンゴ生産量(生鮮及び加工仕向)は、2億4,860万箱(1箱42ポンド)で、前年の2億6,840万箱を下回るとしている。

地域別に見ると、米国東部では生産量が増加し、中部では大きく下回り、西部では緩やかに減少すると予測している。

ワシントン州を筆頭とする西部諸州では、総生産量は1億7,040万箱で、前年を9%下回ると予測している。農務省によると、収穫は前年より数週間遅れており、品質は良いものの、生産量は前年を下回るとのことだ。

ワシントン州の生産量は、1億5,950万箱で、前年の1億7,430万箱より9%下回る見通しだ。また、全米に占める割合は64%で、前年の65%よりも低くなるとのことだ。

東部諸州の生産量は5,570万箱で、前年を8%上回るとのことだ。東部のリンゴ生産の約半分を占めるニューヨーク州では、生産量は2,850万箱で、前年の2,810万箱をわずかに上回る見込みだ。報告では、雹害が局所的に発生し、降雨と低温により果実サイズに影響を及ぼしたとしている。

中部諸州の生産量は2,250万箱で、前年を27%下回ると予測されている。農務省によると5月の寒気の影響で、ミシガン州の生産見通しに大いなる影響があったとのことだ。ミシガン州の生産量は1,900万箱で前年の2,800万箱から30%下回ると予測されている。

農務省の農業価格報告によると、6月の生産者平均価格はポンド当たり36.3セントで、前年同月の38セントを下回っているとのことだ。

米国リンゴ協会は、8月24日～25日に開催される米国リンゴの展望及び市場会議で生産予測を公表することとしている。

11. EUのリンゴ、ナシ生産予測

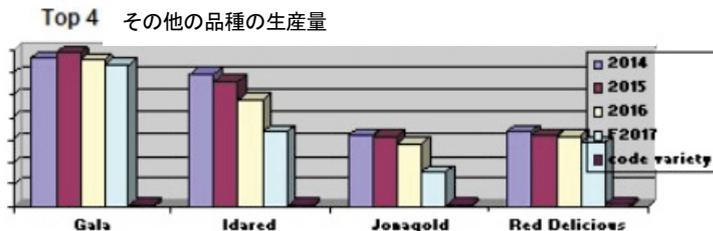
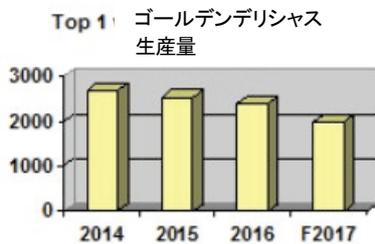
FreshPlaza 電子版 (2017年8月10日)

世界リンゴ・ナシ協会(WAPA)によると、EUのリンゴ生産量は934.3万トンで、ナシの生産量は214.8万トンと予測されるとのことである。リンゴは前年より21%少なく、2014~16年の平均に比べると23%少ない。ナシは前年よりも1%少なく、2014~2016年の平均に比べると8%少ない。また、リンゴの生産予測量は、過去10年で最も少ない数量となっている。ナシは過去10年で2012年に次いで2番目に少ない数量だ。このように生産量が少ないのは、開花期に厳しい霜害があったためと、春から初夏にかけての干ばつによるものだ。

この数値は8月10日にスペインのLeidaで開催されたPrognosfruitにおいて示されたものだ。

リンゴ品種別

品種に関しては、ゴールドデリシャスが前年より18%減の198.2万トン、ガラが3%減の127.6万トン、アイダレッドが30%減の67.9万トンであり、レッドデリシャスは9%減の57.6万トンと予測されている。また、他の新品種(クラブ制品種)は前年の15.7万トンから13.3万トンと15%減となっている。



EU以外の北半球諸国の生産見込み

EU以外の国に関しては、大きく減収が見込まれるのは、ロシア(37%減)、メキシコ(30%減)、スイス(21%減)、ベラルーシ(19%減)、ウクライナ(10%減)、カナダ(5%減)である。米国は比較的安定して約480万トンと

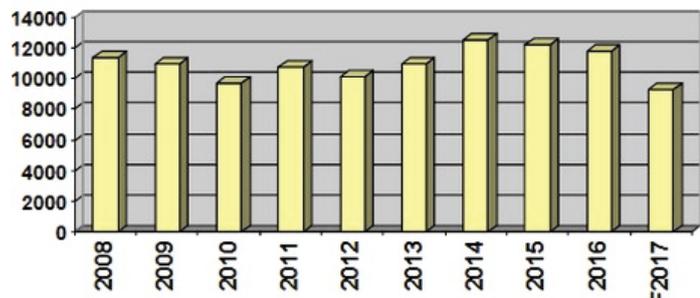
見込まれる。中国は昨年よりもさらに3%増加して4,380万トンと予測されている。なお、米国の予測に関しては、8月24~25日にシカゴ開催される米国リンゴ展望会議で最新予測が報告される見込みである。

欧州のリンゴ市場

過去数年、EUのリンゴ市場はロシアの輸入禁止措置の影響を受けてきており、最近では北アフリカの輸入減少の影響を被っている。このため、新シーズンは供給のバランスは良い方向に繋がる。ほとんどの品種で貯蔵が解消し、南半球産との橋渡しがうまくいくと見込まれる。全体として、新シーズンの販売は2週間早まると見られる。

品種別には、ガラはバランスがとれるが、生産量が減少するゴールドデリシャス、エルスターでは異なる市場動向になると見込まれる。今後数週間で、生産者は品質を見定め、市場バランスに影響を及ぼす生鮮市場出荷数量を決定することになる。現時点では、生鮮市場向け量が620万トンで、加工仕向量が320万トンと予測される。

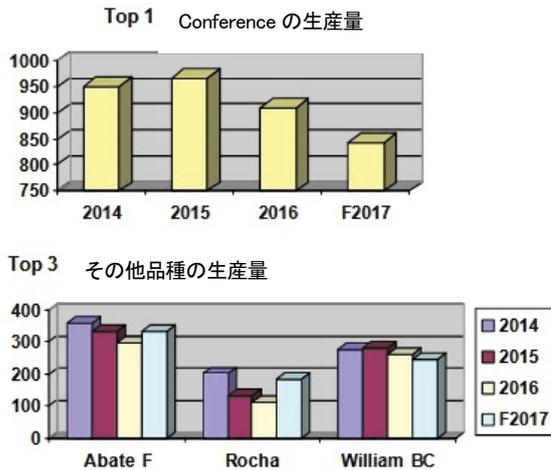
EUのリンゴ生産量の推移



欧州のナシ市場

上記で示したナシの生産予測は EU28カ国のうち上位19カ国の合計である。品種別には、Conference が7%減少して84.4万トンであり、William BC が6%減の24.7万トンであるが、Abate F は12%増の33.2万トンの見込みである。

EU 以外の北半球における生産予測で、増加が見込まれるのは、トルコ(11%増)、カナダ(20%増)、モルドバ(50%増)であり、減少が見込まれるのは、ロシア(37%減)、ベラルーシ(20%減)、スイス(34%減)、米国(3%減)である。



市場は EU の南北で異なった様相になると見込まれる。品種 Abate F と Rocha の生産量は増加する一方で、Conference は減少する見込みだからだ。

新シーズンのナシ市場は昨年より軟調で始まると見込まれる。過去数年で新たな市場開拓は進んだものの、ロシアによる輸入禁止措置の影響は残ると見られる。

情報源:WAPA

1 2 . 熱波の南部・東部欧州

FreshFruitPortal 電子版 (2017年8月7日)



南部欧州、東部欧州で長く続く熱波は、果実及び野菜の生産、貿易に大きな影響を及ぼしており、特にイタリア、バルカン諸国で深刻だ。ただし、生育が進み収穫が早まっているため、一部の国では供給過剰の状況にある。しかし、長期的に見れば、熱波は大変大きな供給不足をもたらすことになる。現在まで、11の欧州諸国が「ルシファー」と呼ばれる

今回の熱波に関する警報を発令している。水不足が深刻化しつつあり、通常よりも降雨量が極めて少ない。このため、収穫に影響を及ぼし、生産物もサイズが小さくなると見込まれている。ただし、これまでのところ、損害は明確になっていない。ただ、イタリアは極端な天候のために影響を被っている。6月には既に干ばつに悩まされ重大な状況を引き起こしていたが、7月には更に重い追い打ちをかけられた。

生産量の減少

バルカン諸国、イタリア、ギリシャではルシファーにより40度以上の高温となっており、生産量の減少をもたらしている。イタリアでは、過去60年このような干ばつに見舞われたことはない。イタリアのメディア Telenord は、多くの果実、野菜が前年よりも早く熟していると伝えている。現時点では多くの青果物が市場に出回っているが、特定の農産物では今後数週間で供給不足になると見られている。具体例としては、トマト、ナス、ピーマンである。加えて、熱波により、キャベツや葉物のような秋冬作物にも影響が見込まれている。



イタリアのブドウ、核果類

Sun World Italy 社の Ventura 氏によると、プッリャ州のブドウ、エミリア-ロマーニャ州の核果類は次のような状況である。「幸いにも両地域は水の利用が可能である。灌漑はドリップ式により行われているため他の方式に比べると効率的だ。この技術のお蔭で、生産者はまだ困難な状況には至っていない。プッリャ州では、生食用ブドウは糖分が高くなり、品質は向上している。加えて、ブドウはカビの被害も受けていない。エミリア-ロマーニャ州でも核果類の糖度は高いようだ。熱波により日焼け果が幾分生じ、果実サイズも前年に比べると全般的に少し小さい。収穫期間は短くなっており、品種間の収穫時期は接近している。2015年に比べて収穫時期は10日早まっている」

8月始めの政府当局者 Puglia 氏の報告によると、市場は値崩れしているという。スイカはキロ当たり10セントを下回り、メロンは30セントを下回っている。加えてズッキーニ、ピーマン、トマトなどの野菜も価格は安い。6月と7月は多くの果実、野菜が同時期に収穫されたため、市場には溢れている、とのことだ。

スペイン

スペインの熱波の影響はそれほど深刻ではないが、いくらかの影響は被っている。夏果実の収穫が早まっ

ており、6月、7月は様々な産地からの供給が集中した。

スペインの有数の産地であり、乾燥地帯でもあるムルシア州では、雨が見込めなければ来シーズンの生産に影響が及ぶとみられている。同地では、将来はスペインの他の地域から水が供給されることを希望している。生産・輸出業者協会である Proexport によると、既に顧客のための水供給計画があるとのことだ。

内陸部のカスティーリャ・ラ・マンチャでは気温は40度を超えており、極度に乾燥している。このため、後期出荷用及び貯蔵用のタマネギの生育が早まっており、サイズははるかに小さい。

市場では少ない量ではない

ベルギーの輸入業者によると、南欧州からの入荷に関する熱波の影響はさほどではないそうだ。Jonckheere 社の Geens 氏は、スペインの供給業者の話では当地の気候は極端ではないという。「スペインにとっては通常の夏の気候である。春の天候は完璧であったし、降雨もあった。冷たい夜と日中の好天に恵まれている。ただし、収穫は通常の年より10日早い」そうだ。

Geens 氏は、現在の供給量は決して少なくないという。「反対に、今年の貿易量は多くの作物において多い。核果類に関しても全ての品目で供給量が多いし、メロンも同様だ」とのことで、入荷した作物を販売するのが難しいと話している。「むしろ休暇の多さに文句を言いたい。安い航空券でより頻繁に、長く休暇をとっていることが販売不振の原因だ」と不満を言っている。

果実と野菜を食べよう

イタリアでは熱波に対応して、もっと果実と野菜を食べよう助言されている。少なくとも業界にとってはありがたいことである。

13. ニュージーランドがカキを中国に輸出

FreshFruitPortal 電子版 (2017年8月4日)



ニュージーランドは、中国の市場解放に12年の歳月を費やした後、中国への試験輸出を行う。業界にとっては、今シーズンは「適度に堅実」な販売活動で幕を閉じたとしている。

ニュージーランドカキ産業協議会の Turk 氏によると、6月まで続いた中国当局による検査への対応は、「長期間の努力」が必要であったようだ。そして輸出に関するプロトコルは、中国当局との間で先月署名された。

「プロトコルの整備に関しては大いに満足している」と Turk 氏は述べている。

「実際、検査活動は果実が着果して病虫害防除が始まる10月に始まった。その後、植物検疫として必要とされる梱包や冷蔵処理における要求事項に関して検査が行われた。さらに、冷蔵処理の過程で、中国当局者が調査を行い、その後中国の輸入許可が下された。

ギズボーンに本拠を置く輸出会社 First Fresh 社は、当地で生産されたカキを、中国、米国で販売実績のあるマーケティング専門会社の Foodview を通じて試験販売を行う。手続きが済めば輸出されるそうだ。

First Fresh 社の Albers 部長によると、カキの中国輸出に関する戦略は、少量から始め、次のステップに進む前に消費者の理解を得ることだ、という。

「中国は、ニュージーランド産のカキに興味を持っていた。生産者は潜在的に大きな市場である中国市場にアクセスできることで興奮している。中国市場は、今後何十年に渡り、ニュージーランドのカキ業界の成長をもたらす可能性がある。しかし、それは正しいアプローチをして初めて可能になる。だから、初年度は上海向けに小規模な試験輸出を行うのだ」と語っている。

Foodview 社の Miller 氏によると、プロトコルに関する交渉が成功したお蔭で、ニュージーランド産の食品に対する中国政府の信用は高まった。次のステップは消費者の手に届けることだという。「大規模な輸出を行う前に、市場や消費者が何を好むかを理解し、市場に受け入れてもらう準備をしなければならない」と語っている。今回の試験輸出では、250の小売店と中国で人気のソーシャルメディアである WeChat を通じて、多くの消費者の反応を得るそうだ。「中国の消費者がニュージーランド産のカキに対してどのような反応をするかは重要なことだ。我々の生産するカキは、中国産の特徴である食べ頃に柔らかくジューシーになるカキよりも固い。中国の消費者がこの違いを理解し、ニュージーランド産のカキを受け入れてもらうためにはどうすべきかを学ばねばならない」と述べている。

Turk 氏によると、ニュージーランドではカキの収穫期は4月下旬から5月だという。「中国向けのカキの収穫は5月初旬であり、包装後に35日間冷蔵されて輸出される。中国向け果実は果樹園における定められたプロトコルを経たもので、2~3日を費やして包装し、別途仕分けたものである」とのことだ。

今シーズンの総括、米国輸出はペンディング

シーズン当初は輸出が増加すると見込んでいたが、結果的には昨年と同程度の32万箱(1箱4kg)であった。「いくつかのサイクロンが通過するなど、気象条件が悪かった」ためとのことだ。生産量の60%が輸出される。「気象条件が悪くなければもっと輸出できたかも知れないが、輸出基準を変更するわけにはいかない」と語っている。Turk 氏はこれらを踏まえ、「適度に堅実」な販売だったと総括している。というのも、オーストラリア、タイ、シンガポール、マレーシアの各市場で堅調な需要があったためだ。

昨年8月、米国農務省はニュージーランドからのカキ輸入を許可するに当たっての条件規則を提案した。通常はパブリックコメントが終わったら程なく公表に移されるのだが、政権が変わったためか未だに公表されていない。次のシーズンに間に合うように期待しているとのことだ。

14. オーストラリア政府、園芸分野で輸出促進

FreshFruitPortal 電子版 (2017年7月28日)



オーストラリア連邦政府は、同国の園芸産業の貿易促進を史上最大規模で行い、野心的な輸出目標を実現するための支援を行うと表明した。

農業灌漑省の Ruston 副大臣は、本日、貿易を促進するため、「オーストラリアを味わう(Taste Australia)」と称する新たなブランド名を公表するとともに、展示会の充実、研究開発と生産者の輸出準備のために資金提供を行うとした。

「我が国の園芸産業は、世界の食糧需要増がもたらす輸出機会をつかみ取る大胆

な声明を発した」と副大臣は園芸業界団体である Hort Innovation とともに述べた。

「世界の食料需要から見ると、食料生産は2007年レベルから2050年までに75%の増加が必要である。中国では食料消費は2009年から2050年までの間に倍増すると予測されている。その需要の大部分はオーストラリアが得意とする高付加価値で、高品質な食料だ」と語っている。

副大臣は、新ブランドを強調するとともに、輸出キャンペーンではオーストラリア産のプレミアム農産品の販売促進を目指すとした。

「このブランドは、農産物の質の高さ、環境面での清潔さ、望ましいライフスタイルの提供、サプライチェーンの信頼性、植物防疫における信用に関する長年の評価を増進させるものだ」と述べている。

Hort Innovation は、『オーストラリアを味わう』の旗の下で、より多くの展示会を行い、生産者や業界の代表者が海外での活動に参加できるよう資金提供を行うとのことだ。

2015/16年には、オーストラリアの園芸産品の輸出額は過去最高の26億豪ドル(20.8億米ドル)に達し、連立政権による市場アクセスの改善等の支援を受け、2021/22年には33億豪ドル(26.4米ドル)に拡大すると予測している。

プロモーション、展示会、研究開発

Hort Innovation の議長である Snell 氏によると、オーストラリアの高品質農産物に対する高い評価、未開拓機会の多さ、業界の貿易に対する意欲を鑑みれば、成長の可能性は極めて大きいとのことだ。

「オーストラリアは、サプライチェーンのあらゆる段階で厳しい安全検査を受けた高級品を提供することで知られている。この実績の上に、まずは、『オーストラリアを味わう』を通じて園芸産品のユニークな『物語』を伝えたい。我が国は、輝く太陽、魅力ある農場、ビーチ、景観の下での素晴らしいライフスタイルで知られている。市場活動の中で、世界の消費者がオーストラリアの果実、野菜、ナッツを購入し食べる度にその魅力を感じてもらいたい」と話している。

生産者、州政府、連邦政府及び貿易関係者が協議して生み出した『オーストラリアを味わう』は、9月に香港で開催されるアジア・フルーツ・ロジスティカにおいて、200名以上の業界代表者出席の下で立ち上がる。そして、ドバイ、北京、上海、東京で6ヶ月間の展示会イベントが行われる。

Snell 氏によると、Hort Innovation は昨年に比べ展示会の開催を40%増やし、海外でのプロモーション活動の出席者を30%増員するとのことだ。

「オーストラリア産農産物、生産者、輸出業者、その他関係者を潜在的なバイヤーに引き合わせ、ネットワークを構築することに重点を当てている」とのことだ。

また、Hort Innovation は、Dairy Australia、Wine Australia、Meat and Livestock Australia とともに、「オースト

ラリアを味わう」の旗の下、プレミアム食品、飲料を紹介することとしている。

一方、国内では、研究開発のために1,050万豪ドル(840万米ドル)を投資し、植物検疫、輸出前処理、サプライチェーンの効率化に資することとしている。

新たな輸出促進のため、Hort Innovationは生産予測、業界の能力、アジアの中産階級の拡大を考慮し、業界と協力して貿易目標を設定した。垣間見ると次の通りである。

- ・野菜輸出額を2020年までに3.15億豪ドル(2.52億米ドル)とし、40%拡大する。連携構築、輸出準備のための業界との協力、サプライチェーンの効率化、海外活動の充実を通じて行う。

- ・今後5年間でアボカドの研究開発に3,148万豪ドル(2,516米ドル)を投じ、潜在的生産額を2億1,200万豪ドル(1億6,950万米ドル)とする。2021年までに、このうち10%をプレミアム品質のオーストラリアアボカドとして輸出する。

- ・サクランボの輸出を2020/21年までに1.2万トンに拡大する。これは2015年に比べて340%増であり、毎年16.5%ずつの増加を見込む。大半はタスマニア州、ビクトリア州による。

- ・アーモンドの輸出量を2016年の6.4万トンから2022年までに11万トンとする。収穫技術の改善、病虫害防除、労働コストの削減に資する斬新な技術導入による。

- ・オリーブオイルについて、今後5カ年で275万豪ドル(220万米ドル)の研究開発、技術普及を行い、高品質品に関しては利益の大きい中国及びアジア市場への輸出を継続的に支援する。

- ・イチゴについて、2021年までに全国生産量に占める輸出の割合を、現在の4%から8%に拡大する。品質の高いイチゴに対し、プレミアム価格を支払う市場に限定して輸出を行う。

15. ペルーのブルーベリー事情

米国農務省海外農業局 GAIN レポート (2017年8月2日)

生産

ペルーのブルーベリー生産は急速に拡大しており、5年前から現在の4,000haに増加し、今後も拡大が見込まれている。高い投資コストにもかかわらず、財政的障壁が低く、高い収益が得られることから、ペルーの輸出農場経営にとっては魅力的な投資先となっている。生産の中心地は、北部沿岸地方の La Libertad である。同地では日照が多く、暖かく乾燥しているため、年間を通して収穫が可能である。

ブルーベリーは永年性の作物であり、平均して20年間生産を継続することができる。また、ペルーでは大きな病虫害の問題はない。ただし、土壌は改善することが必要であり、灌漑水は塩分を抜き PH を中生にすることが必要である。ペルーのブルーベリーほ場では、最新のドリップ式灌漑を行っており、気象条件、土壌、植物の状態に応じて、適正量の灌水と必要な養分の補給を行っている。

土壌改良	1,000
種苗代	48,000
風よけメッシュ	4,000
授粉	500
ドリップ灌漑	6,000
その他	500
合計	60,000

出典: 米国農務省海外農業局

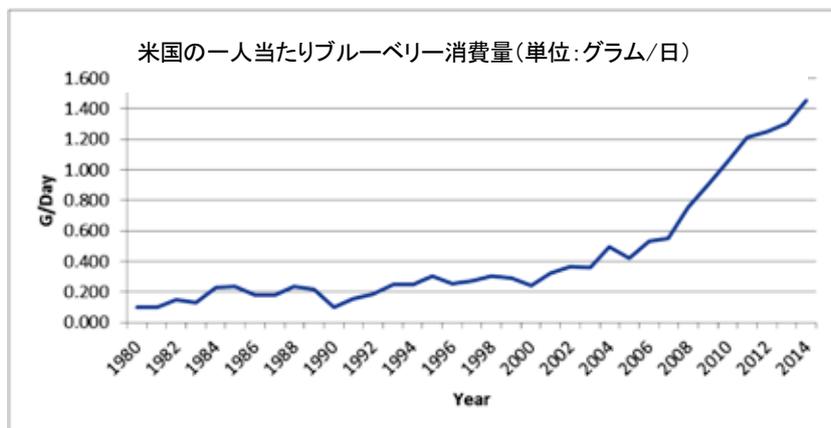
種苗の大部分は米国に由来しており、ペルーの生産者に人気がある Biloxi, Emerald, Springhigh などの品種が栽培されている。収穫は手作業で行われ、現場で輸出向けのパックに梱包される。平均収量は ha 当たり15~20トンである。ほ場開設のための主な費用は、ドリップ灌漑施設と苗木代に費やされる。投資に対する収益は大きく、わずか2カ年で投資を回収することができる。ペルーの果実生産者は、大規模会社も含め、アボカド、ブドウ、カンキツよりもブルーベリーが最も収益性の高い果実だと認識している。

ペルー国内ではブルーベリーは人気のある果実ではない。健康に良い果実との認識はあるが、価格が高いために通常は一般に消費されていない。生産量のほぼ全量が輸出に向けられ、国内消費用として残るのはごく僅かである。

貿易

ペルーのブルーベリーの輸出は、2017年には前年より43%増加すると予測されている。世界貿易の中では、ペルー産品はコンスタントに品質が良いと評価を得ている。2016年には、生鮮ブルーベリーを米国(54%)、オランダ(24%)、英国(13%)、カナダ(2%)に輸出した。輸出量は前年を171%上回る28,139トン(前年は10,303トン)であった。10年前は輸出が皆無であったが、この10年で理想的な条件を利用し、業界は急速に地位を固めた。2017年の輸出量は更に増加し、4万トンに達すると予測される。価格は低下しているものの、2016年の輸出額は前年より150%増加し、2億4,200万ドルとなり、ペルーの生鮮果実輸出額で第3位となった。2016年の平均価格はキロ当たり7ドルで2015年のキロ当たり11ドルから低下した。

生鮮ブルーベリーは通常プラスチック・クラムシエルの容器に入れられるが、容器は125g、170g、340g、510g、680gの5種類がある。冷凍品はより大きなバッグに入れられ、容器は454g、907g、1,361gの3種類がある。ペルーの最大の輸出先である米国では、過去10年でブルーベリーの消費が急速に拡大している。ペルーのブルーベリーは、基本的には米国の生産時期とは逆であるが、生産期間が拡大していることから、一部は米国の生産時期にも輸出が行われている。



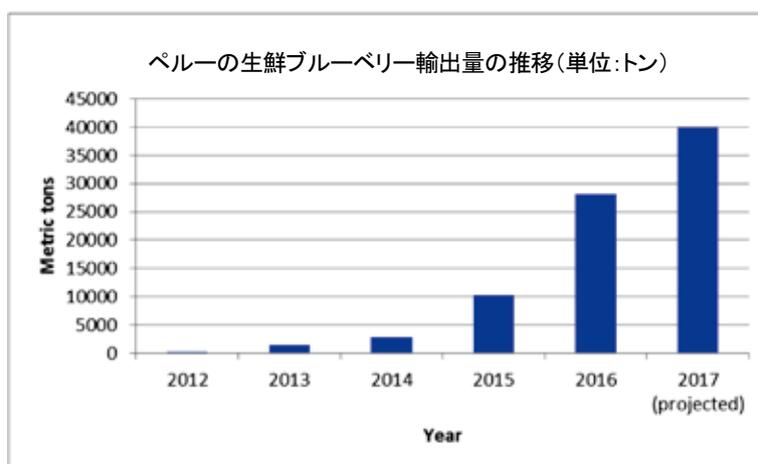
ペルーの輸出量は、その確固たる地位と、生産が拡大していることから、一層増加すると予想される。輸出量ではペルーで6番目に多い果実であり、全体の3%を占めており、輸出金額では果実全体の13%を占めている。また、世界のブルーベリー輸出国の中で、ペルーの輸出量は第5位となっているが、今後2年で南米一の輸出国になると予想される。なお、2017年2月、成長の可能性が極めて大きい中国市場へ、海上輸送により初めてブルーベリーの輸出が行われた。

ペルーのブルーベリー国別輸出量(単位:トン)

	2014	2015	2016
米国	1,298	5,578	15,262
オランダ	694	2,906	6,836
英国	297	1,404	3,753
カナダ	0	22	581
輸出量総計	2,873	10,303	28,139

2016年のブルーベリー輸出国(単位:トン)

チリ	140,577
カナダ	100,808
米国	37,120
スペイン	36,505
ペルー	28,139



政策



米国・ペルー自由貿易協定(PTPA)により、ペルーは米国に対して自由にブルーベリーを輸出することができ利益を享受している。2009年に署名されたこの二国間協定は相互のブルーベリー業界の発展に寄与している。米国はブルーベリーの苗木をペルーに輸出し、ペルーで栽培され、収穫された果実を米国の消費者に届ける、という関係だ。

一方、2016年11月の APAC 首脳会議で署名された新しい輸入プロトコルにより、中国本土へのブルーベリーの輸出機会が創出された。

16. スペインのカキ 生産量は少ないが果実は大きい

FreshPlaza 電子版 (2017年7月21日)



上回る見込み」とのことだ。

春から夏にかけての厳しい高温のため、落果が多かったことから、今年のカキの生産量は減少すると見込まれる。しかし、同時に新植園が結果樹齢に達することから、全体では昨年に比べて生産量は若干増加するとみられる。

「樹に残った果実は少ないが、昨年11月と2月には降雨があったことから樹勢は強い。このため品質は良く、サイズも大きい果実が収穫されると期待している」と Exquisite Fruits 社商業部門担当の Vidal 氏は語っている。「今シーズンの販売数量は約1.1万トンに達し、昨年をわずかに

他の果物と比較すると、カキは比較的新しく、あまり知られていない。しかし、このことはカキに賭けたスペインの生産者にとっては障害とならないようだ。「スペインでは供給量が大きく伸び過ぎた。このため価格にも反映し、今年も価格の面では同様の状況となるだろう。しかし、将来に関しては、需要が増加を続けているため楽観的だ。例えば、ドイツはスペインからの主な輸出先であるが、2012年の1.7万トンから2016年には4.1万トンに増加している」と Vidal 氏は説明している。

バレンシアの企業である Exquisite Fruits 社は、昨年の販売では出荷量を大きく伸ばし、インドネシアのような新たな市場を開拓した。「アラブ首長国連邦での販売を強化し、カナダ向けにも販売を伸ばした。しかし、何より従来からのカキが消費されてきたインドネシアで市場を開拓し、我が社の品種である Rojo Brillante が好意的に評価された意義は大きい。ロシア市場に代る遠隔地の市場を開拓するという戦略に則ったものであるが、既に販売量の12%を占めている」と述べている。

Rojo Brillante は、世界各地でも栽培が始まっており、南アフリカ、南米の他、隣国のポルトガルやイタリアでも生産されている。しかし、スペインのカキ輸出業者は、他国による競争の影響を感じていない。



Exquisite Fruits 社は、毎年、消費者のニーズに応えるためパッケージを新しくして、カキのブランドスタイルを開発している。「毎年、消費者が付加価値を認識してくれるようにパッケージを見直している。市場によりけりだが、パッケージを小さくする傾向にある」とのことだ。

情報源: www.exquisitefruits.com

17. EUの学校給食支援

EUROFRUIT 電子版 (2017年7月28日)

子供達の健康な食生活を推進するための新しいスキームが始まる。この中には、果実、野菜、乳製品の学校への提供、栄養と食料生産に関する教育プログラムが含まれている。

このスキームは、昨年時点で2千万人に達した子供達を対象とする既存のプロジェクトを統合する形でスタートする。EU 加盟国の参加は任意であるが、全28カ国は2017/18年の学年年度におけるこの取組に参加することとしている。

EU の農業農村開発計画担当委員であるホーガン氏は、「新しいスキームが明日発足することを大変に喜んでいる。このスキームは何百万という EU の生徒及び何千人という EU の生産者に価値ある支援を行うものだ。この支援は特に生産者に対して重要であり、増額された資金により支援の質を高めるものとなる。加えて、今回のスキームは、これまでの学校への乳製品及び野菜の提供事業を統合することで、簡素化をもたらすことができた。他の分野の EU 委員と一体となった今回の取組により、健康的なライフスタイルを促進することができるので、このスキームが価値ある役割を果たしてくれると確信している」とコメントしている。

このスキームでは各国の保健当局が認定した品目を学校に提供することとしており、優先品目としては、生鮮果実、野菜、生乳の他、加工品としてスープ、フルーツコンポート、ジュース、ヨーグルト、チーズが対象となっている。なお、砂糖、塩分、脂肪の添加は、保健当局が許容した範囲内でなければ認められないこととなっている。また、EU 加盟国は独自の裁量で、EU の支援に各国の援助を上乗せすることができる。

どのような品目を対象とするかは、健康面、環境面に配慮する他、季節性、入手可能性等に依ることとしており、EU 製品を優先することとなっている。加盟国は、自国の製品、地域の製品を購入するとともに、有機製品、サプライチェーンが短い製品、環境便益を寄与できるもの、農業品質管理計画に沿ったものを推奨するになると見込まれる。

2017/18年学校年度に支出される2億5千万ユーロの EU 拠出金のうち、約1億5千万ユーロは果実、野菜に振向けられ、約1億ユーロは乳製品に向けられることになっている。

EU 委員会はプレスリリースの中で、「この新しい学校給食制度はホーガン委員が提唱する簡素化の提案に沿ったものである。このスキームを推進することにより、相乗効果や効率性が発揮され、保健政策や教育政策等の他の政策を補完することが期待される」と説明している。

なお、スウェーデンと並んで英国は、乳製品に関するスキームの実施には同意したが、果実、野菜に関しては参加を拒否した。

18. ゼスプリが米国に新事務所開設

FreshFruitPortal 電子版 (2017年7月28日)



ニュージーランドキウイのゼスプリが、北米、中南米での販路拡大を目指す管理事務所を、米国カリフォルニア州オレンジ郡に開設した。

最高経営責任者の Jager 氏によると、ゼスプリは北米で力強く成長しており、その大半はサンゴールドによりもたらされている、とのことだ。

「ニュージーランドのキウイ産業の販売額は2025年までに45億ドルと2倍以上に拡大する見通しだ。これは既存の成熟した市場だけではなく、北米のように発展途上の市場によりもたらされる」とプレスリリースで語っている。

「ゼスプリは、米国及び南北アメリカ大陸で新たな消費者を惹きつけ、販売を拡大するため、キウイ部門の再スタートを切る」とも語っている。

今回の公表によると、米国ではキウイ販売の発展が不十分で、果実全体で21位の地位に留まっている。一方、欧州、アジアの大半の国ではトップ10に位置づけられていると説明している。

しかし、ゼスプリとその他のブランドを含むキウイ販売の伸びは、他の果物の伸びを上回っているとも示している。

北米におけるサンゴールドの販売の伸びは、過去2カ年で100%を超えており、2018/19年には5,000万ドルに達すると予測されている。

現在、サンゴールドの販売の40%はアジア系米国人の小売店を通じて販売されている。これは、アジア系のコミュニティがゼスプリに馴染みがあるからだ。しかしながら、この新しい品種は米国全体の消費者を魅了すると言われている。

Jager 氏は、小売業者のニーズは変化しており、ゼスプリはこのニーズを満たすために業者と協力していると説明している。「市場開発マネージャーを任命することで、主要な小売業者と全国を通して販売を拡大する有意義なプログラムを構築し、パートナーである小売業者とゼスプリ生産者に利益を還元することができる」と語っている。

ゼスプリは統合的なPR活動によるマーケティング投資を拡充しており、店内モバイル広告、新しい小売パッケージを含むデジタル及びソーシャルメディアキャンペーンを進めている。Jager 氏によると、ゼスプリは海外での存在感を高め、世界規模での販売額を拡充しようとしており、今年初めにドバイに事務所を開設し、中東、インド、アフリカでのサービスを提供しているとのことだ。「現在450人のスタッフのうち、半数以上が海外に拠点を置き、21カ国にオフィスを構え、59カ国でマーケティングプログラムを実施中」と説明している。

19. ワシントン州のサクランボ生産は史上最高か

The Packer 電子版 (2017年7月26日)

ワシントン州ではサクランボの生産量は史上最大ではないかと予測している。

同州ヤキマに本社を置く Northwest Cherry Growers 社の社長は、個人的見解としながら、出荷量は2,500万箱～2,700万箱(1箱20ポンド)に達するのではないかと語っている。これまでの最高は2014年の2,320万箱であった。社長によると、過去30日間、毎日平均53万箱が出荷されたという。これまで、こんなに長く50万箱近く出荷されたことはなかった。今年、既に2,100万箱が出荷され、未だ1/4が出荷されずに残っているという。既に出荷が終わった生産者もいるが、多くはまだ数週間出荷が続くという。

「これだけ多くの量が生産されることは、皆分かっていたが、実際に起ったのだ」とワシントン州セラーにある Rainier Fruit 社の副社長は語っている。「全てのサクランボがベストなサイズではなく、食味も良くないものもある、一部は出荷が除外されたものもあるが、これほど多くの量の素晴らしいサクランボが市場に出たことはない」とも語っている。

生育期間を通じて理想的な天候に恵まれ、1ヶ月も降雨がなかったことが、収量が多くなった主要因である。加えて新植園が結果樹齢に達していることも要因の一つだ。特に従来品種に比べて生産性の高い品種が植栽されていることが生産増に寄与している。ワシントン州ウェナチーの Honey Bear Fruit 社の社長は、「びっくりするような結果だが、将来も続く」と語っている。「新植された果樹は、ほとんどが7月に収穫される。業界としては7月の生産量を制限しなければならない。市場は残酷かもしれない。市場はどんな時期に出荷される品種を生産すべきか教えてくれる」とも語っている。

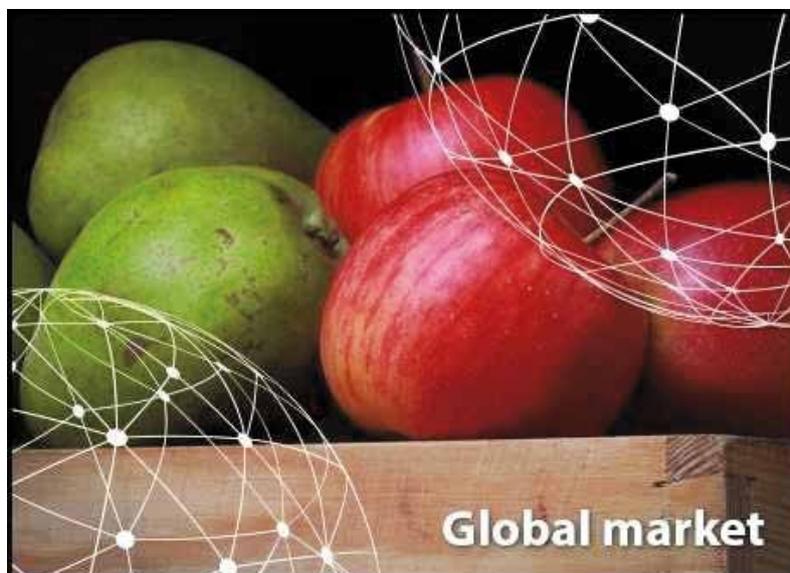
尋常でない出荷量によって価格に影響が出ており、業界はストレスを被っている。米国農務省による FOB 価格調査によると、7月25日現在、18ポンド箱の価格は9.5列サイズで28～30ドル、10列サイズで24～26ドル、10.5列サイズで19～21ドルである。昨年との比較は厳密にできないが、2016年の7月6日の調査では10列サイズで30～32ドル、10.5列サイズで28～30ドルであった。

Northwest Cherry Growers 社の社長は、「需要と供給の法則が発現されている。儲けはほとんどで良いと考える人も多い」という。サクランボの需要が多い7月4日の独立記念日までは市場は堅調であった。しかし、その後価格は低下しているという。「市場は新たな広告支援を必要とするまで価格が低下している。7月第1週以降、市況は良くない。供給が引き締まると見込まれる産地もない」そうだ。

一方で、生産量が多いことは、サクランボで多くの利益を得ている小売業者には好都合だ。また、買い物客にとっては理想的だ。Rainier Fruit 社の副社長は、「今年は沢山の果実が市場にあり、勝者は消費者である。価格の点から見ると、これまでサクランボに接してこなかった消費者も、サクランボを購入することになるだろう」と語っている。

20. 世界のリンゴ、ナシ市場

FreshPlaza 電子版 (2017年7月21日)



欧州のリンゴ、ナシ市場は逼迫している。欧州大陸内では霜害と雹害が発生し大きな損害が生じたが、多くの国ではその全容は明らかになっていない。ここでは主要な欧州諸国と米国の状況を要約した。この他、南半球の状況についても概観する。南半球でも多くの問題を抱えている。

欧州では、収穫量は900万トンと見積もられている。これは2016年に比べ2割5分の減少である。リンゴの産地の中には損失割合が50～70%に達する地域もある。この春に起った霜害が、開花期に遭遇したためだ。ポーランド、ベルギー、オランダ、オーストリア、イタリア、バルカン半島諸国が最も深刻な被害を受けた。2桁パーセントの減少が見込まれる。

フランス: 地域で異なる被害

地域によって被害は異なっている。南東部と西部ではほとんど被害は報告されておらず、あったとしても5%程度である。北部に加えてロワール渓谷では、20%の被害が報告されている。しかし、場所により被害は異なり、重大な被害を受けた生産者がある一方で、ほとんど被害がなかった生産者もいる。6月に行われた第1回目の予測では、中部フランスでは、霜害による被害は5～10%とのことである。ローヌ、アルフェン、アルザスでは被害がひどく、果樹園によりけりだが、割合は15～50%である。フランス全土の生産量の被害は約10%で、加えて約10%は品質的に問題があるとされている。

欧州ではリンゴ、ナシの収穫に被害が出ているため、販売できる果実は限られている。この結果、フランス産リンゴに対する需要は強い。南部では被害はほとんどないからだ。業者は品薄の事態に対処しなければならないと予想している。

南半球から供給される果実は即座に販売されると予想している。ということは、8月初旬から、欧州のリンゴ市場は品薄になるということだ。ゴールデンデリシャスでは状況が悪化している。というのも、特にイタリアでは収量が半減している生産者もいるからだ。

ドイツ: 当初の推計値と大きな違い

ドイツ北部と東部では、霜害による損失は10%程度であり、それほど被害ではない。一方、ラインランドでは最大50%の被害を受けた。また、南部のボーデン湖地域では最大70%の被害があると報告されている。

イタリア: 品種により大きな被害

全体では損失は20～25%と推定されている。大きな被害があった品種は、ゴールドデデリシヤスと Renetta である。その他の品種である Stark、ふじ、ガラはそれほどの被害はない。

トレンティーノ・サウス・チロールでも被害が報告されているが、品種による差があるようだ。ゴールドデデリシヤスは大幅な減少が見込まれるが、ガラは通常の水準にとどまるようだ。

スペイン:生産量は少ないが楽観的

スペインのリンゴとナシの主産地はカタルーニャだが、昨年と比べて大きな変動はなさそうだ。リンゴの生産量は284,790トンと前年を7%下回ると見込まれ、ナシは139,970トンと前年より1%増加する見込みだ。生産者によれば、面積の増加にもかかわらず生産量が増えていないので、果樹園を改善し、着色が良く単位面積当たり収量の高い品種に更新する時期に来ているとのことだ。一般に、今シーズンの見通しは楽観的である。

ベルギー:リンゴは70%減、ナシは20%減

ベルギーでは新シーズンの収穫を待っているところだが、現在、昨年産のナシの販売は終了し、リンゴが少々残っている。今後の収穫予測に関しては見方が混在している。リンゴについては霜害で大きな影響を受け、前年に比べて65～70%減少と推定されている。ナシはそれほど深刻ではないが、15～20%減少すると見込まれている。現在、生産者はナシの選別を行っており、品質の悪いものを廃棄している。ナシのサイズは、干ばつ等のため小ぶりである。

ベルギーの果樹産業部門は悲観的である。種々の報告書によると、多くの生産者は、この状態が続くと廃業するものが出てくることを心配している。生産者は、この問題は第一にロシアのせいだと考えている。ロシアは1990年代後半以降、大量の果実を購入してくれていたが、現在は国境が閉ざされ、大きな打撃を受けているからだ。加えて、この2年で被った気象災害(雹、暴風雨、高湿度、干ばつ、霜)の影響も大きい。果樹関係会社が消滅するなどの犠牲が出ることも見込まれている。数年後、政府は何らかの具体的対策を講じることになるだろう。

オランダ:リンゴは26%減、ナシは18%減

オランダの収穫量は減少する見込みだ。リンゴは23.3万トンで、前年折り26%減少し、ナシは30.7万トンで前年より18%の減少が予測されている。この減少は霜害と冬期の低温によるものだ。

減少は、地域により、生産会社により大きく異なっている。同国南部では最も被害が大きい。その後の日照により、残った果実の品質は良いとみられる。これまでのところ、雹害は報告されていない。

オランダのリンゴ栽培面積は6,950haで、ここ数年、面積は減少している。エルスターが最大の品種で全体の45%を占めている。エルスターの生産量は10.4万トンで、前年より22%減少すると見込まれている。

ナシの栽培面積は9,750haで、品種 Conference が全体の80%を占めている。今年の Conference の生産量は25.4万トンで、前年より13%減少する見込みだ。Conference の栽培面積は年々増加しており、今年は3%拡大した。

ポーランド:リンゴは30%減、ナシは40%減

ポーランドの状況は不確実で、いくつかの異なる数字が公表されている。リンゴの生産量は285万トンで前年を30%下回ると予測される。ナシは前年を40%下回る4万トンと予測されている。この数値は矮化リンゴ推進協会の会長 Makosz 教授による予測値だ。

これらの数値は、これから9月末までに好天が続けば、改善される余地があり、リンゴの生産量は300万トンを超える可能性もある。なお、昨年はリンゴ、ナシとも過去最高レベルの生産量であった。教授の予測は、52の生産者、10名の専門家、アドバイザーに基づくものだ。樹園地によって霜害の影響が異なるため、正確な数字を示すことは未だ難しい。

一方で、被害が50%に達するとする予測もある。「今シーズンは悲惨だ」と業者は話している。全ての生産者が同じ程度の損害を被ったわけではなく、被害が少なかった生産者もいる。とはいえ、販売契約を結ぶこと

ができるかを心配している生産者は多い。最終的な生産予測は約4週間後に出される見込みだ。

米国：リンゴは2%増、ナシは1%減

ワシントン州、ニューヨーク州、ミシガン州が米国のリンゴ3大産地である。収穫は北部では通常8月に始まり、東部と西部では9月に始まる。ワシントン州の生産量は1億4千万～5千万箱の生産が見込まれているが、これは新規植栽園が結実を始めて以降、新しい生産水準といえるものである。ワシントン州の生産者は、今シーズンについて楽観的である。好天候に恵まれたため、国内販売、輸出とも問題を感じていない。

ミシガン州では、5月に晩霜害に襲われたため、生産量は前年を43%下回るとみられている。ニューヨーク州では前年より12%増加を見込んでいる。

全般に、米国の生産量は前年を2%上回ると見込まれる。有機リンゴの生産は着実に増加しており、ハニークリスプやクラブ制リンゴも記録的に増加をしている。生産者は、ハニークリスプ、ピンクレディー、ジャズ、エンヴィーの生産に熱心に取り組んでいる。赤色系品種、レッドデリシャス、ジョナゴールド、ブレイバーン、カメオも市場シェアを確保している。今年はガラの販売量がレッドデリシャスを抜く見込みだ。

6月1日現在、ワシントン州の貯蔵リンゴの85%は冷蔵庫に保管されている。州としてはこれら貯蔵リンゴを新シーズンが始まる前に販売を終えたいと考えている。貯蔵品種はレッドデリシャス、グラニースミス、ふじ、ガラ、クリスピンクである。ニューヨーク州から国境をまたいだオンタリオ、ブリティッシュコロンビアにかけては既に貯蔵リンゴはない。業者は円滑な新シーズンへの移行を期待している。

ナシに関しては様相が違う。ワシントン州とオレゴン州の生産量は2%減少する見込みだ。両州はナシの商業生産の85%を占めている。生産量を過去5カ年平均と比較すると10%の減少になる。また、生産量の増減は品種により異なっている。Green d'Anjou は7%増、Red d'Anjou は10%増であるが、バートレット、ウィリアムズは4%の減で、Bosc は記録的な29%の減少である。

カリフォルニア州はナシ生産の15%を占めているが、州の生産量は27%増加する見込みである。

7月14日現在、前年産のナシの2%、8,500トンが貯蔵されている。業者とすれば新シーズン前に販売を終えたいと期待しているが、市場条件が良好であることが必要である。

南アフリカ：ふじが輸出を押し上げ

9月末までにはクリスピンクの英国、EU 向けの輸出は終了し、1ヶ月後にはその他の市場向けも輸出は終わる。ゴールデンデリシャスは年間を通じて販売されるが、最大の市場はアフリカ大陸であり、ナイジェリア向けが最も多い。グラニースミスも年間を通じて出荷されるが、主な市場は英国とマレーシアである。ふじに関しては極東、特に台湾、マレーシアに市場を開拓したが、継続して輸出が拡大している品種の一つとなっている。公式データによると、ふじの輸出は7%増加した。クリスレッドの販売量は新植園が結果樹齢に達していることから増加している。販売シーズンは11月又は12月まで続く。

ナシでは Packhams、Forelles がまだ出荷を続けている。両品種ともシーズン当初は3%増加の予想であった。Packhams の販売は9月又は10月上旬まで続く。インド、アフリカ、極東が主な市場である。Forelles は主に極東と中東に輸出される。なお、8月初旬には販売は終了する。シーズンを通すと、ナシの輸出は昨年と変化はない。

チリ：中南米で拡大

チリの果実は南米大陸で存在感を増している。チリは経済を開放したことで利益をあげ、低い生産コストと有利な交易レートの恩恵を浴している。この結果、リンゴを含めて輸出は好調である。他の競合国ではチリの存在を懸念している。

ナシに関しては、今年は市場で成果をあげるかも知れないが、急成長というわけではない。市場でよく聞かれるのは「停滞」という言葉である。ナシではアルゼンチンと南アフリカが競合国である。もし、中国市場がチリに開放されれば事態は好転するかもしれない。市場は北半球に依存しているため、これら諸国の生産が多ければ販売は困難になってしまう。もし、北半球で生産が減少した場合は、チリは利益を享受できる。ナシは11ヶ月貯蔵できるため、販売競争が一層難しいものとなっている。なお、今シーズンは品種 Abate Fetel が好

調であった。

アルゼンチン:輸出が減少

今年の上半期はリンゴ、ナシの輸出は185,265トンであり、前年を13%下回った。この輸出量は記録的な低水準である。リンゴ、ナシの産地からの生産情報もネガティブなものであった。輸出港からの報告でも、ナシの輸出は15万トン(13%減)、リンゴは3.5万トンであった。この減少傾向はここ数年の明白になっているが、その理由は生産者が栽培を放棄したことによる。

このように生産者にとって困難な状況にもかかわらず、リンゴ、ナシは近隣のチリ、エクアドル、ブラジルから輸入されている。

中国:リンゴ、ナシとも生産増を期待

中国は世界のリンゴ生産の40%のシェアを占めている。渤海湾、黄土高原、黄河、そして高原地帯の南西部はリンゴの最も重要な産地である。雹害、豪雨に見舞われた昨年と異なり、今年は豊作が予想されている。主要産地の河南省では、昨年に比べ20%多い生産量が見込まれている。

中国のリンゴは東南アジア、中東で人気がある。これら地域では自国産は限られており、中国で最も人気があるふじは、暑い地域での販売が好調である。輸入は主にニュージーランド、米国、チリからであり、プレミアムリンゴとして販売されている。リンゴ市場全体は、昨年に比べ回復しているようである。

ナシの収穫は7月中旬から始まり8月まで続く。中国ナシの Ya は9月まで収穫される。全国の生産量は昨年を5%上回ると予測されている。しかし、最大の産地である山東省は開花期の降雨の影響で15~20%生産が減少する見込みだ。中国はベルギー、オランダからナシを輸入している。品種 Conference は大都市で販売されている。

6月1日以降、インドは中国からのリンゴの輸入を禁止した。これは植物検疫条件に違反していることが判明したという理由からである。インドは中国が輸入リンゴのシェアの70%を占めていた巨大な市場である。市場が再び解放される時期は不明である。

オセアニア:投資が続く

オーストラリアのリンゴ、ナシ産業は他の果実業界よりも多くの生鮮果実の生産を行っている。統計局によると、タスマニアでは2015/16会計年度にリンゴの生産量が前年を28%上回り、4,500万ドルに達したという。全国を通じて、増加する需要に対応するため、数万本もの新植が行われている。これだけ大幅な拡張は数年ぶりである。

ニュージーランドでは2020年までにリンゴ、ナシの面積が10%拡大し、1.1万 ha に達すると予測している。これは、主にアジアにおける強い需要に対応し、新品種の植栽を行っているからだ。今シーズンの初期の報告によると、生産条件は完璧とのことだ。

著者:Rudolf Mulderij

2 1. 2016/17 年世界のカンキツ市場と貿易動向

米国農務省海外農業局ホームページ (2017 年 7 月 21 日公表)

注)この報告書は2017年1月25日に公表された同じタイトルの報告書を見直し公表されたものです。前回報告書の翻訳は海外果樹農業情報 No131「海外の果樹産業ニュース2016年度下期版」の P23 に掲載されています。海外果樹農業情報は中央果実協会 HP からご覧になれます。

<オレンジ>

2016/17年の世界のオレンジ生産量は、前年を320万トン上回る5,020万トンと予測される。これは、大部分が加工に仕向けられるブラジルが大幅に増加するためであり、中国、米国で生産が減少するものの、これを上回るためである。輸出は若干増加する。

米国の生産量は、前年を100万トン下回る460万トンと予測される。これは単位当たり収量の減少と面積の減少によるものである。輸出は若干減少するが、国内消費量は供給量の減少により11%減少する。減少は数年連続している。加工仕向け量はフロリダの生産減により落ち込む。フロリダ産の大部分は加工向けられ、カリフォルニア産は生食に向けられる。

ブラジルのオレンジ生産量は、前年を490万トン、加工仕向量は480万トン上回る予測である。これは好天に恵まれたことと、表年であったため果樹の樹勢が高まり、開花、着果が順調であったためである。生産量は1,920万トン、加工仕向量は1,390万トンと見込まれる。輸出量は供給の増加により増加する。

EU の生産量は乾燥した天候と、イタリアの一部でトリステザウイルスによる被害があったことから減少すると予測される。輸入は比較的变化はないが、国内消費量と輸出量は生産の減少から少なくなる見込みである。

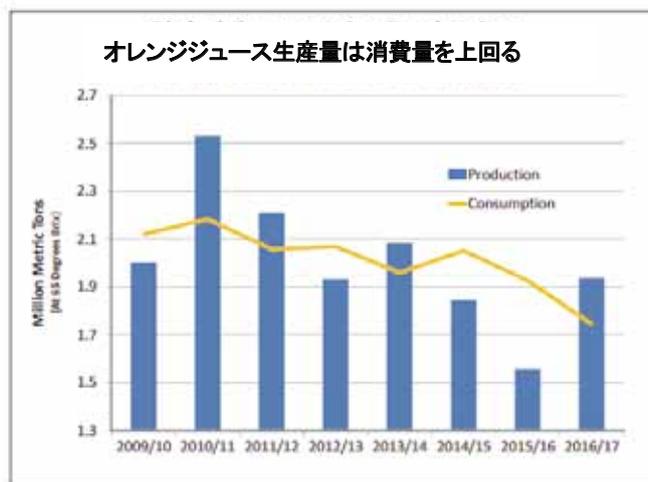
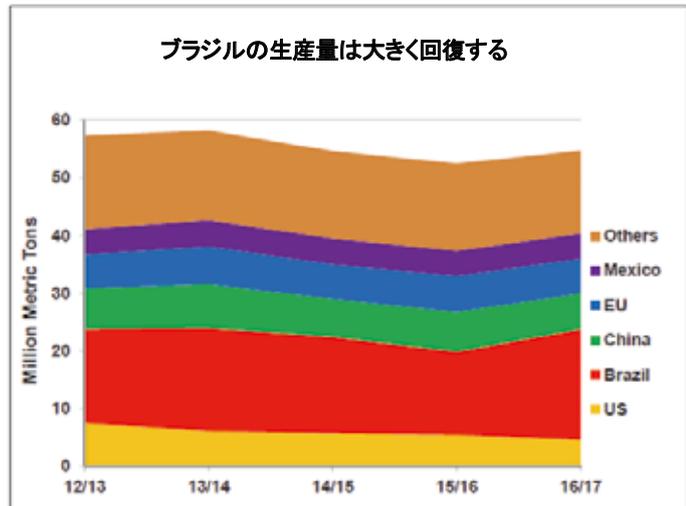
メキシコの生産量はほとんど変化がない。国内消費量は、加工向けが増加することから4%減少する。

南アフリカの生産量は、主産地で前年の干ばつから回復するため、130万トンに増加すると予測される。現在、西ケープ州で干ばつに遭遇しているが、この先、冬期に降雨が不十分であれば、2017/18年産に影響を及ぼすと見られる。輸出は生産の増加により拡大すると見込まれる。

モロッコの生産量は、面積が拡大していることと単収が増加したことから12%増加し、100万トンの新記録を達成すると予測される。生産の増加により輸出量は前年から約3割増加し、国内消費量も10%増加する見込みである。

<オレンジジュース>

世界の2016/17年のオレンジジュース生産量は、ブラジルが過去30年間で最低であった昨年から急回復して約200万トン(65度ブリックス



換算)に達すると予測される。一方、消費量は数年にわたり減少する傾向にある。在庫量はブラジルが4倍増となるため、大きく増加する見込みである。

米国の生産量は、フロリダでカンキツグリーンング病のため生産量が落ち込むため、前年を20%も下回る予測である。輸入量は若干増加する見込みであるが、供給量が減少するため輸出と消費は減少する。

ブラジルの生産量は、加工向けのオレンジ生産量が大幅に増加することから、前年を50%も上回るとの予測である。輸出も生産の増加から27%増加する。

メキシコの生産量と輸出量は若干増加する予測である。

EU の生産量は、若干増加すると予測される。重要なことは、消費について、他の果汁飲料と競合関係にあるものの、安定して推移する見込みであることだ。

<タンゼリン/マンダリン>

2016/17年の生産量は、EU、モロッコ、トルコで増加するものの、中国で減少することから、全体では若干減少し、2,850万トンと予測される。消費量は若干減少するが、輸出量、加工仕向量は5%増加すると見込まれる。

<グレープフルーツ>

2016/17年の生産量は、中国における天候不順と米国のカンキツグリーンング病のため、前年を40万トン下回る590万トンと予測される。輸出量は、南アフリカが増加するものの、トルコが減少することから、全体では減少すると見込まれる。消費量は中国で生産が減少することから少なくなると見込まれる。

<レモン/ライム>

2016/17年の生産量は、前年より4%増加し720万トンと予測される。アルゼンチンと米国で減少するものの、EU では天候に恵まれたため増加すると見込まれるためである。加工仕向量、消費量とも若干増加する。輸出は南アフリカ、トルコが増えることから、全体で増加する。

世界のオレンジの需給

(単位：1,000トン)

国名	2012/13	2013/14	2014/15	2015/16	2016/17 1月予測	2016/17 7月予測
生産量						
ブラジル	16,361	17,870	16,714	14,362	18,197	19,217
中国	7,000	7,600	6,600	6,900	6,200	6,200
EU	5,890	6,550	5,954	6,241	6,050	6,012
米国	7,501	6,140	5,763	5,523	4,892	4,599
メキシコ	4,400	4,533	4,515	4,400	4,375	4,375
エジプト	2,450	2,570	2,635	2,930	3,000	3,000
トルコ	1,600	1,700	1,650	1,800	1,855	1,850
南アフリカ	1,659	1,723	1,645	1,275	1,560	1,345
モロッコ	784	1,001	868	925	960	1,037
アルゼンチン	550	800	800	800	650	680
ベトナム	521	532	590	590	590	590
オーストラリア	435	430	430	455	470	470
コスタリカ	315	220	335	335	345	345
グアテマラ	152	154	160	160	160	160
イスラエル	73	69	86	105	115	115
その他	160	190	193	192	191	191
合計	49,851	52,082	48,938	46,993	49,610	50,186
国内生鮮消費量						
中国	6,405	6,865	6,043	6,446	5,900	5,888
EU	5,382	5,549	5,333	5,608	5,400	5,377
ブラジル	5,421	6,035	5,196	5,296	5,333	5,333
メキシコ	2,887	3,312	2,947	2,776	2,645	2,653
トルコ	1,290	1,284	1,310	1,366	1,425	1,410
エジプト	1,365	1,385	1,350	1,366	1,380	1,380
米国	1,492	1,357	1,263	1,300	1,362	1,151
モロッコ	642	820	688	801	778	867
ベトナム	559	603	626	648	650	640
ロシア	511	467	438	470	477	437
サウジアラビア	274	274	448	435	440	435
アルゼンチン	360	524	450	469	350	370
イラク	261	302	296	304	305	305
オーストラリア	218	206	175	235	200	240
アラブ首長国連邦	201	220	230	222	225	220
その他	1,660	1,467	1,438	1,511	1,545	1,484
合計	28,928	30,670	28,231	29,253	28,415	28,190
加工仕向量						
ブラジル	10,935	11,832	11,506	9,058	12,852	13,872
米国	5,470	4,420	4,133	3,732	3,045	2,998
メキシコ	1,510	1,200	1,550	1,600	1,700	1,700
EU	1,069	1,474	1,251	1,286	1,310	1,315
中国	600	715	650	600	550	550
アルゼンチン	113	200	278	270	245	255
コスタリカ	220	136	220	230	240	250
南アフリカ	369	471	403	142	425	167
エジプト	85	85	85	100	100	100
トルコ	95	100	80	100	100	100
その他	196	200	200	160	187	175
合計	20,662	20,833	20,356	17,278	20,754	21,482

輸出量						
エジプト	1,000	1100	1,200	1,464	1,520	1,520
南アフリカ	1162	1,144	1,160	1,064	1,050	1,120
米 国	678	506	522	655	640	635
トルコ	244	349	305	371	370	395
E U	322	346	297	319	300	300
オーストラリア	127	126	156	161	230	180
香 港	45	49	74	107	110	140
モロッコ	82	111	130	89	120	120
中国	83	108	53	74	50	62
アルゼンチン	77	76	72	65	55	55
メキシコ	31	47	44	56	55	55
ブラジル	20	20	28	24	28	28
シンガポール	7	9	8	8	8	8
イスラエル	7	6	6	6	6	6
ロシア	1	2	2	3	3	3
その他	3	3	2	2	2	2
合 計	3,889	4,002	4,059	4,468	4,547	4,629
輸入量						
E U	883	819	927	972	960	980
ロシア	512	469	440	473	480	440
サウジアラビア	274	274	448	435	440	435
香 港	217	230	256	286	295	320
中 国	88	88	146	220	300	300
アラブ首長国連邦	201	220	230	222	225	220
カナダ	199	183	190	204	210	195
イラク	169	189	180	189	190	190
米 国	139	143	155	164	155	185
韓 国	152	100	111	154	130	145
マレーシア	104	100	102	101	100	100
日 本	113	87	83	100	110	95
スイス	68	63	67	71	75	70
ウクライナ	133	106	69	76	75	70
コスタリカ	77	56	35	52	55	65
トルコ	29	33	45	37	40	55
ベトナム	38	71	36	58	60	50
シンガポール	45	48	46	44	45	42
グアテマラ	51	31	24	34	30	35
ノルウェイ	38	34	36	38	40	35
メキシコ	28	26	26	32	25	33
オーストラリア	20	16	16	18	30	20
ブラジル	15	17	16	16	16	16
南アフリカ	0	13	13	1	10	12
モザンビーク	35	7	11	5	10	7
その他	0	0	0	4	0	0
合 計	3,628	3,423	3,708	4,006	4,106	4,115

注) 年産は北半球：11月→10月 南半球：アルゼンチン翌年1月→12月、
南アフリカ翌年2月→1月、オーストラリア翌年4月→3月、ブラジル翌年7月→6月

世界のオレンジ果汁の需給

(1,000トン(65°Brix))

国名	2012/13	2013/14	2014/15	2015/16	2016/17 1月予測	2016/17 7月予測
生産量						
ブラジル	980	1,230	1,006	810	1,222	1,257
米 国	607	476	438	390	355	312
メキシコ	151	126	159	165	170	170
E U	83	114	97	100	101	102
中 国	45	55	50	46	42	42
南アフリカ	39	48	55	19	44	23
トルコ	8	9	8	9	9	9
その他	21	25	31	20	25	24
合 計	1,934	2,084	1,843	1,558	1,968	1,938
国内消費量						
E U	844	799	937	825	826	827
米 国	733	700	674	670	613	508
カナダ	99	94	88	94	92	89
日 本	70	68	80	78	78	78
中 国	115	111	99	83	73	73
オーストラリア	41	40	40	40	39	39
ブラジル	45	35	35	38	38	38
その他	123	112	100	97	101	95
合 計	2,070	1,960	2,052	1,926	1,860	1746
期末在庫						
米 国	384	347	360	294	300	330
ブラジル	334	329	147	24	174	100
日 本	15	11	18	13	15	15
E U	15	15	15	15	15	15
南アフリカ	13	25	29	9	5	7
その他	9	6	6	7	7	7
合 計	771	733	574	361	516	474
輸出量						
ブラジル	1,110	1,200	1,153	895	1,097	1,143
メキシコ	143	121	153	158	163	163
米 国	114	113	81	66	65	63
E U	54	57	50	52	50	50
南アフリカ	22	31	45	35	36	22
その他	29	30	31	31	31	32
合 計	1,472	1,552	1,513	1,237	1,442	1,473
輸入量						
E U	815	742	890	778	775	775
米 国	302	300	330	280	300	295
カナダ	103	98	91	97	95	92
日 本	65	63	86	73	80	80
ロシア	47	45	38	37	38	36
中 国	59	57	49	40	33	33
オーストラリア	34	32	32	32	32	32
その他	61	53	47	54	49	52
合 計	1,486	1,391	1,563	1,391	1,402	1,395

注) 年産は北半球：11月→10月 南半球：南アフリカ翌年2月→1月、
オーストラリア翌年4月→3月、ブラジル翌年7月→6月

世界のマンダリン／タンゼリンの需給

(単位：1,000トン)

国名	2012/13	2013/14	2014/15	2015/16	2016/17 1月予測	2016/17 7月予測
生産量						
中国	17,000	17,850	19,400	20,200	19,300	19,300
E U	2,927	3,213	3,474	3,076	3,302	3,231
モロッコ	662	1,160	1,003	1,065	1,325	1,278
トルコ	876	880	960	1,040	1,060	1,213
日本	846	1,124	1,040	933	995	995
米国	660	700	810	861	899	941
韓国	667	672	697	635	615	615
アルゼンチン	300	370	350	350	280	300
イスラエル	178	139	205	190	250	250
南アフリカ	171	195	203	226	263	250
その他	202	171	152	154	154	154
合計	24,489	26,474	28,294	28,730	28,443	28,527
国内生鮮消費量						
中国	15,650	16,524	18,053	18,910	18,120	18,130
E U	2,493	2,848	3,206	2,976	3,064	3,063
米国	642	720	759	922	915	971
日本	780	1,041	959	852	917	910
ロシア	789	852	782	724	730	820
モロッコ	355	659	657	600	815	768
韓国	607	575	535	547	542	543
その他	1,741	1,628	1,576	1,655	1,654	1,678
合計	23,057	24,847	26,527	27,186	26,757	26,883
加工仕向量						
中国	660	600	630	660	610	610
E U	347	385	348	272	328	358
米国	130	131	221	135	160	169
日本	81	90	90	95	100	100
アルゼンチン	63	82	97	110	85	95
イスラエル	30	24	45	40	75	75
韓国	56	93	159	85	70	70
その他	17	20	24	12	29	14
合計	1,384	1,425	1,614	1,409	1,457	1,491
輸出货量						
トルコ	406	532	610	575	580	705
中国	702	744	736	658	600	590
モロッコ	307	501	346	465	510	510
E U	404	349	287	250	260	240
南アフリカ	133	153	157	190	205	210
イスラエル	78	78	93	86	105	105
アルゼンチン	87	88	53	50	45	45
その他	48	38	48	42	45	40
合計	2,165	2,483	2,330	2,316	2,350	2,445
輸入量						
ロシア	789	852	782	724	730	820
E U	317	369	367	422	350	430
米国	154	182	212	232	215	235
カナダ	143	117	141	146	150	150
ウクライナ	185	202	125	126	120	140
ベトナム	144	149	158	116	120	125
タイ	135	139	130	149	150	120
インドネシア	77	109	87	60	80	70
フィリピン	57	51	54	68	60	65
マレーシア	76	65	70	69	70	64
その他	40	46	51	69	76	73
合計	2,117	2,281	2,177	2,181	2,121	2,292

注) 年産は北半球：11月→10月 南半球：翌年4月→3月

世界のグレープフルーツの需給

(単位：1,000トン)

国名	2012/13	2013/14	2014/15	2015/16	2016/17 1月予測	2016/17 7月予測
生産量						
中国	3,370	3,717	4,050	4,350	4,000	4,000
米国	1,092	950	826	728	688	621
メキシコ	425	424	424	430	432	432
南アフリカ	437	413	387	315	330	363
トルコ	200	235	238	250	255	253
イスラエル	208	236	186	163	140	140
E U	110	92	109	102	115	101
その他	0	0	26	25	24	24
合計	5,842	6,067	6,246	6,363	5,984	5,934
国内生鮮消費量						
中国	3,257	3,578	3,957	4,224	3,890	3,872
E U	408	417	415	434	416	417
メキシコ	324	328	323	324	328	326
米国	376	346	325	283	294	277
トルコ	72	63	96	62	57	129
ロシア	141	133	101	117	120	110
日本	134	109	125	106	101	98
カナダ	43	42	40	39	40	38
ウクライナ	30	27	15	18	18	18
イスラエル	12	24	8	10	11	11
その他	21	20	17	17	17	17
合計	4,818	5,087	5,422	5,634	5,292	5,313
加工仕向量						
米国	545	470	370	337	292	261
南アフリカ	189	203	168	111	129	127
メキシコ	85	84	84	86	86	86
イスラエル	117	134	117	92	59	59
E U	18	16	18	18	19	19
その他	0	0	1	1	1	1
合計	954	907	758	645	586	553
輸出量						
南アフリカ	242	217	221	203	200	235
中国	130	165	124	159	150	170
トルコ	132	177	145	190	200	126
米国	184	147	141	124	120	107
イスラエル	79	78	61	61	70	70
メキシコ	18	14	19	22	20	22
E U	21	19	15	14	15	15
その他	7	8	10	11	10	11
合計	813	825	736	784	785	756
輸入量						
E U	337	360	339	364	335	350
ロシア	141	133	101	117	120	110
日本	134	109	100	82	78	75
中国	17	26	31	33	40	42
カナダ	43	42	40	39	40	38
米国	13	13	10	16	18	24
ウクライナ	30	27	15	18	18	18
香港	15	16	15	16	15	16
スイス	7	7	7	7	7	7
南アフリカ	0	12	7	4	4	4
その他	6	7	5	4	4	4
合計	743	752	670	700	679	688

注) 年産は北半球：11月→10月 南半球：翌年4月→3月

世界のレモン／ライムの需給

(単位：1,000トン)

国名	2012/13	2013/14	2014/15	2015/16	2016/17 1月予測	2016/17 7月予測
生産量						
メキシコ	2,120	2,187	2,326	2,370	2,400	2,400
E U	1,179	1,308	1,597	1,269	1,554	1,523
アルゼンチン	1,350	780	1,450	1,350	1,370	1,270
米 国	827	748	820	822	782	749
トルコ	680	760	725	670	640	747
南アフリカ	245	312	339	308	345	355
イスラエル	51	64	65	60	70	70
その他	58	55	83	89	91	95
合 計	6,510	6,214	7,405	6,938	7,252	7,209
国内生鮮消費量						
E U	1,336	1,275	1,538	1,532	1,553	1,599
メキシコ	1,268	1,332	1,358	1,344	1,402	1,358
米 国	926	926	1,004	1,130	1,082	1,120
トルコ	258	277	238	200	217	217
ロシア	212	209	206	184	188	208
サウジアラビア	88	85	103	121	125	125
カナダ	100	99	87	102	105	100
アラブ首長国連邦	80	87	96	93	97	92
日 本	57	58	75	74	74	74
アルゼンチン	75	60	70	70	70	70
その他	180	189	172	158	167	175
合 計	4,580	4,597	4,947	5,008	5,080	5,138
加工仕向量						
アルゼンチン	996	570	1,195	1,003	1,020	980
メキシコ	330	339	360	367	370	365
E U	192	312	353	226	311	299
米 国	269	176	265	197	225	199
南アフリカ	58	80	79	56	85	69
日 本	55	60	57	40	0	40
イスラエル	3	3	27	29	31	31
その他	1	3	2	2	2	2
合 計	1,904	1,543	2,338	1,920	2,044	1,985
輸出力						
輸出量						
メキシコ	523	519	610	662	630	680
トルコ	369	426	433	434	425	494
南アフリカ	175	220	246	237	245	270
アルゼンチン	280	150	185	280	280	220
米 国	110	127	114	110	115	115
E U	77	101	105	68	90	75
香 港	7	33	18	17	15	20
その他	11	15	11	14	15	17
合 計	1,552	1,591	1,722	1,822	1,815	1,891
輸入量						
米 国	478	481	563	615	640	685
E U	426	380	399	557	400	450
ロシア	212	209	207	186	190	210
サウジアラビア	88	85	103	121	125	125
カナダ	100	99	87	102	105	100
アラブ首長国連邦	78	85	94	91	95	90
日 本	51	51	51	51	52	52
ウクライナ	63	54	44	41	40	45
香 港	26	66	48	37	35	40
トルコ	2	3	3	4	2	4
その他	2	4	3	7	3	4
合 計	1,526	1,517	1,602	1,812	1,687	1,805

注) 年産は北半球：11月→10月 南半球：翌年1月→12月

2.2. 中国の核果類事情

米国農務省海外農業国 GAIN レポート (2017年7月19日)

注)年産は1月から12月までである。従って2017/18年は2017年1月から12月までである。

生産

モモ・ネクタリン

中国の2017/18年のモモ、ネクタリンの生産量は1,430万トンで、前年を2%上回る予測だ。北部中国では春先の寒さ、乾燥で授粉に影響があったが、全体の生産量は結果樹面積が増加していること、東部の産地では天候に問題がなかったことから、若干増加する見込みだ。今後の生産量は、近い将来は、栽培面積が変わらないとすれば、安定して推移すると見込まれる。

2017/18年の栽培面積84万 haと予測され、前年を若干上回ると予測される。市場価格が最近では安定していることから、過去数年は面積が増加したが、今後は安定して推移する見込みだ。モモ、ネクタリンは大部分の省で生産されているが、生産の大半は中部及び北部地域であり、特に大・中規模都市の周辺に多い。中国の果樹栽培農家は行政から割り当てられた限られた面積で生産を行っている。しかし、農村の高齢化で、農家協同組合、民間企業に農地が集約されつつある。現在、果樹栽培生産者の大半は、50代、60代の女性である。

生産者は地元品種のモモ、ネクタリンを栽培しており5月から10月まで出荷している。1ha 当たりの平均収量は40トンであるが、品種により、地域により大きく異なる。

中国のモモ、ネクタリンの産地



紫色：生産量20%以上（山東省）
ピンク色：生産量10%～20%（河南省）
薄いピンク色：生産量5%～10%
（山西省、河南省、湖北省、陝西省）

サクランボ

中国の2017/18年のサクランボ生産量は36万トンと予測され、前年(33万トン)を9%上回ると予測される。中国北部では一貫して干ばつに襲われ、果実の肥大が悪いが、全体では結果樹面積が増加することから、生産量は過去最高を記録する見込みだ。果実のサイズが小さいことに加え、昨年に比べて味が酸っぱいことから生産者は落胆している。加えて、今年の果実は不規則な形状のものが多いようだ。これら品質面での問題は中国北部の厳しい干ばつによるとみられるが、過去数年間、新植面積が増加したことから生産量には影響を与えなかった。とはいえ、新植園地が今後も結果樹齢に達することから、今後数年間は急速に生産量が拡大する見込みである。

2017/18年の栽培面積は、11.2万 ha で前年を4%上回ると予測される。サクランボは収益性が良いこと

から、今後も生産面積の拡大が続くが、そのペースは落ちると見られる。面積が拡大しているのは、中部及び西部の省の河南省、山西省、陝西省、甘肅省、安徽省、浙江省、江蘇省、四川省で、従来からの産地である北部の山東省や遼寧省は、面積はかなり安定している。

温室栽培も始まっており、2月から出荷されているが、数量は限定的である。露地栽培では5月中旬から6月下旬にかけて主に出荷される。主要な栽培品種は欧州から導入されたもので、ブルックス、ピング、バン、Lapins、レイニアである。浙江省農業アカデミーでは、最近、南部諸省の暑くて湿度の多い地方でも栽培可能な独自の品種を開発中である。

消費

モモ、ネクタリンは、中国で伝統的な果実で人気があり、消費も増加しているが、生産量が増加を続けてきたために供給過剰になっている。加えて、施肥の過剰、植物調整剤の使用、適熟前の収穫により果実の品質に影響を与え、消費者離れを呼んでいる。消費者は、健康や食品安全の観点から、有機農法で生産されるプレミアム価格の果実を購入する動きがある。

中国の消費者はサクランボが好きであり、国産品の供給拡大、輸入の増大をきっかけに消費が急速に拡大している。業界の調査では、中国の消費者は果実サイズが大きく、濃紅色で、甘く、固くて歯ごたえのあるサクランボを好むようだ。これらの条件を満たす輸入品は、特に都市在住の高所得層、中間層にますます人気が高まっている。

E コマース(電子商取引)は、核果類の市場取引においてますます重要な役割を占めている。E コマースと配送サービスの統合により、特に高付加価値で日持ちがしない輸入サクランボは、宅配を通じて爆発的に E コマースの利益拡大をもたらしている。

貿易 輸入

2017/18年のサクランボの輸入量は12万トンと予測され、前年を10%上回る見込みだ。消費者の高品質果実に対する需要は根強い。主な輸入時期は12月から2月までであり、最も重要な祝日である旧正月の前後だ。輸入ではチリがトップの座を占めている。その他の輸入時期は5月から7月までで、この時期の輸入は北半球の米国が第1位を占めている。2017年1月には、世界で最大のサクランボ生産国であるトルコ産の輸入を解禁した。

モモの輸入は限定的である、国産品のシーズンオフにオーストラリア、スペインから輸入されている。

輸出

2017/18年のモモの輸出量は8万トンと、前年を9%上回ると予測される。中国産のモモに対する需要は、ロシア、カザフスタンを含む中央アジアからが多い。この他にも東南アジアからの需要があるが量は安定している。

山東省のサクランボは2017/18年にマレーシアに輸出されたが、量は限定的である。米国産サクランボに比べてジューシーであるが、貯蔵や輸送に難がある。

価格 モモ

モモの価格は品種、産地、収穫時期により異なるが、一般にはここ数年間は安定して推移している。主産地である山東省の Feicheng の農家によると、今年の価格は昨年と同程度と見込んでいる。2016/17年では、早生種(7月下旬から8月上旬)は農場出荷価格でキロ当たり8元(1.18ドル)であった。労働費を含まない生産コストは、haあたり40,500元(5,956ドル)とのことである。通常、生産者は規模が小さいために労働者を雇用していない。

サクランボ

サクランボの価格は、ここ数年、生産量が増加したため下落している。2017/18年は国産の品質が悪いため大きく価格を下げている。例えば、最も生産量の多い山東省では、果実が小さいことと酸味があることから、前年より10%価格が低下している。しかし、高品質果実はプレミアム価格で販売されている。例えば1つの果実重が12g以上のピング種は、煙台卸売市場ではキロ当たり46元(6.8ドル)で取引され、昨年水準を上回っている。

政策

果樹農家は次第に中国の作物保険プログラムに加入するようになってきている。前出の Feicheng のモモ農家は2016年に保険に加入し、加入料の40%を支払い、残りは地方政府から補助を受けた。保険会社は霜害、雹害、風雅雨、洪水害の補償を行う。この作物保険は中国政府による手厚い支援により運営されている政策ツールである。従来、保険は穀物と畜産だけが対象であったが、最近になって果樹にも適用されるようになった。

トルコ産のサクランボの輸入解禁に当たっての議定書が2016年6月に締結されたが、2017年6月末までに中国の品質監督管理総局(AQSIQ)が登録果樹園、出荷施設を公表しない場合は輸入ができないこととなっている。このため、出荷が終わる7月下旬までには、大量のサクランボを輸入する余地はないものとみられる。加えて、コールドチェーンによる輸送システムの整備もトルコにとって課題である。

中国とチリは、2016年11月に習主席がチリを訪問した際、ネクタリンの中国市場参入が可能となる内容の署名が行われた。2017年2月4日には、AQSIQ はチリの登録農園、出荷施設を公表し、事実上の輸入解禁となった。

市場

モモ

主要産地の地方政府や農業生産者団体は、マーケティングに当たっての組織化を進めている。いくつかの地元の品種は登録され、生産地を冠してブランドとして販売されている。マーケティング活動としては、花の季節にはフェスティバルを開催し、関係者を招待している。

サクランボ

上海はサクランボの主要な輸入地であり、米国産、カナダ産が空路、海路で輸入される。北半球から輸入されるサクランボの60%は上海を経由しており、深圳と広州が続いている。米国産は大部分が航空便で輸入されるが、カナダ産は海路で輸入される。

米国産のサクランボのシェアは2016年には13%で、2015年の16%から後退した。一方、チリは2016年には84%で、前年の80%から上昇した。残りの数%は、カナダ、ニュージーランド、オーストラリア、キルギスタン、タジキスタンである。

輸入サクランボはオンライン及びオフライン経由で販売される。E コマースは輸入品、国産品ともに1級、2級都市の若い消費者(24~25歳)の主流となっている。2大オンライン業者であるアリババと JD は生鮮食品、冷凍食品の販売を更に強化しようとしている。2017年には2社はオムニチャンネルでの販売を強化し、オンライン販売とオフライン販売の相乗効果を狙っている。また、1級、2級都市の中・上流階級向けの小売業者も輸入サクランボの販売強化を進めている。

米国産サクランボのほとんどは E コマースを通じて販売されており、その割合は上昇している。この方式の利点は、コールドチェーン施設で保管され、注文を受けて1~2日で消費者に渡ることだ。加えて、ウェブサイトを通じて消費者に輸入果実の良い点やどのように栽培されたかなどの情報を提供できることだ。更に、中国の航空会社はサクランボ輸送のための便を増やし、上海への供給を増加させている。

なお、中国のコールドチェーンには課題がある。ほとんどの卸売業者や小売店では冷蔵施設を保有しているが、適切に運用されている保証はない。また、3級都市ではコールドチェーンは限られており、コールドチェーンによる配送にはコストがかかる。

(競合)

特にカリフォルニア産のサクランボは、中国国産品との競合がある。中国の主要な産地である山東省、遼寧省と出荷時期が重複するからだ。国産品は品質が向上しているが、ポストハーベストに関しては改善の余地がある。加えて高品質の国産品の割合は少ない。小売価格は冷蔵処理や冷蔵輸送を施した国産品はカリフォルニア産と価格が接近している。しかし、業者によると、富裕層が増加しているため、価格要素は大きな問題にはならないとのことだ。消費者は品質の良い果実を求め、プレミアム価格を支払っているからだ。中国の輸入業者は、より品質の良いもの、高い食品安全基準のものを求めて輸入果実を購入している。

米国の北西部産のサクランボシーズンはカナダ産と重複する。カナダ産は約2週間遅れて入荷する。単価はカナダ産の方がやや高い。

(消費者・教育)

米国は高品質果実の供給者と見なされている。長期的観点からは、米国の核果類が高品質でプレミアムであるイメージを増幅することが輸出の促進に繋がる。店内でのプロモーション、試食、POP 展示などは中国の消費者に有効と考えられており、プロモーション期間中に売上が倍増、3倍増することもある。

流通業者や小売業者を対象としたセミナーで、商品の取扱い、利益をあげる「こつ」などを伝えることも信頼関係を構築するのに役立つ。ソーシャルメディアを通じて米国産果実の高品質さを伝えることも認識を高める上で有効だ。その際、中国版のツイッターであるウェイボーは消費者を引きつけ、フィードバックを得る上でも効果的だ。米国の特別な栽培方式、健康への好影響、高い食品安全水準は中国の裕福な中産階級に米国産核果類の魅力を提供すると思われる。米国の生産者、流通業者がウェイボーを介してこれらを継続的に宣伝すれば、販売を有利に進めることができる。

包装も販売にとって重要であり、特に祝日の期間は大切だ。見た目が良い商品は重要な取引先や親戚への贈答品としてよく売れる。例えば、消費者向けの2.5kg入のパッケージは人気が高まっている。

中国のモモ・ネクタリン統計(在中国 米国農務省 農務官)

	2015/16	2016/17	2017/18
栽培面積(ha)	828,000	835,000	840,000
収穫面積(ha)	-	-	-
結果樹数(千本)	-	-	-
未結果樹数(千本)	-	-	-
果樹数合計(千本)	-	-	-
生産量計(トン)	13,600,000	14,000,000	14,300,000
輸入量(トン)	0	433	500
総供給量(トン)	13,600,000	14,000,433	14,300,500
輸出量(トン)	86,400	73,500	80,000
国内消費仕向量(トン)	11,313,600	11,626,933	11,820,500
加工仕向量(トン)	2,200,000	2,300,000	2,400,000
総出荷量(トン)	13,600,000	14,000,433	14,300,500

中国のサクランボ統計(在中國 米国農務省 農務官)

	2015/16	2016/17	2017/18
栽培面積(ha)	100,000	108,000	112,000
収穫面積(ha)	-	-	-
結果樹数(千本)	-	-	-
未結果樹数(千本)	-	-	-
果樹数合計(千本)	-	-	-
生産量計(トン)	250,000	330,000	360,000
輸入量(トン)	91,500	109,000	120,000
総供給量(トン)	341,500	439,000	480,000
輸出量(トン)	0	0	0
国内消費仕向量(トン)	335,500	431,000	470,000
加工仕向量(トン)	6,000	8,000	10,000
総出荷量(トン)	341,500	439,000	480,000

23. 世界のブルーベリー市場（2）

FreshPlaza 電子版（2017年7月14日）



ブルーベリーの販売は北部諸国から始まる。東欧では一部霜害に見舞われたが、全体的には良好である。オランダとベルギーでは供給よりも需要が多いが、これはほとんどの国で当てはまる。米国だけは、業者によっては夏果実との競合関係にあるという。南米ではシーズンの始まりを待っているが、通常の収穫開始は9月である。米国と欧州は大市場であるが、ますます多くの生産者は中東やアジア市場を狙っている。

ポーランド：生産量は少ないが収穫は順調

春期に霜害があり、収穫に影響した。このため、生産量は昨年比べて10～30%減少する見込みである。しかし、品質は良好である。果実のサイズも大きい。ブルーベリーの主な市場は欧州であり、英国、アイルランド、ドイツが中心である。加えて、欧州以外にも新市場を開拓しており、主な市場はマレーシア、日本、シンガポール、香港である。「今年はインド市場も目指したい」と語る業者もいる。ポーランドの業者がアジア市場に賭けているのは、見本市での輸出業者の動向からも明らかである。

ブルーベリーの需要は高まっているが、消費者の要求も急速に厳しくなっている。スーパーの販売ではますます倫理的な観点に焦点を置いている。

ルーマニア：小規模生産だが生産は拡大

小規模生産者により担われているが、近年、生産は拡大しており、栽培に多くの投資が行われている。異なる専門家から、ルーマニアのブルーベリー生産は伸張すると見通されている。現在ではほとんどの農園は10～40haの規模だが、100haに拡大する計画も存在する。現時点での総面積は300haと控えめであるが、今後数年には、1,500haに増加する可能性もある。しかし、小規模生産者で構成されているため、大手業者への輸出は困難であり、また、顧客も単一の業者であることから、将来性には限界がある。

オランダ：シーズンの始めは需要が供給を上回る。

オランダのブルーベリー販売は素晴らしい市場環境の下で始まった。需要が供給を上回っていることから、生産者はこれまでにない好調なスタートを切った。通常、多くの生産物が冷蔵庫で貯蔵されるが、現在は空っぽである。生産者によると、このような状態のため、シーズン後半には極端な不足状態になるかも知れない

とのことだ。オランダ同様、早い時期に市場に出荷した国は霜害に見舞われた。この結果、貯蔵品はなく、オランダ産のブルーベリーは品薄の市場に出回っている。なお、生産量は少ないと見込まれる。また、非常に暑い気候に遭遇したため、多くの早生種は急速に成熟した。不足状態が厳しいため、米国からも航空便で輸入されている。ただ、オランダ側によると、米国産には品質の問題があるという。

スーパーでのブルーベリーの販売は、毎年20%増が続いたが、そのペースはやや鈍り、去年は12%増であった。生産者は、需要の増加にもいずれ限界があると予想している。別の問題は収穫作業の労力不足である。景気が好調なため、労働力に関しては売り手市場だからだ。生産者は労働力の確保を心配している。

ベルギー: 気候の影響で少ない生産量

シーズンが始まったが、生産量は予測よりも少ない。ここ数週間の高温で、急速に果実が熟したが、果実サイズの肥大には結びついていない。この結果、果実サイズは小さく、収量も少ない。

国内生産量の不足は海外から、特にポルトガルからの輸入により補われているが、その量は少ない。ポーランド産のシーズンは遅く始まるが、生産量は例年より少ない見込みだ。大量に輸入が始まるのは、第31週からである。なお、ルーマニアからの輸入もある。

フランス: 6月中旬から不足

6月中旬からブルーベリーが市場で不足していることに苦しんでいる。業者は欧州全体で需要が高まっていることを認識しているが、同時に供給量も急速に増加している。小売業者によれば、不足の事態が生じる前には価格は安かったとのことだ。

スペイン: 豊作だが労働力不足

ウエルバでは収穫シーズンが終わりに近づいている。生産量が大幅に増加しているが、価格の低下と収穫労働力不足が最も重要なファクターとなっている。スペインの栽培面積は2,538ha で30%増加したが、この面積はイチゴの栽培面積である5,000ha の約半分に相当する。生産量は60%増加し、4月と5月の時期の収穫が特に重要となった。6月の統計によると、同月は3.3万トンが販売されたが、価格は27%低下した。なお、(今年は)チリ産の販売が早く終了したため、2月から4月にかけては市場に品物がいない状態であった。

5月の第2週以降、高温により生産が増加し、通常は5週間で生産される量が3週間で生産された。この結果、価格は圧迫されている。加えて収穫労力の確保がウエルバの生産会社にとって深刻な問題となっている。というのも、ブルーベリーの収穫はイチゴ、ラズベリー、カンキツ、早生の核果類の収穫時期と一致するからである。この期間は労力が少ないのに多くの仕事がある。このため、生産会社では収穫機械、自動化技術、貯蔵施設への投資を行っている。

ウエルバには多くの農園があるが、未だに成園に達していないものがあるため、今後数年以内に更に生産は増加すると見込まれる。しかしながら、生産面積の拡大はいくらか落ち着いてきたように見える。スペイン産のブルーベリーは欧州とスカンジナビアが主な輸出先であり、アジアと中東市場も開拓している。

イタリア: 周年栽培を目指す

トレンティーノでは大規模組合で収穫が始まった。今年初めに記録された霜害の影響がどの程度かは不明である。業者によると、「平均すれば10%の生産減と見込まれるが、収穫皆無の生産者もいる模様」とのことだ。品質に関しては満足できる状況である。シーズンは10月中旬まで続く。近年、新品種導入のための投資が行われており、シチリアとカラブリア南部での植栽にも投資が行われている。これらを通じてシーズンの拡大が可能であり、年間を通じてブルーベリーの供給を可能とする野心的な計画も考えられている。

ギリシャ: 高温で生産量減少

トリポリと中部ペロポネソス地域は記録的な高温による問題に直面している。生産者によると、高温による収穫量減少が見込まれるとのことだ。収穫は7月に始まり8月まで続く。この生産者によると、生産量の減少で、今年は輸出が不可能とのことだ。需要の大部分は、国内の大都市からのものである。

オーストラリア:中国市場を視野

オーストラリアでは、シーズンは6月から4月までである。農場販売額は1.2億オーストラリアドル(0.816億ユーロ)だ。生産物は75%が国内市場向けであり、10%がアジア、欧州向けの輸出である。残りの15%は加工向けで、主に冷凍される。

去年は記録的な豊作で、生産量は1.1万トンであった。このため、生産者は急速に成長している中国への輸出を増加させた。今シーズンの見通しは時期尚早だが、品質面、価格面とも良好と言われている。

米国:核果類と競合

ブリティッシュ・コロンビア州(カナダ)での収穫が始まって以降、市場の流通量は増加している。オレゴン州、ワシントン州、ミシガン州、中西部での収穫も始まっている。フロリダ州、ジョージア州、ノースカロライナ州、カリフォルニア州ではシーズンが終わりを迎えている。

ブルーベリーの需要は堅調であるが、市場ではその他の夏果実との競合が見られる。ブルーベリーは年間を通じて市場に出回るため、消費者は夏果実のモモ、ネクタリン、サクランボに目を向けがちであるからだ。

カナダ:ブリティッシュ・コロンビア州で収穫開始

ブリティッシュ・コロンビア州での収穫は始まったばかりである。冬が寒かったため、収穫のスタートは例年よりも2週間遅れた。「全ての地域で収穫開始は遅れたが、実際にはかなり正常な年であるし、こうあるべきだ」と業者は語っている。ブルーベリーは寒い冬に影響を受けないので、品質的には大変に良いとのことだ。ただし、生産量は昨年よりも20%少ない見込みだ。とはいえ、正確な生産予測は、生産が始まったばかりなので難しい。

メキシコ:欧州への輸出を目指す

メキシコでは10月にシーズンが始まる見込みだ。生産量の多くは、米国市場と国内市場向けだが、欧州への輸出の余地もある。ペルー産、アルゼンチン産、チリ産と時期は競合するが、市場は競合していない。メキシコにとっては、米国は巨大な需要のある優良な市場である。

アルゼンチン:中国市場への参入を望む

アルゼンチンでは果実の選別を改善するための投資が行われてきた。重視しているのは、サイズ、色、固さ、障害の有無である。収穫シーズンは9月に始まり、11月まで続く。輸出に関しては数多くの機会がある。業者によると、昨年、初めて船便で輸出を行ったとのことだ。結果は大変良好であったため、今年は更に量を増やしたいとしている。中でも中国は新しい輸出先である。中国はアルゼンチン産のブルーベリー輸入を解禁していないが、輸出業者によると数ヶ月以内に輸入承認に署名すると見込とのことだ。また、中東と極東との関係も良好である。シンガポール、ドバイとは毎日航空便もある。なお、アルゼンチンの伝統的市場は、欧州、カナダ、米国である。

ペルー:力強い成長を予測

昨年の輸出額は2.5億ドルであった。予測によると、2021年までには10億ドルに達するとのことだ。現在輸出量は2.4万トンであるが、2021年には12万トンまで拡大すると見込んでいる。ペルーでは農業は経済の主要な柱であり、作物生産の多い地域では失業率はゼロである。

これだけ膨大な量を市場に投入させるためには、業界は綿密な調整が必要である。調査によれば、市場では1週間に1万トン进行处理することが可能とのことだ。理想的には9月から11月の間に60~70%が市場出荷され、残りはその後に出荷されることである。ウルグアイ、アルゼンチン、チリが量的には競合関係にあるが、ペルーとしては高品質なメキシコ産を恐れている。また、近隣のチリとはブルーベリーの輸出に関する協定を結んでいる。

著者:Rudolf Mulderij

24. ビタミンAを多く含む遺伝子組換えバナナ

EUROFRUIT 電子版 (2017年7月11日)



ウガンダで試験を行っている研究者によると、ビタミンAと鉄分を多く含む遺伝子組換えバナナを初めて収穫することができたとのことだ。

The Times の報道によると、オーストラリアの研究チームは10年間クイーンズランドでキャベンディッシュの遺伝子組換え試験を行い、次いでウガンダにおいて料理用バナナの遺伝子組換え試験を行ったそうだ。

この遺伝子組換えバナナは、アフリカの子供達の間でビタミンAの欠乏が深刻化し、失明、免疫システムの障害、脳の発達不良に直面していることに対し、有効な対抗策となりえるものだ。

「目標とするビタミンAのレベルの4倍の量を得ることができて幸運である」と、研究チームリーダーのクイーンズランド工科大学の Dale 氏は語っている。

オーストラリアの放送局ABCのインタビューでは、「5世代以上にもわたってプロビタミンAのレベルを維持することができ、時にはこれを超えることもある。これは大変にエキサイティングなことだ」と語っている。

しかし、この果実は一般のウガンダ市民に6年間は供給することはできない。規制当局による試験が必要であるからだ。

25. EUがロシアの輸入禁止措置に伴う生産者支援を継続

EUROFRUIT 電子版 (2017年7月3日)

EU はロシアの農産物輸入禁止に伴う果実生産者等への支援措置を延長することとした。このための追加財源として7,000万ユーロの予算を措置し、いわゆる例外的措置を少なくとも2018年6月末まで継続することとした。

この措置は2014年8月に導入され、輸入禁止措置による市場確保が困難な場合にセーフティーネットを提供するものである。

この取組は、欧州の生産者が余剰農産物を慈善団体や学校給食への提供、家畜の飼料化、堆肥の製造、加工に仕向ける場合等に補償を行うものである。

EU 委員会の農業農村開発局担当のホーガン委員は、「委員会はロシアの輸入禁止措置で悪影響を受ける農業者に対して支援するための全ての権限を持っている」と話し、「今回の延長措置は、域内の生産者が恐れることなく生産活動に留まることができるよう、明確なメッセージを発出したものだ」とも語っている。さらに、「この措置は、生産者とEU 社会が共に利益を共有すべく、共通農業政策 (CAP) をより近代化し、簡素化する方向とも両立している」とのことだ。

野菜はメリット

EU 委員会の定期的なモニタリング、市場評価によると、支援措置は非永年性作物、典型的には野菜に対して市場の状況改善に効果があったとしている。

また、ロシアの輸入禁止措置により影響を受けた生産物の大半は、代替市場へ向けられたものとみられ、結果として市場は安定している。

しかし、果樹のような永年性作物はこのような変化への適応が難しく、今回の措置は特に果樹分野を支援するために設計されている。

例えば自由な流通という枠組みの中で、慈善活動での消費のために回され、食品廃棄が出ないような方法で果実が提供される場合は100%の EU 資金が拠出される。

しかし、市場から隔離され消費されないような形態、果実が熟す前の摘果、収穫せず放置するといった場合の支援割合は低くなる。

今回のスキームでは、果実は最大165,835トンが対象となり、リンゴとナシ、プラム、カンキツ、モモとネクタリンの4品目が支援の対象である。

この措置は12カ国を対象とし、対象数量は効果的支援が行えるよう、国ごとに設定されている。

これらの例外的措置の延長に加え、欧州の果実、野菜の生産者はその他の EU 共通農業政策の支援を受けられる。この中には直接支払い、農村開発資金、生産者組織への支援が含まれ、これらの総額は年間7億ユーロとなる。

26. 米国の有機リンゴ

The World Apple Report 誌 (2017年7月号)

米国農業センサスは、2014年の有機リンゴに関する特別調査を行い、結果を公表した。全ての有機農業リンゴに関して把握したものとは言えず、プライバシーに関することも含まれるため全ての調査内容が公表されていないが、結果は米国の有機リンゴに関する価値ある情報を提供している。

2014年には868の有機生産農場が存在し(下表では品種別の延べ数が示されている)、22.4万トンの生産量があり、6,580haの結果樹園で栽培されている。これからすると、1haあたりの生産量は約34トンとなる。また、平均の有機リンゴ価格はキロ当たり1.14ドルでなる。

全体の有機リンゴ生産量のうち、87%はワシントン州で生産され、次いでカリフォルニア州が8%弱を占めている。北東部のニューヨーク州、バーモント州の生産量は1,362トンで、0.5%に過ぎない。現時点では、明らかに乾燥した西部の州が他を圧倒している。また、1haあたりの生産量で見ても、ワシントン州が45トンと他を引き離し、カリフォルニア州、ニューヨーク州、バーモント州の2倍以上となっている。

有機リンゴの大部分(90%以上)は生鮮市場に出荷されている。加工向けも、ワシントン州、カリフォルニア州が全国のそれぞれ40%を占めている。

しかし、カリフォルニア州では有機リンゴの約半分が加工に向けられるのに対し、ワシントン州では4.4%しか加工に向けられていない。加工用のリンゴの価格は、生食用の約半分であることから、生産者としては可能な限り生食向けに出荷しようとするインセンティブが働いている。

品種別の生産量

品種別の有機リンゴ生産量については、乾燥した西部諸州で人気のある品種が全体の順位を支配している。2014年の2大品種はガラとふじであった。ゴールドデンデリシャスとレッドデリシャスは離れた3位と4位である。そしてハニークリスプとグラニースミスは5位と6位であった。

上位6品種で栽培面積の2/3の栽培面積を占め、生産量、生産金額の80%を占めている。ガラとふじは1農場当たりの面積が大きく6ha程度となっているが、上位6品種の1農場当たりの平均面積は4ha程度である。

1haあたりの収量が多いのはレッドデリシャスで約50トンであるが、最も少ないのはマッキントッシュの約10トンである。ただし、単位面積当たりの収量は果樹の樹齢やその他の要因によるところが大きい。

生産者受取り価格が最も高いのはハニークリスプの1キロあたり1.73ドルであるが、コートランド、エンパイア、ローマでは50数セントに過ぎない。その他の上位6品種では、ガラ、ふじ、グラニースミスが有機リンゴ平均価格程度である。一方、ゴールドデンデリシャスとレッドデリシャスは、平均の64%となっている。

このように2014年の米国の有機リンゴに関する調査は、品種によって、栽培面積、単位面積当たりの収量、生産者受取価格に多様性があることを示している。また、確かに有機リンゴの収益は慣行栽培リンゴよりも大きいものの、生産者は品種の選択が必要であることを示している。

米国の品種別有機リンゴ (2014年)

品種名	農場数	結果樹面積 ha	生産量 トン	単位面積当	平均価格 ドル/kg	価格指数*
				たり収量 トン/ha		
ガラ	209	1,340	53,390	39.9	1.24	109.1
ふじ	220	1,323	49,577	37.5	1.10	96.9
ゴールドデンデリシャス	159	559	22,882	40.9	0.73	64.2
レッドデリシャス	108	410	20,702	50.4	0.73	64.3
ハニークリスプ	137	467	15,345	32.8	1.73	152.5
グラニースミス	112	423	14,619	34.5	1.17	103.3
カメオ	37	141	3,314	33.1	0.78	68.5
ジョナゴールド	75	88	2,906	33.2	0.86	75.4
ローマ	35	130	1,498	11.3	0.43	37.6
ジョナサン	52	65	1,271	19.8	0.48	42.6
リバティ	84	40	817	20.9	0.83	53.9
アイダレッド	38	32	681	21.0	0.52	45.4
エンパイア	34	29	590	19.7	0.38	33.6
マッキントッシュ	71	55	545	9.6	1.12	98.2
コートランド	35	27	454	16.6	0.43	38.0
エンタープライズ	22	8	136	16.9	1.15	101.3
その他	570	1,483	35,049	23.6	1.42	124.7
合計	1,998	6,580	223,731	34.0	1.14	100.0

*は「合計」の「平均価格」を100とした場合の指数

27. カンキツグリーンング病対策に1千万ドルを追加投入

FreshPlaza 電子版 (2017年7月3日)

カリフォルニア州はカンキツグリーンング病対策に資金を追加投入する。先週、ブラウン知事は2017年予算法に署名をし、ミカンキジラミが引き起こす不治の病気である黄龍病(HLB)(別名カンキツグリーンング病)対策に1千万ドルを投入することを認めた。

「カリフォルニア・シトラス・ミューチュアルは、この決定を行った州知事及び州議会議員を賞賛している。単に生産者だけでなく、カリフォルニア州経済や住宅敷地内にカンキツを栽培する住民にもこの問題の深刻さを認識させてくれたからだ」とカリフォルニア・シトラス・ミューチュアルのカンキツ生産貿易協会会長は語っている。

HLB(別名カンキツグリーンング病)は、世界中のカンキツ生産を荒廃させた。フロリダ州では商業生産は70%減少し7,945人の雇用を奪い、6.58億ドルの付加価値を減少させ、今や10.98億ドルの産業に縮小した、とフロリダ大学の最近の報告書は述べている。

「フロリダ州でおきたことから見ると、もしも HLB が広がれば、実質的に永続的な経済的影響があることは明白だ。カリフォルニア州のカンキツ産業は36億ドルの規模で2万2千人の雇用を支えている。もし HLB が止められなければ、これらを失うことになる」とも会長は語っている。

カリフォルニア州は、世界で最大の生鮮カンキツ生産地帯であり、HLB の影響を受けていない数少ない場所である。しかし、HLB が広がれば事態は変わる。これまでのところ、ロサンゼルス盆地の73の住宅敷地内で病気が発見されており、ロサンゼルス、オレンジ郡では検疫が開始されている。

「HLB は警戒すべき早さで拡大しており、州資金の追加は、カンキツの全ての樹を守り、活気あるカンキツ産業を荒廃から防ぐため、必要な資源を提供してくれる」と会長は話している。

州資金の追加は、現在毎年2千5百万ドル支出されている資金を補強するものである。病気の発見と撲滅に使用されるが、生物的防除としてミカンキジラミに対抗する有益昆虫の放飼を居住地域で行うこと、実施中の住民への周知活動、教育にも使われる。

情報源: citrusindustry.net

28. 世界に乗り出すリンゴ新品種コズミッククリスプ

FreshPlaza 電子版 (2017年6月30日)



新品種の開発には何年もかかるが、コズミッククリスプは、ワシントン州立大学の果樹育種計画の中で、20年の歳月を要した最新の品種である。この品種はレッドデリシャスのような従来型の品種を追い出すようなものになると期待されている。エンタープライズとハニークリスプの自然交配により生まれたこの品種は、「両方の最も優れた品質を備えている」と、品種所有者管理(PVM)のマーケティング担当部長が話している。PVMは、コズミッククリスプの研究開発、消費者とのコンタクト、ブランド開発に関する経験を活かすために表舞台

に引き出された組織である。

生産者からの強い関心

2014年には多くの生産者が興味を示し、この品種の果実が欲しいと声上がり、ワシントン州立大学では公平を期すため、配布に当たり抽選をしたほどだ。2017年は最初の年として、60万本の苗木が植栽された。部長によると、翌年は550万本の注文があるそうだが、提供可能な最大限の数字だという。2019年も同じようなことが期待されており、既に数百万本の注文があるという。

ワシントン州限定

少なくとも、今後10年間はワシントン州限定として栽培される。「生産者はワシントン州立大学とその育種プログラムを支援するのに寛容であるが、その見返りとして、10年間の独占契約を結んでいる」と部長は話す。しかし、将来は世界のどこかの地域で栽培を認める小規模なグローバリゼーションの計画も持っている。「とはいえ、ワシントン州の強力なリンゴとしてアピールしたい」と語っている。今年、州内の35の生産者が苗木を受け取った。新規果樹園に植栽するものもあれば、既存の果樹園に植栽するものもあるという。



2019年には商業販売

商業販売の初年度は2019年の秋になるという。この年は植栽して3年目に当たる。植栽が進んでいることから、2020年にはさらに多くの量が販売される見込みだ。「その後はどんどん増え続けるだろう」と部長は話す。ワシントン州の生産者は、カナダ、メキシコ、アジアに輸出する予定だ。

変化する消費者の嗜好を満たす

消費者の嗜好が変化しているので、この品種は他の品種の販売に影響を及ぼすだろう。「レッドデリシャスはかつて最も人気があったが、消費者は甘くて、パリパリ感があり、爽やかなリンゴを求めている。量が増え、商業販売が増加すれば、他の品種の販売に影響を及ぼすかもしれない」と部長は感じている。「この品種は甘く、酸味もあり、パリパリ感があり、ジューシーで、素晴らしい味をしている」とのことだ。コズミッククリスプという名は、消費者に対するフォーカスグループ試験を通じ、リンゴの外観、味、特性に関して示された反応の中から選定されたという。

優れた貯蔵性

部長によると、この品種は驚くほど貯蔵性が良いそうだ。「量が増えれば、優れた貯蔵性を持つことから12ヶ月間出荷が可能だ。リンゴの中には美味しいけれど貯蔵性が劣るものもある。こういったリンゴは味が悪くなり、ジューシーさに欠け、パサパサ感が出てくる。しかし、この品種は年間を通して非常に保存性が良いことが証明されている」とのことだ。

著者:Rebecca D Dumais

29. 世界のアボカド市場 (2)

FreshPlaza 電子版 (2017年6月30日)



アボカド市場は成長を続けている。欧州の輸入業者は拡大する需要に見合う十分な量を探している。生産者と輸出業者は需要に見合う輸出が行えるよう努力し、生産拡大に投資している。需要が増加しているのは欧州だけでなく、アボカドに目をつけているアジアもそうだ。中南米の諸国はこれら市場に供給しようと懸命だ。しかし、中国はこの機会を逃さないようにと考えており、自国産のアボカドの収穫が9月に始まる。

メキシコ: アジアと米国に主眼

12万ヘクタールの面積を抱え、メキシコは世界の市場を牽引している。これまでのところ、輸出は94.5万トンで、米国、欧州、アジア、カナダが輸出先だ。米国は90%を占める重要な市場だ。

ある輸出業者によると、中国向け輸出を倍増しようと考えているそうだ。過去2カ年で同社は150トンの輸出を行ったが、今年は300万トンの輸出を目指している。主要な輸出先は、今でも米国で、1.2万トンを輸出している。しかし、中国市場は大変に有望である。

ハリスコの生産者協会は米国市場に力を入れている。公式なデータでは栽培面積は1.7万 ha だが、協会によると2.2万 ha または、それを超えるくらいだという。この違いは新規植栽面積が正しく捉えられていないという事実による。

通常、有機アボカドは年間を通して栽培されているが、今年は栽培期間が10ヶ月であった。これは気象条件によるもので、収穫量も20~30%減少した。欧州からの需要は毎年増加している。ある輸出業者によると70%は欧州向けに出荷しているそうだ。主要な市場はオランダとスペインだが、そこから更に大陸に再出荷されているとのことだ。需要は供給より遙かに多いため、ペルー、コロンビアが市場に参入しているにもかかわらず、実質的な競争は起っていないそうだ。

ペルー: 20%の成長を期待

シーズン初めの気象条件が販売活動に影響を及ぼした。しかし、新規植栽により出荷減を一部相殺した。今年は20~25%の生産増を期待している。主要な生産地は、ラリベルタード、ランバエクで、輸出は2月に始まり、9月まで続く。ピークは6月、7月である。

欧州が最大の輸出先で全体の60%を占めている。次いで米国が30%、アジアは5%である。アジアでは日本と中国が主な輸出先である。その他、中南米、カナダが5%を占めている。国内の市場規模は小さいが、国際市場で培った経験を活かし、国内市場でも販売を拡大したいと考えている。

アジアは新規市場ではあるが、既に5千トンを出荷しており、1万トンに成長すると見込まれる。日本市場はアボカド及びその熟成技術に精通しているが、中国市場よりも価格は安い。一方、ある輸出業者によると、中国ではアボカドに関する知識はまだ十分でないとのことだ。新たな市場として、ニュージーランド、韓国、オーストラリア、コロンビア向けに輸出を目指している。

チリ:アジアを目指す

ハスアボカドの輸出業者は、中長期的に、アジア中でも中国に焦点を当てている。ハスアボカド生産輸出協会は将来有望な市場と見ている。過去2カ年、アジアで販売促進活動が行われた。とはいえ、今のところは欧州市場が主な輸出先であり、協会としても欧州市場を失いたくはない。アジアに焦点を当てるのは、輸出先の多様化を目指すためだ。「アジアに目を向けているのは、同市場がチリ産のアボカドを評価しており、消費者が健康な食生活を意識しているためだ」とのことだ。

チリの栽培面積は24,491ha だが、長期間にわたる干ばつから回復し、面積が増加している。とはいえ、数年前の4万 ha の水準にまでは達していない。主な産地は、サンチアゴの北部のバルパライソ地方である。昨年の主な輸出先はオランダ(欧州大陸への再輸出拠点)、米国、英国、アルゼンチン、中国であった。業界としてはより輸出に力点を置いている。国内市場は、価格の影響により需要は落ち込んでいる。

グアテマラ:世界市場を目指す

グアテマラの生産者は年間を通してアボカドを供給することができるが、月により供給量に変動がある。現時点では量が少なく、国内需要を満たすのも困難である。シーズンのピークは10月～5月までであるが、生産者は年間を通して輸出できるよう、生産量の拡大に努めている。

一部では輸出も行われている。ある業者によると、欧州の輸入業者がアボカドを受け入れてくれることを喜んでいるとのことだ。現時点では生産を拡大し、輸出からより利益をあげることに努力を傾注している。

コロンビア:輸出の拡大

2015年の時点で輸出は記録的に拡大した。公的數字では(前年の)241%増だったそうだ。大規模生産者組織の代表は、生産量が64%伸びたという。今後数年間、栽培面積は増加の一途である。

オランダ、スペイン、英国が主要な輸出先である。今年は、フランスも主要輸出先に加わった。シーズンのピークは8月から11月で、量は少ないが2月から4月までも輸出期間である。果実の栽培に関しては課題がある。熱帯性気候のため、病気に関するリスクがあるためだ。また、欧州への輸送距離は大陸の西の国に比べると短いのだが、国内の輸送網の未整備もコロンビアの魅力を下げる要因ともなっている。

ドミニカ共和国:輸出は限定的

昨年、アボカドの輸出額は91%増加した。すなわち、2015年の1,660万ドルから2016年には3,170万ドルに拡大した。しかし、地中海ミバエの影響で、主な輸出先であった米国向けが減少した。このため、相当量を国内市場、その他の輸出先に振り向けざるを得なくなった。総生産量は20～30万トンの間で変動している。このうち10%(3万トン)が輸出に向けられている。残りは国内市場向けである。

生産者にとっては、開花期の降雨で影響を被ると見られることから、見通しは楽観的とは言えない。この影響は、今年の終わりから来年の初めに明らかになる見込みだ。また、道路も被害を受けた。このため、生産者は自分の農園に到達することもままならない。収穫のピークは10月～3月である。加えて植栽から収穫まで4年かかることから、資金調達も問題となっている。

ケニア:プロフェッショナルが必要

シーズンの終わりは7月下旬である。ハスと Fuerte の果実サイズは小さくなっている。しかし、供給が不足し

ているため価格は上昇している。業者はシーズン終了まで高価格であることを期待している。

一方、輸出品に課せられる条件はますます厳しくなっている。3月までは果実の熟度が一定水準に達するまで輸出は禁止された。しかし、これは肯定的な前進である。ケニアでは監督機関が全く無く、輸出業者は年中輸出を行ってきたからだ。新しいルールに基づき輸出することで、業界は欧州市場や新規市場である香港、シンガポール、マレーシアで高い評価を得られるだろう。今年は、香港からの需要が高まっている。一方、中東の市場は変化している。これまでドバイやオマーンはカタール輸出の経由地であったが、現在は国境が封鎖されているからだ。

南アフリカ: 良い価格

第25週の輸出量はハスが2キロ入箱で30.7万箱、緑色系で10.6万箱であった。北部では既に収穫が終わっているが、Lowveldでは最後のハスと緑色系の収穫が行われている。この地方のクワズール・ナタールでは、FuerteとPinkertonの収穫が行われている。一方、南部地方ではハスの収穫は10月中旬まで行われぬ。他の国の収穫期が終了するのを待っているからである。

価格は良い、または素晴らしい状況だ。サイズは様々あるが、水不足のツァニーンでは果実サイズは小さい。この状況は北部地方でも当てはまるが、降雨があったクアズール・ナタールでは果実は大きかった。一般に裏年であったが、新植園が結果樹齢に達してきたことから、部分的に相殺された。

イスラエル: 儲かるアボカドは投資の対象

過去10カ年に渡り、生産が増加し、10万トンの生産量に達した。生産の60%は輸出され、このうち80%が欧州向けである。ロシアも重要な輸出先である。5万トン以上の輸出量は、世界のアボカド輸出量の6%を占めている。特に冬場は欧州市場において主要な供給国となっている。輸出シーズンである10月から2月にかけての欧州の需要の伸びは、他の月より小さいものの、輸出業者は依然として大きな可能性があると考えている。

生産者にとって、国内も儲かる市場である。価格も安定しており、キロ当たり2~2.5ユーロで、輸出に匹敵する価格である。このような良好な市場環境のため、生産のための投資が行われており、毎年250haが新規に植栽されている。2/3がハス種であるが、育種も盛んであり、イスラエルの気候に適した新品種の開発への投資も行われている。

スペイン: アボカドは基本的な作物

最大の需要は、多くのレストランが立地している海岸地方で記録されている。需要は毎年拡大している。業者によると、アボカドはエキゾチックな果物から基本的な作物に変わってきているという。ケータリングとしての需要のみならず、直ぐに食べられるアボカドの需要が増加している。消費者は果実が熟すまで待たないからだ。ここ数ヶ月価格は上昇している。

需要は増加しているものの、ペルーからの供給は、特にサイズ18、20、22に関して少なくなっている。この原因はペルーにおける降雨と、アジア向け輸出が増加したためだ。ペルーにとっては米国市場も魅力的である。しかし、現在スペインはペルーだけからしか輸入できない。メキシコ産は価格が高すぎるからだ。チリ産が約1ヶ月後に輸入され、市場は安定すると見込まれる。輸入業者としてはより早い輸入開始を期待している。スペイン産の販売は9月に緑系で始まり、追ってハスアボカドが続く。

ベルギー: 高価格を期待

通常、この時期にはペルーから十分な供給があるが、今年は例外のようだ。量は過去数年より少なく、特にサイズ18、20、22は手に入れるのも難しい。価格はサイズ22が12ユーロで、サイズ18が15ユーロだ。ペルー産は前年よりもシーズンが短いと見ている。コロンビア産は2回目の収穫物が市場に出ている。小さいサイズの果実だが販売の可能性がある。ケニア産も小さいサイズの果実は量が豊富だ。南アフリカ産の量が限られているが、ベルギーの輸入業者によると品質上の問題があるようだ。チリ産の輸入は8月下旬に始まると見込まれている。

オランダ:アボカド市場は堅調

例年、6月のアボカド価格は最も低いですが、今年は「グリーン・ゴールド」による収益は大きい。輸入業者は記録的な年だと話し合っている。「12月には、6月に10.5ユーロになると予想した。皆からおかしいと言われたが、予想よりもっと高くなった。ペルー産のピークは既に終了し、その影響を考える人はいなかった。価格はどこまで上昇するのだろうか」とのことだ。

遠い将来、市場が飽和する事態も生じようが、市場は今でも成長を続けている。中国ではアボカドブームが最高潮だし、米国、南米も大きな市場だ。このため、オランダの業者がアボカドを欧州への輸入を拡大しようとするためには、正当な理由が必要だ。輸入業者は顧客に対して、サイズ、原産地、各種証明に関して柔軟に対応するようアドバイスをしている。恐れることは、原産国が、各種証明や残留農薬基準に関し、要求水準が低い市場へ輸出するのではないかと、ということだ。

今年のアボカド価格は一貫して高い状態で、これは欧州のどの国にも当てはまる。イタリアのような緑色系アボカドが優先される国でも、ハスの需要はますます高まっている。通常は、オランダでは1~1.2ユーロと安定した価格で販売されている。しかし、価格が上昇したときの解決策としては、小さいサイズに頼るという手がある。

英国:夏の天気が需要を押し上げ

ここ数週間、夏の暑さ、バーベキュー、屋外ダイニングで英国のアボカド需要は高まっている。昨年よりも高い価格にもかかわらず、需要は増加している。多くのアボカドはペルーから輸入されているが、シーズン最初にはペルーの降雨や地滑りにより供給は減少した。その後、同国の輸出は回復した。南アフリカからは、今年1,250万箱が入荷する見込みで、これは実現するよう見える。同国産のサイズは大きい。ケニア、メキシコ、コロンビアからも輸入が行われている。

イタリア:緑系より価格の安いハス

今年の初めは通常の市場であった。今年の初めの数ヶ月は、スペイン、南アフリカ、イスラエルからの入荷が重複したため、供給量は豊富であった。それでも、供給量は需要を下回っていた。このような状況は、今後数ヶ月変化しないと見込まれる。「南アフリカからの輸入は2週間前に終わったが、例年よりも1ヶ月早かった」と輸入業者は語っている。ペルー産は欧州の需要を十分に満たすものではなく、結果として価格が上昇した。また、「ハスは、現在緑色系よりも安いという逆転現象が生まれている」とのことだ。この結果、スーパーはハスに興味を示している。いずれにせよ、業者はこのことがプラスの効果を持ち、消費者がハスに慣れてくれることを期待している。「消費者がハスに感謝することを願っている」そうだ。近年、イタリアでもアボカドの需要が高まっている。理由の一つは、移民が増加しているからだ。

米国:供給よりも需要が多い

カリフォルニア産の収穫は既に1月から始まっており、まだ終わっていない。情報によると、75%の収穫が終わっているそうだ。収穫期がいつまで続くかは何とも言えない。南部の産地では販売は7月初旬に終了し、北部の産地では8月まで続くが見込まれる。予想では、今年の収穫量は9万トンであるが、昨年よりも少ない。この減収により、需要は供給を上回っている。7月4日の独立記念日は多くの消費が見込まれる。

いくつかの地域では、栽培面積が減少しているが、単位面積当たりの収量増加のための投資が行われている。

中国:生産を開始するプランテーション

中国の市場にはペルー産だけが存在するが、供給は徐々に増加している。価格は、4キロ当たり高品質のもので160~180元(20~23ユーロ)、低い品質のもので150~160元である。一方、9月には国産のハスアボカドが収穫を始め、国内市場に出回ることになる。プランテーションは雲南省にあり、収穫期は9月から2月まで続く、今後数年間で、この地域の栽培面積は11.3万haまで増加する見込みだ。東海岸の主要都市まで

の輸送時間は48時間である。

オーストラリア

需要は相当に大きく、ハスが終了し、Shepard に引き継がれようとしている時は市場のギャップが生じた。このため、5月には価格は若干上昇したが、その後は通常の水準まで下がっている。

アジア、特にシンガポールとマレーシアはオーストラリア産アボカドの輸出先だ。しかし、これら地域では、ケニア産、メキシコ産との競合がある。

オーストラリアの業界では、現在、農園を統合する動きがあり、小規模農家にとっては大変困った状況にある。最近、オーストラリアの最大のアボカド生産会社が1億ドルで買収された。協定はジャスパー農園と海外投資審査委員会との間で合意された。買収先は未だに不明であるが、北米のバイヤーであるとの噂が流れている。ジャスパー農園は、毎年6,000トンのアボカドを生産している。

著者:Rudolf Mulderij

30. ブラジルのカンキツ事情

米国農務省海外農業局 GAIN レポート(2017年6月28日公表)

注)ブラジルの「年産」は7月から翌年6月である。例えばブラジルの2017/18年産は2017年7月から2018年6月までであるが、これは米国の2016/17年年産(2016年11月から2017年10月まで)にほぼ匹敵する。このため、このレポートではブラジルの2017/18年産は米国の2016/17年産と対比することとする。

生鮮オレンジ

生産

ブラジルの生鮮オレンジの生産、供給、需要について、サンパウロ州とその他に分けて整理した。

ブラジル生鮮オレンジの生産、供給、需要(千ha、百万箱本、百万箱(1箱40.8kg))

年産(米国年産)	2014/15	2015/16	2016/17
年産(ブラジル年産)	2015/16	2016/17	2017/18
栽培面積(千ha)	630.6	603.9	602.6
サンパウロ	430.6	403.9	402.6
その他	200	200	200
結果樹面積(千ha)	596.1	579.3	578.1
サンパウロ	403.5	386.7	385.5
その他	192.6	192.6	192.6
結果樹数(百万本)	226.1	227.5	226.8
サンパウロ	174.1	175.5	174.8
その他	52	52	52
未結果樹数(百万本)	27.7	20.5	20.9
サンパウロ	23.7	16.5	16.9
その他	4	4	4
果樹数合計(百万本)	253.9	248	247.7
生産量(百万箱)	409.7	352	471
サンパウロ	300.7	245.3	364.5
その他	109	106.7	106.5
輸出量(百万箱)	0.7	0.6	0.7
輸入量(百万箱)	0.4	0.4	0.4
国内消費量(生鮮)(百万箱)	127.4	129.8	130.7
加工仕向量(百万箱)	282	222	340
サンパウロ※	262	202	320
その他	20	20	20

※濃縮還元果汁+非濃縮果汁(ストレート果汁)

2017/18年のブラジルのオレンジ生産量は、4億7100万箱(1箱40.8kg)で、前年から34%増加すると予測される。サンパウロ(サンパウロ州と西部ミナスジェライス州)の生産量は3億6450万箱で、前年を49%上回る見込みだ。この予測は地元カンキツ関係の協会(Fundecitrus)が5月10日に予測した数値に基づいている。これら数字は次の品種を対象としている。Hamlim、Westin、Rubi、Valecia、Americana、Valencia Argentina、Seleta Pineapple、Pera Rio、Valencia、Folha Murcha、Natal。

協会によると、2016/17年産が25年来の最低の生産量だったため、8月から12月にかけての開花、着果期に樹体にエネルギーが蓄積され生育が良好だったためとのことだ。また、気象条件も良く生産量の増加に繋がったようだ。

2017/18年の他の州の生産量は1億650万箱と予測され、前年と同程度と見込まれる。

栽培面積、収量等

2017/18年の果樹1本当たりの生産量は2.08箱で、前年を34%上回る。これは、天候に恵まれたためと樹体にエネルギーが蓄積されていたためである。これは、特にサンパウロのカンキツベルトで顕著である。オレンジの栽培面積は602、600haで、前年と同程度である。

果樹本数は2億4770万本で、前年より僅かに減少する見込みだ。

価格

価格はサンパウロ大学農学部(ESALQ)及び応用経済研究センター(CEPEA)が、生鮮果実の国内市場向け

価格とジュース向け価格について調査を行っている。いずれもサンパウロ州が対象である。調査は1994年以降行われている。生鮮市場向けの価格は樹上果実の価格である。CEPEA によると、加工向けの価格は1年契約によるものであり、2016年の下期は1箱当たり20～25レアルであった。この価格は平均価格より高いが、加工産業が2017年も不作を恐れたためである。しかし、2017年1月以降は高収量が見込まれたため、加工業者は1箱16～18レアルで購入している。

加工向けオレンジ価格の推移(業界支払い価格)

品種はPera, Natal, Valenciaの平均 レアル/箱

	2012	2013	2014	2015	2016	2017
1月	n/a	5.85	8.45	10.15	13.84	25.84
2月	n/a	5.98	9.09	10.20	13.82	21.98
3月	n/a	6.43	9.81	10.24	14.01	21.39
4月	n/a	6.78	--	11.00	14.72	17.60
5月	n/a	6.50	--	10.83	17.23	--
6月	n/a	6.57	--	9.81	18.79	--
7月	7.00	6.79	10.00	9.83	19.64	--
8月	7.00	6.88	9.72	11.32	19.99	--
9月	7.01	7.10	10.14	12.17	20.28	--
10月	6.97	7.47	10.19	13.07	22.10	--
11月	6.53	8.00	10.11	13.89	25.35	--
12月	5.88	8.32	10.21	14.06	25.90	--

CEPEA/ESALQ

生鮮オレンジの生産者受取価格

品種はPeraの平均価格 レアル/箱

	2012	2013	2014	2015	2016	2017
1月	8.43	8.94	18.98	15.74	18.39	37.53
2月	8.41	10.45	21.65	17.47	20.14	43.91
3月	12.72	13.07	22.06	17.22	22.17	41.86
4月	12.82	11.66	17.92	16.59	20.63	30.41
5月	9.34	7.92	12.59	14.85	21.22	--
6月	6.88	6.67	10.29	12.78	20.36	--
7月	5.99	6.19	9.62	11.53	19.53	--
8月	5.54	7.30	9.98	11.71	21.60	--
9月	5.61	9.28	10.65	13.18	26.88	--
10月	5.65	10.79	11.91	14.65	32.14	--
11月	5.74	12.08	13.18	16.38	34.66	--
12月	6.73	13.60	14.15	17.49	32.77	--

CEPEA/ESALQ

消費

2017/18年の国内消費は、1億3070万箱と見込まれ、前年(1億2980万箱)と同程度である。この数字には実際に国内で消費されたものに加え、果樹園、輸送中、選果場等でのロスを含んでいる。

また、この数字の中には国内で消費される非濃縮果汁の出荷量も含まれている。国内消費の数字は、生産量から輸出向けの冷凍濃縮果汁、非濃縮果汁を差し引いたものとして計算されている。

貿易

2017/18年の生鮮オレンジ輸出量は70万箱と、前年をやや上回る予測である。ブラジルの輸出先は限定されており、主に欧州向けである。

ブラジルのオレンジ統計(在ブラジル 米国農務省 農務官)

	2015年7月-2016年6月	2016年7月-2017年6月	2017年7月-2018年6月
栽培面積(ha)	630,600	603,900	602,600
収穫面積(ha)	596,100	579,300	578,100
結果樹数(千本)	226,100	227,500	226,800
未結果樹数(千本)	27,700	20,500	20,900
果樹数合計(千本)	253,800	248,000	247,700
生産量計(千トン)	16,714	14,362	19,217
輸入量(千トン)	16	16	16
総供給量(千トン)	16,730	14,378	19,233
輸出量(千トン)	28	24	28
国内消費仕向量(千トン)	5,196	5,296	5,333
加工仕向量(千トン)	11,506	9,058	13,872
総出荷量(千トン)	16,730	14,378	19,233

オレンジジュース

生産

ブラジルのオレンジジュースの生産、供給、需要について、サンパウロ及びその他に分けて以下の表に整理した。なお、冷凍濃縮果汁は65°ブリックス換算とし、非濃縮果汁(ストレートジュース)は、冷凍濃縮果汁1トン＝非濃縮果汁(11.6°ブリックス)5.6トンとの計算の下に冷凍濃縮果汁相当量に換算した。

ブラジルオレンジジュースの生産、供給、需要
単位：加工仕向量は百万箱(1箱40.8kg) 果汁は千トン65°換算

年産(米国年産)	2014/15	2015/16	2016/17
年産(ブラジル年産)	2015/16	2016/17	2017/18
加工仕向量(百万箱)	282	222	340
サンパウロ※	262	202	320
その他	20	20	20
期首在庫量(千トン)	329	147	24
全生産量(千トン)	1,006	810	1,257
サンパウロ冷凍濃縮果汁	699	490	920
サンパウロ非濃縮果汁	222	240	252
その他	85	80	85
総供給量(千トン)	1,335	957	1,281
輸出量(千トン)	1,153	895	1,143
サンパウロ冷凍濃縮果汁	869	600	826
サンパウロ非濃縮果汁	222	240	252
その他	62	55	65
国内消費量(千トン)	35	38	38
期末在庫(千トン)	147	24	100

※濃縮還元果汁＋非濃縮果汁(ストレート果汁)

2017/18年の65°ブリックス換算果汁生産量は125.7万トンであり、前年を44.7万トン上回る予測だ。これは加工に仕向けられるオレンジの量が増加するためである。サンパウロでは3億2000万箱のオレンジが果汁用に仕向けられ(うち冷凍濃縮用が2億5500万箱、非濃縮用が6500万箱)、117.2万トンの果汁が生産される(うち冷凍濃縮果汁が92万トン、非濃縮果汁が25.2万トン)見込みだ。

2016/17年の生産量は、その前年を19%下回る81万トンであったと推計される。これは、サンパウロ地方で果汁に仕向けられる果実の生産量が大変少なかったためである。

ブラジルには非濃縮果汁の供給、需要に関する公的なデータはない。

国内消費

2017/18年の国内冷凍濃縮果汁の消費量は、3.8万トンで安定していると予測される。

貿易

2017/18年の65°ブリックス換算の輸出量は114.3万トンと前年を24.8万トン上回ると予測される。これは生産量が増加するためである。この内、サンパウロ地方は84万トンを占めている。

以下の表は国別輸出量(トン)と輸出金額(FOB 価格、千米国ドル)である。

冷凍オレンジジュース輸出(単位:トン、千ドル)

	2014年7月-2015年6月		2015年7月-2016年4月		2016年7月-2017年4月	
	量(トン)	金額(千ドル)	量(トン)	金額(千ドル)	量(トン)	金額(千ドル)
米国	148,312	245,439	101,272	144,556	74,492	144,771
ベルギー	190,480	332,459	133,364	213,168	75,847	124,369
オランダ	79,310	125,491	70,770	104,003	64,417	111,221
日本	65,698	116,599	44,716	70,231	31,663	53,318
中国	32,822	62,871	25,715	44,934	26,215	47,875
オーストラリア	19,737	36,113	10,813	17,863	10,659	18,340
イスラエル	6,852	11,925	6,393	9,759	8,820	17,653
チリ	6,168	11,607	5,890	10,050	5,430	11,147
プエルトリコ	9,189	15,777	6,067	9,607	6,142	10,353
サウジアラビア	3,620	6,449	4,234	6,977	4,583	8,783
その他	36,822	67,170	34,991	56,816	31,356	56,816
合計	599,011	1,031,900	444,225	687,964	339,625	604,646

ブラジル貿易省

非冷凍、ブリックス20度以下オレンジジュースの輸出(単位:トン、千ドル)

	2014年7月-2015年6月		2015年7月-2016年4月		2016年7月-2017年4月	
	量(トン)	金額(千ドル)	量(トン)	金額(千ドル)	量(トン)	金額(千ドル)
ベルギー	524,758	200,981	511,230	177,733	516,444	183,177
米国	327,580	110,253	308,264	101,096	350,847	115,538
オランダ	299,777	113,196	245,153	84,783	264,403	83,597
チリ	200	165	282	246	333	315
スイス	1,000	375	1,000	338	1,002	300
ウルグアイ	0	0	1	1	35	45
日本	41	32	0	0	5	6
香港	0	0	0	0	3	3
フランス	8	9	0	0	0	0
パラグアイ	0	0	1	1	0	0
その他	21	20	0	0	0	0
合計	1,153,385	425,032	1,065,932	364,196	1,133,072	382,982

ブラジル貿易省

その他オレンジジュースの輸出(単位:トン、千ドル)

	2014年7月-2015年6月		2015年7月-2016年4月		2016年7月-2017年4月	
	量(トン)	金額(千ドル)	量(トン)	金額(千ドル)	量(トン)	金額(千ドル)
ベルギー	130,112	234,915	133,975	201,650	105,572	215,907
オランダ	198,177	346,345	166,357	263,164	90,637	150,426
米国	36,147	63,935	7,639	11,472	14,539	21,328
スイス	6,893	11,919	5,633	9,930	7,440	13,839
英国	5,966	10,592	14,019	22,072	7,801	12,090
スペイン	0	0	1,592	2,343	922	1,851
イタリア	331	627	232	396	580	1,046
アイルランド	601	833	338	390	468	594
パラグアイ	332	144	587	232	589	364
オーストラリア	0	0	115	168	189	308
その他	438	844	1,146	1,631	308	568
合計	378,997	670,154	331,633	513,448	229,045	418,322

ブラジル貿易省

注)2014/15年は7月から6月までであるのに対し、2015/16年、2016/17年は7月から4月までとなっている。

在庫

2017/18年の期末在庫量は65°ブリックス換算で10万トンと予測される。これは、前年を7.4万トン上回る数字である。これは果汁生産量が増加するためである。この数字はブラジル国内の工場でのタンク、港湾での貯蔵施設におけるもので、米国、欧州、日本においてブラジルの会社が所有する貯蔵庫に保管されているものは含まれない。

2017年4月にブラジルカンキツ輸出協会が公表した数字によると、2017年6月末の世界のブラジル産果汁の在庫は7.029万トンで、2018年6月末には20~30万トンと予測している。この数字はブラジル国内だけでなく、海外の貯蔵庫、加工工場、港湾施設などに貯蔵されているものが含まれる。

果汁に関する統計を以下にとりまとめた。果汁は全て65°ブリックスに換算した。

ブラジルのオレンジジュース統計(在ブラジル 米国農務省 農務官)

	2015年7月-2016年6月	2016年7月-2017年6月	2017年7月-2018年6月
加工仕向量(生鮮果実、トン)	11,506,000	11,506,000	13,872,000
期首在庫(トン)	329,000	147,000	24,000
生産量(トン)	1,006,000	810,000	1,257,000
輸入量(トン)	0	0	0
総供給量(トン)	1,335,000	957,000	1,281,000
輸出量(トン)	1,153,000	895,000	1,143,000
国内消費量(トン)	35,000	38,000	38,000
期末在庫量(トン)	147,000	24,000	100,000

注)加工仕向量以外は65° ブリックス換算

(参考)為替レートの推移 1米国ドルに対するブラジル・レアルのレート

	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017
1月	1.67	1.74	1.99	2.43	2.66	4.04	3.13
2月	1.66	1.71	1.98	2.33	2.88	3.98	3.10
3月	1.62	1.82	2.01	2.26	3.21	3.56	3.17
4月	1.57	1.89	2.00	2.24	2.98	3.45	3.20
5月	1.57	2.02	2.13	2.24	3.18	3.60	3.26
6月	1.57	2.02	2.22	2.20	3.10	3.21	3.28
7月	1.56	2.05	2.29	2.27	3.39	3.24	
8月	1.59	2.04	2.37	2.24	3.65	3.24	
9月	1.85	2.03	2.23	2.45	3.98	3.25	
10月	1.69	2.03	2.20	2.44	3.86	3.18	
11月	1.81	2.10	2.32	2.56	3.85	3.40	
12月	1.88	2.04	2.34	2.66	3.90	3.47	

注)各月の末日の為替レート

3 1. 消費の不思議（リンゴ）

The World Apple Report 誌（2017年6月号）

何十年にもわたる消費者への説得、政治、教育、医学分野の指導者からの脅し等があったにもかかわらず、一人当たりの生鮮農産物の消費に変化はない。生鮮リンゴでは他の農産物よりも見劣っている。

Belrose社（本誌の発行会社）は、2017ワールド・アップル・レビューを公表した。この中では、32のリンゴ生産国を対象に調査をし、2000-02年から2014-16年にかけて、19の国（60%）で一人当たり消費が減少していることが明らかになった。特に欧州は悪い状態で、18カ国の内14カ国（78%）で減少をしている。

大きな例外は中国とロシアだ。中国のリンゴ消費は他の輸入果実に対抗して、人為的に刺激、拡大されたものである。一方、ロシアは共産国時代に輸入果実の消費が人為的に抑えられていたためであり、現在、同じ収入レベルの国の消費量に追いつこうとしている。

中国とロシアを除く30カ国では、2000-02年から2014-16年の一人当たり消費量は、平均5%減少している。また、西欧では2014-16年の一人当たりの消費量は今でも15kg以上であるが、米国や日本のような豊かで人口の多い国はその半分か半分を下回っている。

非生産国では消費は拡大

非生産国では、非常に低い消費レベルからリンゴの一人当たり消費量は拡大している。低いレベルの例外は、所得の多い都市国家で、アジアの香港、シンガポール、中東のクウェイト、アラブ首長国連邦である。しかし、近年、非生産国における一人当たり消費量の伸びは鈍化している。恐らく、世界的な経済の停滞が原因とみられる。

一人当たり消費量を左右するもの

数知れない経済研究では、どのような農産物、どのような国でも、一人当たり消費量を左右するのは3つの要素だとしている。つまり、農産物価格、一人当たりの所得、対抗する農産物の入手可能性又は価格である。総消費量は、一人当たり消費量に人口を掛合わせたものである。リンゴの需要に関する理想の姿は、多い一人当たり消費量と大きくて増加する人口である。しかし、このような国はほとんど見当たらない。

先頃、米国農務省経済研究所が包括的な研究を行い、2017年2月に公表した。研究のタイトルは、「国、年齢、性別ごとに、所得、価格が世界の食事パターンに及ぼす影響」であり、5人の研究者により著わされた。また、資料は世界食物データベースに基づいた。結果は次の6つの主要な地域ごとに報告された。

- ・東南アジア/アジア太平洋地域
- ・計画経済がなされていた地域
- ・中東/北アフリカ/南アジア
- ・サハラ以南のアフリカ
- ・高所得国/その他

以下、研究報告の内、果物に焦点を当ててみた。

所得と果物消費

概括的な結論をいうと、一人当たりの所得の増加は、一人当たりの果物消費量の増加に対してかなり控えめな影響しか及ぼしていないということである。6つの地域を通じて、所得の増加に対する果実消費の増加はかなり小さく、10%所得が伸びても、消費の増加は2%以下であった。

所得の伸びに対する果実消費の増加の反応は、若い女性の方が年配の女性より小さく、最も小さかったのは若い男性であった。ほとんどの地域で、若い男性は、10%の所得の伸びに対して1%以下しか果実の消費は伸びていない。また、最貧国では所得の伸びに対する果実消費の伸びはより低かった。このことは、ある一定の所得水準に達するまでは、果物消費の伸びはほとんど見られないということだ。

価格と果実消費

価格の低下が果実消費に及ぼす影響は、地域により差が見られた。例えば、サハラ以南アフリカの20歳の女性では、10%価格が低下すると9%果実消費が増加した。

しかし、多くの他の地域では、10%の価格低下により果実消費は5%かそれ以下の増加であった。高所得国では10%の価格低下は3%以下の果実消費の増加であった。特に若い男女にとっては2%以下の増加であった。

競合果実の影響

果実価格の低下が果実消費の拡大へ結びつく度合いが低いのは、恐らく他の競合果実、スナックが利用可能だからと思われるが、米国農務省の研究ではこの点を明確に示していない。

しかし、多くの発展途上国は熱帯、亜熱帯地域に存在しており、そこでは地場産の果実が豊富で、価格も競争的である。このことは、インド、中国にも当てはまり、ブラジル、トルコ、インドネシア、フィリピン、タイ等の大国にも当てはまる。

一方、ほとんどの先進国は温帯に属し、そこではリンゴ、ナシ、モモなどを産する。このような国では、消費者は裕福になると輸入品の熱帯果実、エキゾチックな果実を多く消費するようになる。

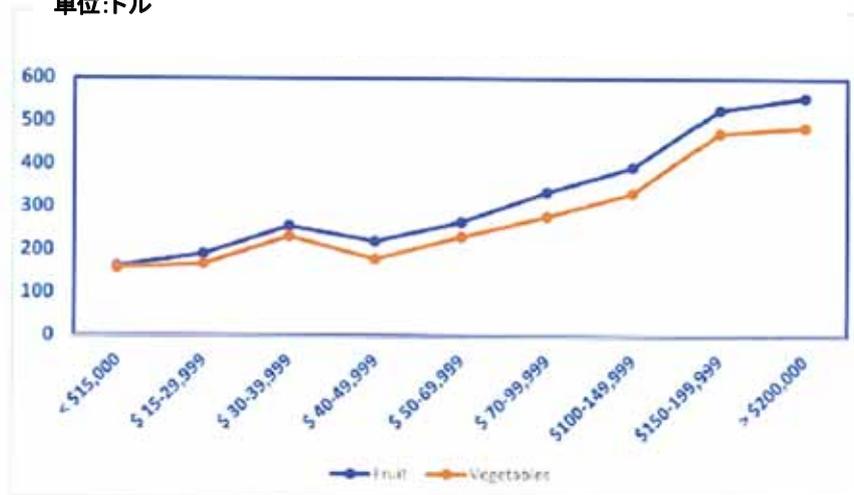
例えば、米国では、主要果実であるリンゴ、オレンジ、バナナの消費は、2000年から2015までほとんど変化はないが、その他の果実の消費は1/3増加している。2016年の調査によると、低所得グループによるパイナップル、マンゴー、パパイアの購入は50%であるが、高所得者層は90%に上っている。

健康志向の影響

所得の増加は、生鮮果実、野菜の消費に対して直接的に大きな影響は及ぼさないが、高所得グループはより良い栄養、ダイエットに焦点を当てる傾向がある。それが、生鮮果実、野菜への支出を増加させる。図は2015年の米国消費支出調査から抜き出したものであるが、生鮮果実、野菜の消費支出が世帯所得により変化することを示している。世帯当たりの所得が4万ドル未満の場合は所得の増加につれ支出が増加しているが、4万ドルから7万ドルまでの間は停滞している。そして、7万ドルを超えると再び増加している。

高所得グループは、高品質果実、野菜の高単価な商品に対して支出を行っているため、ここでは消費量は不明である。加えて、このデータでは、最高所得者層の年間所得は中間所得者層の4倍であるが、支出額は2倍でしかない。

米国における世帯所得階層別、生鮮果実(上)、生鮮野菜(下)に対する消費支出
単位:ドル



消費拡大の努力

明らかに生鮮果実、生鮮リンゴの消費を拡大する上で障害がある。先進諸国では、人口の増加は小さいかゼロである。従って、消費の拡大は控えめにならざるを得ない。現在の状況では、一人当たり消費量は停滞

しているか減少している。所得の増加率は低く、所得の増加に伴う一人当たり消費量の増加割合も小さい。

多くの発展途上国では、人口増加率も一人当たり所得の増加率も比較的高い。しかし、所得の増加は不安定な傾向にある。加えて、これら諸国の多くでは、政府が様々な口実の下に果実の輸入に障壁を設け、市場は自由な交易を阻害されている。加えて、途上国の中で健康や栄養に資するため果実の消費を拡大させる計画を持つものはほとんど見られない。先進国においてさえ、こういった計画は特定の果物だけを対象としてはならないと用心深い。

果実産業、そしてリンゴ産業は少なくとも低所得消費者層に果実を提供しようと価格を引き下げる協調努力をしている。しかし、このことは市場で成功するため高価格を期待する生産者から反発を買っている。例外は、規格やサイズが悪い商品が、バックか安い容器に入れられ、キロ単位で安く販売される場合である。しかし、こういった価格戦略は在庫が過剰になった場合の管理のために行われるもので、消費拡大のために意図的に行うことはまれである。

先進国も発展途上国も、生鮮リンゴは他の果実との競合が激しくなっており、同様に工場生産されたスナックとの競合もある。こういった競争に打ち勝つための唯一の方法は、消費者への直接的なプロモーションであり、又はメディア、医者、栄養学者、教育者その他消費に影響を与える人達による働きかけである。

課題を受け止める

果実消費の拡大を図るため、様々な取組が行われてきた。例えば、多くの国でファイブ・ア・デイのような計画を策定し、消費者が実現すべき摂取量や頻度の目標を設定した。しかしながら、この目標に到達したのは僅かな人口であり、平均的には、多くの消費者は、はるかに目標に達していない。

多くの国で、学校給食プログラムを設け、果実の消費拡大を進めた。しかし、これは全ての果物に恩恵があるかという点で議論を呼んだ。リンゴのような単一の果物に恩恵があったかという点、ほとんど又は全く証拠はない。

我々の結論は、一人当たり消費量を拡大することは、特に先進国においては難題だということだ。しかし、リンゴ産業はこの課題に取り組むインセンティブがある。この課題に取り組まなければ、リンゴの一人当たり消費量は減少を続けるだろう。

3 2 . 成長を期待するナシ産業

AMERICAFRUIT 電子版 (2017 年 6 月 26 日)



第10回の国際ナシ協議会 (Interpera) の会議が、13カ国から160人を集め、6月の初旬にワシントン州ウェチナーで開催された。

このイベントは、米国北西部ナシ協議会と欧州地域果実、野菜、観賞作物生産者会議 (AREFLH) との共催によるものである。会議の狙いは、新品種、生産技術、収穫前及び収穫後の品質改善、貿易、消費パターンに関して参加者の経験の共有を図ろうとするものである。

世界のナシ生産量は着実に増加しており、2002年の1,500万トンから2014年には2,600万トンに拡大している。

世界の最大生産国は中国で1,800万トン、次いで欧州の240万トン、アルゼンチンの86万トン、米国の83万トンと続いている。

統計によると、世界の貿易量は2005年の220万トンから2015年には270万トンに増加している。一方、欧州の販売量は過去20年間で減少し、1995年の258.5万トンから2015年には217万トンに縮小している。

世界のナシ消費は、2012年以降増加しており、年間1人当たり消費量は2kgをわずかに上回る程度である。しかし、消費量は国ごとに大きな不均衡がある。例えば、中国では現在9.26kgであるのに対し、インドではわずか0.24kgである。

この会議では、市場に登場する有望な新品種が将来の消費拡大を導くことが議論された。

特に赤色系、2色系のナシが市場で有望であることが示された。有望とされた品種は以下の通りである。

Celina, Carmen Angelys, Sweet Sensation, Xenia, Cepuna, Corina, Gem, Piqua Boo

3 3 . 米国北西部のサクランボ生産見込み

Good Fruit Growers 電子版 (2017 年 6 月 23 日)



サクランボの収穫が本格化しているが、生産者団体は収穫予想を更新した。

定期的に収穫予測を行っているワシントン州ヤキマの北西部サクランボ生産組合(北西部5州を代表する組織)は、今回、24.5万トン、(20ポンド箱相当で)2,450万箱の収穫を予想した。もし、実現すれば、2014年の2,320万箱を抜いて新記録となる。

この予想は、大手出荷業者19社のほ場調査員により行われたものだが、実際の収穫量は果実成熟期の天候状態によりしばしば変動する。

赤色系のレイニアは、今年は、180万箱(15ポンド箱)と見込まれる。

春の気候が冷涼であったため、北西部のサクランボは例年より収穫が遅れている。しかし、カリフォルニア州の豊富で甘いサクランボ950万箱(15ポンド箱)のシーズン終了時には、市場で円滑に移行することができた。

北西部の果樹園では、最初の収穫は6月8日に行われた。

34. 米国農務省がカンキツの種保全のため冷凍保管

FreshPlaza 電子版 (2017年6月19日)

カリフォルニアのカンキツ生産者は、フロリダがカンキツグリーニング病により産業の崩壊を招いていることを心配しながら見ている。これは、単にカリフォルニアのオレンジ産業に限った心配事ではなく、全米の希少種、野生種、育種して開発した価値ある品種で米国農務省が保存している樹木にも当てはまることだ

これらの種、品種は、現在、リバーサイド、コーチェラ、セントラルバレー等のほ場、虫害防止用の温室で栽培、保存されている。貴重な遺伝的多様性を保全するため、米国農務省では各種、品種ごとに最低2つのコピーをこれら施設に保存している。

しかし、種子植物と違い、果樹はクローンであり、穂木から作出されるため、ノルウェイのスヴァールバル種子保存庫のようなジーンバンクでは保存できない。

そこで、カンキツ業界は、独自に植物組織の凍結を行い、冷凍保存する方式を取入れた。

コロラド州フォートコリンズに本拠を置く米国農務省の植物生理学者 Volk 氏は、穂木を凍結し、後に再生させる方法を開発した。この方式は、植物体から小さな芽の断片を切り取り、混合した化学物質につけることで、細胞中の水分と置換させ、液体窒素の中に投入するというものだ。この方式で、過去9ヶ月の間、商業的に有用な344品種を保存したという。

カリフォルニア州バイセリアのカンキツ経営3代目になる Steen 氏は、種の多様性を保存する取組が他の作物分野も刺激し、冷凍保存するための資金を提供してくれることを望んでいる。「多様性を保全することは、単に病気から守るということだけではなく、味や風味を保存し、後生に蘇らすことができるということだ」と語っている。

情報源:npr.org

35. 世界のレモン市場

FreshPlaza 電子版 (2017年6月16日)



昨年のレモン市場は堅調で高値で推移したが、現在は正常に戻っている。スペイン産は市場で過剰状態になっている。南アフリカも収穫量は多い見通しだ。南アフリカの輸出業者によると、アルゼンチンからの供給に注目しているとのことだ。アルゼンチン産が市場を形作るからだ。スペイン産はアルゼンチンから数週間早く入荷があったため、競合している。南米諸国では加工業界からの需要が大きく、これは生産者にとっては魅力的だが、輸出業者にとっては魅力が少ない。

南アフリカ: 収穫量が多く、市場で競合

同国北部では、最初の収穫が終わった。しかし、北部及びケープでは、収穫されていないレモンは相当量残っている。第23週までは出荷量が顕著に増加し、昨年より15kg入の箱で110万箱多かった。これは、13%の増加(今年は880万箱、昨年は770万箱)に相当する。その後、数字は増加を続けており、昨年は860万箱であったのに対し、現在は1,070万箱に達している。最新の収穫予測によると1,750万箱とのことだ。

ロシアの市場は成長している。同国は南アフリカとアルゼンチンから2万トン以上を輸入した。しかし、この量は過剰ではないかと南アフリカの輸出業者は懸念している。中東と欧州では、アルゼンチン産、スペイン産の量が多いため価格は昨年より下がっている。極東の価格は変動している。

欧州向けに関しては、シトラス・ブラックスポット病に対する検疫の関係で、輸出業者は輸出を躊躇している。

アルゼンチン: 加工業界からの強い需要

シーズンは、これまでとは違った形で推移している。主な理由はスペインの出荷時期が延び、スペイン産の Verna レモンが多く出回っているからだ。輸出業者によると、既に最初のコンテナは欧州に向けて出航し、1週間前に到着した。1~2週間後には大量のコンテナが出荷される見込みだ。業者は米国向けよりも欧州向けに焦点を当てている。その他の輸出市場は、ロシア、東南アジア、カナダだ。スペイン産が欧州で優位なためにこれら市場に注目している。業者は入荷量が少ない市場を選んでいることやスペインが欧州で優位な立場にあることは決して理想的とは考えていない。例えばスペイン産の果実が大きく、小さいサイズのアルゼンチン産を受け入れてくれる余地があるとしても、だ。

昨年に比べると、量が多く、品質も向上している。しかし、加工業界からの需要が大きい。このため、価格は急速に上昇している。生産者は輸出に比べてリスクが少なく、儲けが大きいことから、加工業に出荷する方を選んでいる。

メキシコ

収穫量の概要は、ミチョアカンが最大で78,000トン(48%)、コリマが28,560トン(24%)、オアハカが16,040トン、ゲレーロが2,000トン(8%)である。

米国:有機レモン市場は好調も供給量は少ない

有機レモンは、順調な市場の動きの後に、供給はタイトになっている。毎年、この時期には同様の状態になる。「昨年は量が不足していたが、今年は潤沢だった」と有機レモン業者は語っている。昨年は1箱当たり100ドルまで上昇し、業者の儲けは少なかったそうだ。

現在、レモンの供給は減少しており、価格も変化している。1月から3月までは価格は安かったが、4月下旬から上昇した。その後5月も上昇した。現在1箱30ドルであるが、来週には倍の値段になりそうだ。そして夏の終わりには80~100ドルに達するのでは、と業者は話している。レモンの需要が高まっているため、価格も上昇している。ある業者はカリフォルニア産とメキシコ産を扱っているそうだ。フロリダは既に産地としての地位を失った。(新シーズンの)スペイン産が入荷する前、夏の終わりまでは供給量が不足するのではないかと。

ロシア:レモンが溢れる

業者によると、現在の市場は「大いに問題」だそうだ。その理由は、昨年大きな利益を上げたからだという。昨年は不足状態であったため、輸入業者は利益をあげた。「輸入業者は今年も同じ状態になると考えた」そうだ。この結果、現在の輸入量は昨年より60%多い。このため価格は大変安く、先月はキロ当たり110~120ルーブルだったものが、今月は70~80ルーブルとコストを割っている。

輸入業者によると、アルゼンチン産の品質に問題があることで、事態は更に悪化しているという。「南アフリカ産のレモンに品質は良い。長い間良好な関係を保ち、求める品質のレモンを供給してくれている。しかし、アルゼンチンの輸出業者には当てはまらない」と不満を述べている。輸入業者によるとアルゼンチン産の60~80%は問題があり、果皮に傷がついているそうだ。このため、アルゼンチンの輸出業者とは関係を見直さないと考えている。ロシアの小売業者はますます厳しくなっており、クラス2の製品も販売をしない場合がある。

ドバイ:品質は平均以下

業者によると、入荷するレモンはしばしばレベルに達しない品質のものがあるという。その業者によると、レモンは決して儲けのよい果実ではなく、南アフリカ産を輸入しているという。同国産はアルゼンチン産よりも貯蔵性が優れている。とはいえ、冷蔵室の中に置くと、数日後には腐り始めると語っている。

イスラエル:収穫シーズンが終わり価格は上昇

昨年と同様に価格は高く、地元スーパーでは3.5~5ユーロである。地元産の収穫は4月に終了し、その後数ヶ月は貯蔵庫から出荷される。収穫最盛期の2~3月は地元産の出荷は多く、価格は現在の半値程度だ。価格が低いと、生産者は輸出に目を向ける。しかし、イスラエル産のレモンの品質はトルコ産やスペイン産に劣ると認識されているため、両国産の供給にギャップがあるときに輸出される。昨年は2,000トンが、主にイタリア、フランスに輸出された。

レモンはカンキツ生産の中ではマイナーだ。カンキツの栽培面積2万 ha に対して、レモンは1,700ha に過ぎない。レモンは公園や庭園に植栽されており、商業需要以外に一部対応している。

ギリシャ:価格は数年間抑えられている

市場は、イタリア、スペイン、トルコ、アルゼンチンからの輸入品で溢れている。この結果、ギリシャ産の価格は数年来抑えられている。ギリシャからは、ブルガリア、マケドニア、モンテネグロ、アルバニアに輸出されている。「市場が違えば要望も異なるので、どんな需要があるかを知ることが大事だ」と業者は語っている。業者によると、「アルゼンチン産の評判は品質に関しては良いが、価格は他国に比べて高い」そうだ。アルゼンチン産はキロ当たり1.5ユーロで、トルコ産は1.15ユーロ、スペイン産は75セントだ。このような激しい競争の

ため、レモンに対する需要は高まっているが、ギリシャ産の価格は抑制されている。

イタリア:高値でシーズンを終える

シチリアの東部では市場が活発だ。生産時期は終わりに近づいているが、需要は堅調だ。需要が供給を上回っている。市場は現在、昨年と同様の動きである。Verdello レモンの価格は大変高いが、南アフリカ産が既に市場に出回っている。数週間以内にはイタリア産のレモンの供給は途切れる。国産レモンの最後は国内市場に出回り、大手小売業者は海外産に切り替える予定だ。

現在、二日おきにレモンの価格が変わっており上昇している、とチェゼーナの業者は語っている。Bianchetto レモンの季節は終わりに近づき、Verdello レモンに引き継がれる。このレモンは加工業者が好むもので、生鮮にはあまり適してはいない。今シーズンはあと15日で終了し、次期シーズンは10月に始まる。

同国南部で、生産者団体が Verna レモンを50ha 新植した。数年間に更に面積が増加すると見込まれる。4～5年後には「重要な作物」になると見込まれる。

スペイン:供給過剰の恐れが現実

スペインは現在市場に出回っている Verna レモンの供給が過剰になることを恐れている。そしてこれが現実となっている。収穫量は昨年の2倍であり、他国との競争が激化しているからだ。スペインで収穫量が多かったことと、アルゼンチン、南アフリカでも収穫が多いことが一致したことが問題を大きくしている。5月には早くもロシア市場にアルゼンチン産が到着したが、通常は6月に出荷されるものである。また、トルコ産も貯蔵ものが出荷され、近隣諸国の市場に流れている。

加えて、サイズの大きさも問題だ。サイズが大きいものが多いため、相当割合のレモンは商標的販売に向いていないとのことだ。この分を抜きに考えれば、フランス、ドイツなどの市場では過剰とはいえない。

市場は沈静化していて、価格は良好である。第23週にはキロ当たり57～67セントであった。市場では今でも投棄が行われているからだ。業者は再度販売するために購入を行っているのだ。

来シーズンに向けては、スペインと南アフリカは面積が拡大しているため、更に量が増えるだろうと業者は警告している。一方、アルゼンチンとトルコの変化は緩やかと見ている。

Verna のシーズンは今後数週間で終わりを迎える。海外産の競争は更に激化すると見られる。

ベルギー:極端な価格の恐れはない

ベルギーの輸入業者によると、現在スペイン産と海外(他の大陸産)が市場に出回っている。スペイン産の販売は、例年よりも長く、6月下旬から7月上旬まで続く見通しだ。スペイン産の品質は現在でも良好で価格も高い。しかし、昨年のような高価格は期待できないとしている。十分な供給量があるため、価格の上昇は見られないだろう、とのことだ。

オランダ:南アフリカ産の価格は期待以下

レモンのシーズンはやや遅れて始まった。昨年同時期よりも入荷量が多いが価格は好調である。現在23～25ユーロで推移している。しかし、この水準は期待よりも低い。この期待は近年の高価格から生まれたものだ。高価格の傾向は、栽培面積が増加しているため、終わりを迎え、適正なものに価格も修正されるだろう。

オーストラリア:輸出の拡大

昨年は輸出が増加し、3,400トンであった。輸出額は2012年の100万ドルから2016年には850万ドルに拡大した。主な市場はインドネシア(全体の68%)、シンガポール(11%)、フィリピン(8%)だ。近年、供給がややタイトになり、収益は上がっている。栽培面積は国内各地で増加している。

著者:Rudolf Mulderij

36. オーストラリアがカンキツで日本との関係強化を狙う

FreshPlaza 電子版 (2017年6月13日)

シトラス・オーストラリアは最近行った日本での貿易セミナーで成功を収めた。両会場とも満員の盛況であった。

オーストラリア側は東京と大阪でイベントを開催したが、最高経営責任者は、「これは重要な市場対して、より深い関係を構築するためのプログラムを進展させる一環である」と語っている。

シトラス・オーストラリアの Damiani 氏によると、「過去10年の間、オレンジの日本への輸出量は、2007年の15,200トンから2016年の33,400トンへと増加している。量的には日本が最大の市場であり、最近締結された日豪経済連携協定により関税も引き下げられている。このため、オーストラリアのカンキツは市場で高い競争力を持ち、需要に応じている。2015年から2016年にかけて、輸出量は20%増加している」と話している。

←オーストラリア産農産物のプロモーション資料

シトラス・オーストラリアは今後5年間でアジア諸国への参入機会を得ようとしている。今回のイベントは、果実品質を軸にオーストラリア産の地位を強化することを狙いとされたものだ。

Damiani 氏は、「観光産業も盛り上がり、2020年の東京オリンピックに繋がっていく。この時期(7・8月)は輸出のピークでもあり、需要に応えられるだろう。我々の一貫したメッセージは味の良さとクリーンで、グリーンな点だ。オーストラ

リア政府と一体となって、園芸作物の全国残留農薬検査プログラムを実施し、市場での販売促進につなげたい」と語っている。さらに日豪 EPA 自由貿易協定の下で、カンキツの輸出促進に拍車がかかっているとも述べている。「オレンジの関税が、今年16%から10.2%に引き下げられることは大きなインパクトだ。また、為替レートも輸出にとって有利に働いている。これらのことで、オーストラリア産カンキツは競争力を増している」と語っている。

オーストラリア産カンキツが潤っているのは日本だけではない。中国に対しても過去10年間で輸出が420%増加した。一方、韓国に対しては、オーストラリア政府は輸出を支援するため事前検疫調査を実施している。

それだけでなく、Damiani 氏によると、「業界は常に新技術と新品種によって、これら国際市場の中でトップを維持するための努力を重ねている」そうだ。

「日本への市場アクセスの改善を常に進めている。新たに、Afourer マンダリン、不知火、ブラッドオレンジに関しても冷蔵処理の実証試験を終了したところだ。また、ポストハーベストに関する新技術も実証している。腐敗を防ぐ上で、防カビ剤の代替技術(コールド・プラズマなど)も調査している。これらは、『園芸革新オーストラリア』が行う研究開発へ、業界からの投資を行うことで初めて可能となるものだ」とのことだ。

著者: Matthew Russell

3 7. 欧州のリンゴシーズンは衝撃的(抜粋)

FreshPlaza 電子版 (2017年6月14日)



4月と5月の極端な気象条件(降霜)は、多くの欧州作物の収穫にかなりの損失をもたらすとみられる。様々な予測や推計が行われているが、何れも確かなものではない。ドイツの研究機関AMIが推計したところによると、リンゴの生産量は欧州全体で1,000万トンを下回るとのことだ。2016/17年のリンゴ生産量は1,200万トンであったと見込まれることから、20%の減収ということになる。

ドイツ研究機関AMIの予測

AMIは様々な数字を提供しているが、欧州の生産量は1,000万トンを下回ると予測している。これによると、ポーランドの減収見込みは50~60%、ベルギーは65~70%、オランダは30~35%、オーストリアは45~50%、イタリアは20~25%で、バルカン半島でさえ50~80%である。

スペインと英国だけが今回の夜間の霜の影響を受けなかった。

ボーデン湖(ドイツ、オーストリア、スイスの国境)周辺では70%の減少が見込まれる。しかし、ドイツ北部では多くの灌漑施設があるため、減収率は10%程度しかないと見込まれる。

いずれにせよ、8月初旬に開催される Prognosfruit(イベント)でより正確な情報が提供される見込みだ。

38. 世界のバナナ市場

FreshPlaza 電子版 (2017年6月9日)



エクアドル産は降雨により価格が上昇している。輸出業者によると、米国企業はこのような価格では購入する意図はないようで、他の中南米諸国からの輸入に切り替えている。この影響で、コロンビアとホンジュラスは輸出が増加した。メキシコも同様に輸出が増加しているが、有機バナナの供給量は少ない。フィリピンは国内政情が不安定という問題を抱えている。このため、バナナへの投資が減少している。中国では、何年もの間、バナナ栽培で収益をあげてきた。

エクアドル: 降雨で価格上昇

今シーズン、豪雨があったため価格は高い。いくつかのプランテーションは洪水の被害を受け、果実の品質にも影響があった。なお、昨年はエクアドルがバナナ市場を牽引した。業者によると、バナナ産業の発展には価格が好調であることが必要だと強調している。もし価格が安ければ、労働条件の改善のために投資ができないと指摘している。政府が設定している最低価格は1箱6.26ドルだ。一方、現在の価格は12ドルに達している。多くの米国企業はこの価格に嫌気を示している。小売業者によると、米国企業はコロンビア、コスタリカなど他の国から調達しようと考えているという。いずれにせよ、先の業者は他の国のバナナには品質的に懸念があるとしている。

1990年以来、中南米の諸国は中国市場に進出してきた。輸出量はその後増加し、特にベビーバナナでは成功を納めている。最新の数字によると、2015年のベビーバナナの輸出量は1,687トンであり、1年後には3,240トンへと倍増した。今年は、4月までの数字は780トンである。

メキシコ: 有機バナナの供給が遅れる

有機バナナの供給は、2月に記録された低温により遅れが出ている。メキシコは年間を通して米国に有機バナナを供給している。米国の輸入業者は、市場がタイトになることを考慮に入れ、有機バナナ出荷のピーク時に備えている。

ホンジュラス: 輸出が増加

ホンジュラス中央銀行によると、今年の第1四半期の輸出は、昨年を12.8%上回り、1億3,346万ドルに達した。価格は抑制された水準であったが、昨年の1億1,93万ドルに比べて1,530万ドル増加した。

輸出量は860万箱(18kg入り)に達し、前年の第1四半期より13.1%増加した。中央銀行によると、これはプランテーションの改良と新規プランテーションの開発によるものだろう。

コロンビア:米国、EU向けに輸出

公式統計によると、2016年にサンタマルタ港から輸出されたバナナは520,289トンであったようだ。バナナの輸出の28%はこの港を通じて行われている。この内、30%は米国向けで、23%がベルギー向けだ。3番目に多いのは英国向けで20%、次いでオランダ(11%)、ドイツ(9.9%)である。現在、有機バナナの承認手続きが進められている。

中国:国内市場の成長は終わりか?

中国は世界で2番目のバナナ生産国であり消費国だ。2015年には1,400万トンのバナナが消費された。国内生産量は1,290万トンであり、輸入はフィリピン、エクアドル、コスタリカから行われている。国内経済の成長と消費者の健康志向により、バナナ市場は毎年5%の成長を示している。

栽培は、主に南部の地方の広東省、広西チワン族自治区、海南省、雲南省、福建省で行われている。栽培面積は27万 ha である。しかし、最近、生産者の経営環境は厳しくなっている。推計によると、バナナ栽培で収益をあげている生産者は10~20%だという。この結果、プランテーションは放棄されるものもあり、生産量は減少している。パナマ病の蔓延も事態を悪化させている。今シーズンは生産量も多く、価格も高い。例えば、雲南省では、旧正月以降、キロ当たり0.8元上昇し、3.0元に達した。とはいえ、生産者は輸入の重要性が高まっていることに懸念を抱いている。

フィリピン:各種事態に悩むバナナ産業

世界最大の生産国の一つであるが、多くの輸入業者はこの国に背を向けている。というのも、品質問題、社会不安があるからだ。フィリピンの企業はこのことを懸念しており、政府に支援を求めている。また、企業は投資を延期している。このような中、政府は中東の企業と連携して、5千~1万 ha の面積を拡大しよう計画していたが、この計画は保留されている。中国、韓国、日本が最大の輸出先である。ASEAN貿易圏の発展に伴い、もっと投資がなされても良いはずである。

インドネシア:生産増を期待

好天に恵まれ、生産量の増加が見込まれる。加えて、栽培面積拡大のための投資が行われている。主な輸出市場は、韓国、中国、中東、シンガポールである。この地域での競争相手はフィリピンだ。国際価格が安くなっても、国内市場も魅力的だ。

オランダ:供給量の減少で市場は維持

この時期、バナナ市場は適切な状況にある。供給量が抑えられているため、価格は良い水準を維持している。黄色バナナの販売価格は16~18ユーロで変動しているが、6月としては良好である。この時期は夏果実のソフトフルーツや核果類が豊富に出回るため、供給がタイトであることで価格が維持される。夏に入るとバナナの販売はやや減少する。しかし、卸売業者はスーパーが安値で販売(1kgで99セント)することを嫌っている。こういう状況に対しては、卸売業者は手も足も出ない。

イタリア:夏にはバナナの地位が奪われる

夏の間、バナナ市場は安定している。ナポリの業者によれば、夏の期間は、夏果実が好まれるため、バナナの消費は大幅に減少するようだ。市場価格は卸売市場で異なる。ローマではキャベンディッシュが80セント(6月6日)であったが、トリノでは93セント(6月7日)であった。

2002年にフェアトレードバナナが導入されて以来、この市場は拡大をしており、2016年は1.1万トンに達

した。当初から取組んでいる輸入業者は市場の成長で利益をあげている。「より多くの輸入業者がフェアトレードを促進することを願っている」そうだ。

イスラエル:輸出市場を開拓

近年の栽培面積の減少にもかかわらず、生産量は11～12万トンと安定している。栽培面積の減少は2008年に厳しい霜害にあったためである。生産地はガラリア湖周辺と北部沿岸地帯である。これら地域では病気が蔓延することがほとんど無く、極端な天候によるリスクが少ないからだ。

大部分のバナナは国内市場で売られている。このため、一人当たり消費量は世界平均よりも多い。イスラエルの年間消費量は15kgだが、EUの場合は1～10kgの範囲内にある。このため、国内市場は有利であり、生産者は輸出を無視する余裕がある。しかし、近年、有機バナナの輸出が魅力的となっている。2008年以降、多くの量のバナナがEUに輸出され、高価格で販売された。このため、一部の生産者は、国内市場から輸出に焦点を移している。

オーストラリア:小売価格が上昇

2016/17年シーズンは39.6万トンが収穫され、生産額は6億ドル(4.03億ユーロ)であった。収穫は年間を通じて可能で、国内市場で販売されている。3月にはハリケーンに襲われ、プランテーションが壊滅するのではないかと恐れられたが、4月の報告によると北部の主な産地は被害を逃れたとのことである。栽培面積1.3万ヘクタールの94%をクイーンズランド州が占めている。小売価格はここ数ヶ月上昇しており、kg当たり3.50～4.50(2.3～3ユーロ)の範囲にある。

米国:有機バナナの供給量が減少

有機バナナの需要は増加しており、メキシコ以外にもエクアドルからも輸入されている。価格が手ごろな水準になったため、消費者はより多くの有機バナナを購入したいと考えている。また、セサミストリートキャラクターによる宣伝活動も行われた。今後数週間はメキシコからの有機バナナの供給量は少ないと見込まれている。

プレミアムバナナの市場も成長している。業者によると、昨年は市場が33%拡大したとのことだ。

輸入業者によると、メキシコがインフラを整備し、大量の果実を米国に輸出する体制を整えたため、メキシコは大変に優位な立場に立ったとのことだ。

著者:Rudolf Mulderi

39. 2015/16年産落葉果樹(リンゴ、生食用ブドウ、ナシ)の世界需給

米国農務省海外農業局ホームページ (2017年6月12日公表)

注)この報告書は2016年12月に公表されたものを最新の情報により修正したものである。

<リンゴ>

2016/17年の**世界**のリンゴ生産量は、前年より72.8万トン増加し、7,720万トンに達すると予測される。これはチリで生産が回復したこと、中国の生産量が引き続き増加していることによる。世界の貿易量は前年から若干減少し、620万トンと予測される。これは東欧及び南アフリカの輸出が減少したためである。

中国の生産量は引き続き増加しており、前年より90万トン増の4,350トンと予測される。これは、陝西省と山東省で気象災害があったものの、結果樹面積が増加したためである。輸出量は前年を22万トン上回る140万トンと予測される。ロシア向け輸出は減少したものの、アジア市場向け、特にインド、インドネシア向け輸出が増加することによる。輸入は需要の減少から7千トン減少し7万トンと予測される。主な輸入先は南半球である。

EUの生産量は前年を30万トン下回る1,230万トンと予測される。これは特に収穫期にEUを襲った悪天候による。輸出量は7.5万トン減少し、150万トンと見込まれる。ブラジル、インド、東欧向け輸出は増加したものの、エジプト、アルジェリア向け輸出が減少したためである。輸入はブラジル及び東欧産が減少し、全体では若干減の43万トンと見込まれる。

米国の生産量は14.7万トン増加し、460万トンと見込まれる。東部諸州では夏の干ばつ及び4月の霜害があったものの、西部、中部諸州で生産が増加したためである。輸出は、メキシコ、インド、台湾向けが好調であったため、7.2万トン増加し、150万トンと予測される。輸入は、生産が増加したことから減少し、18万トンと見込まれる。

アルゼンチンの生産量は引き続き減少しており、前年を7万トン下回る53万トンという記録的低水準に落ち込むと予測される。主産地であるリオ・ネグロとネウケンで雹害と晩霜害に遭遇したこと、栽培面積が、他の収益の高い作物(ワイン用ブドウ等)へ転換したため減少していることによる。被害があった地域には4月に緊急事態宣言が発令され、各種業界から支援が行われた。一方、輸出には影響がなく、前年と同程度の9万トンと見込まれる。主な輸出先はEU及び南米である。

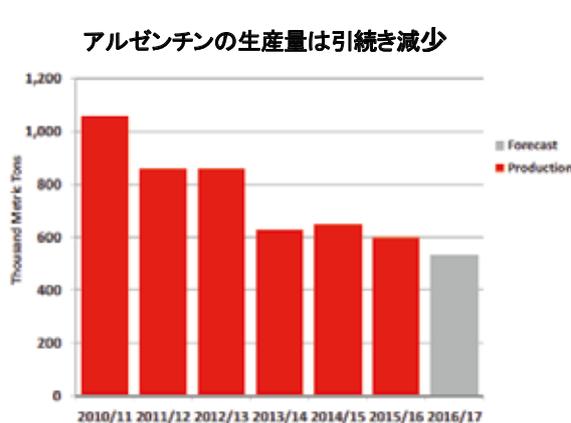
トルコの生産量は、良好な生育環境に恵まれたことから270万トンと安定した量と見込まれる。輸出は、イラク向けが増加したことから10万トン上回る21.5万トンと予測される。

チリの生産量は、生育環境に恵まれ着果が良好であったことから、7.5万トン増の140万トンと予測される。輸出はコロンビア、EU、サウジアラビア向けが拡大するため、3.5万トン増の80万トンと見込まれる。

ロシアの生産量は、生育環境に恵まれ商業生産が増加することから、若干増の130万トンと見込まれる。輸入は、モルドバ、アゼルバイジャン、セルビアから増加するものの、ベラスーシからの輸入が減少するため、7.2万トン減の67万トンと見込まれる。ロシアはEU等からの輸入禁止措置を継続しているが、今でも世界一の輸入国である。

メキシコの生産量は、主要産地のチワワ州で雹害と不安定な気象条件に遭遇したことから、2万トン減少し、73万トンと見込まれる。輸入は米国から増加し、3.2万トン増の25万トンと予測される。

ニュージーランドの生産量は、2.5万トン増加し57.4万トンと見込まれる。これは、栽培面積が引き続き増加していること、生育条件が良いこと、表年に当たることによる。生産量の増加と高品質が見込めることから、



輸出はアジア、EU 向けを中心に増加し、新記録となる38.5万トンに達すると見込まれる。

南アフリカの生産量は、0.9万トン増の93.3万トンと予測される。これは、干ばつで果実品質の低下をきたし、輸出可能な数量を減少させたものの、栽培面積が増加したためである。輸出量はほぼ変わらない51.5万トンと見込まれる。

<生食ブドウ>

世界のブドウ生産量は、前年を110万トン上回る2,200万トンと予測される。これは、中国で引き続き生産が拡大していること、トルコが前年の霜害から回復したことによる。世界の貿易量は、前年を上回り290万トンに達すると予測される。これは大輸出国であるチリ、米国、南アフリカからの輸出量が増加するためである。

中国の生産量は、栽培面積が拡大していることから、60万トン増の1,020万トンと見込まれる。輸出量は、3.3万トン増の26万トンと予測される。これは、生産の増加と低価格により、アジア市場、特にマレーシア、インドネシア向けの輸出が拡大するためである。輸入は1.6万トン増の26.5万トンと見込まれる。これは需要の増加によりチリ、南アフリカ、米国から増加するためである。

トルコの生産量は、前年の霜害から回復し、34.5万トン増の240万トンと予測される。輸出は若干減少し、17万トンと予測される。ベラルーシ、ジョージア、EU 向けは増加するものの、ロシアがトルコに対して輸入禁止措置を講じているためである。

EUの生産量は、6.1万トン減少し170万トンと見込まれる。これはEU全体で栽培面積が減少していること、イタリア、ギリシャで悪天候に遭遇したことによる。輸出はやや減少し8.4万トンとみられる。これは供給量が少なかったこと、ベラルーシ、中東向けの輸出が減少したためである。輸入は2.9万トン増加し64万トンと予測される。輸入先は南半球である。

米国の生産量は、生育条件が悪く生産が減少した前年から回復したため、6万トン増の100万トンと予測される。最新の貿易統計によると、輸出は1.9万トン増加し34.7万トンである。メキシコ向けが増加した。輸入は史上3番目となる6.3万トン増の59.3万トンである。チリ、ペルーからの輸入が増加したためだ。記録的水準の生産量と輸入の増加により、国内消費量は新記録の130万トン程度が見込まれる。

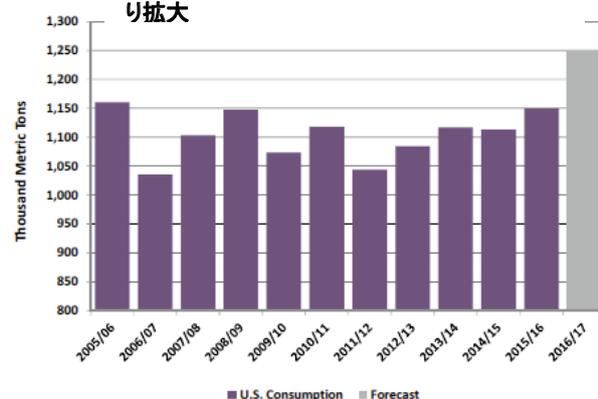
チリの生産量は、天候に恵まれ着果が良好であることから、4.7万トン増の91.5万トンと予測される。今年の販売においては、チリの早期収穫によりペルー産と重複があったが、輸出量は4.2万トン増加し、73万トンと見込まれる。主な輸出先である米国、中国向けが増加した。

ペルーの生産量は、新植園が結果樹齢に達したこと、生産性の高い果樹園が増加したことから、6.5万トン増の60.5万トン見込まれる。輸出量は、引き続き米国、EU 向けの需要が大きいことから、1万トン増の30万トンと予測される。

ロシアの生産量は、若干増の10.3万トンと見込まれる。栽培面積は減少したが、単収が高かったためである。輸入は、4.5万トン減の21万トンと予測される。これは最大の輸入先であったトルコに対して輸入禁止措置を継続しているためである。

アルゼンチンの生産量は、減少を続けており、2万トン減の4万トンとなる見込みだ。霜害と雹害が果樹園を襲ったこと、生産コストが高いことから生産者が収益性の高いレーズン用、ワイン用に転換していることによる。輸出も縮小しており、0.3万トン減の0.8万トンと見込まれる。

米国の国内消費はチリからの早期輸入もあ
り拡大



<ナシ>

世界のナシ生産量は、前年を28.6万トン上回る2,530万トンと予測される。これは、中国の生産が増加し、EU、アルゼンチン、米国の収量減を上回ったためである。世界の貿易量は若干増の180万トンと予測される。

中国の生産量は、新植面積が増加していることから、60万トン増の1,930万トンと見込まれる。輸出はインドネシアなどアジア向けが増加し、7.9万トン増の48万トンと見込まれる。輸入は西洋ナシの需要が減少し、0.2万トン減の0.6万トンと、2013/14年水準に戻った。

EUの生産量は、主要生産国であるイタリア、ベルギー、スペインで低温及び開花期の湿潤な天候により、2万トン減少し230万トンになると見込まれる。輸出はベラルーシ、リビア向けが減少し、1万トン減の30万トン予測される。輸入は主な輸入先であるチリから増加し、1.3万トン増の23.5万トンと見込まれる。

米国の生産量は、結果樹面積が長年にわたり減少していることから、2.5万トン減の70.7万トンと見込まれる。輸出はこれに伴って2.6万トン減少し、13万トンと見込まれる。主要市場であるメキシコ、カナダ向けが減少した。

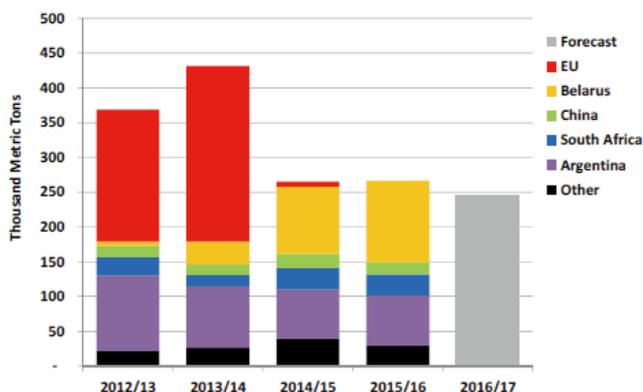
アルゼンチンの生産量は、4年連続減少し、8万トン減の50万トンと予測される。主要産地であるリオ・ネグロ、ネウケンで雹害と霜害があったためである。栽培面積も減少を続けており、生産の放棄、収益性の高い作物へ転換が見られる。被害があった地域には4月に緊急事態宣言が発令され、各種業界から支援が行われた。輸出は生産量の減少により1万トン減の30万トンと予測される。

チリの生産量は、1.3万トン増の28万トンと予測される。早期収穫のため果実は小さかったが、天候に恵まれ着果が良好であったためである。輸出はEU向けが増加し、1.1万トン増の14万トンと見込まれる。

ロシアの生産量は、生育条件が良好であったため、若干増の15.9万トンと見込まれる。輸入は、ベラルーシからの減少、EU等に対する輸入禁止措置のため、2.2万トン減の24.5万トン予測される。とはいえ、ロシアのナシ輸入量は引き続き世界一である。

南アフリカの生産量は、干ばつの被害があったものの栽培面積の増加が相殺し、前年と変わらないと見込まれる。輸出も同様に前年と同程度と見込まれる。

ロシアのナシ輸入量は引き続き少ない



世界のリンゴ需給（単位：千トン）

	2012/13	2013/14	2014/15	2015/16	2016/17 (12月予測)	2016/17 (6月予測)
生産量						
中国	38,500	39,680	40,920	42,600	43,500	43,500
EU	12,207	11,865	13,636	12,659	12,595	12,295
米 国	4,049	4,690	5,067	4,502	4,649	4,649
トルコ	2,900	2,930	2,289	2,740	2,700	2,700
インド	1,915	1,900	1,900	1,900	1,900	1,900
イラン	1,693	1,693	1,693	1,693	1,693	1,693
チリ	1,420	1,310	1,210	1,335	1,360	1,410
ロシア	1,264	1,417	1,409	1,311	1,335	1,335
ウクライナ	1,211	1,211	1,211	1,211	1,211	1,211
ブラジル	1,231	1,377	1,263	1,041	1,045	1,045
その他	5,244	5,437	5,526	5,445	5,585	5,426
合 計	71,635	73,510	76,124	76,437	77,574	77,165
生鮮消費量						
中国	32,317	34,920	37,040	37,527	37,885	37,800
EU	7,929	7,353	7,781	7,499	7,540	7,290
米国	2,293	2,498	2,702	2,520	2,558	2,573
トルコ	2,762	2,639	2,064	2,532	2,466	2,376
インド	2,085	2,064	2,084	2,084	2,085	2,172
ロシア	1,992	2,116	1,803	1,641	1,626	1,574
イラン	1,266	1,487	1,406	1,259	1,303	1,468
その他	8,758	9,289	9,667	10,046	10,338	10,098
合 計	59,401	62,366	64,545	65,108	65,802	65,351
加工量						
中国	5,200	3,850	3,200	4,000	4,400	4,400
EU	3,273	3,562	4,139	3,852	3,820	3,820
米国	1,058	1,562	1,492	1,392	1,406	1,406
チリ	392	295	332	320	357	357
ロシア	570	459	370	335	348	348
アルゼンチン	420	250	300	230	296	230
南アフリカ	246	200	242	192	216	194
その他	754	849	680	635	370	500
合 計	11,912	11,028	10,754	10,955	11,212	11,254
輸入量						
ロシア	1,383	1,254	820	742	720	670
ベラルーシ	159	278	724	657	540	600
EU	563	622	400	450	460	430
インド	197	197	204	205	210	290
メキシコ	266	227	314	218	190	250
イラク	210	190	202	296	240	245
ハンガリー	121	148	151	203	230	230
カナダ	250	222	217	230	225	225
アラブ首長国連邦	223	189	224	212	200	190
香港	109	120	147	160	175	180
その他	2,480	2,540	2,692	2,988	3,010	2,857
合 計	5,960	5,986	6,096	6,361	6,200	6,167
輸出量						
EU	1,568	1,573	1,792	1,590	1,595	1,515
中国	1,026	934	748	1,150	1,300	1,370
米 国	893	843	1,037	778	855	850
チリ	833	820	628	765	750	800
南アフリカ	459	382	466	511	550	515
ニュージーランド	322	308	329	347	365	385
セルビア	40	143	153	233	175	245
イラン	428	206	288	435	390	225
トルコ	41	193	128	109	125	215
アルゼンチン	162	144	106	91	100	90
その他	424	460	866	492	384	346
合 計	6,197	6,006	6,541	6,501	6,589	6,556

米国、メキシコは8月→7月 その他の北半球は7月→6月、
南半球は翌年の1月→12月

世界の生食用ブドウ需給（単位：千トン）

	2012/13	2013/14	2014/15	2015/16	2016/17 (12月予測)	2016/17 (6月予測)
生産量						
中国	7,400	8,085	8,800	9,600	10,200	10,200
インド	2,483	2,585	2,823	2,823	2,823	2,823
トルコ	2,200	2,200	2,350	2,005	2,350	2,350
EU	1,724	1,816	1,638	1,756	1,695	1,695
米国	874	1,013	955	947	1,007	1,007
ブラジル	1,440	1,437	1,492	959	970	970
チリ	1,195	1,055	939	868	910	915
ペルー	398	500	500	540	605	605
南アフリカ	262	252	291	285	280	335
メキシコ	280	260	247	282	280	280
その他	909	857	969	850	823	823
合計	19,164	20,059	21,005	20,916	21,942	22,002
生鮮消費量						
中国	7,436	8,212	8,899	9,622	10,150	10,205
インド	2,335	2,448	2,752	2,667	2,693	2,648
EU	2,134	2,241	2,131	2,279	2,220	2,250
トルコ	1,992	1,997	2,094	1,831	2,126	2,181
米国	1,084	1,117	1,113	1,150	1,187	1,253
ブラジル	1,429	1,443	1,490	956	967	965
韓国	315	320	325	307	316	315
ロシア	444	407	389	346	323	302
ペルー	221	234	190	238	230	301
ウクライナ	364	352	342	273	285	290
その他	1,321	1,253	1,192	1,240	1,308	1,279
合計	19,074	20,022	20,916	20,908	21,804	21,989
輸入量						
EU	560	577	604	611	610	640
米国	567	519	547	530	545	593
中国	159	231	226	249	300	265
香港	144	210	215	232	250	250
ロシア	389	349	302	255	230	210
カナダ	176	182	177	173	175	180
タイ	85	87	89	131	160	150
カザフスタン	80	28	67	100	90	90
メキシコ	59	77	69	67	70	75
ベトナム	45	50	51	76	80	73
その他	330	347	341	318	378	381
合計	2,594	2,657	2,688	2,741	2,888	2,907
輸出量						
チリ	854	728	761	688	730	730
米国	357	416	389	328	365	347
南アフリカ	235	226	264	258	255	305
ペルー	178	267	312	290	370	300
中国	123	104	127	227	350	260
香港	105	164	172	190	190	230
インド	151	142	76	161	135	180
トルコ	209	204	257	175	225	170
メキシコ	168	150	152	164	155	155
オーストラリア	73	80	84	110	100	95
その他	226	196	159	134	132	129
合計	2,678	2,677	2,753	2,724	3,007	2,901

米国とメキシコは5月→4月、その他の北半球諸国は6月→5月
アルゼンチン、チリ、南アフリカは10月→9月
ペルーは1月→12月

世界のナシ需給（単位：千トン）						
	2012/13	2013/14	2014/15	2015/16	2016/17 (12月予測)	2016/17 (6月予測)
生産量						
中国	17,000	17,300	18,000	18,700	19,300	19,300
EU	2,009	2,523	2,566	2,499	2,279	2,279
米国	772	795	754	732	707	707
アルゼンチン	780	690	590	580	590	500
南アフリカ	392	414	411	430	440	430
トルコ	390	415	305	415	420	420
インド	340	340	340	340	340	340
日本	294	294	294	294	294	294
チリ	289	267	290	267	280	280
韓国	173	282	303	261	250	250
その他	517	521	544	541	546	545
合計	22,956	23,842	24,396	25,059	25,446	25,345
生鮮消費量						
中国	15,243	15,506	16,028	16,607	17,110	17,106
EU	1,732	2,009	2,027	2,029	2,017	1,942
米国	395	409	414	402	401	416
トルコ	363	392	282	381	385	394
ロシア	464	528	400	397	381	381
インド	357	356	358	365	370	370
日本	293	293	293	293	293	293
韓国	159	258	273	226	221	217
ブラジル	212	227	194	163	206	181
台湾	149	155	152	153	155	154
その他	1,103	1,016	1,071	1,138	1,155	1,200
合計	20,470	21,149	21,493	22,154	22,694	22,655
加工量						
中国	1,350	1,500	1,650	1,700	1,720	1,720
EU	237	300	294	369	267	267
米国	272	265	255	253	241	241
南アフリカ	141	158	160	132	134	132
アルゼンチン	266	186	153	170	170	115
チリ	62	65	58	56	57	57
ロシア	20	20	9	9	10	10
トルコ	10	10	7	10	10	10
韓国	0	0	6	12	7	7
メキシコ	3	4	4	4	4	4
その他	33	32	2	2	2	2
合計	2,394	2,539	2,599	2,717	2,622	2,564
輸入量						
ロシア	369	431	265	267	245	245
EU	278	255	221	222	275	235
ブラジル	190	208	179	147	190	165
ベラルーシ	19	60	186	151	125	150
インドネシア	136	96	86	92	110	145
米国	79	82	89	79	85	80
ベトナム	63	37	43	73	65	75
その他	547	501	525	561	585	552
合計	1,680	1,670	1,595	1,592	1,680	1,647
輸出量						
中国	409	299	332	401	480	480
アルゼンチン	439	409	333	310	320	300
EU	317	469	417	310	265	300
南アフリカ	202	207	205	250	260	250
チリ	143	117	144	129	140	140
米国	184	203	175	156	150	130
ベラルーシ	11	38	163	122	100	87
その他	52	65	67	73	77	68
合計	1,759	1,807	1,835	1,751	1,792	1,755

北半球は7月→6月、南半球は1月→12月

40. リンゴ品種アンブロージアまもなく特許切れ

Good Fruit Grower 誌 (2017年6月号)



リンゴ品種アンブロージアの20年の特許が今月に期限切れとなる。これにより、人気があり収益性の高いクラブ制のリンゴ品種アンブロージアが米国の全ての生産者に開放されることになる。

特許切れの意味するところは、認可された全ての育苗園が栽培用の穂木を生産することが可能になること、生産者が接木を行えることであり、2019年春には栽培が始まることになるだろう。育苗園は、おそらくこの8月には繁殖を始めるとみられる。また、生産者は既に植栽用の農地の準備を始めている。

この品種は、カナダの家族農園の実生から幸運にも開発されたものだ。そしてブリティッシュコロンビア州(カナダ)サマーランドの Summerland Varieties 社により管理されてきた。

米国においては、2005年以降、ワシントン州ウェナチーの McDougall & Sons 社が同国での独占権を取得した。ただし、それ以前に既に栽培していた生産者は独占権から除外されている。

同社の共同経営者によると、アンブロージアには他の品種と同じように栽培上の癖があるという。甘くて中生のこの品種は、クリーム色の素地に赤色が乗っているのが特色だが、収穫適期が短い。このため、労働力の面から、同社では同じ時期に収穫する品種は植えないよう促している。

同社のリンゴを販売する会社もこのことを認めている。販売会社によると、「ちゃんと収穫時期を固定しないととんでもない目に遭う」と語っている。

新しい生産者は同じ品質のリンゴを出荷できないかも知れない。市場での評価を台無しにする恐れもある。「アンブロージアの箱を開けた時がとても心配だ」と販売会社は語っている。

ワシントン州果樹協会によると、2015/16年の出荷量は120万箱であり、同州で10番目に人気のあるリンゴ品種とされる。

ブリティッシュコロンビア州では、同州の農業省によると、42ポンド箱(19kg)で46万箱が出荷され、同州で2番目に多い品種である。

Summerland Varieties 社も生産者に栽培場所を賢明に選択するよう警告している。「アンブロージアは2色系のリンゴだが、特に暖かい場所だと色が出ない恐れがある。例えばワシントン州の South of Quincy などでは栽培場所に注意が必要だ」とのことだ。

米国以外では、特許保護の期間が異なっている。カナダでは既に2015年に特許が切れたが、欧州では今後数年間の猶予がある。

「アンブロージアは正しい場所で生産されれば本当に良い品種だ。しかし、もし米国の生産者がこれを実行しなければ、大損することになりかねない」との話だ。Summerland Varieties 社は過去20年間多くの教訓を学んできて、中には高価な代償も払ったそうだ。生産者には、苗木を注文する前に同社に質問のためのコンタクトをとるよう薦めている。

4 1. 世界のマンゴー市場

FreshPlaza 電子版 (2017年6月2日)



欧州市場は、この時期アフリカから供給を受けている。コートジボアールは例外であるが、アフリカは今シーズン生産が順調に拡大している。米国は中南米からの輸入が中心だ。生産に関しては様々な事態が生じている。ペルーは輸出時期を早めており、ブラジルの輸出業者を悩ませている。ペルー産は早期出荷のために品質が悪いと不満が出ている。

ブラジル: 干ばつで収穫量が少ないが、栽培面積の増加が補っている。

南米諸国は8月に出荷が始まり、9月～11月がピークとなる。しかし、マンゴー業界ではこの時期に価格が高い欧州へペルー産が出荷されることに不満を持っている。ブラジルのマンゴー生産者によると、あまりに収穫が早いと、ブラジル産の出回る末期に損害を与えると話している。

輸出業者によると、主な出荷品種は、ケイト、ケント、パーマーでトミー・アトキンスも出荷しているとのことだ。欧州市場ではケイトとケイトが好まれるが、パーマーの人気も出つつあるとのことだ。ブラジルでは年間を通じて栽培することが可能だ。

北西部の干ばつの影響で生産量は減少した。しかし、新植園が結果樹齢に達したことで、ある程度生産減を補ったようだ。生産量も推計値は未だ出されていないが、15万トンに達するとみられている。いずれにせよ、干ばつの影響は深刻で、最近ほとんど降雨がなく、灌漑に利用できる水はほとんどない。

ペルー: 出荷の早期化で世界市場に影響か

ペルーの生産者は早期出荷の準備を進めている。これによりペルーの貿易業者は欧州における高値を享受しようとしている。この高値の時期は10月から12月初旬まで続く。数年前までは出荷は1月に始まっていた。その後12月開始を経て、現在では11月に出荷が始まっている。この影響でブラジルの輸出業者は市場から追い出されたが、輸出業者は未熟な果物を販売することで市場を混乱させていると非難している。

英国の輸入業者もペルー産の動きに不満を持っている。出荷が早まったことでブラジル産と競合するからだ。「ペルーは輸出をコントロールできていない。短期間に輸出業者が増え、生産量も増加したからだ」と話している。

メキシコ:北米市場に照準

メキシコではシーズンのピークは夏である。これは貿易業者にとっては好ましいことである。需要のピークが同じ時期だからだ。最も主要な市場は米国とカナダだ。また、量は少ないが世界各地にも輸出されている。

有機マンゴーの市場も拡大している。品種は地域によって異なっているが、トミー・アトキンスとアタフォが一般的である。シーズンはアタフォで始まり、トミー・アトキンス、ケイト、ケントと続く。しかし、米国のスーパーでは品種による好みの違いはなさそうである。

シーズンは2月に始まり9月まで続く。しかし生産量について、昨年との比較は難しい。昨年は4月に少量の有機マンゴーが供給されたが、今年は随分少なかった。しかし、供給可能量は十分にあり、論理的には出荷量は増加するはずだと見ている。

ドミニカ共和国:良いシーズンを期待

カリブ海諸島からは、米国、欧州、英国、カリブ海諸国、カナダに輸出されている。加えて、国内市場にも出回る。シーズンは3月から8月までである。今年は、様々な施策を講じたため、生産量の増加が期待できる。生産者は関係組織から技術的アドバイスを得ており、天候にも恵まれた。

ケニア:中東に焦点

ケニアはごく最近シーズンが終了した。ケニアは、主にアラブ首長国連邦への輸出に力を入れている。同国はアップルマンゴーにとっては良い市場である。しかし、エジプト産とは競合している。輸出業者によると、時にはエジプト産は50%近く値段が安いそうだ。また、エジプトは中東への輸出に当たり距離が近くて有利である。西アフリカ諸国では、ガーナのような国もライバルである。ある輸出業者によると、欧州市場に必要な証明がとれないため、未だに輸出できないとのことだ。欧州で好まれるケイトやケントにもっと照準を当てるべきと思われる。

イスラエル:輸出開始が早まる

イスラエルでは生産増が見込まれる。今年は輸出時期が若干早まり、6月下旬に始まる。また、アラバ砂漠から初めて輸出が行われる。この地域では、伝統的な生産地であるガラリア湖周辺よりも若干早く収穫が始まる。輸出は幾つかの国に向けられているが、フランスが直ぐに食べられるマンゴーの最も重要な市場であるそうだ。この他、英国、オランダ、ドイツ、イタリア、ロシア、カナダ、南アフリカ、中東へも輸出される。輸出量は年間約2万トンである。

輸出シーズンはセネガル、コートジボアール、コスタリカ、ブラジル、ドミニカ共和国と重複する。従って、これらの国が競争相手である。シーズンの終わりにはスペイン産も市場に出回る。

中国:生産増も価格に影響なし

主要な産地は、海南省の三亚、広西チワン族自治区のバイズ、雲南省、四川省のハンシカである。海南省ではシーズンは4月に始まる。現時点では市況は良く、国内市場での売上は昨年より10%多い。また、品質も優れている。また、天候も順調である。生産量は多いが、プレミアム商品の価格は昨年より30%高い。(価格の高い)品種は Guifei とレッドドラゴンである。

国内生産だけでなく、東南アジアからの輸入もあり、最近ではエクアドルからも輸入されている。東南アジアからの輸入品は国産と競合している。というのも、タイ、マレーシア、インドネシア、フィリピン、ベトナムの生産コストは国産よりも安いからである。

インド:輸出に投資

今年、輸出先国が4カ国加わった。インドは、オーストラリア、韓国、中国、イランに対して輸出が許可されている。各国は輸入に当たりそれぞれ独自の検疫プロトコルや要求事項を課しているが、インドでは単一の組織が輸出をコントロールしているため、それぞれの要求基準が満たされている。

スペイン:出荷の長期化を目指す

シーズンは9月に始まるので、生産見通しをするには早すぎる。とはいえ、最初に出された予測では、前年と同程度の生産量であるとのことだ。品種ではオスティーンが市場の75%を占めており、次いでケイトである。トニー・アトキンスとケントの生産量は安定しているが新規植栽はない。出荷期間を延長するため新品種利用を進めようとしているが、道のりは長い。

国内生産に加え、コートジボアール、マリ、セネガル、ブルキナファソから輸入も行われている。市場は安定し、程良いバランスを保っている。過去3年前から5年前にかけ、南欧ではマンゴーの消費が拡大した。欧州諸国ではスライスされたマンゴーやジュースの消費が拡大しているため、スペインの産地であるマラガは欧州市場で確固たる地位を築いている。

ベルギー:各国産が存在

現在、様々な国からのマンゴーが市場に出回っている。最近、コスタリカからケントが到着した。また、マリ産はシーズンは始まったばかりだ。アフリカ諸国はケントから販売が始まり、数週間後にケイトに移行する。輸入業者は、6月末までマリから週次入荷を期待している。隣国のコートジボアール産は相当量が今でも市場に出回っている。西アフリカ諸国では既に収穫が終わっているが、6月末まではコンテナで入荷する見込みだ。カンビアとセネガルはケントでシーズンは始まる。第24週には最初の入荷がある予定だ。週次入荷は8月まで続く。

船便で輸入されるマンゴーに加え、樹で熟したマンゴーが航空機で輸入されている。これはケントの「サイズ10~12」のものだ。ただし、このシーズンの終わりは近づいている。

オランダ:需要の拡大でアフリカ産に期待

コートジボアールでは、先月、軍隊の反撃により、輸出に支障が生じた。この間、出荷は停滞し、アフリカからの輸入は4週間マリに頼ることになった。ケントの入荷は間もなく終わり、直ぐにケイトに置き換わる見込みだ。コートジボアールのマンゴーは、到着時には既に熟していたことから、品質は良くなかった。このため、同国産の取引は消極的となった。しかし、需要は急回復すると見通されている。マリ産が終了すればセネガル産が8月まで入荷するからだ。

イタリア:夏の市場は好調か、不調か？

イタリアのマンゴーは3つに区分される。一つは船舶による輸入品で、直接外食産業やディスカウンターに販売される。次は輸入され追熟されるもので、最後は樹で熟したものを航空便で輸入するものだ。市場に関する評価はこの区分ごとに様々だ。

ボローニャの業者によると、夏はマンゴーにとって理想的ではないという。国産の夏果実がマンゴーを追いやっているからだ。このため、輸入はこの間は制限され、価格もキロ当たり5ユーロである。なお、冬期には価格はキロ当たり10ユーロまで上昇する。同社ではトニー・アトキンスをメキシコから空輸しており、同品種はマリ、コートジボアールからも空輸されている。

しかし、ナポリの熱帯果実専門の卸売業者は反対のことを述べている。5月から9月まではマンゴーの市況は理想的だそうだ。ペルー産が終わった後は、ブラジル産のトニー・アトキンスに切り替わり、価格は1箱当たり10~12ユーロとなる。同社ではケントを南米、コートジボアールから輸入しており、価格は1箱40~50ユーロだという。

米国:メキシコからの輸入が少ない

米国市場の輸入先は、主にブラジル、メキシコ、ペルー、ガテマラ、エクアドル、ニカラグアである。メキシコ産のシーズンは大量の入荷で始まった。その後5週間、入荷が増加してもよいはずだが、実際は増加していない。ということは、メキシコ産の入荷量は通常年よりも少ないということだ、と輸入業者は語っている。輸入業者は、今後数週に渡り、輸入量が少ないことを懸念している。この入荷の遅れは、ヤナリット地方とシロアナ地

方を襲った寒気の影響だ。輸入業者によると、市場拡大の余地は大きいですが、果実の品質をアピールするプロモーション活動が必要だという。

ロシア:赤いマンゴーが好まれる

ロシアは経済状態からするとマンゴー市場は挑戦的な位置づけであるが、マンゴーの輸出を目指す業者もいる。米国の輸出業者によると、ロシアでは赤いマンゴーが好まれるそうだ。少なくとも果皮の65%は赤くなければならないそうだ。ということは、輸出する品種が限定される。例えば、ケントはロシア市場では十分赤くない。経済事情により、マンゴーの需要は減少している。一般に、熱帯果実は高級品と認識されている。

オーストラリア:輸出が拡大

国産の収穫は9月に始まり、3月まで市場に出回る。現時点では量は少ないがメキシコの輸入がある。また、今年、インドからの輸入を解禁した。

輸出に関しては、25カ国に出荷されている。このうち80%は、シンガポール、香港等の東南アジア、中東、ニュージーランドに向けられている。輸出は近年増加している。輸出業者からは米国と韓国が特に注目されている。

マンゴー業界ではいくつかの新品種に対して投資を行っている。過去15カ年で Calypso やハニーゴールドが国内市場で評価を得ている。

著者:Rudolf Mulderij

4 2. 米国の2016年有機農産物販売額は8.4%増

The Packer 電子版 (2017年6月1日)

2016年の米国の有機農産物の販売額は、2015年に比べると増加率はわずかに下回ったが、力強く増加した。有機トレード協会(OTA)の2017年度調査報告によると、2016年の有機果実、野菜の販売額は前年に比べ8.4%増加し、156億ドルに達したようだ。

なお、2016年の調査報告によると、2015年の販売額は、前年を10.5%上回る144億ドルであった。

OTAによると、果実、野菜分野は全有機農産物販売額の40%近くを占め、また、果実、野菜全体の販売額の増加率が3.3%であったのに対して、8.4%の伸びであったとのことだ。

OTAの推定値には生鮮だけでなく加工果実、野菜も含まれているが、生鮮果実、野菜の占める割合は90%程度だと説明している。残り10%は缶詰、冷凍品、乾燥品である。

OTAのために栄養学ビジネスジャーナルが2月、3月に行った調査によると、今や有機果実、野菜は、アメリカ人が口にする生鮮農産物の中で15%くらいを占めているという。

OTAの調査によると、全ての有機農産物の販売額は430億ドルで、前年に比べて33億ドル、8.4%の増加であったようだ。これは食品販売額全体がほぼ前年と同じ0.6%の伸びであったのに比べると大きく上回っている。調査はオンライン販売も対象にしており、有機食品の全食品に占める割合は5.3%であるとしている。

「有機産業は、農家の収入にとっても販売業者の売上にとっても明るい光となり続けている」とOTAのCEOであるBatcha氏はプレスリリースの中で語っている。

一方、Batcha氏はこの分野の成長に当たっては課題があるという。

「拡大する有機農産物需要に対応するためにはより多くの有機農業生産者が必要だ。また、さらに成長するためにはツールが必要だ。つまり、連邦政府、州政府、地域計画の段階で有機農業研究を推進し、農業者が成功を納められるような手法を提供することが必要だ」と語っている。

有機農産物に関するデータの違い

OTAが示した数字は生鮮農産物協会による小売調査の結果とは大きく違う点がある。こちらの数字では有機農産物の小売段階での販売額(加工品や外食販売は含まない)は2016年には44.6億ドルで前年を13.2%上回ったという。さらに、こちらの調査(ニールセンが実施)では、2016年の有機販売額は生鮮農産物全体の9%を占めるのだという。この数字は、先ほどの生鮮農産物市場に占める有機の割合に関するOTAの数字である15%に比べると40%下回る。

また、本紙が2017年に行ったフレッシュトレンド調査によると、1000人の調査対象消費者のうち28%が一般的に何らかの有機農産物を購入すると回答している。

一方、米国農務省のエコノミストによると、2014年の小売データを使った有機農産物の市場シェアは、野菜で7%、果実で6%であったという。とはいえ、このエコノミストによると、有機果実、野菜の輸入の増加、小売段階でのプレミアム価格の設定、米国内における有機農産物の生産増加を考えると、この数字は低く出ているのではないかと話している。

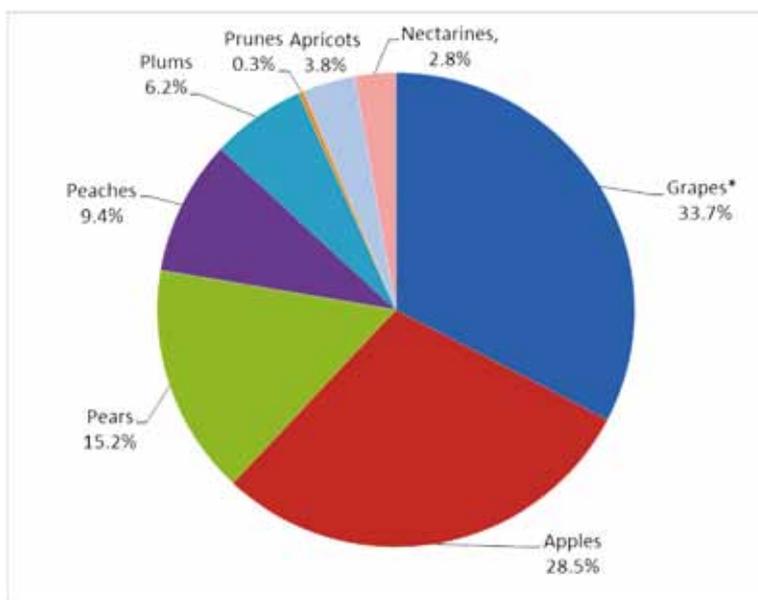
OTAは自らの調査(200の企業と様々なデータソースを利用している)が、最も包括的で正確だと主張している。ニールセンの調査が従来型のスーパーを対象としているのに対し、OTAはこの他に大規模小売店や新業態の大規模店、青果専門店、有機自然食品を扱う全国チェーン、地域の有機自然健康食品店も含んでいるという。加えて、ファーマーズマーケット、オンライン販売も対象としているようだ。

OTAによると、過去数年間の調べの結果、有機農産物の販売の50%は大規模小売店を通じて、40%は自然食品専門店を通じて、10%がファーマーズマーケットやオンラインを通じているという。

4.3. 南アフリカの落葉果樹事情

米国農務省海外農業局 GAIN レポート(2017年5月30日公表)

注)年産はリンゴ、ナシは翌年1月から12月まで、生食ブドウは10月から翌年9月まで



2014/15年の落葉果樹面積割合

リンゴ 生産

2016/17年のリンゴの生産量は933,404トンと前年の924,162トンから約1%増加する見込みだ。これは新植面積が増加し、未成園が結果樹齢に達したためだが、増加が少ないのは干ばつにより果実のサイズが小さかったため相殺されたことによる。品質は干ばつの影響を強く受け、貯蔵性が悪く、一部地域では着色も理想的ではなかった。

リンゴの生産は複数の州で行われているが、西ケープ州は落葉果樹の主産地であり、リンゴに関しては約90%を生産、輸出している。同州は冬に降雨があり、地中海性気候と似ており、リンゴの生産に適している。主産地は同州のセレス(面積で29%)、グロエンランド(27%)、ロングルーフ・イースト(18%)、フィリエルスドープ(15%)である。

一般に、収穫は1月下旬に始まり6月まで続くが、ピークは2月から4月までである。栽培品種は、2008年以降ゴールデンデリシャスが最も多く24%を占めている。次いでグラニースミス18%である。その他、着実に増加している品種は、ガラ16%、ピンクレディー10%、フジ9%である。

栽培面積

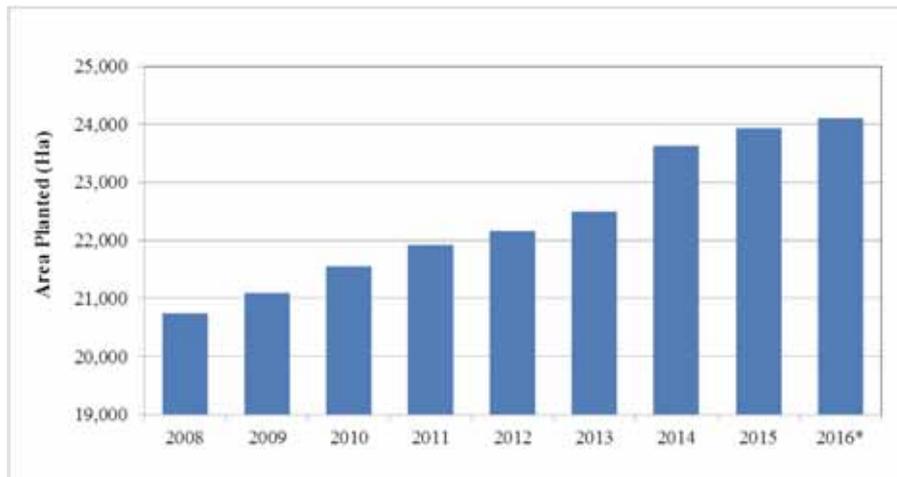
図に示す通り、過去10年間栽培面積は着実に増加している。これは通貨ランド安により貿易収入が増加していること、これによりリンゴへの投資が進んでいることによる。2016/17年の栽培面積は24,100haと予測され、前年の23,625haから1%増加する見込みだ。

国内消費

2016/17年の国内消費量は226,012トンと見込まれ、前年の221,580トンから2%増加するとみられる。これは、生産量の増加と着色不良や貯蔵性が悪いため輸出品質基準に満たないものが出たためである。国内消費の増加は、低い経済成長や高いインフレによる経済環境の悪化から消費が抑制されていることで一

部が相殺されている。

過去数年間、国内市場は増加する中間層のニーズが加工品から生鮮果実へシフトすることで拡大を続けてきた。リンゴは南アフリカでは人気の果実であり、年間を通じて消費される。加えてリンゴは南アフリカ農産物市場委員会による価格変動調査対象品目である。しかし、一人当たり年間消費量は未だに低く約4kgである。これは米国(少なくとも7kg)、欧州(約115kg)に比べると明らかに少ない。



リンゴの栽培面積の推移

輸出

2016/17年の輸出量は513,451トンと前年の510,897トンより1%弱の増加の見込みである。これは生産量が増加したこととフジ、ロイヤルガラ、ゴールドデデリシャスに対する需要が多いためである。一方、増加が少なかったのは、果実サイズが小さかったこと、干ばつの影響で輸出品質基準に満たさないものが多かったためである。

輸出先は英国が引き続き1位であるが、地域としてはアフリカが最も多く39%を占めている。次いで EU(28%)、アジア(21%)、中東(7%)と続いている。

生鮮リンゴ輸出量(2014-16年(暦年))

輸出先	輸出量(トン)		
	2014	2015	2016
合計	381,909	465,695	510,897
英国	65,218	87,828	107,614
マレーシア	43,797	53,651	51,311
ナイジェリア	43,624	55,395	41,121
バングラデシュ	10,276	17,778	25,082
アラブ首長国連邦	16,227	19,360	23,207
ケニア	11,169	15,482	18,166
オランダ	12,170	15,259	16,773
ロシア	4,512	7,832	14,739
ザンビア	12,392	14,555	14,113
ジンバブエ	12,124	13,713	13,946
台湾	5,390	7,128	13,495
セネガル	8,074	11,038	13,342
ボツワナ	8,524	11,381	13,003
シンガポール	12,084	12,745	11,356
ナミビア	10,011	9,813	9,623
ガーナ	6,256	7,358	9,256
アンゴラ	16,853	12,743	8,725
スワジランド	7,399	6,839	6,548

南アフリカのリンゴ統計(在南ア 米国農務省 農務官)

	2014/15年	2015/16年	2016/17年
栽培面積(ha)	23,625	23,932	24,100
収穫面積(ha)	21,638	21,919	22,000
結果樹数(千本)	26,337	26,679	27,200
未結果樹数(千本)	3,287	3,330	3,100
果樹数合計(千本)	29,624	30,009	30,300
販売生産量(トン)	920,406	924,162	933,404
非販売生産量(トン)	0	0	0
生産量計(トン)	920,406	924,224	933,504
輸入量(トン)	4	62	100
総供給量(トン)	920,410	924,224	933,504
国内生鮮仕向量(トン)	213,058	221,580	226,012
輸出量(トン)	465,695	510,897	513,451
加工仕向量(トン)	241,657	191,747	194,041
総出荷量(トン)	920,410	924,224	933,504

ナシ 生産量

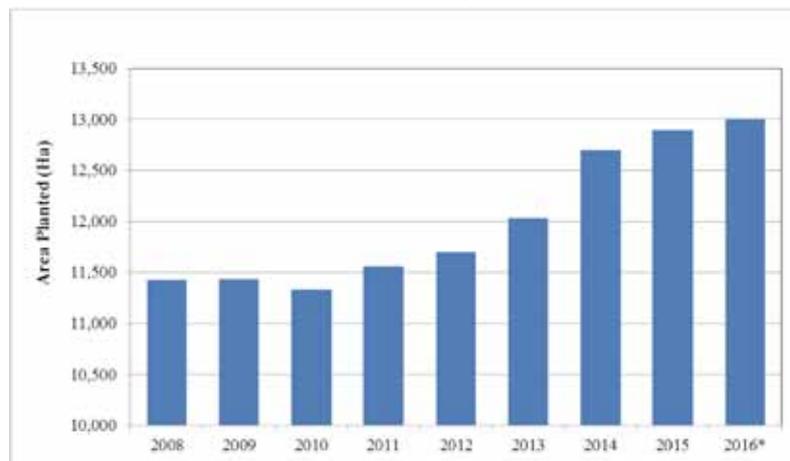
2016/17年のナシ生産量は429,754トンと前年の429,582トンを僅かに上回る程度と見込まれる。これは栽培面積の増加と未成園が結果樹齢に達するためだが、増加が少ないのは干ばつにより果実のサイズが小さかったためである。

ナシはリンゴと同様に気温が高くない地域で栽培されている。このため、西ケープ州が栽培の中心地で、全体の79%を占めている。主な産地はセレスで栽培面積の37%を占め、次いでラングルーフ・イースト(14%)、グロエンランド(12%)、ウォルズレー/タルバ(11%)、クレイン・カレー(9%)、フィリエルスドープ(8%)である。

収穫は、通常12月下旬から1月上旬にかけて行われる。主要な品種はPackham's Triumphで34%を占め、次いでForelle(26%)、William Bon Chretien(20%)、Abate Fetel(6%)である。

栽培面積

2016/17年の栽培面積は13,000haで、前年の12,894haを1%未満だが上回ると見込まれる。図は2010年以降、栽培面積が着実に増加していることを示している。



ナシの栽培面積の推移

国内消費量

2016/17年の国内消費量は47,728トンで、前年の47,255トンから僅かに上回ると見込まれる。これは、生産量の増加によるものであるが、低い経済成長や高いインフレによる経済環境の悪化から消費が抑制されていることで一部が相殺されている。ナシとリンゴは国内市場では代替品目となっている。一人当たり年間消費量未だに低く、1kg未満であり、欧州(約4kg)に比べると少ない。

輸出

2016/17年の輸出量は250,354トンで前年の250,254トンを僅かに上回ると見込まれる。これは、生産量

が僅かに増加することによる。EU が伝統的な輸出市場で49%を占め、次いでアジア(16%)、アフリカ(8%)、中東(5%)と続いている。

生鮮ナシ輸出量(2014-16年(暦年))

輸出先	輸出量(トン)			輸出先	輸出量(トン)		
	2014	2015	2016		2014	2015	2016
合計	207,309	205,199	250,254	ポルトガル	4,409	3,792	5,774
オランダ	55,055	47,283	63,561	シンガポール	4,388	4,308	4,384
アラブ首長国連邦	21,295	22,022	25,170	ベルギー	82	3,254	3,581
ロシア	15,540	14,920	19,550	ナイジェリア	2,379	3,819	3,221
英国	17,541	14,552	13,283	モーリシャス	1,666	1,918	2,157
ドイツ	10,457	13,501	12,887	ボツワナ	1,340	1,793	2,074
フランス	7,634	7,200	9,492	オマーン	1,909	1,588	2,058
マレーシア	8,576	8,565	9,127	スペイン	1,747	1,439	1,932
サウジアラビア	4,448	5,577	8,585	モザンビーク	877	858	1,638
香港	7,614	7,125	8,404	アンゴラ	1,977	1,954	1,526
カナダ	3,822	3,921	8,194	ギリシャ	1,312	849	1,412
インドネシア	4,304	3,570	7,869	バーレーン	863	1,094	1,298
イタリア	8,293	8,708	7,842	アイルランド	1,077	899	1,286
インド	4,555	6,029	7,681	米国	848	1,062	1,195

南アフリカのナシ統計(在南ア 米国農務省 農務官)

	2014/15年	2015/16年	2016/17年
栽培面積(ha)	12,697	12,894	13,000
収穫面積(ha)	11,682	11,863	12,000
結果樹数(千本)	14,838	15,068	15,300
未結果樹数(千本)	1,107	1,124	1,000
果樹数合計(千本)	15,945	16,192	16,300
販売生産量(トン)	410,840	429,582	429,754
非販売生産量(トン)	0	0	0
生産量計(トン)	410,840	429,582	429,754
輸入量(トン)	144	89	100
総供給量(トン)	410,984	429,671	429,854
国内生鮮仕向量(トン)	45,879	47,255	47,728
輸出量(トン)	205,199	250,254	250,354
加工仕向量(トン)	159,906	132,162	131,772
総出荷量(トン)	410,984	429,671	429,854

生食ブドウ

生産

2016/17年の生産量は、335,000トンと前年の284,739 トンを18%上回ると予測される。これは未成園が結果樹齢に達することで成園面積が増加したことによる。また、オレンジリバー、ヘックスリバー地域で栽培面積が拡大したこと、一部のワイン用ぶどう園が生食用に転換したこと、ヘックスリバー地域で新植された新品種の生産性が高かったこと等も理由として上げられる。さらに、収穫期の天候が乾燥し、雨が極端に少なかったことも生産が増加した要因である。

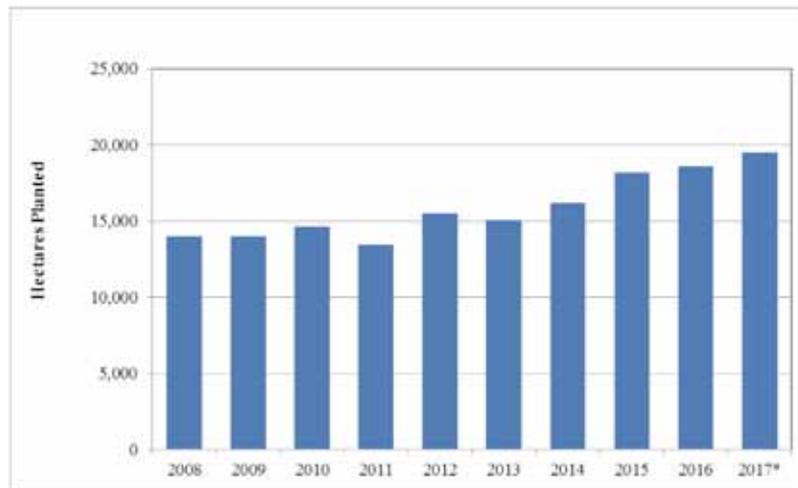
ブドウの主な産地は、西ケープ州のヘックスリバー(33%)、バーグリバー(23%)、北ケープ州のオレンジリバー(29%)、オリファンツリバー(7%)である。収穫期は10月から5月である。第43週(10月)に北ケープ州で収穫が始まり、ヘックスリバーの収穫は最も遅い。

主要な品種はCrimson Seedless で24%、次いでPrime(9%)、Thomson Seedless(8%)、Flame Seedless(7%)、Sugraone(6%)、Redglobe(6%)、Sugrathirteen(5%)である。南アフリカの品種構成は近年変化している。消費者の嗜好から、種のある品種が減少し、種無し(黒及び赤色系)の品種が増加している。種無しで人気がある品種は、果粒が大きく(細長又は卵形)、食感(歯ごたえ)が良く、食味が良いという特色を持つものである。

栽培面積

2016/17年の栽培面積は、19,500ha と前年の18,575ha から5%増加する見込みだ。これは、主にヘックスリバー、オレンジリバーで投資が進み、面積が拡大しているからだ。

図に示すように、栽培面積は2008年以降増加傾向にある。これは、通貨ランド安により輸出利益の拡大していることと相関がある。



生食ブドウの栽培面積の推移

国内消費

2016/17年の国内消費量は、37,000トンと前年の35,739トンと4%上回ると見込まれる。南アフリカでは国内市場への供給及び国内消費は輸出と密接な関係がある。輸出市場で販売できなかったもの、輸出品質基準に満たなかったものが国内市場で販売されるからだ。

輸出

2016/17年の輸出量は、304,000トンと前年の254,969トンと19%上回ると見込まれる。南アフリカの生食ブドウ産業は輸出志向である。可能な限り輸出に向けられ、過剰な分が国内市場に出回ることになる。

輸出先は伝統的に欧州が多く、75%を占めている。他の南半球諸国に比べて輸送距離が短いこと、種無し品種への需要が大きいこと、EUと自由貿易協定を結んでいることが要因である。また、通貨ランドはユーロなど主要輸出国通貨に比べて安く推移していることが利益を生む原因となっている。アジア向け(14%)、中東向け(6%)、アフリカ向け(4%)も成長の可能性を持っており、今後の輸出の核としようと考えている。米国、カナダ向け輸出は近年著しく増加しているが、未だに12,000トンと少なく、4%以下のシェアである。

2016年11月、南アフリカの要請により、中国は偽コドリグ蛾(FCM)に対する冷却処理プロトコルを緩和した。これは従来の-0.6℃を22日とする措置から、+0.8℃を最低20日としたものである。将来、米国に対しても同様の緩和要求をしていくと可能性が高い。

南アフリカシーズン別生食ブドウ輸出量

シーズン(10月-9月)	輸出量(t)	シーズン(10月-9月)	輸出量(t)
2004/05	210,823	2011/12	245,797
2005/06	230,896	2012/13	234,463
2006/07	227,265	2013/14	226,401
2007/08	224,123	2014/15	263,452
2008/09	217,875	2015/16	254,969
2009/10	234,579	2016/17(予測)	304,000
2010/11	202,500		

南アフリカの生食用ブドウ統計(在南ア 米国農務省 農務官)

	2014/15年	2015/16年	2016/17年
栽培面積(ha)	18,212	18,575	19,500
収穫面積(ha)	15,484	16,229	17,200
販売生産量(トン)	291,442	284,739	283,700
非販売生産量(トン)	0	0	0
生産量計(トン)	291,442	284,739	335,000
輸入量(トン)	5,602	5,969	6,000
総供給量(トン)	297,044	290,708	341,000
国内生鮮仕向量(トン)	33,592	35,739	37,000
輸出量(トン)	263,452	254,969	304,000
総出荷量(トン)	297,044	290,708	341,000

4 4. カンキツグリーンニング病に耐性があるマンダリン

FreshPlaza 電子版 (2017 年 5 月 18 日)

カンキツグリーンニング病によりフロリダのカンキツ産業は痛めつけられているが、フロリダ大学の研究者がこの戦いに打ち勝つマンダリンを交配育種した。今、どうすればこの品種が役立つかを研究している。

同大学の研究者は、同僚が開発したマンダリン品種が、他のカンキツに比べてグリーンニング病を撃退する代謝物を含むことを発見した。

これは、毎年何百万ドルもの損害を与えている病気との闘いにとって、希望のニュースである。LB8-9、別名を Sugar Belle®というこの品種がカンキツグリーンニング病に対する耐性を持つマンダリンである証拠は更に深まっている。2016年には、フロリダの育苗施設は、一つを除き他のマンダリンよりも多くの Sugar Belle®の苗木を生産した。これは生産者がこの品種に興味を持っている証拠だ、と同大学の Gmitter 教授は語っている。

ほ場の観察でも Sugar Belle が他のマンダリンに比べてカンキツグリーンニング病に罹病しにくいことが確認されている、と同大学の植物病理専門家の Killiny 助教授は語っている。研究者は、何故 Sugar Belle が耐性を持っているのかを究明している。Killiny 助教授は、Sugar Belle に含まれるどのような化学物質が病気と闘うことができるのかを特定しようとしている。

フロリダ大学のカンキツ研究・教育センターの学者は、Sugar Belle がいくつかの揮発性物質、フェノール系の化合物を多く含むことを発見した。これらの発見は、何故 Sugar Belle がカンキツグリーンニング病に耐性をもつかを研究者に示唆している。

「この結果は耐性メカニズムについて多くの洞察を与えることができる。メカニズムが解明できれば耐性のある経済的品種を作出することができる」と Killiny 助教授は話している。

研究者は温室栽培のマンダリンを対象に、揮発性及び非揮発性の代謝物を試験している。この中で、揮発性代謝物は臭いを発し、非揮発性代謝物は発生しないとのことであった。

代謝物の分析のため、ガスクロマトグラフィー-質量分析法を用いている。Sugar Belle は相対的に耐性があるが、論文では、他の新しく育成されたマンダリンに対しても温室栽培条件下で同様の試験を行えば、耐性品種が発見できるかも知れないとしている。品種の耐性が確認されれば、従来 of 感受性のある品種に置換えることが可能だと論文では述べられている。

フロリダ大学の Grosser 教授と論文の共著者である Gmitter 氏は Sugar Belle を2009年に開発し、世に送り出した。両者によると生産者には人気があるようだ。この品種はクレメンティンとミネオラの交配によるもので、豊かな味と強い芳香を持っているようだ。ピリッとしたパンチのある甘酸あいまった品種だという。

カンキツグリーンニング病がアメリカに侵入して以来、何百万本の樹木を枯らし、多くの生産地で急速に生産量が低下した。ほ場試験では Sugar Belle のような交配品種が耐性を示すことを研究では示している。

45. オーストラリアのリンゴ新品種 Bravo が世界へ

FreshPlaza 電子版 (2017年5月26日)



オーストラリアの最新の商標登録品種 Bravo™の国際的な試験販売が始まった。オーストラリア国内で生産が増加し、広く提供できるようになったからだ。

品種名 ANABP 01 は西オーストラリア州農業食品局により育成され、20年を経過した。同局の同じ品種プロクラムではピンクレディー (Pink Lady®) が世界に羽ばたいている。オーストラリアでは商業生産が2014年から始まり、Bravo は昨年初めて小売市場にお目見えした。最近、2017年の販売がオーストラリア国内で始まり、間もなく世界にも供給される。

「現時点では試験輸出をシンガポール、香港に焦点を当てて検討している」と Fruit West Co-

operative 社の執行役 Stacy は語っている。「しかし、これは始まりに過ぎず、Bravo は世界で楽しめるオーストラリアのリンゴだ。また、他の登録商標品種に見られないような、大胆で異なったプレミアム品種である」とも話している。

今年の生産量はオーストラリアで50トンと予測されており、主に国内市場で販売される。

「小売業者は、消費者はこれまで以上に多くの店で入手することができるよう、Bravo の仕入れを行っている。ビクトリア、ニュー・サウス・ウェールズ、南オーストラリア、クイーンズランドの各州では、消費者がこの新しいリンゴを味わうことができるだろう」と執行役は話している。

この新しいリンゴ品種のお蔭で、同国のリンゴ産業は大きな成長の可能性を持った。Fruit West Co-operative 社は、この品種はオーストラリアの生育条件に合うよう育種され、消費者からの関心が高いことから、生産者から絶大な興味が寄せられているのは不思議ではない、と述べている。

「生産は拡大を続けている。現在20万本植栽されているが、今年は更に10万本植栽される。国際市場への輸出を想定して生産を行っているが、海外からの需要がオーストラリアの需要に反映することを願っている。というのも、現時点ではこのユニークで特別な新品種はオーストラリアの生産者が独占的に栽培しているからである」と執行役は語っている。

この品種はロイヤルガラとクリプスレッドを交配したもので、甘味がハッキリしており、中～高程度のパリパリ感を持っている。果実の大きさは中～大程度で、濃くて深い赤ワイン色の果皮を持ち、黄金色の輝き・斑点を持っている。この斑点はクリーム色の羊皮紙にも例えられ、果皮の色と対象的である。また、果実をカットした際の褐変の出方が遅いのも特徴である。

味について有名シェフは、「乾いた大地に降る雨のにおいのような新鮮な香り、赤ワインに似た味を持つ」と記述している。

執行役によると、「甘味と酸味のバランスが絶妙で、美しく甘くジューシーだ。食べ終ると愛らしい味が残り、噛むたびに申し分ないパリパリ感がある」そうだ。

Fruit West Co-operative 社は、この品種の管理に関する権利を所有しており、WA Farm Direct は同社の代わりに販売に関する担当者として指名されている。両者は今月初めの販売開始以降、小売店からもたらされた噂を歓迎している。このリンゴは、優れた味、独特な果皮がもたらす他のリンゴとの違い等、優れた品質で独自の市場を形成するだろうという噂のことだ。

「これはオーストラリアのリンゴ産業にとって、新たなブランドの始まりとなるかも知れない。このリンゴ及びリンゴが持つ驚くべき力を世界に広めたい」と執行役は締めくくった。

著者: Matthew Russell 参照: www.fruitwest.com.au

4 6．タイ農業者会議が中国への生鮮パイナップル輸出を要請

FreshPlaza 電子版 (2017 年 5 月 26 日)

タイ農業者会議(National Farmers Council (NFC))の公表によると、同会議は5月24日、政府に対して生鮮パイナップルを中国に輸出する方法を模索するよう要請したそうだ。

NFC の議長 Praphat 氏は、商務省に対し、タイの生鮮パイナップルに関して中国市場で拡大を図るよう提案した。これは、特に「スーパー・スイート」として知られる品種 MD2 を対象としている。この品種は比較的長期間鮮度を保つことができる。

Praphat 氏の話では、中国市場は MD2 の仕入れについて興味を持っており、生鮮果実として消費することを望んでいるという。

タイは毎年およそ190万トンのパイナップルを生産しているが、大部分は缶詰として輸出され、生鮮果実として供給される量は少ない。

パイナップル生産者としては、缶詰生産者から前もってどの程度の供給量が必要であるかを知らされないため、供給過剰になってロスが生じる可能性があることを憂慮しているとのことだ。



情報源:news.xinhuanet.com

4 7. 世界のパイナップル市場

FreshPlaza 電子版 (2017年5月19日)



コスタリカの天候不順に世界のパイナップル市場は釘付けとなっている。様々込み入った状況は他にありにせよ、現在の世界市場の情勢はコスタリカが握っている。コスタリカの状況は今後数週間で改善されないと見込まれる。米国では、このためもあり市場が逼迫している。オランダでは輸入量が過剰の状況である。ベルギーでは市場の低迷が終わるのか疑問を持っている。中南米各国はパイナップルの生産に投資を行っており、生産者は儲けが多い市場に期待を寄せている。アジアではパイナップルの人気が高まっている。中国は近隣諸国から輸入をしている。協定が締結されているにもかかわらず、中南米からの輸入は未だない。

コスタリカからの供給が不足

2016年から2017年の初頭にかけて天候不順と降雨でパイナップルの供給量が落ち込んでいる。輸出量は7月、8月とも通常年より減少する見込みだ。この結果、同時期の世界の市場価格に影響を及ぼすと見られる。

年初は加工業界も含めて需要が多く順調であった。この結果輸出に回る量が少なかった。しかし、6～8週間後には供給は回復しなければならならず、6月には回復が期待された。しかし、輸出業者によると、「回復は秋までは見込めない」そうだ。

メキシコは新規市場を開拓

輸出業者は、米国大統領が交代したことで、米国市場を失うことになるのではと恐れている。アボカドに課せられた規制があるからだ。しかし、米国内では、他にパイナップルを輸入できる国がないことからメキシコからの輸入は安定的であると見ている。ベラクルスの港には米国による保護主義の兆候はない。港湾当局によると、2月には米国向け輸出は10%多かったそうだ。いずれにせよ、メキシコとしては何が起るかを待っているわけにいかず、新規市場として、南米、アジア、欧州に狙いを付けている。

パイナップルの生産量は、2005年の701,740トンから2015年には840,486トンと急速に拡大した。66%のシェアを持つベラクルスは最も重要な産地である。次いでシェアが多いのはオアサナの13%である。

2015年の全栽培面積は18,865ha で平均収量は ha 当たり44.55トンである。

パナマは栽培に課題

パインアップルはバナナに次ぐ輸出品目である。2016年4月の政府統計によると、生産額は7,700万ドルで6万人の雇用を生んでいる。今年は輸出が回復の兆しを見せており、1月には110万ドル相当が出荷され、昨年よりも多い額であった。欧州が最大の市場であり、70%を占めている。米国も主要な輸出先であり、少量がカリブ海諸国に輸出されている。

とはいえ、近年栽培環境は悪化しており、面積も減少している。主な原因は生産コスト、労働コストが高いことである。

コロンビアは供給を抑えて利益を獲得

業者によると、最近コロンビアで発生した豪雨による影響はなかったようだ。豪雨に襲われた地方はパインアップルの産地ではなく、産地は天候の影響を最小限に抑えるため、排水と灌漑の施設を整備しているようだ。業者は、コロンビアはコスタリカの最大の競争相手になると見ている。というのも、通常、コスタリカほど豪雨に見舞われないからだ。

また、競争というよりも品質の差別化に強みを感じているようだ。コロンビアでは国内市場に加え、欧州、米国が有力な市場である。ある輸出業者によると、欧州が最も重要な市場であり、スペイン、ポルトガル、イタリア、ドイツは新規市場だという。輸出業者は供給量を絞ることで高価格を享受している。

ドミニカ共和国は主に国内市場向け

大部分のパインアップルは国内市場向けである。ドミニカ市場で1年半熱心に活動している業者によると、品種MD2に焦点を当てているという。面積は37ha であるが、毎年倍増している。同社はコスタリカ人により指導され、技術を供与させているようだ。業者によれば、最終的には欧州そしてロシアに輸出したいそうである。ドミニカ共和国は日照が多く、雨も少なく、人件費が安いという長所を強調している。

キューバは輸出機会を狙う

2009年に品種MD2がキューバに導入されたが、成功であった。過去5年間で3,000トンが輸出された。来年は、1,200トンを欧州に輸出する予定だ。ha 当たり88トンの収量があることからすれば、可能な数字と思われる。生産者は、2022年までにMD2の栽培を2,000ha まで拡充したいとのことだ。

ペルーではコカインの代替作物

パインアップルの輸出についてはあまり知られていない。Agrodata Peru のデータによると、2016年は少量がスペイン、ドイツ、チリに輸出された。前年の輸出量はゼロであった。Apurímac Valley、Ene、Mantaro ではパインアップルの栽培はコカインの代替となっている。業者によると、「パインアップルは生産性も収益性も良く、コカインの代替作物として最高だ」とのことである。ペルーとしては販売先を模索中であり、より多くのコカイン栽培者がパインアップルに転換することを願っている。

米国は供給量が少なく需要はピーク

コスタリカからの入荷が遅れているため、市場にはパインアップルが少ない。(コスタリカの)降雨のため、東海岸への供給量が少なく、消費者もそれを感じているようだ。加えて、供給量の減少と需要のピークが一致している。需要のピークは通常5月から8月である。業者によるとこの4ヶ月の販売量は、他の月よりも多いという。果実の品質が良いことは、販売業者にとってはもう一つの有利な点だ。このような状況は、少なくとも来月までは続くと思われる。

世界市場と隔絶しているオーストラリア

オーストラリアでは国内需要は国内生産で満たされているため、実質的に世界市場とは隔絶している。生

産コストが高いために輸出価格が高すぎるのだ。有利な点は、コスタリカの降雨など世界市場の動向が国内市場に影響を与えない点だ。生産者によると、今年の冬は通常よりもパインアップルの供給量が多いそうだ。生育条件が良かったため、収量が多かったためである。生産物は6週間で市場に出回る。とはいえ、業者によると気温が下がれば需要は減少するそうだ。

コスタリカとマレーシアが中国市場に接近

中国の卸売市場の数字を見ると、今年はパインアップルの販売が増加している。これまで海南が主要な産地であったが、中国北部、西部で前例のないような人気の上昇により、他の省でも生産が拡大している。南部広東省、広西チワン族自治区、雲南省等である。また、最近パッケージのコストが低下しつつあることから、以前のようにバラ売りではなくパッケージされて販売される量が増えた。このことが、更に人気を高めている。台湾は中国への供給が多く、ダイヤモンドパインアップルとして知られている。去年は気象条件が厳しかったため、生産量が10%減少した。中国ではこの他、タイ、フィリピンから輸入している。

コスタリカとマレーシアは中国市場でシェアを獲得するための活動を進めている。2月には中国の代表団がコスタリカの農園を視察した。この訪問は、2015年の協定を実現する最後の障壁を取り除くためのものと見られる。マレーシアにとっては、輸出手続きの最後の段階にあるといえる。貿易協定は2013年に調印されたが、条約はまだ批准はされていない。

フィリピンは中東と中国で需要が旺盛

フィリピンは、コスタリカ、オランダ、ベルギーに次ぐ世界で第4位のパインアップル輸出国である。2015年には輸出額は1,540万ドルに達し、前年を6%上回った。主な輸出先は、日本、韓国、中国、アラブ首長国連邦、サウジアラビアである。生産者によると、中国と中東からの需要が好調とのことだ。フィリピンと中国は、政治情勢がバナナの輸出に影響を及ぼすことがあるが、パインアップルに関しては限定的だそうだ。業者によると、中南米からの(中国への)船による輸送時間の長さも関係しているようだ。いずれにせよ、フィリピンの内乱により海外からの栽培への投資が減少している。

ベルギー:市場は回復か

価格は約10ユーロに下がった。現在はコスタリカ、コートジボアール、ガーナから入荷している。市場の状況は、「困難」と評価される。「価格が高かった時期の後、再び価格低下が起った。2週間前に比べると入荷量は少ないが、価格が高かったため需要が鈍っている。この状況は改善されなければならない」と業者は語る。これは(ピーク時に)箱当たり20ユーロをつけたせいである。この業者によると、現在は最悪の状況であり、今後数週間で市場は回復すると見ているそうだ。

オランダ:供給量が多すぎ需要は少なすぎる

オランダの輸入市場では、パインアップルは大変悲惨な状況である。供給量が多すぎて、他の欧州産果実との競合が激しい。加えて、コスタリカの加工業者からの需要もほとんどないことで価格が低迷している。米国市場もまた難しい状況である。輸入業者はこの状況が少なくとも6月末まで続くとしている。

イスラエルでは高価格

価格は依然として高い。事実、イスラエルはパインアップルの価格が高い国の一つである。これは国内での生産が難しいことと、輸入国からの距離が遠いためである。市場出回り量の大部分は国産品であり、生産量は約3,000トンだ。輸入は500トンに過ぎない。灌漑水の価格が高いことが生産費を押し上げている。需要が多いことも価格高騰の原因だ。現在の価格はキロ当たり8ユーロだが、ピーク時には9~10ユーロに達する。

著者:Rudolf Mulderij

48. チリの落葉果樹事情

米国農務省海外農業局 GAIN レポート(2017年5月19日公表)

リンゴ 生産

2015/16年産の気象状況は冬期の低温、不規則な開花、4月中旬のフジの収穫期における降雨が特徴であった。落葉果樹の生産に不向きとされるものは、低温、相対湿度の低さ、予期せぬ高い生産量である。

このシーズンの主要な問題は、Botrytis、Neofabraea などのカビの発生であった。両方とも、収穫3ヶ月後に貯蔵庫の中で発生する。フジの場合、中国や米国では防カビ剤の利用の制約はきつくない。しかし、EUでは防カビ剤の使用基準が厳しく、ピンクレディーのようにカビが多く発生した品種にとっては問題であった。

2016/17年は開花と収穫が例年より10日早かった。収穫は高温にさらされるのを避け、果実の固さを維持するために2～3週間の期間で終わった。また、果実の品質が多様であったため、収穫、貯蔵の過程が通常年より複雑であった。ただ、晩生品種のデリシャスやピンクレディーは、収穫期の2～3月が低温であったため、早生品種ほど高温にさらされなかった。一方、ピンクレディーにとって問題であったのは着色の不良である。着色を待って収穫した場合は果実の固さが問題となるからだ。とはいえ、2016/17年は相対的に天候に恵まれたため、生産量は前年を6.4%上回る141万トンと見込まれる。

消費

2016/17年の国内消費量は、生産の増加と人口増のため25.5万トンと推測される。2016年のチリの人口は18,191,884人で2010年から2015年までの平均人口増加率は0.97%であった。

貿易

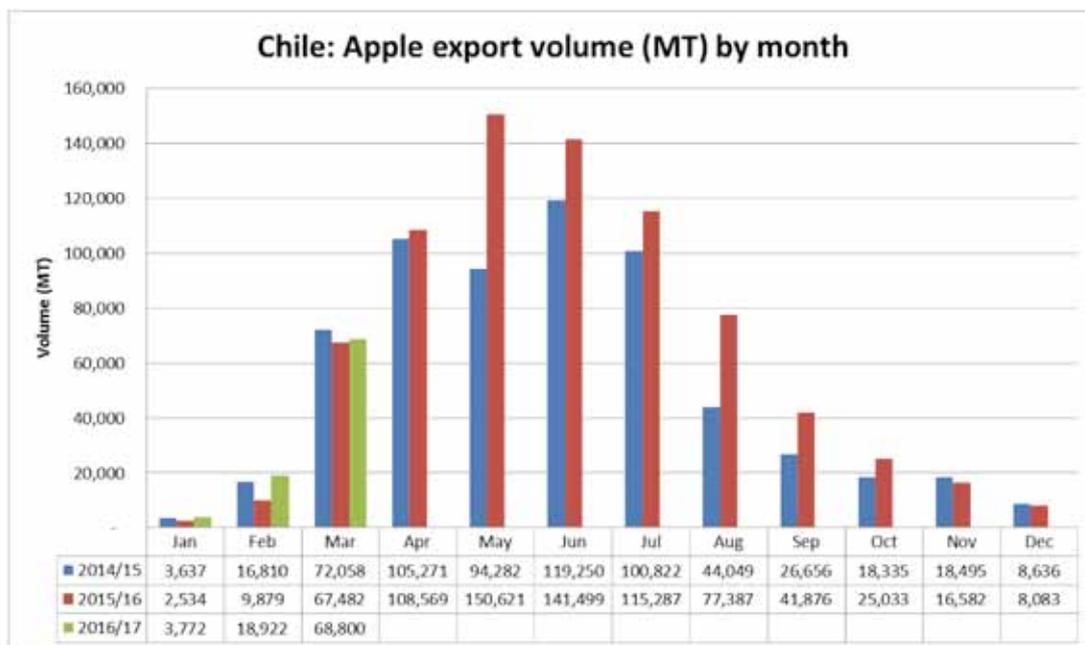
チリのリンゴは世界中に輸出される。しかし、最も大きな市場は米国であり、2015/16年のシェアは13.73%である。ブラジルが2位で11.28%、次いでコロンビアの9.99%である。2016/17年の生産状況に見るように、貯蔵可能期間が短いため、3月から5月にかけて大量の輸出が行われる見込みだ。2016/17年の輸出量は前年を4.7%上回り、80万トンに達すると見込まれる。2017年に入って、1月から3月までの輸出量は既に前年を上回っている。

チリのリンゴ国別輸出量

	量(トン)		シェア(%)		2016/2015 変化率(%)
	2014/15	2015/16	2014/15	2015/16	
世界合計	628301	764833	100.00	100.00	21.73
米国	78,290	105,039	12.46	13.73	34.17
ブラジル	35820	86261	5.70	11.28	140.82
コロンビア	75593	76392	12.03	9.99	1.06
台湾	39332	49899	6.26	6.52	26.86
ペルー	43,715	47,894	6.96	6.26	9.56
サウジアラビア	39981	47075	6.36	6.15	17.74
オランダ	42943	46164	6.83	6.04	7.50
エクアドル	41348	37898	6.58	4.96	-8.43
インド	19997	32189	3.18	4.21	60.97
英国	25373	27150	4.04	3.55	7.00
その他	185909	208872	29.59	27.31	111.35

注)年産は翌年1月から12月まで

月別リンゴ輸出量



チリのリンゴ統計(在チリ 米国農務省 農務官)

	2014/15年	2015/16年	2016/17年
栽培面積(ha)	37,200	36,059	36,000
収穫面積(ha)	33,900	33,600	33,500
結果樹数(千本)	39,900	38,900	38,000
未結果樹数(千本)	2,900	2,800	2,500
果樹数合計(千本)	42,800	41,700	40,500
販売生産量(千トン)	1,200,000	1,325,000	1,400,000
非販売生産量(トン)	10,000	10,000	10,000
生産量計(トン)	1,210,000	1,335,000	1,410,000
輸入量(トン)	2,100	1,809	1,500
総供給量(トン)	1,212,100	1,336,809	1,411,500
国内生鮮仕向量(トン)	252,032	251,926	255,000
輸出量(トン)	628,300	764,883	800,000
加工仕向量(トン)	331,768	320,000	356,500
総出荷量(トン)	1,212,100	1,336,809	1,411,500

注)年産は翌年1月から12月まで

生食ブドウ

生産

2016/17年のチリの生食ブドウの収穫は例年より10日早かった。これは春に気温が高く、生育を早めたためである。この結果、米国市場向けの出荷は12月に多く、ペルー産と競合した。生産者によるとクリムゾンシードレスなどの赤色系ブドウは着色が悪く、着色を待ったため収穫は遅れたそうである。

消費

2016/17年の国内消費量は18.4万トンと見込まれ、前年を2%上回るようだ。国内消費量は安定している。

貿易

2015/16年の生食ブドウ輸出量は、前年を9.63%下回る687,559トンであった。主な輸出先は引き続き米国であり、45.70%のシェアを占めている。中国への輸出は増加しており、2015/16年のシェアは17.4

9%であった。

アタカマ地方では最も早く収穫が行われ、栽培面積の16%を占めている(7,593ha)。生産者の話では2016/17年シーズンの12月から1月にかけては、米国市場での価格が安く、生産コストを賄えなかったとのことである。このため、同地域では生食ブドウ産業のあり方について再考を行っているとのことである。専門家によれば、収益を上げるためには生産性の向上、果実サイズの充実(市場では小さいサイズの果実の需要はないため)が必要であるとのことで、生産性の低い果樹園の根絶、近代的品種への改植などのドラスティックな改革が必要とのことである。

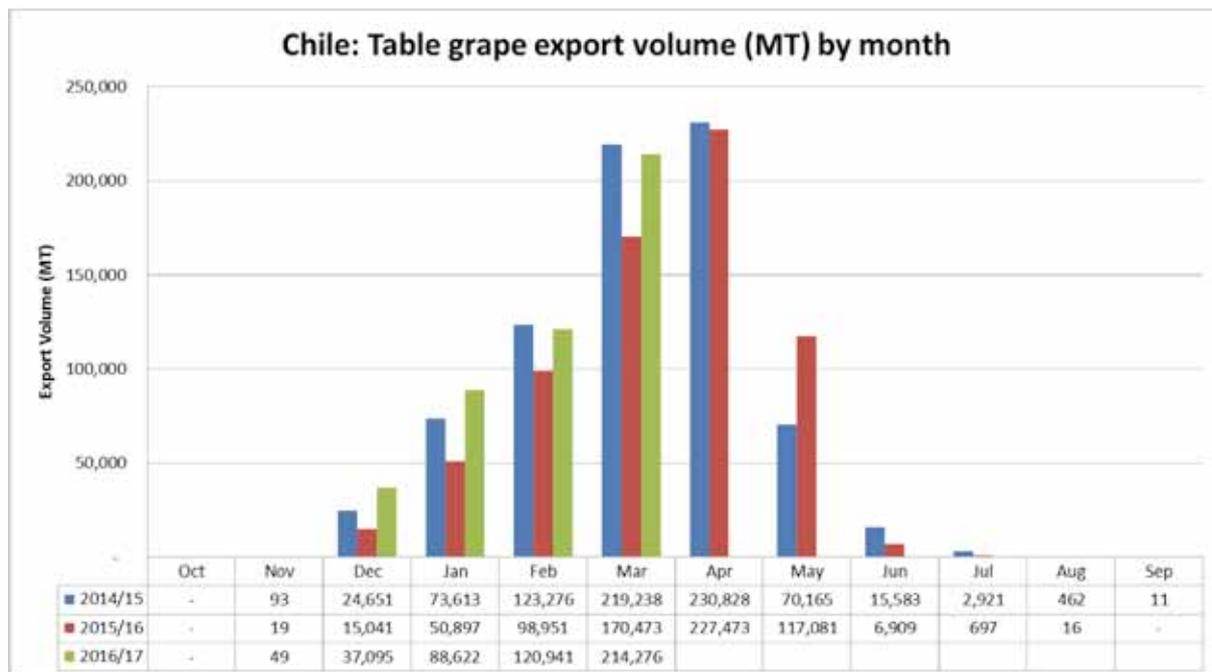
収穫期が1～2月に当たるチリ中央部の生産者は、米国市場で低価格に遭遇することはなかった。これは、2月にはペルー産の流通量が少ないこと、米国国内でのチリ産への需要が増加したためである。これらの地域の属するのは、バルパライソ州、首都圏州、オイギンズ州であり、チリの栽培面積の65%を占めている。

2016/17年は12月と1月の輸出量は、収穫が早まったため異常に多かった。2017年3月の輸出量も前年を上回った。2016/17年の輸出量はトータルで前年を6.3%上回る73万トン見込まれる。

チリの生食ブドウ国別輸出量

	量(トン)		シェア(%)		2016/2015 変化率(%)
	2014/15	2015/16	2014/15	2015/16	
世界合計	760841	687559	100.00	100.00	-9.63
米国	355,846	314,221	46.77	45.70	-11.70
中国	90201	120259	11.86	17.49	33.32
オランダ	61163	43806	8.04	6.37	-28.38
韓国	50,630	33,857	6.65	4.92	-33.13
英国	37136	30466	4.88	4.43	-17.96
ブラジル	24583	18446	3.23	2.68	-24.97
カナダ	14169	13132	1.86	1.91	-7.32
メキシコ	17236	12986	2.27	1.89	-24.66
ロシア	16456	11937	2.16	1.74	-27.46
日本	10778	9255	1.42	1.35	-14.13
その他	82643	79194	10.86	11.52	-4.17

月別生食ブドウ輸出量



チリの生食ブドウ統計(在チリ 米国農務省 農務官)

	2014/15年	2015/16年	2016/17年
栽培面積(ha)	52,200	48,378	48,000
収穫面積(ha)	49,600	47,200	46,100
販売生産量(トン)	935,700	847,800	906,000
非販売生産量(トン)	3,500	20,000	3,700
生産量計(トン)	939,200	867,800	913,700
輸入量(トン)	272	341	300
総供給量(トン)	939,472	868,141	914,000
国内生鮮仕向量(トン)	178,631	180,542	184,000
輸出量(トン)	760,841	687,599	730,000
総出荷量(トン)	939,472	868,141	914,000

注)年産は10月から翌年9月まで

ナシ 生産

2016/17年はナシの収穫も10日早かった。品種 Packham's の収穫は1月10日に始まったが、生産者は誰もこのような早い時期を予想していなかった。果実は急速に柔らかくなり、その後安定するので、収穫作業は急いで迅速に行う必要がある。冷蔵貯蔵容量が少ないこともあり、収穫量は例年と同程度であるが、果実のサイズは小さい。品種 Forelle は全てのナシ生産地で栽培されているが、品種 Abate Fetel に置き換わりつつある。ナシの栽培面積は安定しているが増加の傾向もない。というのも、生産者は収益性の高いサクランボやクルミの生産に移行しつつあるからだ。

消費

ナシに関する公式な統計はない。従って輸出や加工仕向量等の数値から数字を推定している。国内消費に回るものは、輸出できなかつた分である。2016/17年の国内消費量は8.7万トンと推計される。

貿易

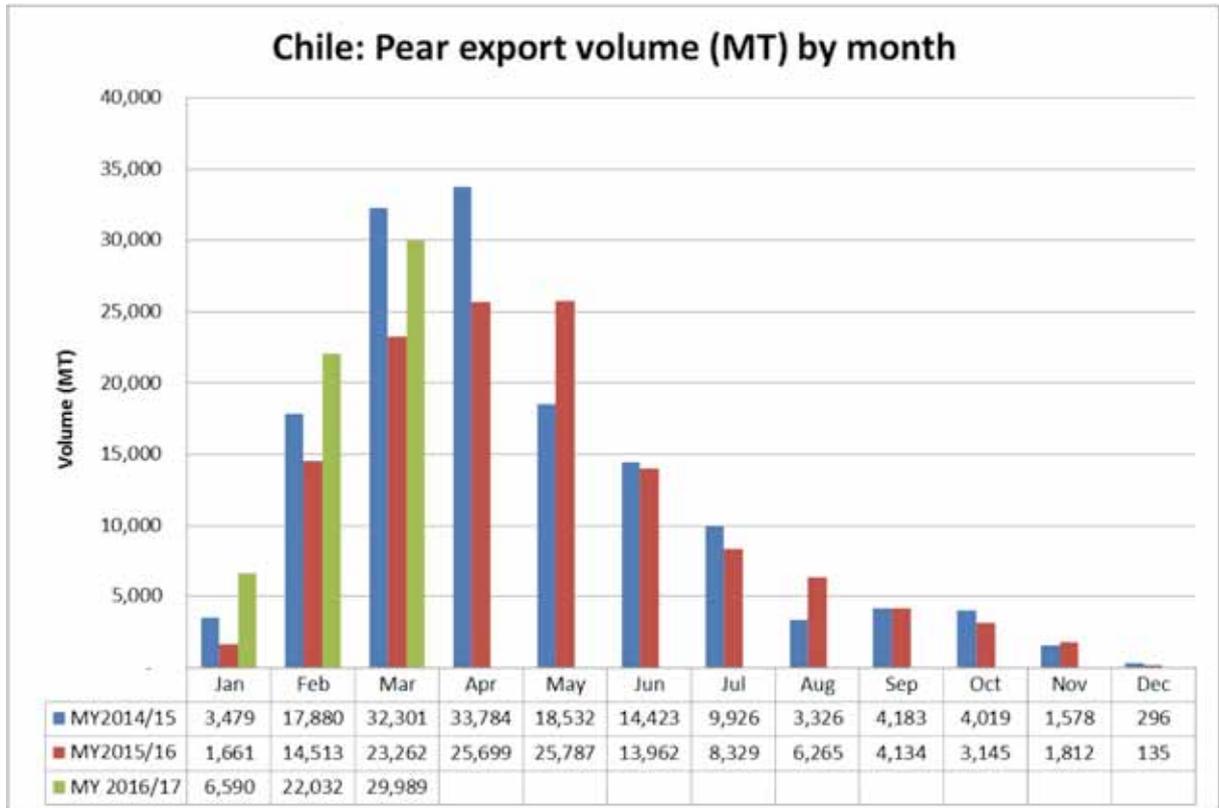
2015/16年の輸出量は前年を10.45%下回ったが、2016/17年は回復すると見込まれる。2017年1～3月の輸出量は前年を上回っている。2016/17年の輸出量は14万トンと予測される。

ナシの輸出は大部分が品種 Packham's である。主な輸出市場はオランダでシェアは16.37%である。次いでコロンビア16.22%、米国10.80%の順だ。品種 Beurre Bosc はチリでも栽培されているが、大きなサイズの需要しかない米国、メキシコだけに輸出されている。品種 Abate Fetel は欧州市場だけに輸出されているが、収益面では未だに良い良い結果は出していない。

チリのナシ国別輸出量

	量(トン)		シェア(%)		2016/2015 変化率(%)
	2014/15	2015/16	2014/15	2015/16	
世界合計	143726	128703	100.00	100.00	-10.45
オランダ	26,676	21,065	18.56	16.37	-21.03
コロンビア	22214	20875	15.46	16.22	-6.03
米国	19025	13896	13.24	10.80	-26.96
イタリア	16,725	13,814	11.64	10.73	-17.41
ペルー	11311	13303	7.87	10.34	17.61
エクアドル	9580	8981	6.67	6.98	-6.25
ロシア	6763	6400	4.71	4.97	-5.37
ドイツ	3819	4032	2.66	3.13	5.56
ブラジル	4258	3047	2.96	2.37	-28.44
サウジアラビア	3156	3027	2.20	2.35	-4.08
その他	20199	20263	14.05	15.74	0.32

月別ナシの輸出量



チリのナシ統計(在チリ 米国農務省 農務官)

	2014/15年	2015/16年	2016/17年
栽培面積(ha)	7,300	8,646	8,900
収穫面積(ha)	6,000	7,200	7,500
結果樹数(千本)	6,500	7,600	7,800
未結果樹数(千本)	1,200	1,400	1,500
果樹数合計(千本)	7,700	9,000	9,300
販売生産量(千トン)	288,000	265,000	278,000
非販売生産量(トン)	2,000	2,000	2,000
生産量計(トン)	290,000	267,000	280,000
輸入量(トン)	600	700	600
総供給量(トン)	290,600	267,700	280,600
国内生鮮仕向量(トン)	88,500	83,297	84,000
輸出量(トン)	143,700	128,703	140,000
加工仕向量(トン)	58,400	55,700	56,600
総出荷量(トン)	290,600	267,700	280,600

注)年産は翌年1月から12月まで

49. ニュージーランドの落葉果樹(リンゴ・ナシ)事情

米国農務省海外農業局 GAIN レポート(2017年5月18日公表)

注) 例えば、「2016/17年産」は2017年1月から12月末までを表す。

栽培面積・収穫面積

リンゴ

当職(在ニュージーランド米国農務官)の予測では、2016/17年のリンゴ栽培面積は9,600ha で、前年を4.3%上回る。この予測は Pipfruit New Zealand(生産者等による会社組織)の予測によるものである。リンゴ産業は引き続き拡大を続けている。栽培面積は2020年までに毎年3~4%増加(年間300~400ha)すると見込まれる。加えて、過去5~6年の傾向である着色系のロイヤルガラ&スポーツ、新フジ、パシフィッククイーン、エンヴィイの増加は、今後も継続すると見込まれる。ニュージーランドリンゴ・ナシ育種プログラムにより、2016年12月に新品種ダズル(Dazzle)が公表された。この品種は、大きく、高着色で大変甘い品種であり、アジア市場向けである。

ニュージーランドにおける品種別栽培面積の推移(ha)

収穫年(暦年)	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017
プレイバーン	2,484	2,246	2,034	1,869	1,740	1,589	1,504	1,381	1,352	1,303	1,239
ロイヤルガラ&スポーツ	2,893	2,669	2,538	2,417	2,423	2,369	2,386	2,337	2,410	2,549	2,604
コックス	314	295	281	248	236	203	178	150	134	121	111
フジ	836	829	899	931	970	934	906	832	837	858	831
グラニースミス	294	286	282	267	256	256	246	240	219	233	231
クリプスピンク/ピンクレディー	248	285	353	397	434	446	459	443	461	523	562
ジャズ	576	768	917	977	983	943	905	869	855	825	821
パシフィックビューティー	177	162	149	135	127	120	113	92	84	83	71
パシフィッククイーン	223	212	220	263	291	351	456	622	730	827	878
パシフィックローズ	529	454	424	416	399	396	390	379	364	365	342
パシフィック小計	929	828	793	814	817	867	959	1,093	1,178	1,275	1,291
エンヴィイ				88	174	272	285	315	346	416	544
その他品種	198	332	389	421	376	385	484	709	790	707	930
リンゴ合計	8,772	8,538	8,486	8,429	8,409	8,264	8,312	8,369	8,582	8,810	9,164
ナシ合計	735	412	412	429	473	441	448	403	407	403	371
落葉果樹未登録分								383	320	413	465
落葉果樹合計	9,507	8,950	8,898	8,858	8,882	8,705	8,760	9,155	9,309	9,626	10,000
プレイバーンの割合	28.30%	26.30%	24.00%	22.20%	20.70%	19.20%	18.10%	16.50%	15.80%	14.80%	13.50%
ロイヤルガラの割合	33.00%	31.30%	29.90%	28.70%	28.80%	28.70%	28.70%	27.90%	28.10%	28.90%	28.40%

リンゴ産業の拡大は適切な灌漑ができる良質な農地の存在により制約される。そのような土地はいくらか存在するが限られている。当職の推計によると収穫面積は9,164ha で、前年を4%上回った。

ナシ

ナシの栽培面積は比較的安定しているようであるが、2016/17年の面積は400ha で、前年を4.8%下回る見込みだ。収穫面積は371ha で前年を8%下回る見込みだ。ナシの面積の減少理由は、リンゴの方が収益性は高いからである。

リンゴの生産

2016/17年の生産量は57.4万トンと前年を4.6%上回ると予測される。

増加の要因は、収穫面積が拡大したこと、2016/17年が表年に当たることによる。主要な産地の気象条件も良好である。2月から4月までが収穫期間であるが、ホークスベイ(落葉果樹の61%を占める)では3月下旬から4月までに豪雨があった。しかし、これは生産量や輸出量に大きな影響はなさそうだ。収穫された果実の品質は良く、着色も十分であり、輸出向けグレード品が増加する見込みだ。

ナシの生産

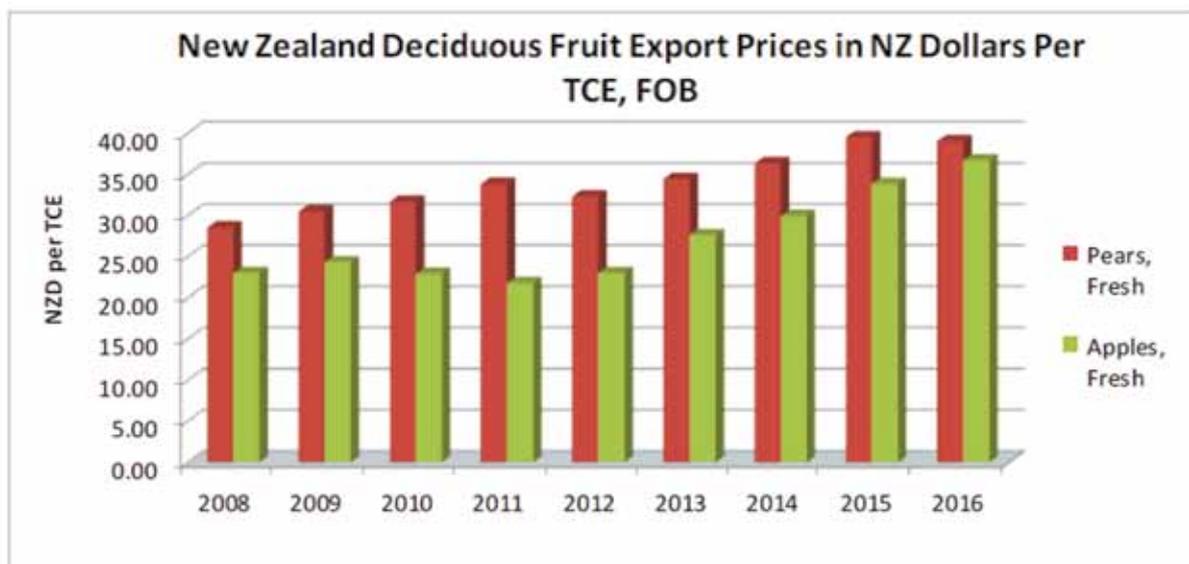
2016/17年の生産量は13,200トンと予測される。栽培面積が8%減少したものの、表年に当たることと気象条件が良好であったことが栽培面積の減少を補った。

生産者手取り

2015/16年のリンゴ、ナシの生産者収益は引き続き好調である。同年の FOB 価格は、平均1箱(18kg)36.74ニュージーランドドル(25.46米国ドル)であった。ニュージーランドドルでは、前年より8.2%増加し、米国ドルに換算すると4%の増加であった。ニュージーランドドルでの FOB 価格の上昇の要因は、半分は市場価格の上昇であり、半分はニュージーランドドルが他の主要輸出国通貨に対して安くなったためと見られる。

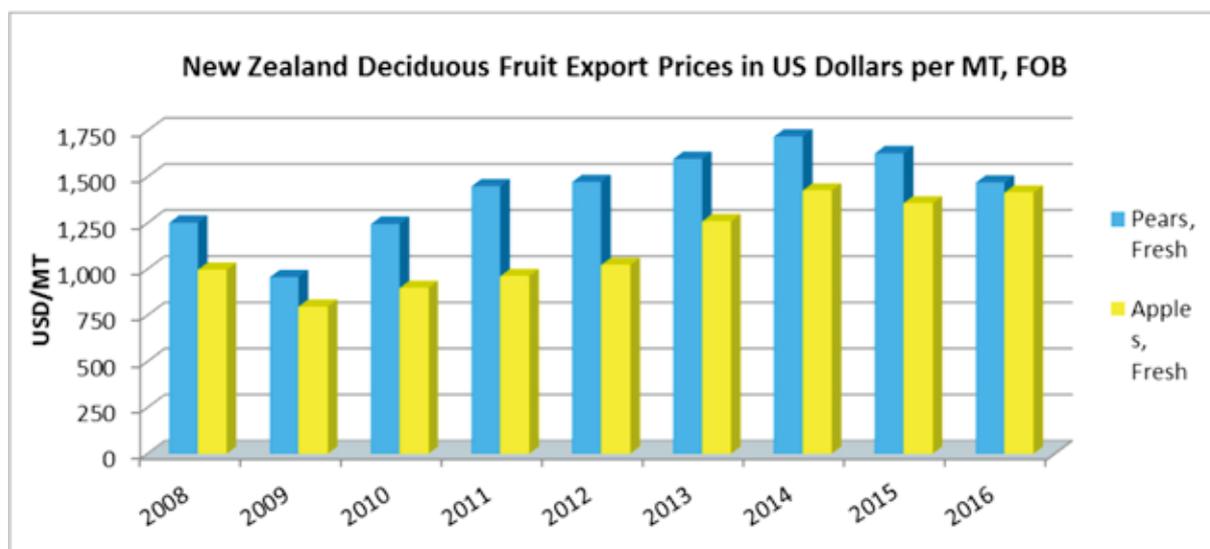
この傾向は、2014/15年が前年に比べて FOB 価格が13%上昇したことに続くものである。2015/16年の ha 当たりの輸出向け収量は、前年を1トン上回った。加えて、FOB 価格が8%上昇したため、2015/16年の ha 当たりの収益は、9~10%上回ったと推測される。

ニュージーランド 落葉果樹1箱(18kg)当たり輸出価格(FOB) ニュージーランド度エル



2015/16年は、4年続けて生産者手取りが増加した。このため、生産者は自信をもち、果樹園への現金投資を促した。これにより、新品種への改植、果樹園の面積拡大が行われた。高い収益性は2016/17年も継続すると見込まれる。というのも面積当たりの収量が増加する見込みであることと、1箱当たりの農家販売価格が、プレミアム品種の割合が増加するため、前年に比べて少なくとも同程度と見込まれるためである。

ニュージーランド 落葉果樹のトン当たり FOB 価格 米国ドル



消費 リンゴ

2016/17年の国内消費量は、前年を4.5%上回る65,700トンと予測される。

ナシ

2016/17年の国内消費量は、10,600トンと、前年を1.4%下回ると見込まれる。

加工

2016/17年のリンゴの加工仕向量は、12.3万トンと予測され、前年を12.8%下回る見込みだ。これは、輸出向けグレード品の数量が増加し、加工に回る量が減少するためである。

2016/17年のナシの加工仕向量は2,000トンと推計され、前年を200トン上回る見込みだ。

ニュージーランドのリンゴ統計(在新 米国農務省 農務官)

	2014/15年	2015/16年	2016/17年
栽培面積(ha)	8,886	9,204	9,600
収穫面積(ha)	8,581	8,809	9,164
販売生産量(トン)	539,000	535,000	571,000
非販売生産量(トン)	14,000	14,000	3,000
生産量計(千トン)	553,000	553,000	574,000
輸入量(トン)	174	323	200
総供給量(トン)	553,174	549,323	574,200
国内生鮮仕向量(トン)	63,143	61,323	65,700
輸出量(トン)	329,031	346,913	385,500
加工仕向量(トン)	161,000	141,087	123,000
総出荷量(トン)	553,174	549,323	574,200

ニュージーランドのナシ統計(在新 米国農務省 農務官)

	2014/15年	2015/16年	2016/17年
栽培面積(ha)	422	420	400
収穫面積(ha)	407	403	371
販売生産量(トン)	12,558	13,731	13,000
非販売生産量(トン)	200	200	200
生産量計(千トン)	12,758	13,931	13,200
輸入量(トン)	4,129	3,231	3,900
総供給量(トン)	16,887	17,162	17,500
国内生鮮仕向量(トン)	10,700	10,750	10,600
輸出量(トン)	4,187	4,612	4,500
加工仕向量(トン)	2,000	1,800	2,000
総出荷量(トン)	16,887	17,162	17,100

貿易

リンゴ輸出

生育環境が良好であったため、品質及び着色が良く、輸出グレードに適合する割合が増加すると見込まれる。この品質の良さと収量の増加が相俟って、2016/17年の輸出量は385,500トン予想され、前年より11%増加する見込みだ。この数字が実現すれば、これまでの記録であった2004年の358,327トンを上回る新記録となる。

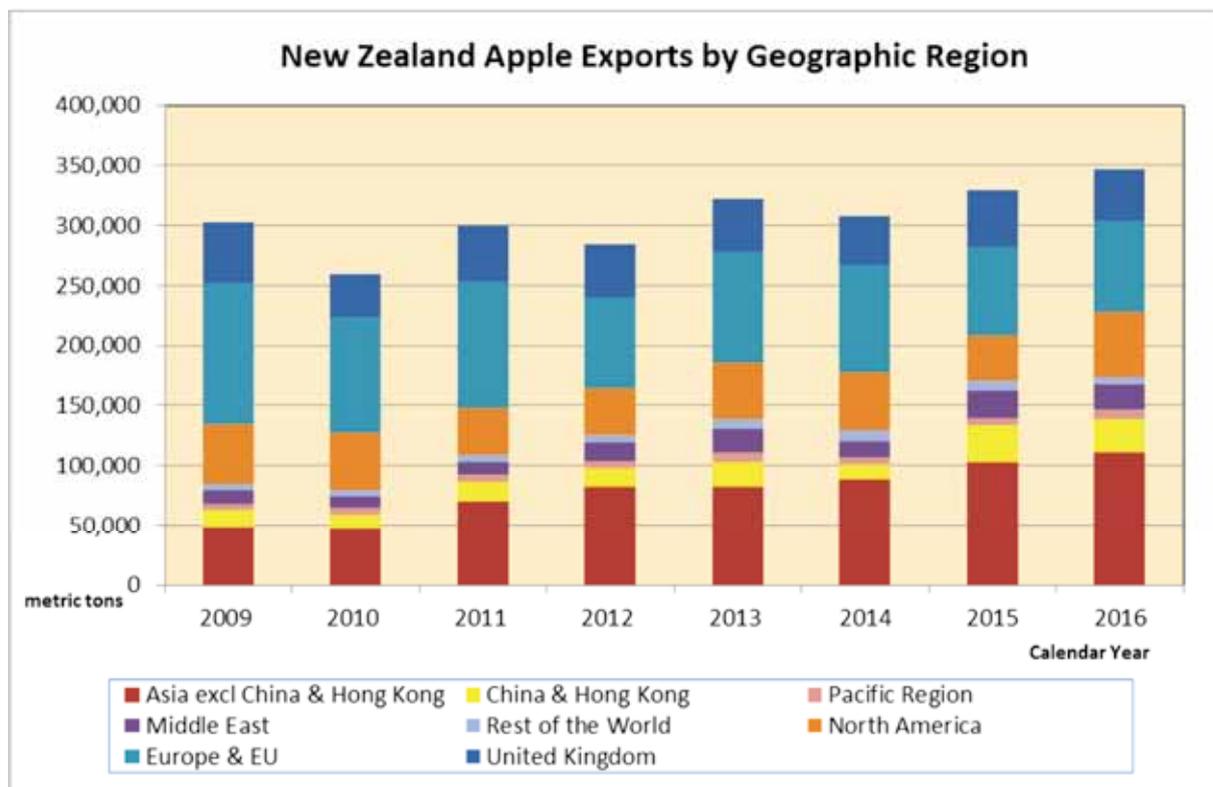
ニュージーランドドルベースの FOB 価格は、前年を上回らないまでも、少なくとも同程度と見込まれる。既存品種の価格は前年と同程度かやや下回ると見込まれるが、割合が増加している着色の良いプレミアム品種は高価格になると見込まれる。この結果、箱あたりの FOB 収益は増加する可能性もある。

2015/16年のリンゴ輸出量は346,913トンであった。これは前年の329,031トンと5.4%上回った。

生鮮リンゴ輸出量(2014-16年)

輸出先	輸出量(トン)			シェア(%)			2016年の 対前年比
	2014	2015	2016	2014	2015	2016	
EU(英国を除く)	88,707	73,327	76,117	28.81	22.29	21.94	3.8
米国	40,345	32,070	48,625	13.1	9.75	14.02	51.62
英国	41,548	47,236	42,925	13.49	14.36	12.37	-9.13
台湾	19,876	22,096	32,183	6.46	6.72	9.28	45.65
タイ	20,220	30,141	24,889	6.57	9.16	7.17	-17.42
アラブ首長国連邦	11,422	18,764	17,785	3.71	5.7	5.13	-5.22
中国	1,966	20,331	17,491	0.64	6.18	5.04	-13.97
インド	12,487	15,007	13,253	4.06	4.56	3.82	-11.69
香港	10,670	10,599	10,183	3.47	3.22	2.94	-3.92
シンガポール	8,747	8,336	9,070	2.84	2.53	2.61	8.81
その他	51,905	51,124	54,392	16.86	15.54	15.68	6.39
合計	307,893	329,031	346,913	100	100	100	5.43

輸出先別リンゴ輸出量の推移



リンゴ輸入

生鮮リンゴ輸入量(2014-16年(暦年))

輸出先	輸入量(トン)		
	2013	2014	2015
米国	822	173	281
ニュージーランド (再輸入)	21	1	42
合計	843	174	323

2015/16年の輸入量は、前年を149トン上回る323トンであった。2016/17年については、200トンと予想される。CA貯蔵や科学的成熟阻害剤 SmartFresh™ の出現でニュージーランドのリンゴは長期間品質を保つことができるので、輸入を必要としない。将来とも、輸入は最小限に抑えられる見込みだ。

ナシの輸出入

2015/16年のナシの輸出量は4,612トンと前年を10%上回った。2016/17年は、面積が減少しているため輸出余力は小さくなっている。しかし、生育状況が良好であることが幸いし、輸出量は4,500トンで、前年を2.4%下回る程度に留まると予想される。

輸入に関しては、2008年以降、3,000トンから4,000トンの間で推移してきた。数字の変化は、国内生産量の多寡に依存している。この傾向は現在でも同様であり、2015/16年は前年を22%下回る3,231トンであった。2016/17年は、前年を21%上回る3,900トンと予測される。

生鮮ナシ輸出量(2014-16年(暦年))

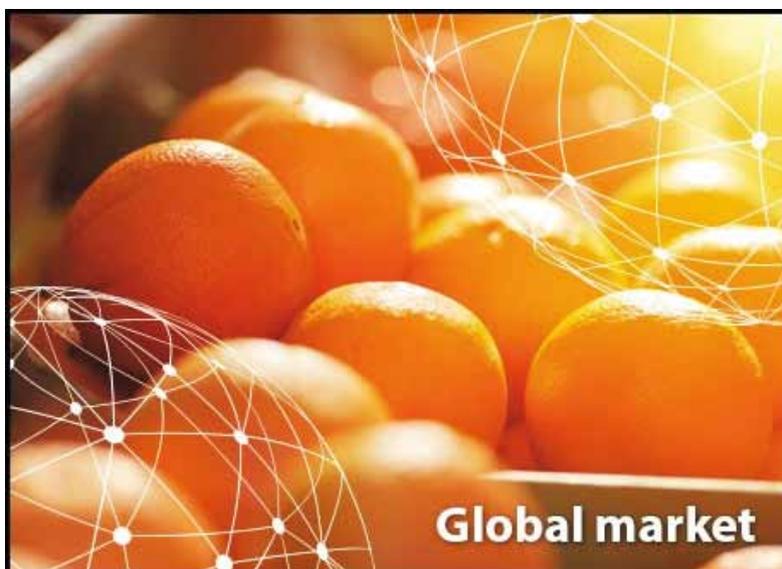
輸出先	輸出量(トン)			シェア(%)			2015年の対前年
	2014	2015	2016	2014	2015	2016	
台湾	682	846	1,662	12.7	20.2	36.04	96.5
米国	2,265	1,102	1,121	42.17	26.32	24.32	1.76
香港	293	467	471	5.46	11.15	10.21	0.89
英国	623	644	280	11.6	15.37	6.06	-56.54
フジー	116	119	251	2.16	2.83	5.45	111.81
EU(英国を除く)	519	174	239	9.66	4.16	5.18	37.36
カナダ	261	250	112	4.86	5.98	2.44	-55.06
シンガポール	217	121	103	4.04	2.89	2.22	-15.27
ポリネシア	71	62	93	1.32	1.48	2.03	50.77
その他	325	402	280	6.05	9.6	6.07	-30.35
合計	5,372	4,187	4,612	100	100	100	10.15

生鮮ナシ輸入量(2014-16年(暦年))

輸出先	輸出量(トン)			シェア(%)			2016年 の対前年
	2014	2015	2016	2014	2015	2016	
オーストラリア	1,929	2,839	2,108	52.15	68.75	65.23	-25.75
米国	1,233	777	513	33.34	18.83	15.86	-34.07
中国	365	423	505	9.88	10.25	15.63	19.27
韓国	100	89	106	2.71	2.16	3.29	19.01
ニュージーランド	0	0	0	0	0.01	0	100
アメリカ領サモア	71	0	0	1.92	0	0	0
合計	3,699	4,129	3,231	100	100	100	-21.74

50. 世界のオレンジ市場

FreshPlaza 電子版 (2017年5月12日)



2016/17年の世界のオレンジ生産量は、昨シーズンよりも240万トン多いと見込まれる。米国農務省の予測によると、世界の収穫量は4,960万トンである。ブラジルでの生産増は、中国と米国の生産減を補うものである。一方、原因は不明であるが南アフリカでは果実の被害がでている。イタリアでも栽培は困難に直面している。これはトリステザウイルスによるものである。

南アフリカ: 良いシーズンだが被害が大きい

東ケープは南アフリカのオレンジの40%を生産しているが、ネーブルの生産は減少している。果実が劣化する被害を受けているからだ。この原因は開花期間中の低湿度と高温によると考えられている。さらに収穫物の多くがアルテルナリア(真菌)による腐敗の被害を受けている。早生品種のフクモト、Navelina、Newhall では特に大きな被害があった。Cambria のような晩生品種では被害は少ない。とはいえ、既にネーブルの収穫は始まっており、通常年よりもやや遅れている。ガントウー・バレーはサンデーリバー・バレーよりも被害は少ないが、果実の梱包率(出荷率)は50~60%である。

西ケープでも同様の被害がでており、Navelina の収穫の25%に影響がでている。晩生品種では被害は少ない。同地域では被害は相対的に大きくない。

同国北部では被害の報告はない。ロスコップ・バレーや Senwes では Navelina、Newhall の収穫は終わりを迎えている。早生種の大部分は収穫が終わり、市場に出荷されているが、生産者は満足している。色つきもサイズも十分であるからだ。これら地域では豊作が見込まれている。

Palmer、Bahianinha、Washington 等の品種は順調である。雹害、風害被害の報告もあるが、これらは特定地域に限られる。「過去10年で最高のシーズンだ。エジプト産が早く終わったため市場に在庫がなく、将来も含めてベストシーズンになるだろう」という生産者もいる。

ウルグアイ: 通常のシーズン

世界規模では生産量は多くないが、世界市場にオレンジ、カンキツを輸出している。また、種々の品種を輸出しており、例えば、Navelina、晩生ネーブル、Lane Late、Salustiana、Valencia である。オランダで欧州にオレンジを販売する輸入業者によれば、平年並みのシーズンで、安定供給が見込まれるそうだ。南米諸国は欧州が最大の市場である。

ブラジル: シーズンがスタート

第18週に最初のオレンジが出荷されたが、EU による植物検疫に関する懸念がある。このため、欧州の需要に応えるには問題が多い。他の南米諸国と同様に、ブラジルも欧州市場での販売を拡大したいと考えているが、ブラジルの輸出業者は、EU 議会が検討している計画(注:植物検疫関係と思われる)を踏まえ、警告を発している。

予測によると生産量は27%増加し、1,820万トンと見込まれている。これはここ数年続いた減少傾向を打ち破るものである。生産量の大部分である1,290万トンは加工に向けられる。

エジプト: 良い結果を残す

エジプトのシーズンは既に終了したが、前年よりも好調であった。輸出業者によると、サイズも品質も良好だったようだ。生産量が減少したため、シーズンは昨年よりも早く終わった。減少は悪天候が原因であったが、価格は20%高かった。

エジプトの輸出先は欧州とロシアである。一部の輸出業者は現在でも出荷しているが、大部分の業者はシーズンを終えている。エジプトの業者はスペインの悪天候の恩恵をうけ、欧州市場での高価格を享受した。

トルコ: 平均的販売活動を収量

シーズンはほぼ終了し、国内市場向けのネーブルとバレンシアを残すのみである。輸出業者によると、今シーズンは満足できる状態だったようだ。特に大きな期待もされていなかったが、シーズン中に支障も生じなかった。生産量は前年並みだったが輸出量は増加した。イランへの輸出の機会も獲得できた。

イスラエル: 輸出市場を失う

輸出シーズンは、昨年より15%減少で幕を閉じた。過去3カ年は輸出量が増加したが、様々な要因によりこの傾向が変化した。欧州市場では他の競合国からの供給量の増加に直面しているが、気象条件による品質悪化の要因も存在する。

同国の栽培面積は1970年代には4.2万 ha あったが、現在では1.75万 ha に減少している。輸出量は通常4千トンであり、主な品種は、Shamouti、Tabouri、バレンシアである。特に、輸出に関しては晩生品種で競争が厳しい。この傾向が継続すれば、2年以内にバレンシアの輸出はストップする可能性がある。

スペイン: 販売は失望

同国の輸出業者を束ねている「カンキツ管理委員会(CGC)」は、今シーズンのオレンジ販売について、「失望した」、「大変に変則的だった」と述べている。昨年の販売が順調に経過したのと対照的に、今シーズンは荒れ模様の天候に左右され、現在でもこれを克服しようと努力している。シーズン後半には需要の回復と価格の上昇も期待される。

時系列的に主要ファクターを並べると、次ようになる。まず、オレンジの生産が過剰になるとの誤解が生まれた。次に欧州へ寒さの到来が遅れ、需要が伸びなかった。さらに、南アフリカと EU との貿易協定に基づく輸入初年度に当たるといった心理的要因が働いた。そして、11月、12月の猛烈な嵐により収穫作業が中断し、品質への影響ももたらした。加えて、港湾労働者による争議で非 EU 諸国への出荷が遅延した。

トレンドの変化

その後、嵐はおさまり、クレメンティンの販売も終了した。クリスマスの後、1月中旬に霜害があり、主にイタリアを襲ったが、ギリシャ、トルコにも影響があった。これを受け、(スペイン産の)市場は好転し、需要が掘り起こされ、晩生ネーブルやバレンシアでは利益が期待される。

イタリア: ウイルスによる影響

イタリアの販売は既に終了している。シチリアでは満足いくシーズンであった。業者によると、特に問題なく販売されたという。しかしながら、数量は40%減少した。国内市場は問題なく出荷を受け入れられ、輸出市

場では平均価格も堅調であり、需要も通常通りであった。業者によると、「今シーズンは生産と貿易にとって大変に関心を引き起こす年であった」とのことだ。

来シーズンに向けては、既に開花が終わり、豊作のようにも見える。しかし、シーズンの早い段階では、この先、何が起るか分からない。トリステザウイルスが生産に大きな脅威を与えているからだ。

業者は将来に対して楽観的である。シチリア産のブラッドオレンジに対する需要が増加しているためだ。しかし、2016/17年シーズンは春に終了しているが、いくつかの大きな変化が見られた。収量が大きく減少し、この要因はウイルス病と悪天候によるものであった。この結果、価格も低下も見られた。しかし、業者によると、「新シーズンは大丈夫だ。ウイルスによる減収は明らかだが、開花は順調であるからだ」という。

とはいえ、農業専門家は楽観的ではない。Tarocco の販売が思いもよらず3月には早くも終了したからだ。これにより業者の儲けは少なかった。「若い木を持つ生産者だけが、トリステザウイルスの影響を受けないので、安心していられるに過ぎない」と専門家は言う。また、昨シーズンより生産コストが大幅に上昇し、キロ当たり約1ユーロとなった。一方で販売価格は変化していない。このため、オレンジへの投資が減速するとアナリストは警告している。

オランダ:南アフリカ産オレンジシーズンの始まり

南アフリカ産のシーズンが始まった。ネーブルが大きく減産し、蛾の防除のために冷蔵保存を義務づけられ、南アフリカが以前より欧州市場への興味を失ってはいるが、依然として南アフリカは様々な食材の宝庫である。ネーブルについては深刻な問題を抱えている。現在、この原因について調査が進められている。ある調査によると、夜温と日中の温度差が大きいからだという。また、近年の水質や干ばつによるとの説もある。あるいは、これらの複合要因とするものもある。ネーブルに注目が集まっているが、最初にこの被害が現れたのは、晩生ネーブルと Midnight orange である。バレンシアオレンジだけはこの被害を受けていない。一方、最近ではネーブルからマンダリンやレモンの栽培に転換する生産者が多い。東ケープでは最も事態が深刻である。供給量にして30~40%減少しているからだ。西ケープでも、20~30%の減少が見込まれる。とはいえ、カンキツに対する需要は旺盛である。エジプト産が既に終了し、カリフォルニア産も通常より早く終了した。また、中東からラマダンの需要もあるからだ。

南アフリカ産の柑橘のシェアは変化している。かつては、南アフリカにとって、欧州は最大の市場であったが、現在では欧州のシェアは35%で、65%は拡大する非欧州市場が占めている。これは、例えばウルグアイが生産量は少ないものの、欧州市場に焦点を当てているのと対照的だ。南アフリカは欧州への比重を減らしている。

オーストラリア:平均的なシーズンを予想

現在、市場は転換期にある。国内ではオレンジは年間を通じて供給されている。ネーブルは人気のある品種であり、主に6月から10月まで販売される。生産地は主に南部に位置し、マレー・バレー、ニューサウスウェールズ州のリバリーナ、南オーストラリア州のリバーランドである。バレンシアはごく一般的な品種で、主に夏の期間である11月から2月まで販売される。主な産地はリバリーナである。

生産者は今シーズンの生産量について、平年並みかやや増を期待している。平均的な生産量であれば、価格の上昇は期待できない。果実は夏に40度を超える暑さがあったために小さめである。M7と呼ばれるネーブルの栽培に投資したものは、この品種の需要が拡大していると捉え、需要を満たすために生産を拡大している。この品種はアジアの輸出市場で人気がある。

米国:生産予測を公表

米国では生産予測が公表され、前年より47万トン少ない490万トンであるとされた。減少要因はフロリダ州におけるカンキツグリーニング病である。フロリダ州のオレンジ生産は、全米の60%を占め、主に加工向けである。残り40%はカリフォルニア産で生鮮市場に向けられる。

著者:Rudolf Mulderij

5 1. 偽物 中国市場で優位に保つためのゼスプリの課題

FreshPlaza 電子版 (2017年5月10日)

ゼスプリグループは中国市場で拡大を続けており、昨年は日本を抜いて最大の市場となった。しかし、会社は偽物や盗難により市場の一部を奪おうとする者との戦いを進めている。

(ゼスプリで)中国のマーケティングを担当する Pan 氏によると、ゼスプリはブランドの認知力を高め、市場の支配力を強化することに重点を置いているという。中国市場は2016年には約3億ドルの売上があり、前年を60%上回った。そして、ゼスプリ全体の売上高19.1億ドルの16%を占めている。

中国は世界で最大のキウイ生産国であり、2014/15年には130万トンを生産している。この数字はニュージーランドの生産量の3倍であり、国産キウイは国内で消費されている。中国では未だゼスプリブランドのキウイ生産は試験段階であり、ニュージーランドはもとより、イタリア、フランスから(中国に)輸出してスーパーで周年販売を進め、ブランドを確保している。

ゼスプリは中国500の都市のうち、50都市で販売を行っているが、この数字は3年前の2倍以上に達する。このうち14の都市はマーケティングと宣伝を重点的に行う「メディア連携都市」と位置づけている。

上海や北京のような大規模1級都市は、英語を理解する人も多く、ブランドは高く認識されているが、英語を話せない中国消費者との繋がりの強化が必要なのである。

ゼスプリは中国国内では「Jia Pei」という名前を用いてマーケティングを開始している。この名前は中国語の「ダブル(2倍)」と発音が似ている。このため、「良い生活を『2倍に』」というスローガンを用いている。

Pan 氏は、「我々はブランドをより深く浸透しなければならない段階に達している。しかし、リソースはこれら都市に対応する以上のもではない。戦略都市である14市での活動を全うするまでは、現在以上のことは行わない」と語っている。

ブランドの成功の裏返しは、コココーラやレイなどの大手多国籍企業が直面している国内の偽造である。現地のキウイ販売業者は、偽のゼスプリステッカーを使ったり、自社のロゴに Z を用いたり、ニュージーランド産と思わせせるような不正確な表記などをして消費者をミスリードしているのである。

ゼスプリは、過去8ヶ月で偽物対策にこれまでの2倍の努力を傾注したそうだ。「中国ではよく知られた果実がプレミアムイメージを持つようになれば、人々は模倣を始める。これらの人は卸売市場で販売するので、時々発見することができるので追跡を行う。時には偽ラベルを製造する者を訴追することもある。この8ヶ月の間、ブランドを守るため、こういった取組みを強化した」と Pan 氏は述べている。

先月は生産者による植物体の盗難があった。特定の区域から別の区域にライセンスの移動を行うことになるこの行為は、ゼスプリが定めた規則に違反するものである。この件は現在でも警察が調査中である、と Pan 氏は語っている。

「ということは、中国では不法に G3(ゴールドキウイの新品種)を受け取り、栽培している生産者がいるかも知れないということだ。既に専任チームを設け、より多くの情報収集と事態を収める方法について検討をしている。最善の努力を払い、ニュージーランドのブランド利益を損ないかねないリスクを軽減する必要がある」と締めくくった。

52. ニュージーランドのリンゴ・ナシ生産量は事前予測より減少

FreshPlaza 電子版 (2017年5月10日)

ニュージーランドのリンゴとナシの生産量は、シーズン前の事前予測にとどかない見込みだ。

今年の初めに、Pipfruit New Zealand (PNZ:リンゴ、ナシの生産者等による組織)は、総生産量が59万トンの新記録を達成するものと予測していた。この数字は過去最高であった2004年の56万トンを上回るものであった。この予測によると、このうち38.4万トンが輸出されると見込んでいた。

しかし、収穫が産地でほぼ終了した現在、総生産量は大きく予測より減少する見通しである。

PNZのCEOであるPollard氏によると、「いくつかの要因により、総生産量は事前予測より10%減少する見込みだ。この中で、晩生品種のブレイバーンが最も影響を受けるようだ。食味品質も素晴らしく、生育期間は良好に推移したが、1月に予測した数量には達しなかった。収穫シーズンが終われば、来シーズンの予測がより正確になるような予測を行うよう、今年の結果を評価しなければならない」と語っている。

生産量は減少するものの、果実の品質は大変良い。「いくつかの主要市場、例えば欧州や英国では量的には昨シーズンよりも少なくなるだろう」と氏は語っている。

さらに、「輸出量が少なくなるのは残念だが、消費者はユニークな味と品質で名高いニュージーランド産リンゴとナシを味わってもらえることを期待している」とも述べている。

生産量が頓挫したにもかかわらず、ニュージーランドのリンゴ、ナシ業界は、目標年次である2022年より前に10億ドルの輸出収入を得ることには自信を持っている。ちなみに、2016年の輸出収入は7.2億ドルであった。

情報源:Pipfruit New Zealand Alan Pollard

53. 世界のライム市場

FreshPlaza 電子版 (2017年5月5日)



欧州の業者は、メキシコ、ブラジルから大量のライムが輸入されていることを懸念している。(欧州の)大部分の国では過剰にライムが市場に流れることを心配している。東方に目を転じると、ロシアは品質の良いライムを大量に求めている。市場ではグリーンライムだけを求めているが、入手は容易でない。中国では生産量が限られている。オーストラリアでは輸入品を受け入れる余地はない。一方、米国では、少なくとも大きなサイズのライムは不足している。

ブラジル:安定を期待

ブラジル最大の競争相手はメキシコの輸出業者である。特に出荷時期が重複する数ヶ月は競争が厳しく、価格が下落する。とはいえ、ブラジルは他国に比べて、欧州、中東、カナダ市場では安定した地位を占めている。ある輸出業者によると、(彼の)毎週の出荷量は7~8コンテナだそうだ。通常、ブラジルの出荷最盛期は11月であるが、去年は12月であった。年が明けて気象条件が悪くなったが、その後は安定している。業者はシーズンが終わる7月まで安定供給できることを望んでいる。

オーストラリア:人気のライム

ライムはマンダリンとともに人気があるカンキツである。今週、シドニー市場ではライムに強い需要があった。取引業者によると、最良のライムは1月から4月までだそうだが、年間を通して供給される。小売価格はキロ当たり11~14オーストラリアドル(7.40~9.40ユーロ)である。大部分のライムは国産であるが、シーズンオフには一部輸入されている。カンキツ類の中でレモン及びライムの栽培面積はわずか5%である。

イスラエル:欧州向けには黄色すぎ

大生産国に対抗して欧州で輸出の足がかりを設けるのは難しいが、近年はニッチな市場では利益を上げている。昨シーズンは7月から9月まで輸出量が24%減少し、153トンとなった。通常、欧州市場では南米産が好まれているが、イスラエル産は果皮の色が明るいため、不利な立場に置かれている。これはイスラエル

では日照が多すぎるためである。

しかし、近年では良いシーズンもあり、輸出が300%増加したこともあった。これは、メキシコを始めとする他の供給国に問題があったためである。こういった年は、生産者は利益をあげ、悪い年の不利益を埋め合わせてきた。こういったことから、ライム市場は生産者にとって利益をもたらしているといえる。国内市場の規模は小さいが拡大をしている。特に外食産業は需要が増加している。

オランダ:需要は多いが供給過多

オランダ市場は大部分がブラジル、メキシコからの輸入である。需要は年間を通じて多いが、供給量があまりにも多い。この数週間、輸入が50~90%増加した。この結果、価格は低下している。これは販売可能量を上回る量に達したからだ。見通しとしては、販売量は増加するものの、供給量は依然として多い。輸入業者は引き続き低価格であることを期待している。

ベルギー:ライムが殺到

現在、ライムはブラジル、メキシコから輸入されているが、供給量は多い。両国とも欧州に対して過剰な量を輸出している。小売業者の言うには、第15週にはブラジルから102コンテナ、メキシコから57コンテナが出荷されたそうだが、この数字は多すぎる。というのも欧州市場で消化できるのは、毎週100コンテナだからだ。このような供給過剰はメキシコの収穫開始があまりに順調であったためだ。2016年の場合は、第14週以前の出荷量は毎週7コンテナであったそうだが、今年は57コンテナである。供給過剰のため、価格も低下している。低下傾向は、今後数週間は継続する見込みだ。

英国:高価格だが変化の兆し

4週間前、ライムは高価格で販売されていた。これは供給量が少なかったというよりは、品質の問題である。高品質の果実は、量は少なかったが高価格で取引された。しかし、高価格状態は業者が無理に利益を得ようとするため問題を生じていた。英国の輸入業者によると、供給量の増加で価格低下は招かなかったが、気候の影響で価格は低下しているとのことだ。

スペイン:メキシコ産が好まれる

スペインの輸入業者は、メキシコ産の方がブラジル産よりも品質が良いと話す。輸入は両国から行われているが、今月から需要が増加する見込みにもかかわらず、価格は低迷しており、今後も継続するとみられる。需要のピークはスペインに観光客が溢れる夏である。また、需要は毎年拡大している。

国内のライム生産は、他のカンキツ類に比べると少ない、多くはムルシア地方で生産されている。収穫は8月から9月にかけてである。生産は徐々に増加しているものの、高収益が得られるレモンに比べてライムの生産意欲は小さい。スペインの気候ではライムの栽培は難しく、収穫期間も短い。

イタリア:未だにニッチな作物

イタリアではライムは未だにニッチな作物ではあるが販売量は増加傾向である。主にブラジルとメキシコから供給される。現在、低温傾向と供給量が多いため、価格は安い。需要の大部分は外食産業からのものであり、(一般の)消費者はこの果物に慣れていない。ライムは年間を通して供給されるが、消費のピークは夏である。

メキシコとブラジルの他に、ペルー、コロンビア、ベネズエラからも供給される。業者によると、ブラジル産は果汁が多く香りも良いが、メキシコ産は日持ちが良く、緑色でいる期間が長いそうだ。4月28日のローマの卸売価格は、(キロ当たり)2.60ユーロで、5月4日のヴェローナの価格は2.40ユーロであった。

フランス

現在はほとんどがメキシコ産である。クラス1のサイズ53-67の価格は3.5ユーロである。

ロシア: 緑色ライム市場が成長

緑色のライムが市場に浸透を続けている。ほとんど全てのスーパーがライム販売のために売り場を用意している。しかし、業者によると、品質面で販売に問題があるそうだ。「ロシアではライムがよく売れる。しかし、多くの輸出業者がロシアは二級品市場だと考えているから」とのことだ。このため、ロシアの港に着いたときは過熟の状態であり、多くを廃棄しなければならないそうで、顧客である主要な小売業者は受け取りを拒否するという。ライムが緑色であれば、販売には問題がないはずなのだが。

ライムの使用方法が変化してきたため、消費者はますますこの果物に詳しくなっており、台所に定着している。他のカンキツのピークが冬場であるのに、ライムの価格は安定している。現在、小売価格はキロ当たり1.90ユーロで取引されている。

中国: 生産の大部分は台湾

中国本土での生産量は限られている。四川省にはライムの生産者がいるが、レモンの生産に比べれば量は少ない。生産の大半は台湾で行われており、主な産地は平東と台中である。主要品種は、Four Season、Perfume、Taiwan である。販売のピークは夏の7月、8月とともに秋の11月、12月である。中国はペルーとオーストラリアから輸入しているが、最近公表されたところによると、メキシコに対しても輸入を解禁するそうだ。

米国: 需給が引き締まる

供給量と需要量が丁度均衡している状態だ。市場では大きいサイズのライムの確保がより難しくなっている。というのも大きいものは早期に収穫されるからだ。従って、小さいサイズのライムは豊富に存在する。米国ではメキシコから大量の供給があるが、生産のピークは7月と8月である。米国のライム市場は拡大している。

南アフリカ: 小規模な生産

公式数字によると、ライムの生産はごく少ない。国全体で Bearss (品種) の栽培面積が50ha、Tahiti limes が6ha である。大半はフーズスプレート(42ha)で生産され、残りは西ケープ(5ha)とセウエウ(2ha)等である。生産の大部分は国内市場を対象としており、少量が欧州、中東に輸出されている。

著者: Rudolf Mulderij

5 4 . 米国北西部のサクランボ収穫予想

The Packer 電子版 (2017 年 5 月 5 日)



今年最初の米国北西部(ワシントン州、オレゴン州、アイダホ州等)のサクランボ収穫予測によると、今年の生産量は2,180万箱(20ポンド入=19kg)であり、昨年より多いものの、過去最高であった2014年の2,320万箱よりは少ないとの見込みだ。

サクランボの収穫予測は、計4回行われるが、今シーズン初めての予測が5月4日に公表された。今回の予測は北西部全ての産地を対象としたものだ。

今年の収穫のスタートは昨年よりも遅く始まるため、7月、8月の収穫量は昨年より多い見込みだ。

今回の予測によると、6月に出荷されるのは520万箱、7月は1,330万箱、8月は330万箱とのことだ。昨年は5月に50万箱が出荷され、1,000万箱が6月に、790万箱が7月に出荷され、8月にはわずかな量であった。

加えて、レイニア(品種)の生産が増加し、2015年、2016年の170万箱(15ポンド入で)を上回るとの予想である。

「良好な開花なので、黄色い果肉のレイニアが多く着果することができれば、市場で力強く販売することができる。『国民レイニアの日(7月11日)』と前後して販売期間を拡大することができる」と予測の中で述べられている。

また、開花は遅れたが、温暖な日が安定して続いたために開花は全ての産地を通じて素晴らしかった、と予測では述べている。

最も早い収穫は(5月)第2週から始まると見込んでいるが、収穫は8月まで続く。

著者: Tom Karst

5.5. EUが対米カンキツ輸入規制を緩和

The Packer 電子版 (2017年5月3日)

米国から欧州へのカンキツ輸出が、カンキツかいよう病(Citrus canker)に関する規制ルールの変更で、拡大することが期待される。

米国パーデュー農務長官とヴォーン通商代表は、5月3日、EU はカンキツかいよう病(Citrus canker)の確認のために課している樹園地ごとの検査を取り下げると発表した。このプレスリリースに基づけば、米国からEU に対する輸出が容易になり、生産者が負担していたコストも削減される。

新しい EU 指令によると、カンキツかいよう病(Citrus canker)が発生している国に対しては、病気の管理計画を策定すると共に、輸出されるカンキツに病徴がないことを確認することを求めるという。これまでの樹園地ごとの検査が必要なくなることで、米国農務省の試算によると、生産者は年間560万ドルを節約できるという。

「これで重複を排除することができる」とフロリダ・シトラス・ミューチュアルの公報部長は話している。部長によると、選果・梱包過程における病害管理プロトコールで十分市場に出回ることを防ぐことができる、とのことだ。「これは素晴らしい決断であり、我々のために取組んでくれた農務長官、通商代表を賛辞する」とも話している。

Wonderful Citrus 社の輸出販売上級部長は、社としては大歓迎で、フロリダのグレープフルーツを欧州に輸出する際の規制が緩和されると話している。また、電子メールで、「この決定により欧州への輸出のオプションを増やすことができる。欧州へは海外市場で最も多くのグレープフルーツを輸出しているからだ」と述べている。

カンキツかいよう病(Citrus canker)は主にフロリダ州で発生しているものだが、もともとはルイジアナ州、テキサス州で発見されたものである。「EU は多くの不当な『衛生と植物防疫のための措置(SPS)』を米国の輸出に対して課している。米国は長い間、科学的根拠に基づく SPS を行うように EU に要求している」と通商代表はプレスリリースの中で語っている。さらに、「今回のことで長年行われてきた不当な障壁が取り除かれ、米国は10年前の EU に対する輸出を取り戻すのに役立つだろう」と続けた。

フロリダ州では2.5万エーカーのグレープフルーツが栽培されている。2016年には、フロリダ州カンキツ局によると、1.08億ポンドが欧州に輸出されており、同年の輸出量2.64億ポンドの41%に相当する。

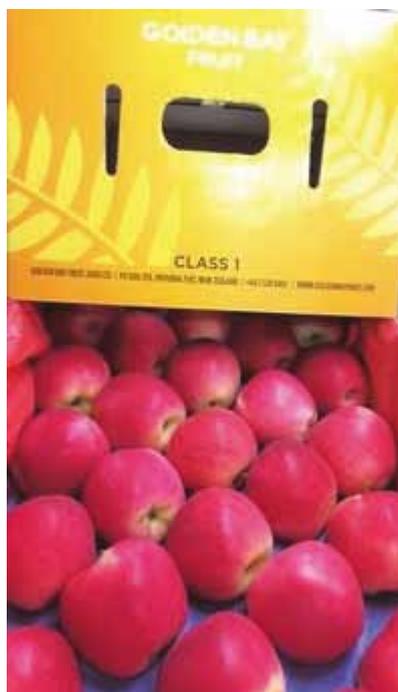
業界では、プレスリリースに基づけば、規制の緩和で初年度のカンキツの輸出量は25%または1,500万ドル増加することを期待している。

プレスリリースによると、EU の措置は11月中旬から施行され、グレープフルーツの輸出には間に合うとのことだ。

著者: Tom Karst

56. ゴールデンベイからリンゴ新品种が出荷

FreshPlaza 電子版 (2017年4月28日)



最近、多くのリンゴ新品种が市場に出回っている。この中の多くはフルカラー（果実全体が着色している）の品種で、アジア市場を狙いとしている。とはいえ、現段階では商業生産されているものはごく僅かである。

ゴールデンベイフルーツ社（ニュージーランドゴールデンベイに本拠を置く果実生産会社）により生産された Prem34 は新品种の一つだが、まだ命名はされていない。この品種はニュージーランドの育種家 Preva 氏により育成された品種で、同氏が開発した品種にはリンゴの Rockit、Smitten、Sweetie の他、ナシの Piqa®、Boo®がある。

これらはいずれもゴールデンベイフルーツ社により栽培され、輸出されている。

ニュージーランドの生産会社であるゴールデンベイフルーツ社は Prem34 の最大の生産者で、既に5万本の植栽を行った。同社の Meikle によると、「ニュージーランドからの輸出権利は当社が所有しているが、世界各地の同調者（オーストラリア、米国、欧州、南アフリカ、チリ）と協力して生産を行い、最終的には年間を通して出荷できるようにしたい」と語っている。

「Prem34 は果実全体がピンク色に覆われている点は群を抜いている。その味も抜群で、甘く、カリカリ感があり、ジューシーで、食べると爽やかだ。世界の消費者を対象とした試食会では、味に関して大変な好評を博している。味が熱帯果実のようで、パインアップルに似ているという人もいる。従って、Prem34 は世界の市場で成功を納めると見ている。今シーズンの生産量はまだ限定的で、将来性のある少数の市場へしか出荷できない。しかし、この先2～3年で生産量は大幅に増加する」と述べた。

著者: Nichola Watson

57. 世界の生食用ブドウ市場

FreshPlaza 電子版 (2017年4月5日)



現在のところ南アフリカ産のブドウはこれまでと同様好調で、大部分の生産物は既に出荷された。インド産は現在でも市場に出回っており、エジプト産は出荷が始まった。様々な生産国でブドウの栽培面積は拡大している。この点で注目すべきはスペインである。同国では多くの新規植栽が行われている。

南アフリカ

南アフリカでは既にシーズンは終了した。生産者にとっては、販売期間中に浮き沈みがあった。隣国ナミビアでは、干ばつ、豪雨、雹害があり生産が懸念されたが、収穫は順調であった。一方、為替相場は常に懸念材料であった。また、いくつかの課題もあった。赤色品種の生産は順調であったが、価格は低く抑えられた状態であった。一方、クリムゾン是一般に堅調であった。南アフリカでは常に新品种の開発に取り込んでいる。特に晩生の赤色系品種に重点が置かれている。

インド

インドからの輸出は11月の早生トンプソンから始まった。これらは主にはロシア向けであったが、1月以降は欧州向けの輸出が増加した。当初は、寒さのために糖度が十分ではなかった。ロシア向け輸出は量的にはまだ少ないが、次第に増加している。とはいえ、輸出の多くは欧州向けである。初期には価格は高かったが、3月になって値崩れを起こした。品質上の問題があったとの報告もある。インドでは新しい市場を開拓する上で、生産者に新品种の導入を呼びかけている。この中で、中国市場への輸出は増加している。インドは昨年11月から欧州へ輸出を始め、量的には相当量に達している。価格は非常に低いレベルではあったが、現在上昇の気配もある。

チリ

チリの販売は通常より早く始まったが、シーズンの始めは不調で会った。理由の一つは天候によるものであった。このため、多くの量が貯蔵に回り、価格も低下した。もう一つの理由はペルーとの販売競争である。ペルーの輸出先国はチリと重なる。例えば米国は両国にとって重要な輸出先である。ペルーは世界の生食ブ

ドウ市場では新しい参入国で、栽培面積も急速に拡大しており、最近は新品種の導入も盛んだ。

オーストラリア

収穫が例年よりも数週間遅れて始まった。このため、日本、韓国市場にチリ産の輸出を許す結果となった。一方、中国市場は高価格での販売が見込めるため、大いに有望な市場である。ただ、オーストラリアの輸出量は、昨年より15～20%減少が見込まれる。要因の一つは雹害である。一方、国内市場は良好であるため、優先的に国内市場に向けられている。オーストラリアでは、現在、降雨が予想されており、供給量と品質に悪影響を及ぼす可能性がある。

トルコ

トルコでは、現在、スイカと核果類の生産が中心である。生食ブドウの収穫は6月から始まる。主要品種の収穫は8月、9月が最盛期となる。近年、トルコの生食ブドウに対する人気が高まっている。特に欧州からの需要が大きい。ロシアがトルコに対して市場を閉ざしていることもあり、欧州が重点市場となっている。

エジプト

エジプトでは、輸用途ブドウに関する新しい議定書、取決めに関して(見直しを行っているため)変革期にあると言える。この変更は収穫が始まる1ヶ月前に公表された。この厳格な取り決めによると、最良のブドウだけが欧州に輸出できる。このため、全ての育種者、出荷業者、輸出業者が要求水準に満たしているかの検査を受けることになる。

こういった中であって、既に1,000コンテナが欧州、英国に輸出された。生産面に関してみると、今年は良いシーズンを迎えている。というのも、雹害も降雨もないことから、栽培期間中に防除を行う必要がなかったためだ。今年の欧州向け輸出は増加すると見込まれる。現在、価格は安い、5月には改善されると期待している。このため、輸出業者は5月まで出荷を手控えている。

イスラエル

イスラエルはシーズンのスタートが早ければ成功する。つまり、インド産とイタリア・スペイン・エジプト産の隙間を埋めることができるからだ。過去2カ年、インド産の切り上がりが早かったため、イスラエルは1ヶ月にわたり高価格を享受した。従って、今年も同様の状況がおきることを期待している。現時点では、インド産の供給量がまだ十分であるため、予測は困難である。ブドウの生育状況は良好に見えるが、生育期間を通じて気象条件は理想的とはいえなかった。このため、出荷は第21週まで待たざるを得ないようである。初出荷では高価格が期待されている。

中国

中国の国内生産量は1,020万トンと、前年を60万トン上回る見込みだ。輸出量は昨年より50%増と予測されている。輸出先はタイ、ベトナム、マレーシアが主である。輸入も前年より20%上回ると見込まれる。主な輸入先はオーストラリア、チリ、ペルー、米国である。南アフリカとペルー産は春まで輸入が継続する。国内での収穫は既に始まっている。量は少ないが、雲南省産は既に市場に出回っている。

米国

現時点で市場に出回っているのは、メキシコ産とカリフォルニア産である。チリ産も少量出回っているが、ほぼ終了した。米国のスーパーではチリ産の種無しブドウの需要が増加している。チリ産の市場への出回りは(チリにおける)大雨に関わらず、安定していた。とはいえ、米国市場への出回り量が減少したため、価格は上昇した。メキシコ産のブドウ5月中旬から大量に供給される見込みである。メキシコは、緑系の新品種を含め、今年の実産量は多いと見込まれる。5月の第2週からはカリフォルニア産も多く出回るが、見通しは良好である。

スペイン

スペインでは、今年の収穫の始まりは6月と見込まれる。夜温が低く、昼間の温度が高いため、果実の生育にとっては良いとされている。着果も良好である。スペインにとってブドウは益々重要な作物となっている。ムルシア地方が主産地で、全体の90%を占めている。今年は、合わせて6,000haの新植が行われた。ムルシアに次いでアリカンテ地方も重要な産地になりつつある。昨年、スペインは16万トンを輸出した。主な輸出先はドイツ、英国、オランダである。非EUではノルウェーが主要な輸出国である。中国は程なくスペインからの輸入を解禁する見込みであり、将来有望である。一方、輸入に関してもスペインは大幅な増加があった。ブドウの消費は大幅に増加しており、これまでは季節的な果物と見なされていたが、輸入ブドウに対しても評価が高まっている。南アフリカ産のブドウは今年が品質にバラツキがあったが、インド産については品質が改善されたとスペインの輸入業者は評価している。

フランス

ブドウの輸入は主に南アフリカ及びチリからである。価格はパッケージ当たり、約14ユーロである。国内ではヴァントウ地方は生食ブドウの主産地ではないものの、約70%に上る被害を受けた。

オランダ

インド産のブドウの輸入は大幅な拡大を記録した。大量の輸入があったため、価格は劇的な低下を記録した。現在も価格は低迷しており、1パック(punnet)当たり7~8ユーロである。南アフリカ産の出荷は既に終了し、南米産(チリ、ペルー)の輸入品は既に到着済である。レッドグローブに対しては入荷量よりも需要は多い。現在、エジプト産の収穫が始まったばかりであり、生産量も多い見込みである。加えて、イタリアからの輸入も5月中旬から始まる。

イタリアーシチリア島

シチリア島では、品種 Victoria、Black Magic、種無し Superior の収穫が5月15~20日に始まる見込みだ。量的には少ないものの、輸出は第23週から始まる。主な輸出先はアラブ諸国である。今年はカナダにも輸出される予定だ。シチリア島では良好なシーズンを期待している。

著者: Gertrude Snoei

58. ニュージーランド産リンゴのソーニャが中国で販売

FreshPlaza 電子版 (2017年4月27日)

(訳注:ソーニャは商標名で品種名はNevson、2002年に販売が始まった、形状に特徴があり、甘味が強い品種とされる)



ニュージーランド産のリンゴのソーニャ(Sonya)の出荷式が、4月25日に広州江南卸売市場で行われた。このイベントは Yuanxing Fruit 社(中国)が主催したものである。

ニュージーランドの人気スターともいえるソーニャは強い勢いで中国市場に進出している。厳格な生産管理により、ソーニャブランドは中国の消費者に高品質で味の良いリンゴを提供している。Yuanxing Fruit 社は、この優れたリンゴの将来見通しについて強い自信を持っている

Freshco 社(ニュージーランドの青果会社)の Mangan 氏(写真)は Yuanxing Fruit 社による中国市場での強力なマーケティング活動を理解してイベントに臨んだ。氏は、高品質リンゴとしてのソーニャを紹介し、中国市場での潜在能力に関して自信を表明した。

Yuanxing Fruit 社のゼネラルマネージャーLu 氏によると、「ソーニャブランドの所有者である Freshco 社とは数年来協力している。Freshco 社は育種や栽培管理に優れた経験を持ち、ニュージーランドから高品質な製品を輸出している。ここ数年間、同社の新品種を中国市場に導入してきた。例えば Breeze(リンゴ)、Cheekie(リンゴ)、New Zealand pumpkins(カボチャ)である。ソーニャはその中の一つだ。ソーニャの販売は4月から8月まで続く。この品種は現在大部分がニュージーランドで生産されているが、次第にチリや米国での生産も進みつつある。ソーニャは主要なスーパーで販売されるだけでなく、E-コマースや卸売市場を通じても流通している」とのことだ。

続いて、「現在、ソーニャの栽培面積は少なく、まだ初期段階にあると言える。重要な要因は、ガラ、クイーン、ローズなどに比べて収量が低く、栽培管理が難しい品種だということだ。これが、中国への輸出量が少ない理由だ。今年は、最大10コンテナしか輸出できないとみている。多くの生産者は収量が少ないことから、ソーニャの栽培に積極的ではないが、Freshco 社の確固たる生産努力のお陰で、中国の消費者はソーニャの味を楽しむことができる。当社は、限られた供給量と優れた品質を持つソーニャをニュージーランド出身の人気スターにしようと考えている。消費者には様々な供給ルートで提供したい。同時に、他の国からもソーニャの供給を受け、販売期間を長く、できれば周年で販売したいと考えている」と語った。

イベントは、「獅子舞」が続き、聴衆や取引相手を魅了した。様々なパフォーマンスで陽気な雰囲気となった。

「Yuanxing Fruit 社によって、今年初めてのソーニャのコンテナが中国に入荷した。引き続き Freshco 社と協力して、ニュージーランドからの様々な高品質青果物を提供したい」と締めくくった。

59. 欧州でリンゴ、核果類に霜害発生

EUROFRUIT 電子版 (2017年4月25日)

週末に中部欧州を襲った霜害で、フランスからポーランドにかけてリンゴ、核果類に大きな被害がでた。



中部欧州は季節外れの低温により生育初期の果実は霜害に見舞われ、パニックが広がっている。影響を受けている国は、スロベニア、チェコ、クロアチア、ポーランド、オーストリア、ドイツ、ベルギー、オランダ、スイス、フランスである。

スロベニアの生産者は、リンゴへの影響について、「非常に悪い」と話している。「金曜日から土曜日にかけての低温は、深刻な被害をもたらした。正確な被害は、数日たないと分からないが、良い状態とはとてもいえない。昨年霜害で80%の損害があったが、それよりもっと悪いのではないか」とのことだ。

ポーランドでは、季節が暖くなる前の4月中旬にはマイナス6度という低温に耐えたが、再び週末の霜害に遭遇した。「甘果サクランボの80%が被害を受け、酸果サクランボも相当な被害を受けている。スモモ、ナシ、リンゴにも被害でると見込まれるが、現時点では予測は時期尚早だ」と Rajpol 地方の生産者は語っている。彼は、これら果実の損害は15~20%止まりであって欲しいと期待している。「開花は始まったばかりであり、蕾状態のものが沢山残っている。このため、被害は限定されるのではないか。しかし、葉や樹体の状況は良くない。ポーランドではここ数日は暖かいが、週末はまた寒くなる。この気温変動が樹体にストレスを与え、果実生産にも影響するのではないか」とも話した。

チェコの果樹生産組合によると、霜害でサクランボ、アンズ、その他核果類に深刻な影響を及ぼしたが、生産への影響は相当程度まぬがれるのではないかとのことだ。「開花期が早いアイダレッド(リンゴ品種)やジョナゴールドにはある程度の被害があるだろうが、まだ被害を予測するには早い。おしなべて、降霜により相当な被害を受けた昨年ほどではない。生産者は被害を最小限に防ぐため、藁を燃やし、その他の多くの努力を払っている。まだ、困難を乗り越えたという状況にはないが、リンゴが寒気によるダメージを乗り越える可能性はある。ただ、さらなる霜害を受けるリスクもある」と語っている。

オーストリアに本拠を置く会社の栽培管理責任者は、現時点で被害の程度を計ることは困難だとし、「オーストリア南部の Styria はリンゴと核果類の主産地であるが、同地の情報を集めている。リンゴに関しては50%の被害を受けていると推定される。現在のところ、海拔350~380メートルの果樹園ではまだましなように見える。核果類に関しても同様の状況だが、多くの生産者は果樹園を暖める努力に成功している。そして、被害を受けたとしても、多くの生産者は保険でカバーできる」と語った。

著者: Tom Joyce

60. リンゴ新品種ルビーフロストは販売好調でシーズン終了

FreshPlaza 電子版 (2017年4月24日)



は語っている。

Crunch Time Apple Growers 社(ニューヨーク州)の人気品種ルビーフロスト(RubyFrost®)は成功裏にシーズンを終了し、小売業者は販売を終了した。

自らルビーフロストを生産し、同社の販売委員長を務める Russell 氏によると、生産者は小売の実績に大変満足しているとのことだ。

「生産量が増加したため、より多くの店舗で販売することができ、小売店からは再注文が多く販売を早く終わることができた。今年のルビーフロストの品質は素晴らしく、期待に応えるものであった。この品種はルビーのような赤い色と甘さと酸味のバランスが絶妙で、パリパリ感のある歯ごたえが評判だ」と氏は

ルビーフロストの販売プランでは、店頭でのデモンストレーションに力点が置かれ、全米の小売店で試食品が提供された。中西部では小売チェーン Cabot Creamery 社と提携して、同社得意のチーズとともに販売が行われた。Crunch Time Apple Growers 社のビジネスマネージャーによると、消費者、小売業者とも、店頭での試食に対して大変好意的な反響があり、お陰で販売量が増加したという。販売プランには、広告に対するインセンティブの付与、デジタルクーポンの提供も含まれており、消費者の認識を高めるとともに、消費者及び小売店のルビーフロストファンを増やすこともできたそうだ。

「このリンゴに対しては信じられないほど消費者と小売業者からの需要が強く、来シーズンは生産量が増えることから、この勢いは更に続くだろう」と Russell 氏は語っている。

コーネル大学の研究者により育成されたルビーフロストは、Crunch Time Apple Growers 社だけが生産を行っており、消費者に満足してもらおうと、厳格な出荷基準を設けている。ニューヨーク州の同社に属する145の生産者が2011年に植栽を始め、2013年に初めてスーパーで販売された。

新規に植栽された果樹園が成長し、実を結んでいることから、生産量は毎年急速に拡大している。

情報源: www.crunchtimeapplegrowers.com

6 1. 2016年カリフォルニア州のブドウ栽培面積

The Packer 電子版 (2017年4月21日)

4月20日に公表されたカリフォルニア州食品農業局と米国農務省の調査結果によると、2016年の生食ブドウ栽培面積は12.3万エーカーで、全ブドウ栽培面積89.7万エーカーに占める割合は13.7%であった。(注:1エーカー=0.405ha)

全ブドウの栽培面積は、2015年の91.8万エーカーから2.3%減少した。

生食用ブドウの栽培面積は、2015年の12.4万エーカーから0.8%減少したが、2014年に比べると2千エーカー、1.7%増加している。

主な品種の2016年の栽培面積は以下の通りである。()内は2015年の面積

- Flame seedless 15,499エーカー(16,530)
- Crimson seedless 9,387エーカー(10,564)
- Red globes 7,923エーカー(9,644)
- Scarlett Royal 7,254エーカー(6,706)
- Sugraone 5,069エーカー(5,108)
- Autumn King 6,111エーカー(5,386)
- Autumn Royal 4,453エーカー(4,548)
- Cotton Candy 406エーカー(54)
- Sweet Globe 245エーカー(78)

干しぶどうの2016年の栽培面積は17.2万エーカーで2015年の18.6万エーカーから7.5%下回った。

ワインブドウの栽培面積は60.2万エーカーで、うち56.0万エーカーが結果樹面積、4.2万エーカーは実結果樹面積であった。

カリフォルニア州食品農業局は、米国農務省農業統計サービス太平洋地域事務所に協力して面積調査を行っている。詳細な情報は www.nass.usda.gov/ca から入手できる。

6 2. 世界の青果物の貿易動向

FreshPlaza 電子版 (2017年4月17日)

過去10年の生鮮果実・野菜の貿易額の伸びは、全製品の貿易の伸び率よりも大幅に大きい。ユーロベースの貿易額で見ると、過去10年間に、生鮮果実・野菜の輸出額は、全体の貿易輸出額の平均伸び率より8%高かった。昨年の世界の果実・野菜の輸出額(再輸出による重複を含む)は、1,000億ドルを超えた。ただ、この数字は世界全体の輸出総額である15兆ドルに比べれば、控えめな数字である(全体に占める割合は0.7%)。

大不況による貿易の影響

過去10カ年の分析によると、生鮮果実・野菜の貿易は大不況であった2009年以降、さほど影響を受けていない。一方、世界の貿易総額は2009年には相当に落ち込んだ。果実・野菜の世界の貿易は、2009年には前年とあまり変わらなかったものの、それでも増加したのだ。

貿易量で見ると、過去10年、果実・野菜の貿易量は、毎年3%増加している。この率は世界の人口の最近の伸び率である1.2%よりも大きい数字だ。

様々な品目で輸出入の鍵を握るオランダ

オランダは多くの果実・野菜の品目で鍵を握る国である。量で見ると、オランダは果実・野菜貿易で4番目の国である。スペインは世界の輸出の中で最も重要な国であり、次いで、メキシコ、中国と続く。オランダは生鮮野菜では最大であり、生鮮果実では第9位を占めている。

スペインは多くの品目で第1位を占めており、主要品目のうちナンバーワンは(オランダに比べ)9倍多い。一方、オランダのナンバーワンは4品目である。オランダがタマネギ、トマト、キュウリ、ピーマン、キャベツで輸出が多いことはさほど驚くべきことではない。しかし、オレンジ(第7位)、ブドウ(第6位)、パインアップル(第3位)、メロン(第7位)、ニンニク(第4位)、マンゴー(第6位)、アボカド(第3位)、キウイ(第7位)、グレープフルーツ(第5位)、パパイヤ(第9位)などでも順位が高いのは目立つことだ。オランダの重要性は、再輸出が多いことにある。

(世界の)主な輸入国は、米国、ドイツ、ロシア、英国、フランスである。オランダの世界全体に占める輸入の割合は4%を超えており、野菜で2.7%、果実では5%以上を占めている。輸入で際立っている品目は、オレンジ(第2位)、タンゼリン(第6位)、ブドウ(第3位)、パインアップル(第2位)、レモン(第4位)、メロン(第2位)、アボカド(第2位)、マンゴー(第2位)、グレープフルーツ(第1位)である。

アジアとアフリカの成長

多くの成長市場がアジアにあり、中国が主導している。アフリカ市場も果実・野菜にとって益々重要になっている。一方、湾岸諸国の増加率には失望している。過去10年の平均増加率が5%であり、アジア、アフリカよりも劣っているからだ。

輸入に関しては、中国が際立って増加している。過去10年で、中国の果実・野菜の輸入は年平均15%の伸びを示した。外来の品目やバナナが主要な輸入品である。これに比べて、EU諸国では果実・野菜の輸入増加はわずかであった。オランダが唯一の例外で年平均4%の伸びを示したが、EU全体では1%の伸びであった。

6 3. 米国の認定有機農業事業者数は増加が続く

FreshPlaza 電子版 (2017年4月20日)



米国農務省が本日公表した最新の数字によると、有機産業は引き続き成長を続けており、米国内の認定有機農業事業者は24,650、(米国市場で販売を行っている)海外の事業者を含めると37,032に上るとのことであった。

国内の認定有機農場や有機生産会社を2015年末と2016年末で比較すると、13%増加している。このように、2016年1年間で有機産業界は2桁拡大した。有機農業事業者数は統計を取り始めた2002年以降、一貫して増加しており、2016年の増加率は2008年以降最大であった。

有機認証制度は、認証を受けたいとする事業者が自主的に申請するもので、官民のパートナーシップの下で管理されている。米国農務省は、約80の企業及び州政府が直接認証できるよう、これらを認可し、また、監視している。加えて、農務省は拡大する有機市場に対応できるよう、有機農業を志す生産者に対して教育資源を提供している。この中には、有機認証を得るための、また、維持するための方法を理解するための双方向ビデオ通信、有機認証を獲得することによる価値を示したファクトシート、有機基準に関する明快な説明資料などが含まれている。

認定された農場や会社のリストは、農務省が認定した認証機関が運営するデータベースを通じて入手することが可能である。2015年に発足したこのデータベースを利用することで、農務省が定めた有機シールを貼付できる有機農業事業者を特定できるようになり、偽装表示を防止することが可能となった。加えて、データベースは有機製品を取引する売り手と買い手の間のサプライチェーンを接続する上でも有効に機能している。

情報源: ams.usda.gov

6 4. チリは好調の下にサクランボの販売を終了

FreshPlaza 電子版 (2017年4月19日)

先週、チリ生鮮果実輸出者協議会 (ASOEX) 会長は、2016/17年シーズンのサクランボの販売は、好調の下に終了したと語った。輸出先市場は、ブラジル、米国、韓国、日本、中国である。会長は、この報告をサクランボ委員会会長、チリ貿易振興局 (ProChile) 等に行った。

「今回、新たな販売促進活動を行うと決まったとき、正しい選択であると確信した。大変ユニークで、500万ドルを投じたこの活動は、特に中国の消費者に焦点を当てて行われた。初年度の結果は良好で、例えば、小売販売額は65.5%増加した」と会長は話している。

「初年度の成功を踏まえ、業界として5年後には16万トンを輸出するという計画を達成するため、継続して活動を実施することが不可欠であることが明らかになった」とも語った。

中国

中国はチリのサクランボ輸出の82%を占めており、世界の果物輸出の最大のターゲットである。従って、販売促進活動はこの中国を中心に行われた。ASOEX のアシスタントマネージャーによると、プレミアムな果物であるサクランボ販売促進のスローガンは、「どれも食べる価値がある」だという。スローガンは新鮮さ、果実の大きさ、果皮の赤さを強調したものであり、いずれも中国市場では高く評価される特性である。

「中国での販売促進活動の目標は、これまでの顧客に対して購買頻度を増してもらうだけでなく、新たな消費者を開拓するものであった。加えて、『チリサクランボ』ブランドがメインの供給先と認識してもらうことを目指したものであり、第一段階では達成できた。活動は37都市と22地域で行われ、9,100万人の消費者を対象とした。活動は2016年の11月から始め、今年2月中旬まで続けた。独身の日 (11月11日) に先行販売を始め、活動を強化し、クリスマス期間にはフラッシュモブ (公共の場でのパフォーマンス) のような活動が人気を博した」とアシスタントマネージャーは語っている。

副マネージャーによると、小売店での試食会、展示会だけでなく、戦略的な宣伝活動として、北京の地下鉄、マンションのエレベーター、オンラインテレビ、ビルの照明の活用、交通量の多い場所での宣伝活動にも力を入れたという。「新たな販売促進活動の初年目として、中国では良い成果を残した。しかし、もっと重要な成果は、活動を改善するにはどうすれば良いかを学んだことである。消費の拡大速度を上げるにはもっとやるべきことがある。活動を成功させるためには、まだ道半ばであり、継続しなければならないことを認識することだ。ProChile は翌年も支援することを約束している。成果を業界全てに示し、輸出業者を集めた会合を開き、国家プロジェクトともいえるこの取組みに引き込むことが大事だ。そうすることで、将来にむけて更なる挑戦をすることができる。この活動に興味を持つ種々の団体を取り込み、中国における将来の活動を練ることが必要だ」と話している。

中国の小売業、オンライン販売業者からも、今回の販売職新活動は高く評価されている。商品の注目度が高まり、販売も増加したからだ。このため、活動を継続する必要性について同意している。

「販売促進活動は成功だった。チリのサクランボ広告は都市部の多くで見られた」とJD.com社のマネージャーは語っている。また、T-mall -Fresh社は「メディアでの宣伝で、会社の売上も増加した。また、新しいコンセプトを生み出すことにもなった」と語っている。「シーズンを通してチリのサクランボは品質が優れていた。店頭での販売活動も好調だった。昨年より20~30%販売が増加した」とPagoda社の総支配人も語っている。

「店頭販売活動のお陰で、昨年比べて今年の販売は大きく増加した。販売促進活動は (従来に比べ) より多くの都市や店舗で行われた。活動が行われなかった店舗に比べると販売額は大きな差があった」とウォルマート中国の仕入れ支配人は話している。

その他の市場

2016/17年のチリの販売促進活動は、その広範さ、多数の都市で多くの消費者を対象としたこと、その活動の内容が高度であったこと、等から際立っていた。ブラジルと米国では、主要な小売店の店頭で活動が行われた。またソーシャルネットワーキングを使い、ブラジルで1万1千人に、米国では63万人に訴えることができた。

韓国は、チリのサクランボにとって新しい市場であるが、E-mart のようなスーパーに重点を置いて活動が行われた。同国では在韓チリ大使や ProChile のソウル所長が自ら販売促進を行った。韓国での活動の目標は、品質、安全性、健康に良いことをアピールするだけでなく、「チリ産のサクランボが手に入る」ということを周知することにあるという。

Asoex の代表部は、韓国と日本市場に関して、今後数ヶ月にわたり消費者調査を重ね、潜在的需要の可能性を確認すると語っている。

情報源:asoex.cl

6 5. 中国 大連のサクランボは盛り

FreshPlaza 電子版 (2017 年 4 月 18 日)



「年明けからの気温上昇により、収穫時期は2週間前倒しとなった。収穫は2月早々から始まった。しかし、天候の影響で大連のサクランボ生産量は(昨年より)約50%少ない見込みだ。サクランボの温室栽培面積は増加しているが、温室栽培であっても生産量は減少するようだ」と Dalian Jinfuhui Fruit Industry 社の Zhang 氏は語っている。

「大連地方では温室を加温、冷却することで、7月初旬まで供給を継続できる。後半に出荷されるサクランボは主に Paotai 地域で生産されるものである。最高の産地と言われる Delisi 地域のサクランボは既に生産が終わっている。

市場供給量が減少したことで、販売価格は昨年よりも30%高くなっているとのことだ。

同氏によると、「大連の生産農家全てと協力して、注文販売システムを開発した。扱っている品種は数種類ある。現在は主にスーパーとの間の販売チャンネルを利用しているが、少量は上海の卸売市場にも出荷している。将来はこの素晴らしい大連のサクランボを中国全土にオンライン販売で提供したい」とのことだ

情報源:Dalian Jinfuhui Fruit Industry



サクランボ大連は大きくて明るい色をしている



66. ニューージーランドリンゴのジャズとエンヴィー

ASIAFRUIT (2017年3月号)

ジャズ(Jazz)とエンヴィー(Envy)という強力なブランドにより、T&G Global 社(ニューージーランドの輸出・販売会社)のビジネスは明るい。

同社ではジャズのブランド再構築を踏まえた販売活動を2017年のシーズンから始める。同社のゼネラルマネージャーの Drury 氏は、ブランド再構築に18ヶ月を要したという。選果場での包装、プロモーション活動、試食の提供、デジタルメディアの活用など種々のポイントをくまなく点検したからだ。



「ジャズは、世界で最高のリンゴの一つだ。世界の消費者にもっと知ってもらいたい。消費者調査の結果では、ジャズをプレミアム商品として維持しつつ、ブランドの活力を取り戻す方法が確認された」とDrury氏は語る。

ジャズはロイヤルガラとブレイバーンを交配して生まれた品種で、ニューージーランドの他、世界9カ国で生産されている。現在の生産量は6百万箱だが、2022年には1千~1千1百万箱に増加すると見られている。「この数量がプレミアムリンゴとしての地位を確保し、市場価格を維持する上で最適と見ている」とのことだ。

ジャズが商業生産を始めた2001年には、そのピリッとした(香辛料のような)甘さ、果実の香りから、英国、欧州、米国が主なターゲット市場だと考えられていた。しかし、アジア市場でも好評であることが分かった。特にタイである。タイでは T&G Global 社から独占輸入を行う Vachamon 社が需要を拡大する上で重要な役割を果たした。

「アジアの消費者に対しては、甘みが強くて赤いリンゴしか受け入れられない、という先入観があった。しかし、Vachamon 社はこの課題にチャレンジして良い仕事をしてくれた。つまり、店頭で正しい認識を消費者に伝えたのである」とDrury氏は語っている。

ジャズはこれまでの主要な市場である英国、ドイツ、米国でも消費は増加しているものの、T&G Global 社としては新しい市場である中国、ベトナム、日本のようなアジアに参入する機会を狙っているのだ。

「日本はジャズを受け入れてくれる潜在力がある。日本に輸出するためには、検疫上、25日間の冷蔵の後に燻蒸をしなければならないが、我々のパートナーの日本技術者は『素晴らしい品種だ』と言ってくれる」とDrury氏は述べている。

一方、エンヴィーはジャズに比べれば遅れて世に生まれた品種だが、急速にジャズに追いつこうとしている。「エンヴィーは会社にも成長をもたらしてくれる。素晴らしい品種で、北米、タイ、中国、ベトナムで成果を収めている。世界全体の生産量は2百万箱だが、2025年には1千万箱に達すると思う」とのことだ。

エンヴィーは、特に米国で良い成果を出している。ライセンス生産された果実は国内市場だけでなく、輸出も行われている。T&G Global 社では新たにワシントン州にオフィスを設け、活動を後押ししている。関係グループは選果施設などのインフラを整備し、米国内の販売や輸出の管理体制も構築した。

ニューージーランド国内でも T&G Global 社は新規園地の開設、選果施設等のインフラ整備に投資をしている。「毎年60~70haの面積が増加している。現在、ニューージーランドの販売の約1/3が我が社によるものであるが、2020年までにはこれを45%までに引き上げたい」とDrury氏は締めくくった。

著者:John Hey

67. オーストラリア カンキツは収穫が遅れるも収量は平年並

FreshPlaza 電子版 (2017年4月18日)



オーストラリア南部のカンキツ生産者は、収穫は例年よりも遅れて始まるものの、生産量は平年並みと見ている。

Seven Fields 社の管理部長によると、収穫は5月初旬から始まるとのことだ。「今年は、生食ブドウ、ワインブドウ、核果類など全ての果実で収穫が遅れた。これに倣えば、カンキツも遅れるだろう」とのことだ。

Seven Fields 社は、ミルデウーラ(ビクトリア州)、サンレシア(ビクトリア州とニューサウスウェルズ州に跨がる)に4カ所のカンキツ果樹園を所有、管理しており、オレンジ、レモン、マンダリン、グレープフルーツを生産している。

オーストラリアでは、夏に茹だるような暑さで40度を超える日もあったが、昨年と比べればこの気象条件はSeven Fields 社にとってそれほど大きな問題ではなかったようだ。

とはいえ、果実のサイズはミリ単位ではあるが、前年よりも小さいようだ。

「生産者は、今年は良いシーズンとなると期待している。しかし、いくつかの輸出市場は大きな果実を求めており、今年は大きな果実は多くない」と語っている。

部長は、秋に入って気温が下がることで、果実に甘味が増すことを期待している。

果実の価格がどのように推移するかを予測するにはまだ早いと、部長としては輸出による収益が鍵であると考えている。

「マンダリンは半分が輸出され、残りは国内市場に出荷されるが、オレンジは大部分が輸出される」と部長は説明している。「輸出市場は特に変わったことはない。米国は新大統領になっても市場には変化がない。幸い、輸出市場は例年と同様だ」と続けた。

シトラス・オーストラリアは、先週、これから収穫に向かう各州の情勢概要を公表した。

西オーストラリア州では、冬期の降雨量が例年より少なく、平均気温は平均を上回っているようだ。生産者の報告によると、着色が2~3週間遅れているという。

一方、クイーンズランド州は、黒点病等の発生も少なく、ミバエや spined citrus bug も少々見られる程度だという。

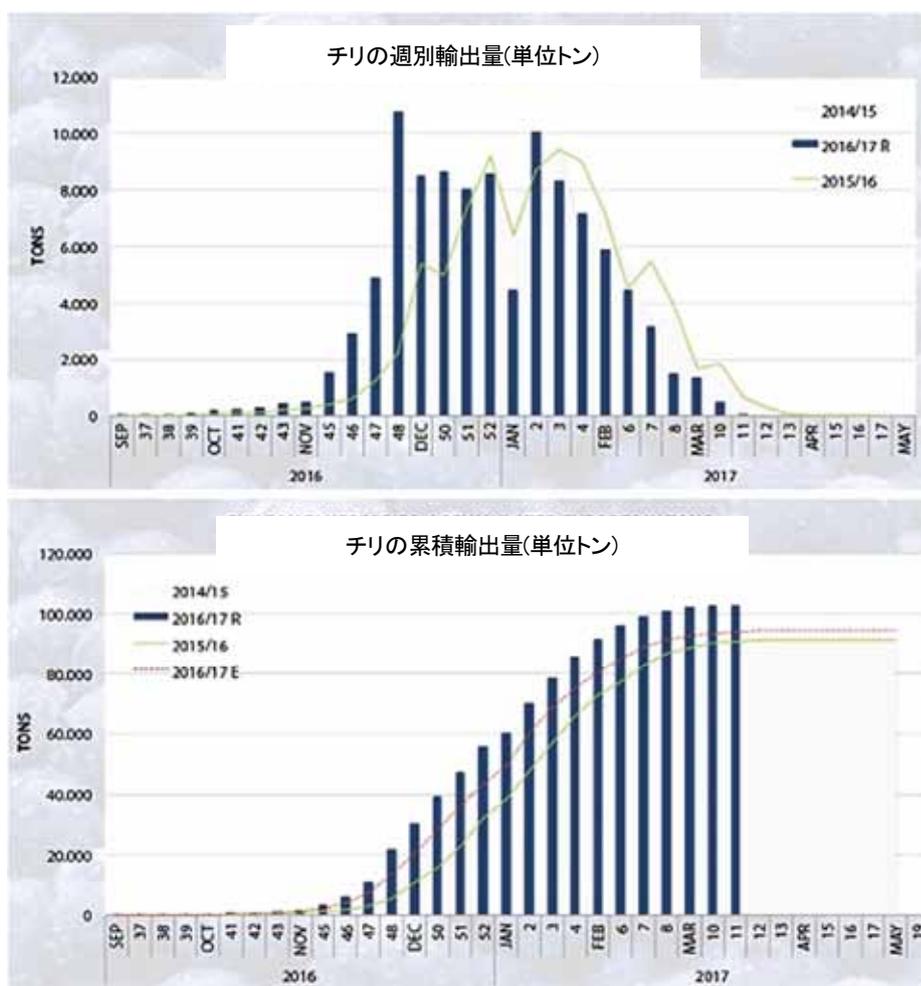
著者: Nichola Watson

68. 世界のブルーベリー市場

FreshPlaza 電子版 (2017年4月14日)



誰も確信しているわけではないが、ブルーベリーの消費は増加が期待されている。特に欧州では増加が見込まれる。一方、米国では業者は消費を拡大するための新たな方策を模索している。



チリでは輸出量が新記録

収穫時期は終了したが、まだいくらかの輸出向けのブルーベリーが国内に残っている。しかし、2016/17年の生産予測量に変更はない。輸出については予想を上回り、初めて10万トンを超えた。第11週目までの輸出総量は10.3万トンで2015/16年より13%上回った。また当初の予想よりも9%上回った。この歴史的記録により、アジア向けは54%増加、欧州向けは14%増加した。一方、北米向けは7%の増加であった。輸出先の割合は、米国向けは63%で、欧州向けが22%、アジア向けが12%である。

この他の今シーズン

の特徴は、2016年の第50週まで続いた高温である。このため、通常は出荷のピークは第50週であるが、今シーズンは第48週に前倒しとなった。この結果、第50週までの輸出量は前年を2.36万トン上回り、152%増ということになった。

2016/17年に大きく輸出が伸びた原因は、1つは米国でブルーベリー冷凍保管されたこと、2つめはシーズン後半に入って市場の出回り量が少なかったことである。後半に市場環境が良かったため、終盤に収穫されたブルーベリーは生食用として出荷され、通常見られるシーズン後半の輸出の減少は思ったほど大きくなかった。

市場を新規開拓するアルゼンチン

新規市場の開拓はアルゼンチンにとって重要な課題である。今年是中国が市場を開放すると期待している。国全体の生産量は増加を続けており、2017年シーズンは大きな期待が持たれている。

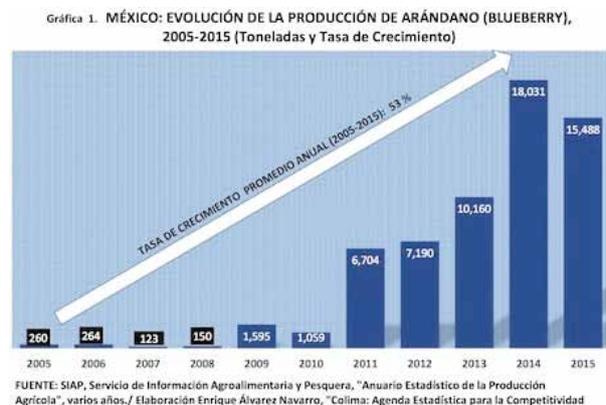
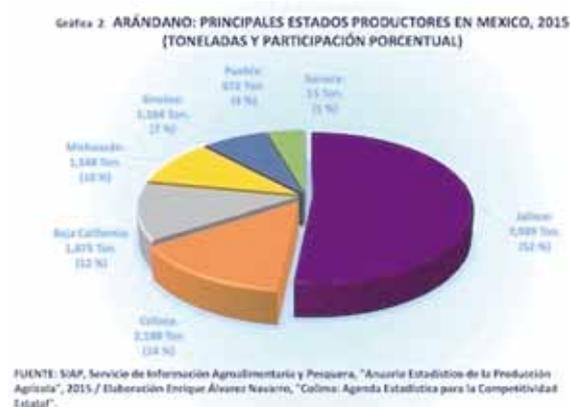
米国市場を目指すペルー

米国商務省の統計によると、ペルーの米国への輸出量は、過去5年で494.5%増加したようだ。このため、かつては米国市場を支配してきた他の国を追い落とす状況にある。他の中南米諸国がライバルではあるが、ペルーの輸出拡大で最も影響を被っているのはカナダである。

生産拡大を続けるメキシコ

最新の数字によると、2005年から2015年に掛けて、ブルーベリーの生産量は260トンから15,488トンへと増加した。これは年率53%増にあたる。主な生産地はハリスコ州7,989トン(52%)、コリマ州2,188トン(14%)、バハ・カリフォルニア州1,875トン(12%)である。2015年はこれら3州で78%を占めている。

コリマ州では、栽培面積は2012年から2015年にかけて222ha から306ha と年率11.3%増加し、生産量も年率18.5%増の、1,318トンから2,188トンに増加した。(同州の)出荷先は米国、カナダが主である。



左:メキシコの州別生産量 右:メキシコの年別生産量の推移

国内生産量が少ない米国

米国市場では供給量が少ない時期に当たる。チリからの輸入が終わり、国産品の生産が始まるタイミングだ。フロリダ州では3月から収穫が始まり、現在は出荷のピークを迎えている。カリフォルニア州は温暖な冬期を経て生産環境は良好である。一方、ブルーベリーの2大産地であるジョージア州とノースカロライナ州は霜害により大きな被害があった。大産地のジョージア州では3月に襲われた霜害で60~70%の減収の見込みだ。ジョージア州では4月15日から収穫が始まり、7月の第1週まで続くのが通例だ。ノースカロライナ州も霜害に見舞われ50~70%減収が見込まれている。同州の収穫は5月中旬から始まり、7月第1週まで続く。霜害により、5月15日から6月10日まで需給ギャップが生じると見られている。

豊作で価格が安い中国

中国ではブルーベリーの人気を着実に高まっている。消費者の注目を集めるようになった4～5年前は、500g当たり150元(20ユーロ)という高値であったため、農民はブルーベリーの生産に熱心に取り組み始めた。生産の大半が行われている山東省では、4年前に比べて少なくとも50%生産が増加した。国産のブルーベリーは4月25日頃に販売が始まり7月下旬まで続く。数年前から、高収益を期待して農民や生産会社が栽培面積を急速に拡大している。このような状況を受け、ブルーベリーの価格は着実に下落している。今年に関しては、栽培面積、生産量とも比較的安定しているため、市場価格は昨年と同程度ではないかと期待されている。中国ではもともとチリからブルーベリーを輸入している。今年の初めにはペルー産のブルーベリーが市場に出回った。

イスラエル: 極端な価格と消費の増加

イスラエルではブルーベリーの需要が増加しているため、ここ数年間、需給バランスが崩れている。輸入品の価格はキロ当たり15ユーロで、冷凍物は10ユーロであるが、国産品は20ユーロで販売され、不足時にはさらに25%価格が上昇する。毎年販売数量が増加しており、これだけの高価格でも消費者は購入を続けている。

イスラエルの生産者は需要を満たすために生産を増加させ、収益性の高いブルーベリーの生産の確立を図ろうと努力してきた。しかし、生産条件に問題があることで、この努力は実を結んでいない。現在、商業生産が行われているのは同国の北部で、冷涼な気候と栽培時期に暑さに遭遇しない場所である。生産者は、同国の気象条件に合った新品種の開発により、今後数年以内にブルーベリーの国内市場が成長することを願っている。しかし、これは直ぐ実現できることではなく、少なくとも数年は現在の市場環境、高価格が継続することになるだろう。

収穫シーズンに移行するスペイン

ウエルバでは、昨年は高温のため収穫時期が早かったが、今年は例年通りの収穫が始まった。一方、南半球からの輸入から国産の出荷への移行は大変流動的であった。価格が平準であった2ヶ月間の後、ウエルバ産の生産が増加したことから、価格は下落を始めた。ウエルバでは生産量は増加しているが、ブルーベリーはまだ新しい作物であり、栽培的にも販売上も(特性に応じて)様々な条件に適応しなければならないことを生産者は理解している。業界では、今シーズンも来シーズンも、供給過剰に陥りかねない不確実性があると見ている。ウエルバでは栽培面積も収穫量も増加を続けているが、市場はそれだけの量を吸収してくれるか心配されている。

良いシーズンを期待するイタリア

昨年(2016年)のピエモンテ州は、生産量、品質、価格に恵まれた良い年であった。ブルーベリーへの投資は増加を続けており、100haの増加が見込まれる。今年に関しては、開花期は順調で、現時点で特に問題はない。このため、生産量も価格も順調と見込まれる。収穫は5月に始まる。ブルーベリーの生産は国の北から南まで行われており、収穫期間も長い。カラブリア州も主要な産地である。

ノルウェーでは供給不足

業者によると、スーパーで価格を抑えた販売促進活動を行って以来、現在販売は上向きとのことだ。「しかし、ブルーベリーの販売促進活動は事態を悪化にさせた。何故なら、スーパーは125g入の容器(場合によっては2容器)を1.00～2.25ユーロの安値で販売したからだ。しかし、現時点では輸入業者は12容器入の箱を22.50ユーロで購入せざるを得ない厳しい状況だ。南半球産が減少している中で、需給ギャップが生じており、現在の高価格はモロッコ産、スペイン産が出回るまで続くだろう」とのことだ。

拡大するフランス市場

欧州の生産量は増加しているが、これはフランスを含めた欧州市場が拡大しているということだ。ブルーベリーを生産する大きな農場が同国にないため、今シーズンの生産量の増加は見込めない。生産自体は順調

に経過しており、生産量は3,000トンに満たないものの、昨年と同程度と見られる。国産の75%は輸出されている。フランス市場は需給のバランスが均衡している。フランス産の競争相手は、例えばオランダから入るブルーベリーだが、機械収穫された果実なので、フランス産よりも価格が安い。また、国産品は小売店に直接アクセスできるが、輸入品は不可能である。このため、当面、国産は輸入品との競争で保護されているといえよう。とはいえ、フランス産のブルーベリーにとって脅威なのは、ポルトガル、北部スペイン、ルーマニア、ブルガリアである。

新たなステップを踏み出すベルギー

他の国と同様にベルギーでも消費が拡大している。小売業界では、この機会を利用して、125gから500gまで様々な容器で販売を試みている。ベルギー市場への供給国は、スペイン、モロッコ、オランダ、ペルー、南アフリカ、チリである。

オランダ:需要がないのにスペイン、モロッコから大量入荷

現時点ではブルーベリーの需要はほとんどない。先週の消費者価格は125g入容器で1.30~1.40ユーロであったが、その後、価格は半減している。既に十分な供給量があるにもかかわらず、今後スペインとモロッコからの入荷が見込まれている。両国では生産が拡大しており、業者は両国からの輸入のピークである第16週~第19週の価格動向を心配している。

ポーランド:今後の気象状況で生産が決まる

天候が不安定であるため、今後の予測はつきがたい。ポーランドでは年初に凍害に見舞われた。その後、2週間温暖な気候で例外的にあっただけだ。今後も寒気に見舞われる恐れがあり、霜害を懸念している。主な輸出先は英国、ドイツ、スカンジナビアである。一部はアラブ諸国にも輸出されるが、現時点では量は限定的である。

生産に投資するアラブ首長国連邦

中東では需要が増加していることから、生産への投資も行われている。同国では2014年と2015年の間に消費量が7.6%増加した。供給量を確保するために、同国の会社は、国外、例えばモロッコやセルビアでの生産に投資を行っている。

著者:Sander Bruins Slot

69. 2017年の中国リンゴ市場は回復基調

FreshPlaza 電子版 (2017年4月13日)



輸出向け出荷(左) 輸出向けにラベルが貼られたリンゴ(右)

2016年の大半の期間において、中国のリンゴ市場は低迷していた。収量もさほど多くなかったが、品質が平均より悪かったため、販売は苦戦をした。

販売の低迷で生産者は落胆し、肥料への投資意欲も萎えるという状況であった。

事態が好転したのは2016年の下半期になってからで、販売数量と価格も徐々にではあるが上昇してきた。以上は、Dalian Golden Apple 社の輸出担当者のお話である。

「2017年は収量も良く、リンゴにとって良い年になるのではないかと。旧正月以降、リンゴの需要は大きく拡大している。また、今シーズンの価格については、昨年よりも10～15%上回っている。さらに、輸出についても、数量、品質とも向上している」とも述べた。

「我が社はリンゴの購入、貯蔵、包装、販売を専門に行う近代化された組織である。大連と運城に施設を所有している。また、協同組合と連携して『ゴールデンアップル』というブランドで東南アジア、ロシア、米国、カナダに大連港、青島港を経由して輸出を行っている。主な輸出先は、バングラデシュ、インドネシア、フィリピン、タイである。直近の輸出数量は、年9千トンである。取扱っている品種は、紅星(Hongxing)、Huaniu、Jinshuai、フジ、国光である」とのことであった。

情報源: www.appledalian.com

70. 豊作を期待するカリフォルニア州のサクランボ

ASIAFRUIT 電子版 (2017年4月12日)

カリフォルニア州のサクランボ生産者は、数年続いた干ばつの後に昨年は豪雨に見舞われてきたが、今年には豊作を期待している。

カリフォルニア州では、州の歴史上まれにみる干ばつが続き、昨年は4月と5月に相次ぐ豪雨に見舞われたため、多くの作物で被害を被った。

昨年の唯一の救いは、レーザー光を用いた選果識別装置の導入で、様々な出荷形態に対応できるようになったことだ。

「昨年、業界としては800万箱(注:1箱20ポンド/約9kg)の収穫を見込んでいたが、収穫期に10回あった降雨が生産者を見捨てた」と Primavera Marketing 社の Calder 氏が語っている。

このため、今年、カリフォルニアのサクランボ生産者は幸運(豊作)を求めている。平均の法則(悪いことが続いた後はよいことがある)に則れば、今年は量だけでなく品質も良いはずだ。

「今のところは果実の出来はかなり良い。良いのだが、大豊作ともいえない」と Stemilt Growers 社の Martin 氏は3月末に語った。氏は、まだ残りの生育期間の天候が読めない以上、収穫量を予測するのは時期尚早と感じたからだろう。

今年の冬は、州の歴史上まれにみる湿潤な気候であったため、業界には春の天候の予測に関してとやかく断言する人はいない。ただ、初収穫が4月の末で、5月には収穫量が増加するとの期待を持っている。

「5月の第1週はパレット単位程度の出荷量で、8日の週には毎日2万箱の出荷に増加する。そして5月26日までは大幅に増加し、その後は急速に減少するだろう」と Martin 氏は見ている。氏によると、カリフォルニア州の出荷が終了した後、米国北西部産のサクランボの出荷は6月8日頃まで始まらない。だから、この間に需給ギャップが生じる恐れがあるという。

天候の神様がこの春に優しく接してくれるなら、カリフォルニアサクランボ委員会(CCB)はアジアの複数の市場で販売促進活動を行う予定とのことだ。「今シーズンは中国、日本、韓国で販売活動を行いたい」と輸出担当マネージャーの Hooker 氏は語っている。この活動には、種々の小売チェーンでの店内販売活動や試食会などが含まれる。中国では、2つの電子取引会社でも活動を行うとのことだ。また、韓国ではテレビショッピングのネットワークを使うようだ。「日本では店内販売活動に重点を置くが、一部の小売会社では『販促用品』としての販売を考えている。また、栄養上のメリットを売込む予定もある。いつ頃、販売促進活動を行うか、については明確になっていないが、シーズンで最も出荷量が多い5月半ばになると考えている」と氏は語っている。

著者: Jeff Long

71. カンキツグリーニング病に対抗する遺伝子組換えウイルスの環境影響評価

The Packer 電子版 (2017年4月7日)

カンキツグリーニング病に対抗するために作出された遺伝子組換えウイルスの環境影響評価が米国農務省により行われる見込みだ。

農務省は、遺伝子組換えされた「カンキツトリステザウイルス」の環境影響評価を行う旨の告知を4月10日に発表するとのことだ。

フロリダ州トレントンに本拠を置く Southern Gardens Citrus Nursery LLC (育苗会社) は、遺伝子操作されたウイルスを放出することに関する承認申請を行った。プレスリリースによると、同社はカンキツグリーニング病を防御するための「生物制御剤」として認可を申請したとのことだ。

本件に関しては、農務省が環境影響評価書を作成する意図に対して、5月10日までに意見を申し出ることができる。当局によれば、(その後作成される)環境影響評価書に対してはパブリックコメントを受け付ける予定とのことだ。なお、農務省は環境影響評価書がいつまでに作成されるかについて明らかにしていない。

著者: Tom Karst

72. チリ産果実が中国市場で成功する理由

FreshPlaza 電子版 (2017年4月5日)

3年間の交渉の末に、2016年11月下旬、チリ産ネクタリンの中国輸出が許可された。これで、アンデス諸国から中国に輸出できる果実にネクタリンが加わった。既に輸出されているサクランボ、リンゴなど同列となったのである。そして、中国のスーパーや電子商取引の中で存在感が更に増した。

中国の消費者にネクタリンを提供するため、チリの中国担当商業顧問 Pierotic が、北京で3月下旬に開催された式典の司会を務めた。参加者にはネクタリンの他、アボカド、タパス(小料理)が振る舞われ、チリの伝統的な踊りが披露された。

この式典はチリ貿易振興局(ProChile)が主催したものだ。同局はチリ産の商品、サービスの輸出、海外投資の拡充、観光振興の任を負っている組織だ。

最初に輸出された中国向けネクタリンの大部分は、チリで最大の核果類生産会社である GESEX 社によるものである。同社の中国担当マネージャー Matamala によると、現在輸出しているのは黄色の果肉が白い品種で、(チリ産と)識別できて品質を保証するために、1つずつバーコードを貼付しているそうだ。

チリと中国は2005年に自由貿易協定を結んで以降、サクランボ、ブルーベリー、キウイ、スモモ、リンゴ、ブドウ、アボカドなどチリ産の様々な果実がアジアの巨人と言われる中国市場で人気を博した。そして多くのスーパーや Tmall、アリババグループ、JD などの電子取引で扱われている。

在中国チリ大使館が先頃公表した資料によると、2016年にチリからアジア諸国に輸出された果実は、総額で12億ドルに達し、前年を22%上回ったそうだ。これは、中国への最大の輸出国であったタイにとって代るものだという。

何故チリのような遠い国からの果実が中国市場で高いプレゼンスを示すのだろうか。Matamala 氏によると、チリの最大の利点は季節が逆であるからだそうで、「中国が冬の時は、チリでは夏だ」と話す。

「ネクタリンの輸出は11月に始まり3月末まで続くが、その後は中国産のネクタリンが販売され、消費者としては年間を通して購入することができる」とのことだ。

「これにより、地元産との競合を避けることができ、加えて GESEX 社では、中国で最も盛大な祝日である旧正月に同社のブランドを宣伝することができる」としている。

チリは複雑で多様性のある気候のお陰で、沢山の種類の果実を栽培することができる。Pierotic 氏によると、中国の消費者はチリ産の果物が、「清潔で安全で健康的だ」と信じているという。

氏によると、チリの農産物は、生産段階、梱包段階、輸送段階でそれぞれ厳しく監視されており、汚染されていないので、他の南米諸国よりも多くの種類の果実を中国市場に輸出できるとのことだ。

チリは1970年の後半、南米諸国で初めて中国との外交関係を結んだ。その後両国間の関係は急速に深まり、2005年には自由貿易協定が締結された。さらに、2015年には二国間通貨スワップ協定を結び、2016年には包括的戦略パートナーシップの確立を公表した。

今日、中国はチリにとって最大の貿易相手国であり、最大の輸出入国となっている。また、中国としては中南米で3番目に大きい貿易相手国となっている。

Matamala 氏は、「長年かけて諸手続が簡素化され、中国に農産物を輸出しやすい環境となっている」という。

Pierotic 氏は、「より多くの果実を中国の消費者に届けたいと願っており、その努力を行っている。現在、ナスの輸出が行えるように進めているが、中国市場で成功するだろうと考えている」と語っている。

一方、自由貿易協定にもかかわらず、中国市場ではチリ産果実が輸送コスト等の関係から高価格で販売されていることには留意する必要がある。例えば、ネクタリンの場合はキロ当たり35元(約5ドル)で販売されているが、国産よりも7倍高い値段である。この結果、消費者の中には購入を控えるものも多い。

「将来、チリ産の果物がより多く輸入されるようになると、価格も下がるかも知れない。となると、間違いなく私のようなグルメな中国人には大きなメリットである」と国有企業を退職した Han 氏は述べている。

73. ペルーの洪水で農業に6.45億ドルの被害

AMERICAFRUIT 電子版 (2017年4月10日)

政府は被害を受けた生産者に数百万ドル規模の緊急支援を行うことを承認した。

ペルー農業会議所(Conveagro)によると、今回ペルーを襲った洪水で農業、畜産業に少なくとも6.45億ドルの被害があったとのことだ。

会議所は、その声明の中で、豪雨と洪水により、9.2万ヘクタールに被害があり、主にバナナ、サトウキビ、コメの被害が大きかったとのことだ。

(訳注)米国農務省海外農魚局 GAIN レポート(4月10日公表)によると、最も被害が大きい作物は、バナナ、ブドウ、ニンニク、オリーブ(ただし詳細は不明)と記述されている。



また、エルニーニョが原因で12月から始まった降雨に引き続き豪雨と洪水で、道路の損壊又は破壊が6,000kmにも及んでいる。

会議所の会長によると、「被害を受けた大部分の人達は小規模な生産者であり、負債に対するゼロ金利の資金貸し付けか、負債額の減免を求めている」と語っている。

ペルーの閣議は、農業大臣から提案された被害者を救済するためのプログラムについて、4,200万ドル支出することを緊急決定した。

このプログラムには水路や貯水池などの損傷を受けたインフラを改修するために2,900万ドルを緊急配分すること、被害を受けた作物に対するヘクタール当たり307ドルを支払うこと(ただし、最高額は1,231ドル)が含まれている。

さらに、被害を受けたバナナ、レモン、マンゴー、その他果樹の改植するための資金も準備されている。

74. 米国北西部のサクランボ収穫はシーズン後半が中心

The Packer 電子版 (2017年4月5日)



米国北西部のサクランボは6月に出荷が始まるが、ピークは7月で、8月の供給量も多い見込みだ。

生産予測はまだ行われていないが、ワシントン州ヤキマの北西部サクランボ生産者協会会長は、2千万箱収穫できる条件が整っていると見ている。

「北西部は24年ぶりに寒い冬を迎えた」と4月5日に会長は語り、標高の高い果樹園ではまだ数インチの雪が残っており、北西部のサクランボの収穫時期は2016年に比べて随分と遅くなる見込みだともコメントした。

「これまで3月下旬に開花することはしばしばあったが、今年はこの地域でも開花していない」とのことだ。

会長は、収穫は6月第1週の後半から始まると見ている。2016年は5月15日から収穫が始まったが、これは今までにない早さだったようだ。

4月の始めの段階で、北西部の生産者は収穫量を約2千箱と見ている。2016年は2千1百万箱の収穫量で、2014年には過去最高の2千3百万箱を記録した。

会長は、6月の収穫開始以降、出荷のピークは7月となり、8月にも相当量が出荷されるだろうと発言している。

「過去2カ年間、8月の出荷量は20万箱から50万箱であった。今年は200万箱以上の水準となるのではないかと語っている。

会長の話では、カリフォルニア州産(注:北西部には含まれない)のサクランボの収穫は、通常の時期に7～8百万箱と見込まれるが、今年は北西部産とは競合しないだろう、とのことだ。

著者: Tom Karst

75. 世界のリンゴ市場

FreshPlaza 電子版 (2017年4月7日)



ニュージーランドからの欧州市場への出荷は若干遅れているが、欧州ではまだ前年産のリンゴが販売されている。ポーランドでは、生産者が終盤の販売を再開することを決定した。ジョナゴールドに関しては、オランダの業者も関与する激しい競争市場となっている。ベルギーとフランスでは、昨年の雹害の影響で貯蔵量が少ないが、流通業者からは歓迎されている。スペインは貯蔵量が豊富であり、イタリアは楽観的な状況である。輸出は厳しく、北アフリカが輸入を控えており、ロシアは依然として市場を閉ざし、アジアでは米国との競争が遜色ない状況である。米国は貯蔵量が豊富であるため、輸出に力を入れており、インドを含めて様々な輸出先を求めている。貿易業者は輸入量の増加に満足している。

マケドニアでリンゴ栽培に投資

マケドニアのリンゴ生産者はロシアと良好な関係を築いてきた。ロシアが欧州を対象に輸入禁止措置を講じて以降、マケドニアにとっては(欧州との)競争が緩和されたことから利益を得ている。マケドニア政府はリンゴ生産者の商業生産活動を支援しており、国際市場の中で競争力を高めようと狙っている。同国のリンゴ主要品種はレッドデリシャス、ゴールデンデリシャス、アイダレッドである。次期シーズンの開始はまだまだ先の9月又は10月初旬である。従来からの品種の価格は安く、キロ当たり30セントであるが、シーズン当初の価格はキロ当たり40～50セントで取引される。

ロシアの輸入禁止措置から回復したポーランド

ついに販売が再開された。生産者は価格の上昇を期待して、ここ数ヶ月は貯蔵をしいたが、販売再開に至った。業者によると市場での品質は向上しているようだ。ロシアへの不法な輸出は少なくなってきている。業界ではロシアの輸入禁止措置は長期化し、既にロシアからのポーランド産の需要はないと見ている。流通業者によると、「ポーランド産リンゴは独自の品質を持っており、店頭にはリンゴが潤沢にある」そうだ。一方、輸出業者はポーランド産リンゴに興味を持つ中国、インドへの輸出を狙っている。

業者によると、次期シーズンも今年と同じく供給過剰になることは確実と見ている。これまで天候は順調であり、予測するには早いものの、事情が変わらなければ豊作になると見通している。「ロシアの輸入禁止措置が

ら回復した、という理由は、輸出量が輸入禁止措置の講じられる前より増大したためだ」、と業者は語っている。

生産量は少ないものの増加しているポルトガル

イベリア半島のポルトガルは他の国に比べるとリンゴ市場に占める割合は小さい。生産量に関しては、フランス、イタリア、スペインなどに比べて少ない。リンゴのシーズンもこれらの国と同時期であり、7月中旬に始まり3月まで続く。現時点では、貯蔵量は少なく、輸出に向ける量はない。主要品種はロイヤルガラである。

生産者にとって国内市場は大きな存在であるが、ブラジル、英国、アイルランド等への輸出も行われている。輸出業者によると、過去2カ年はアラブ首長国連邦へも輸出が行われたそうだ。業者はリンゴを高く買ってくれる国に輸出する傾向があるとのことだ。(ポルトガル産リンゴは)色調が良く、パリパリ感があるので高値で取引できるようだ。毎年、リンゴの生産量は数パーセントずつ拡大している。

貯蔵量が少ないフランス

貯蔵量は昨年より6%少ないが、生産量が7%少なかったので不思議ではない。ただし、温度制御ができる貯蔵庫での保管量は4%多い。2月の段階ではゴールデンデリシャスの価格は過去5カ年平均より3%高かった。しかし、アルジェリアへの輸出が止まったため、価格は3%下落した。ガラの価格は安定している。

9～10月のシーズン当初は高価格で始まり、11月まで高値が続いた。しかし、12月に入りクラブ品種を除いて需要が減少した。欧州市場では、フランス産はイタリア、ポーランドと競争関係にある。ガラやサイズの大きいリンゴはゴールデンデリシャスやグラニースミスよりも販売は好調であった。

高品質エルスターは高価格だがジョナゴールドの販売に苦戦するオランダ

オランダでは高品質のエルスターは高価格で販売されているが、「クラス1(規格)」を除くエルスターの平均価格は低くなっている。業者によると貯蔵もののエルスターは即座に販売されるそうだ。なお、エルスターの輸出には関心がないようだ。対照的なのはジョナゴールドである。ポーランド産のジョナゴールドが豊富にあるため、市場では競争が激しい。オランダにとってはポーランド産のリンゴの増大が脅威となっている。業者によると、オランダは想像できない(安い)価格でポーランド産のジョナゴールドを大量に仕入れたそうだ。このため、大きいサイズのエルスターの価格の方が、同サイズのジョナゴールドよりも価格は高い。業者によると、在庫量が少ないことから国産の切り上がりが早くなったとしても問題はないと見ている。こういった事情で、加工業者は底値を設定している。このような中、ニュージーランド産のリンゴが市場に到着したが、同国がアジア向け輸出に焦点を当てていること、降雨により収穫、選果が遅れていることから市場への影響は限定的である。

楽観的だが慎重なベルギー

ベルギー市場は順調である。昨年の市場は硬直した状況であったが、今年に入って好転した。業者によると、これは他国の供給量の不足によるという。ベルギーもシーズン当初は数量が少なかった。6月の雹害の影響があったためだ。10月には貯蔵量が30%少ない状況であった。1月には行ってインドがベルギー産の輸入を解禁した。これは昨年よりも1ヶ月早いものであった。インド市場は赤色の品種の需要が強く、レッドプリンス、ジョナゴールドが健闘した。

業者によると、現下の状況(高価格)は主に欧州の収穫量が少ないお陰だという。今シーズンの欧州の収穫量は1,200万トンであったが、被害がなければ1,500万トンに達していたと見込まれる。この300万トン分を市場が受け入れる余地はなく、仮に被害がなければ、リンゴ業界は災難に見舞われていた、と関係者は話している。

新たな市場を求めるイタリア

マーケティング部門はそれほど楽観的ではない。輸出業者はロシアの輸入禁止措置に伴う新市場を現在でも探している。この間、輸入禁止措置が長期に及ぶことだけは覚悟したようだ。北アフリカ市場では今シーズンの輸出量は少なかった。これらの国はイタリアの伝統的な輸出先であったが、不安定な国情を受け、輸

出先の変更をせざるを得なくなった。そして輸出の目論みは巨大市場である中国、インドに向かった。レッドデリシャスはブラジル市場で好調な販売であったが、南米産が出回り初めて輸出は終わった。アラブ首長国連邦からの需要も少ないものであった。

業者は、次期シーズンは始まるまでには貯蔵品の販売が終了することを願っている。今年に入って、2ヶ月を経過した後、3月には市況が回復した。また、アルジェリアの輸入再開も期待されている。こうなれば、ゴールドデンデリシャス、レッドデリシャスにとって良好な終期を迎えることができる。

貯蔵量が多いスペイン

中小サイズのゴールドデンデリシャスの貯蔵量が相当量あるため、スペインのリンゴ市場は理想とはほど遠い。加えて収穫時期の悪天候で品質的にも問題がある。このため良好な成果を収めるには難しい状況である。業者によると、リンゴ業界はシーズン当初にあまりに楽観的であったため、過剰な貯蔵を行い、これが現在の結果を招いているという。アルジェリア市場が輸入を止めており、エジプトへの輸出も少ないことも問題となっている。加えて、ポーランド産との競合やロシアの輸入禁止措置で、欧州市場は供給過剰になっていると業者は指摘している。

スペインではガラの出荷は既に終了した。赤色系のリンゴの価格は昨年と同程度とのことだ。フラニースミスは需要が供給を上回っているため価格は上昇傾向だ。フジの需要も大きい。

公式統計によると、リンゴの収穫量は3%多い49.68万トンとのことだ。地域別にはカタルーニャ(+11%)、アラゴン(前年同)、ムルシア(+25%)、カスティーリャ・レオン及びラ・リオハ(-3%)である。生産量のシェアが多いのはカタルーニャ(63%)、アラゴン(20%)、カスティーリャ・レオン(6%)である。主要な品種はゴールドデンデリシャスが55%で、フジ、グラニースミス、Reinetaと続く。

スペインはリンゴの純輸入国である。輸出量よりも輸入の方が2倍多い。輸入先はフランスが最も多く、10.4万トンを占めている。次いでイタリアが9.1万トンである。ここ数年、果実の消費拡大のためのプロモーションに投資が行われている。輸出先はポルトガル、フランス、ブラジル、モロッコ、英国、アラブ首長国連邦、コロンビアである。

トルコでは夏果実に移行

リンゴのシーズンは終了し、生産者は8月に始まる次期シーズンに備えている。リンゴは冬の果実と見なされている。新シーズンは8月の早生品種の収穫から始まり、10月には大量のリンゴが市場に出回る。グラニースミスとレッドデリシャスが一般的品種で、これらは輸出されている。シーズンの終了時は3月である。

現状では、少量の貯蔵リンゴが販売されているが、市場は既に夏果実に移行している。輸入リンゴには60%の関税が課せられている。

輸出は順調に行われた。インド、アジア、中東への試験輸出も行われた。輸出業者に中にはこれら地域での地位を拡大したいとするものがある。

米国のレッドデリシャスは大部分が輸出用

昨年に比べると量的には相当多い。レッドデリシャスの収穫量は昨年よりも18%上回った。その他の品種も昨年と同程度か上回っている。現在供給が需要を超えているため、価格は低く押されている。

世界規模では市況を安定化できるだけの十分需要がある。今後数週間は需要増加の見通しすらある。一方、米国におけるレッドデリシャスの需要は少なく、消費者はハニークリズプやガラを好んでいる。このため、レッドデリシャスの輸出が増加している。世界市場における需要は増加しているが、インドは中でも注目されている。

中国は投資の減少で品質低下

2015と2016年の販売が低調であったため、リンゴ生産への投資が減少している。この影響は昨年観察された。つまり、生産量はわずかに増加したが、品質は劣っていた。中国におけるリンゴ生産は山東省、遼寧省、河北省に集中している。

プレミアムリンゴは依然として高価格を維持しているが、品質の劣るものは価格を維持するのが困難である。一方、低価格は輸出にとっては魅力的である。中国の輸出先は、インド、ロシア、東南アジアが最も一般的である。輸出は2016年下半年から徐々に増加している。生産者としては、次期シーズンの豊作を願っており、価格も10～15%上昇と見積もっている。

インドはリンゴの輸出市場

インドのリンゴ市場は、ベルギー、中国、イタリア、米国などに開放されている。ベルギーは満足なはずだが、慎重なムードもある。というのはインド市場が米国産リンゴで埋め尽くされることを恐れているのだ。インドでは赤色系のリンゴの需要が大部分である。今シーズンはワシントン州で赤色系リンゴの貯蔵量が30%上回っているからだ。

インドの貿易業者は今シーズンの米国産リンゴの輸入について楽観的である。昨年の輸入量は国内生産(の増加)により影響を被ったが、今年は2015年と同程度か多いと見ている。

ベルギーはインド市場に足場を作ろうとしている最中だが、イタリアはインド市場で5年の経験がある。ある輸入業者によると、ベルギーは広範囲に販売促進活動を行っており、ロシアの輸入禁止措置で失った市場の開拓を進めているとのことだ。インド市場では価格は大きなファクターだ。わずかな価格変動が輸入市場に大きな影響を及ぼすからだ。インド政府は輸入リンゴに50%という高い関税を課している。

ロシアでは緩やかに生産量が増加

生産者は政府の輸入禁止措置で利益を享受しているが、依然として輸入量が多い。ポーランド産との競争は終わったが、(輸入量が多いのは)最近の状況変化によるものだ。生産コストの最大75%を国家が支援していることは、市場に大きな影響を及ぼしている。とはいえ、これだけの国の支援にもかかわらず、リンゴ生産への投資はそれほど熱心に行われていない。理由の一つは、植栽から収穫まで6年を要するからだ。投資者としては、収益が得られるまでそれほど長く待てないということらしい。さらに、老木となって処分される樹は新植される樹とほぼ同じ量であることも影響している。このため、生産量はほとんど増加していない。

著者:Rudolf Mulderij

76. 米国 有機食品が80%以上の家庭に

FreshPlaza 電子版 (2017年3月28日)



前ジョージア州知事のパーデュー氏が農務長官就任の手続きに入ろうとする中、有機取引協会(OTA)がニールセンによる新しい調査結果を公表した。これによると、全米の小さな町から大都市に至るまで、家庭のキッチンが変わりつつあるというのだ。つまり、全体の82.3%の家庭のキッチン棚や冷蔵庫に有機食品が置かれているという。パーディー氏の地元ジョージア州のような農村地帯でも同様なのだ。

ニールセンの調査は州別に10万世帯を対象として、2015年と2016年に実施された。この結果、2016年は定期的に有機食品を購入した割合が増加したことを表している。全国平均では2015年から3.4%増加し、82.3%に達した。ジョージア州では4%増加して81.5%になった。最も増加幅が大きかったのはノースダコタ州で、14.2%増加して85.6%であったようだ。

「この結果は、全米1.17億世帯の中の80%以上家庭で、有機食品がいかに重要になったかを示すもので、ジョージア州では350万世帯の80%以上、ノースダコタ州では30万世帯の85%以上というになる」とOTAの執行役員Batcha氏は語っている。「有機業界は農務省の新しいリーダーと共に働きたい。業界は、有機農業の振興をサポートし、有機食品により全米の家庭の中で健康に良い食事を提供し続けるためには、適切な資金がどれほど重要であるかを示したい」とも述べている。

ニールセンの調査によると、いくつかの州では定期的に有機食品を購入する割合は90%を超え、割合が低い州でも70%程度に達している。この中で増加率の大きい州は以下の5つであった。

- ・ノースダコタ州:2015年から14.2%増加して、2016年は85.6%
- ・ロードアイランド州:12.35%増加して88.3%
- ・ワイオミング州:10.8%増加して90.0%
- ・サウスダコタ州:10.05%増加して68.9%
- ・ウィスコンシン州:9.1%増加して77.6%

「有機食品は消費者に健康という選択肢を提供し、生産者には利益をもたらす。有機産業はその急成長を支える上で、数少ない公的機関、例えば全米有機プログラム(NOP)、に頼っている。NOPは世界的に監視を行い、基準を統一し、有機農産物生産のための研究投資を行っている。有機業界は消費者に支えられており、農務省が農村経済、農家世帯にとって有機産業の重要性を認識してくれることで、より繁栄が見込める」とBatcha氏は語っている。

ジョージア州では、州農業局と非営利団体の「ジョージアオーガニクス」が協力関係を構築したことで、有機農業を目指そうとする生産者への投資に変化が起っていることが明らかになった。

「ジョージア州では革新的な農業者、起業家、優れたパートナーのお陰で、有機に対する消費者の需要が高まる中、より大きな産業に成長しつつある。州農業委員会との連携により、2020年までに有機農業を行う農場数(現在200)を倍増しようとしている。パーデュー氏との関係は、有機農業を含め大きなプラスの影響をもたらすだろう」とジョージアオーガニクスの執行役員は語っている。

全米の有機食品の販売額は、現在400億ドルで、全食品の売上の5%を占めている。2016年のOTA調査によると、2015年の有機食品の販売額は397億ドルで、前年から11%増加した。この春には2016年の販売額を公表する予定だ。

ニールセンの調査は、全米48州の地理的、人口動態的に多様な中から10万世帯を対象に行われた。調査に参加した世帯では、家庭内で食事する全ての購入食品を家庭用のスキャナーで調べられた。参加者はスーパーなどで使われるバーコードを通じて購買状況が把握されたのだ。ニールセンは家庭用のスキャナーを使う手法に関して、2002年から実績を持っている。

情報源: Organic Trade Association www.ota.com

77. バイテクでカンキツグリーニング病と戦う

The Packer 電子版 (2017年4月3日)

フロリダ州のオレンジ郡を駆け抜けると、荒廃した樹園地と活気のないコミュニティーに遭遇する。前回ドライブしたときは、活況を呈していたのだが。

金が乏しくなった金鉱のように、フロリダのカンキツ地帯の町は落ち込んで見える。数年前、生産が好調だった頃にも健康なオレンジの樹は多くはなかった。

米国農務省は、2017年のフロリダ州のオレンジ生産量が10年前に比べて72%に落ち込むと予測している。農家手取額の減少も相当である。

カンキツ研究開発基金の Browning 氏によると、オレンジの加工施設は能力の25%しか稼働していないという。

犯人

原因は2つの生物に由来する。一つはバクテリアで、一つは昆虫だ。カンキツグリーニング病と呼ばれるこの病気はキジラミがバクテリアを拡散させることにより問題を引き起こす。黄龍病とも呼ばれるこの病気は100年前に中国で発見された。その後、専門家により、2005年にフロリダで発見され、州全体に広がった。

バクテリアは樹木内の養分の流れを阻害する。葉は黄色くなり、衰弱した樹は奇形で固く苦い果実をつける。

Browning 氏によると、生産者への影響は破壊的で、何世代も経営してきた生産者の中には樹園地を放棄しなければならないものも出ているようだ。キジラミを制御することができず、放棄された樹園地はキジラミの隠れ場所ともなった。

現時点ではこの病気に対する抵抗性の品種はない。仮に抵抗性品種ができたとしても、苗木が結果樹となる3~4年の間に相当額を投資しなければならない。

解決策

カンキツの研究者は解決策を模索している。2009年以降、米国農務省は4億ドルをカンキツグリーニング病対策に投入した。フロリダカンキツ委員会も投資をマーケティングから病害研究にシフトさせている。

研究者達は様々な手法に取り組んでいる。温熱療法、化学療法、寄生虫を使った方法、バクテリアを媒介しないキジラミに置換える方法などである。

いくつかの研究プロジェクトでは、既存の樹の健康状態を維持、改善する方法も目指した。その内の一つは、感染樹の特定の根域に肥料と水を施す方法である。

このような中、2つのバイテク方法が有望である。

ホウレンソウ

一つはホウレンソウを使ったプロジェクトである。この研究はスペインを起源とするものである。これによると、植物に抵抗性を与える天然のタンパク質を探すため、数多くの植物を調査した。この過程で、ホウレンソウから特定の種類のバクテリアや菌類から植物を守る強烈なタンパク質を持つことを発見した。Texas A&M 大学の研究者はこれを基に、ホウレンソウの遺伝物質を用いて、カンキツグリーニング病に抵抗性のあるオレンジの開発を試みた。まだ商品化されていないものの、この「バイテクオレンジ」は、研究段階では抵抗性を示している。

もう一つのバイテクプロジェクトは、ウイルスの遺伝子を変化させる方法である。フロリダ大学の研究者は、ホウレンソウの遺伝子をオレンジに存在するウイルスに取り込めることを発見した。

ウイルスを使う方法は、オレンジの樹自体の遺伝子組換えを行うものではない。また、既に感染している樹も守ることができる。

承認

Southern Gardens Citrus 社の研究・商業化担当副会長は、これらバイオテク手法に期待を寄せている。というのも、この2つの方法は食物連鎖の中に新しいタンパク質を組み込むことを避けられるからだ。

フロリダの大手生産会社である同社は、カンキツの生産、加工に関して長い歴史を持っている。同社は7年前から研究と製品開発に取り組み始めた。カンキツグリーンング病に対するバイオテク手法を用いた商業化の長い道のりが始まっている。製品を販売するためには農務省環境保護局、食品医薬品局の承認が必要である。

商業化への道は危険も伴う。副社長は、コンセプトの証明、規制上の承認獲得、「バイオテクオレンジ」の繁殖などで数年の努力が必要だと述べている。

承認が得られて後も、結果樹齢に達するまでには3~4年は必要である。成園に達するまでには植栽から7~8年を要する。

報酬

成功の報酬とは、生産者への利益の還元であると共に消費者への高品質果実の提供である。バイオテクはハワイのパパイヤ産業を救ったように、消滅への道を進んでいるフロリダのカンキツ産業を救うことができるのではないか。

著者: Joe Guenther (アイダホ大学農業経済学教授)

78. 2017年世界のリンゴ競争力比較

The World Apple Report 誌 (2017年4月号)

ここでは、世界の生産量の90%を占める33の世界の主要リンゴ生産国について、競争力を比較した(今回は22回目)。なお、イランとウクライナについてはデータの不足から除外した。

ランキングの比較要素

国際競争力に関連する23の要素に関して、国別にポイント1(最低点)から10点(最高点)を配点した。これらの点数を積み上げて比較を行ったが、総合順位とサブカテゴリーの3つに関して順位付けを行った。即ち、生産の効率性、産業インフラ及び資本、財政及び市場要素の3つである。各サブカテゴリーは、表のように、それぞれ6つ、9つ、8つの要素から構成されている。この方法により、競争力は、単に生産現場の状況だけを反映させるのではなく、リンゴ産業を支えるインフラ、政治の安定性、経済・社会状況が反映される仕組みとしている。

各要素は、可能な限り客観的指標(例えば平均収量をヘクタール当たりトンで評価)により評価したが、「財産権の安全性」といった要素は数値化できない。これらは専門家の意見を下に指数化した。

1つの要素を除いて、これまでと同様の方式によったが、第23番目の指標である「平均出荷距離」に関しては、ロシアの輸入禁止措置により輸出国の状況が変化したこと、また、欧州、北米向けの輸出からアジア向け輸出にシフトしていることから、計算方法に修正を加えた。

リンゴ: 2017年競争力比較指標

生産の効率性	産業インフラ・資本	財政・市場
1. 2014-16年と2008-10年の生産量増加率	7. 適正な貯蔵施設	16. 2017年の長期金利
2. 2006-16年における生産量の変動	8. 近代的な出荷施設	17. 2017年インフレ率
3. 2016年の未結果樹面積	9. 流通の効率性	18. 2001-05年に対する2016年の為替レート比
4. 2016年の新品種の生産割合	10. 市場の近代化	19. 財産権の安全性
5. 2016年のヘクタール当たり植栽樹数	11. 土地利用効率	20. 製品の品質
6. 2014-16年のヘクタール当たり生産量(トン)	12. 水利用効率	21. 2014-16年の輸出割合
	13. 労働力利用効率	22. 2014-65年の平均輸出価格(ドル/トン)
	14. 資本利用効率	23. 平均出荷距離(キロ)
	15. 投入コスト	

ランキングの変動

ニュージーランドが総合順位で3年連続1位だった。しかし、米国がチリを抜いて総合2位となった。一方、2016年にトップ10にいた国は、2017年も引き続きトップ10に留まっている。この中で、オランダが前年の10位から4位に上昇している。また、ベルギーも3つ上昇し5位となった。イタリアと韓国は2つランクが下がったが、フランスが最も順位を落とし、5つ下がって10位となった。

2016年に中位、下位にランクされた国にはほとんど変動がなかった。このことは、中・下位国が発展し、上位国に対抗するのがいかに難しいかを示している。その中で、ポーランドとアルゼンチンは例外である。両国とも3つランクを上げ、17位、19位となった。反対に、スロベニアは7つランクを下げ、24位となった。

注) 上位、中位、下位とは33カ国の中の各1/3を指す。以下同様。

地理と競争力

地理的な面で見ると、2016年と同様の傾向であった。トップ10のうち、5カ国が西欧であり、2カ国が北部アジア、2カ国が南半球、1カ国が北米である。過去数十年、経済発展を遂げた国は競争力が上に位置し、発展途上にある国は下に位置している。リンゴ産業の競争力にとって、経済状況が安定していることはとても重

要であると言える。

一方、中位に位置する国のうち、5カ国は先進経済国であり、4カ国が西欧で残りはオーストラリアだ。ということは、経済状況が良好であるからといってリンゴ産業の不利な面は克服できないことを意味する。5つの新興経済国である南アフリカ、中国、アルゼンチン、ブラジル、トルコが中位に位置しており、もう一つの中位国は発展途上国のポーランドである。

下位に目を転じると、ギリシャが先進経済国として入っている。しかし、ギリシャは先進経済国の中では最も貧しいとされている。下位のランクのうち、8カ国は中央集権国家から自由経済に移行中の発展途上の国であり、残りの2国であるメキシコ、インドは新興経済国である。

2017年リンゴ国際競争力ランキング

2017 ランク	2016 ランク	総合順位	生産の効率性	産業インフラ・ 資本	財政・市場
1	1	ニュージーランド	韓国	チリ	オランダ
2	3	米国	ベルギー	米国	日本
3	2	チリ	イタリア	ニュージーランド	ベルギー
4	10	オランダ	ニュージーランド	カナダ	フランス
5	8	ベルギー	南アフリカ	南アフリカ	イタリア
6	4	イタリア	オーストリア	ブラジル	韓国
7	7	日本	ドイツ	フランス	オーストリア
8	6	韓国	オランダ	アルゼンチン	ドイツ
9	8	オーストリア	米国	オーストリア	英国
10	5	フランス	中国	イタリア	ニュージーランド
11	11	カナダ	英国	トルコ	カナダ
12	12	ドイツ	日本	日本	スロバキア
13	13	南アフリカ	チリ	韓国	スロベニア
14	14	英国	フランス	ベルギー	米国
15	15	オーストラリア	ロシア	オランダ	スペイン
16	16	スペイン	オーストラリア	オーストラリア	オーストラリア
17	20	ポーランド	ブラジル	ドイツ	チリ
18	18	中国	ポルトガル	スペイン	セルビア
19	22	アルゼンチン	カナダ	英国	ポーランド
20	19	ポルトガル	トルコ	中国	ポルトガル
21	21	ブラジル	アルゼンチン	ポーランド	メキシコ
22	24	トルコ	チェコ	ポルトガル	ギリシャ
23	23	メキシコ	ポーランド	メキシコ	ブルガリア
24	17	スロベニア	スペイン	ギリシャ	南アフリカ
25	25	ギリシャ	ブルガリア	ハンガリー	チェコ
26	26	スロバキア	ギリシャ	スロベニア	ルーマニア
27	27	チェコ	ルーマニア	スロバキア	ハンガリー
28	29	セルビア	セルビア	チェコ	中国
29	28	ハンガリー	メキシコ	インド	アルゼンチン
30	30	ブルガリア	スロバキア	セルビア	インド
31	31	ルーマニア	スロベニア	ブルガリア	ロシア
32	32	ロシア	ハンガリー	ルーマニア	ブラジル
33	33	インド	インド	ロシア	インド

生産の効率性

生産の効率性については、2016年と同様の傾向であり、韓国とベルギーが上位の2カ国を占めた。上位国の中では西欧が6カ国を占め、南アフリカが第5位に位置し、米国が9位、中国が10位であった。中国は過去10年間で単位面積当たりの収量が大幅に増加した。

チリは、自然条件からリンゴ栽培に有利と思われがちであるが、13位に位置している。しかし、南米のライバルであるブラジル、アルゼンチンよりも上位に位置している。発展途上にある国は大部分が下位に位置づけられている。これらの国では旧式の植栽方法で栽培され、果樹園の所有権が明確でなく、改植のための資金が乏しいからだ。

産業インフラ及び資本

資本の利用効率は、上位に押し上げる重要なファクターである。同様に重要なのは、土地、水、労働力の供給力、貯蔵施設、選果施設、市場、流通の質である。

西欧諸国はこの項目に関して不利な点がある。都市部が過密化しているため、土地や水の利用効率が劣ってしまうからだ。上位国のうち8カ国は農村部に広大な土地があり、発展の可能性が大きい。これら諸国には、チリ、米国、ブラジル、アルゼンチン、トルコなどが含まれる。一方で、ニュージーランド、カナダ、南アフリカ、オーストリア、イタリアなどは、限られた資源を効率的に開発することで対応している。

この項目で遅れをとっているのは発展途上にある国で、天然資源も人口資源も決定的に不足している。

財政・市場

上位に位置するものは、有望な市場を持っており、財政的には先進経済国と位置づけられ、財産権に関しても信頼できる国である。上位の7つの欧州の諸国は、例のないほど利率が低く、インフレ率も低い。

欧州諸国は比較的 주요な輸出市場に近いという利点もある。ニュージーランドはこの点では不利であるが、高品質果実を輸出することで補っている。反対に、南アフリカ、中国、アルゼンチン、ブラジル、トルコは高いインフレ率と財産権が不安定であるというハンディを背負っている。

ランキングの利用法

ランキングは、リンゴ生産国における国際競争力の弱点を正確に指摘するものである。ある場合は個々の果樹園の管理方法を見直すことにも利用できる。また、コミュニティとして特定の資源を改善するための方策、リンゴ業界の情報システムを改善するための組織の設立、マーケティング努力の改善策を検討するためにも役立つ。

とはいえ、多くの場合、処方箋への十分な理解が必要であるし、政府による賢明な対応が必要となる。例えば、各国の中央銀行はインフレや為替レートに大きく関与している。政府は財産権の信用確保に大きな役割を果たし、貿易の振興にも力を持っている。

リンゴ生産国が競争力を強化したいのであれば、最も大切な指標に焦点を当てる必要があり、適切な対処療法を打ち出すことができる強固な業界組織を持つことが重要だ。また、多くの場合は、同じ目標を持つ他の業界組織との連携が不可欠である。いずれにせよ、何年にもわたり、継続的で集中的な努力を払うことが必要である。

79. 世界のアボカド市場

FreshPlaza 電子版 (2017年3月31日)



4月はアボカド供給の転換時期である。チリ産の輸出が終了し、市場には需給ギャップが生じている。南アフリカとペルーは大きな需要に未だ応えられない。特にペルーは悪天候の影響があり、市場への供給が遅れている。このため世界中で価格が急騰している。

輸入業者は次の状況に対応している。

- スペイン、モロッコ、イスラエル産: ハス(品種)のシーズンは第13~14週に終了。
- ケニア産: 熟成したものが4月半ばから出回る見込み。
- 南アフリカ産: Maluma(品種)は第14週から、ハスは第15週から出荷の見込み。
- ペルー産: 今回の気象災害の影響で多くの産地で影響を受け、収穫が遅れる見込み。
- コロンビア産: 第2回目の収穫の準備中で、第14週に収穫が始まる見込みだが、3週間遅れている。
- チリ産: 最終出荷便が到着したところ。
- メキシコ産: 生産量が30%下回っている。米国が主要市場であるが、量が不足しているため、大部分は国内市場に残っている。
- 米国: 国内価格が高く、欧州向け輸出は皆無。
- ブラジル: 収穫が3月下旬からスタートしたが、供給量は少ない

豪雨で出荷が遅れるペルー

豪雨に襲われる前は、販売は順調であった。しかし、現下の状況では、豪雨の影響でインフラに被害があり、出荷が遅れている。今回の大災害では、まずは人道支援に最大限の力が注がれている。

ペルー産アボカドは既に市場に出回っていたが、豪雨の影響で出荷のピークが遅延した。生産地の全てが豪雨の影響を受けたわけではないので輸出余力はある。しかし被害を受けたインフラにより引き続き影響が残っている。

ユーロ圏諸国での価格は上昇が見込まれる。輸出業者は、需要が下がる前に価格がどれだけ上昇するか予測できないとしている。業者によると、「現時点では」世界各地で需要が多いため、ペルー産と南アフリカ

産は販売に支障はないだろう」としている。

昨年は第11週まで輸出量が増加を続け、445コンテナに達した。今年は昨年より輸出量は20%少なく、352コンテナに留まっている。明るい話題としては、アボカドの果皮が固いため、収穫が遅延しても問題が少ないということだ。

イースターに合わせて保有しているメキシコ

生産者は、販売期間を延ばすために収穫を控えるよう努めている。新シーズンの販売は6月まで始まらない。主要な観光都市での需要がピークとなることから、イースターは重要な時期に当たる。通常、これら都市で販売されるアボカドは輸出ライセンスを持たず、量も多くないことから、国内市場に留め置かれる。これが米国におけるアボカド不足に繋がっている。

業者は供給不足を確信している。今シーズンの生産量は20万トンと見込まれるが、この量はかろうじて米国の需要を満たす数字である。加えて、米国以外にも、日本、欧州、カナダ、中国向けにも輸出されている。こういったことから、不足状況は今後3ヶ月続く見込みだ。この状況は新シーズンの収穫が本格化する7月まで続くと思われる。

供給量不足の米国

メキシコからの輸入量が少ないことから、市場の出回り量は小さい。このため、市場は逼迫しているが、需要は旺盛である。シンコ・デ・マヨ(メキシコの祝日)はスーパーボウルに匹敵する行事になったが、そこでの需要は世界規模で大きい。業者は、「価格は高く、また継続するだろう」と見ている。加えて、カリフォルニア産のアボカドの供給量が少ないことも影響している。メキシコとペルーから供給される有機アボカドに対する需要も拡大している。

「ファンタスティック」なシーズン:イスラエル

シーズンはほぼ終了している。業者の報告では、最後の(輸出)コンテナが2週間前に出航したそうだ。「大変素晴らしいシーズンだった」とのことで、量も多く、高価格もここ3~4年連続して続いたからだ。品種に関しては状況が変化しているようだ。かつてはハスだけが求められていたが、現在は緑色の果皮のアボカドの需要が増加している。イスラエルは、健康志向から人気が高まり需要が増加している欧州市場から利益を得ている。

Hass、Fuerte、Ettinger、Nabal がイスラエルで一般に栽培されている品種である。それぞれの品種で収穫時期が幾分重なるが、全体を通すと、販売時期は10ヶ月に及ぶ。他の多くの生産国では、これ程長期間に及ぶことはない。輸出業者は欧州市場に近いことから利益を得ることができる。輸出(出荷)から消費者の口に入るまでほんの4~5日であるからだ。

昨年は10万トンが収穫され、半分が輸出に回った。しかし、冬期に発生した暴風雨の影響で、その前の年に比べると輸出量は3,000トン少なかった。欧州が輸出先の中心で80%を占めている。中でもフランスが最大の得意先で1/3を占めている。スペインがアボカド生産に力を入れており、イスラエルの輸出にとっては競合国となっている。

輸出に力を注ぐモロッコ

業者によると、生産量は前年より少ないそうだ。加えてサイズも小さい。「需要は、今後数週間多いと見込まれる。特にイースター後は、ペルー産が市場に出回るまで需給ギャップが広がるだろう。それまでは、欧州市場にアボカドはほとんど出回らないのではないかとモロッコの業者は見ている。

モロッコ産のシーズンは、通常2月15日から4月15日までだ。この時期は、主要生産国の生産物が市場に出回らない時期に当たる。(今シーズンは)暑い夏と寒い冬により生産に影響があった。サイズの大きい果実が出回っていない。主要な品種はハスと果皮が緑色の品種である。輸出は大変に有利であるため、輸出業者は国内市場に目向きもしていない。このため、(国内市場の)ギャップをスペイン産が埋めようとしている。

高価格で利益を上げるスペイン

販売が終了するまで1ヶ月しか残されていない。マラガ産のハスの価格は高騰し、新記録を達成した。生産地での価格はキロ当たり2.3~3ユーロであり、今年の最高値だ。Lamb Hass と Reed の価格はハスに続いている。

スペインの輸出業者は南半球産の入荷の遅れで利益を得ている」。なお、地中海諸国を対象とした輸出はピークを過ぎている。

ペルーの天候で価格が高いオランダ

今シーズンの価格の構造的高さに見られるように、アボカドの成功はまだ発展途上といえる。世界中で栽培面積が増加しているにもかかわらず、市場は生産量を飲み込んでしまっている。現在、価格は各地で非常に高くなっている。供給はペルーの気象災害の影響で減少している。パッケージされた製品の価格は18~18.5ユーロで推移し、これは1個あたり1ユーロに相当する。輸入業者によると、「現在、大変異常な要求が(輸出業者から)出されており、誰もそれに応えることができない」とのことだ。ペルー産の供給不足を補うことができないので、今後数週間は問題を解決できないようだ。事態の好転には、メキシコ産を空輸するか、ブラジル産が市場に出回るまで待たねばならない。チリ産のアボカドは終了し、次期シーズンは8月まで待たねばならない。このような転換時にあって、一部分は近年生産が拡大しているコロンビア、イスラエル、スペインからの輸入で需給ギャップを埋めてくれるかも知れない。一方、アフリカでは降雨不足からサイズの小さいアボカドが生産される見通しだ。ただ、パッケージ化されたアボカドの人気の高まっているため、サイズの小さいものでも円滑に販売できる見込みだ。

ベルギーでは価格が高騰

ベルギー市場もペルーの影響を被っている。供給は少なく、価格は上昇し、当面下落する見込みはない。事実、イースターを間近に控え、価格は上昇を続ける見通しだ。地中海諸国(スペイン、モロッコ、イスラエル)産が終わりを迎え、南アフリカからの本格輸入は第15週までまたなければならない。現在市場には、メキシコ、ケニア、コロンビア産が出ている。業者によると、慎重な見方としては、市場が元に戻るのには5月頃とのことだ。

好調な市場のイタリア

昨年はペルー産の出回りは3月上旬が最初であった。しかし、今年は空輸による入荷は3月下旬か4初旬まで待たなければならない。イスラエル産の最終便は既に到着し、南アフリカ産が入荷するまでには3週間待たねばならない。この他、少量ではあるがケニア産の入荷がある。こういった状況を除けば、市況は良好だと業者は見ている。果皮が緑色の品種の中で需要が最も大きいのは Pinkerton である。イスラエルからの輸入品種は Ardith, Arad が中心であり、ペルーからは主に Fuerte, Ettinger, Zutano が輸入される。

アボカドは過去5~6年で大変人気が出ており、市場の中で独自の地位を獲得した。夏を前に需要は拡大しており、価格は既に高く、1個あたり80セントである。

業者によると、消費者には2種類あるという。1つは固くてゆっくり熟す品種を好む人達で、代表的品種は Pinkerton である。もう1つは既に熟したアボカドを好む人達で、代表品種はハスであるとのことだ。

レーザーラベルへの投資は回収途上:スウェーデン

最近始められたレーザーラベルの投資回収には、まだ時間がかかりそうだ。レーザーラベルを施されたアボカドは、まだ少数に留まっている。通常、有機アボカドにはレーザーラベルが施され、消費者は買い物袋に入れているようだ。

アボカド市場は急速に拡大している。量的には、毎年15~20%増加を続け、昨年は高価格だったにもかかわらず歴史的な販売量であった。

中国は輸入市場

アジア諸国は、チリとメキシコからアボカドを輸入している。また、2015年からはペルーからも輸入を始めた。

現在、ニュージーランドが中国市場への参入を目指している。2014年以降、輸入量は爆発的に増加している。この年(2014年)は輸入量が32トンから1,500万トンに拡大した。

輸入品の他に、中国では国内生産がある。主産地は雲南省、甘肅省、四川省、海南省である。これら地域では前世紀からアボカドが栽培されていたが、商業的生産は行われていなかった。このため、品質は大変劣っており、このことが他の生産国に輸出機械を提供することとなっている。

著者:Rudolf Mulderij

80. 米国 生鮮・有機ゴジベリー(クコ)の生産

The Packer 電子版 (2017年3月29日)



生鮮のゴジベリー(goji berry:クコ)は、カリフォルニア州モロベイの Shanley Farms によって、5月から販売が始まる。

ドライフルーツとしてのゴジベリーは、全米でスーパーフードとして知られている。しかし、オーナーの Jim Shanley 氏によると、生鮮果実を販売しているのは、全米では同社が唯一ではないかという。

収穫の際は、果実の損傷を防ぐため、茎は残しておくそうだ。

昨年は0.5エーカーの農園の400本から収穫し、ホールフーズ(訳注:有機食品、自然食品などを販売する小売チェーン)や高所得者層に販売したそうだ。そして、昨年12エーカーの土地に新たにゴジベリーを植栽し、今年は12.5エーカーで生産を行うという。

現在開花中で、収穫は5月に始まり6月までである。しかし、秋にも同様に開花、収穫される。氏によると、昨年植栽した木からの収穫量は春よりも秋の方が断然多いそうだ。

今年の生産量は40~60パレットとのことで、生鮮果実は4オンス(約110g)入のプラスチック容器で販売されるそうだ。

ゴジベリーはブルーベリーやラズベリーよりも繊細で傷つきやすいそうだ。

昨年の小売価格は4オンス入の容器で7.99~8.99ドルで、卸売価格は5ドルだったそうだ。

Shanley Farmsも販売マネージャーはアボカド、パッションフルーツ、フィンガーライムも担当しているが、昨年のゴジベリーの収穫経験で、棚持ちを良くするための収穫方法を学んだと語っている。

8 1. 韓国のブドウは巨峰とシャインマスカットにシフト

FreshPlaza 電子版 (2017年3月30日)



韓国での生産者、輸出業者はキャンベルからシャインマスカット、巨峰にシフトしている。「キャンベルは伝統的な韓国の品種である。しかし、キャンベルの消費量は、シャインマスカット、巨峰などの新品種に押されて減少している」と Rima Global Co 社のリー氏は語っている。リー氏によると甘酸っぱいキャンベルは、甘いシャインマスカット、巨峰に比べて世界市場では魅力がないようだ。

この傾向は5年前に始まり、2年前からこれら新品種への転換が進められているという。価格は甘さの強いシャインマスカットの方が高い。販売時期は両品種とも9月下旬

から12月初旬までだという。

「品種の転換は素晴らしい結果を生んだ。日本から輸入されていたので、2品種の素晴らしさはよく知っていた。日本産の価格は大変高いが、韓国産の価格はそれに比べると良い。韓国の消費者は国産を求めているし、韓国産は中国産より品質が優れている」とリー氏は語る。

韓国ブドウの輸出先は、台湾、中国、ベトナム、ニュージーランドである。しかし、リー氏は中国市場に対しては懐疑的である。「中国市場は我々に役立っているとは思えない。中国では韓国産と偽装表示された商品が沢山ある。このため、中国市場への輸出量はたいへん限られた量になってしまう。一方、東南アジア市場は有望である。ニュージーランド市場は限定的だ」とのことだ。

韓国の輸出に対する競合国は日本と中国だ。中国は巨峰を大量に生産している。韓国国内での消費量は相当あるが、韓国政府は輸出を奨励している。これは韓国のオフシーズンに輸入されるブドウと相殺するためだという。

「現在の韓国ブドウ産業は大変脆弱である。古くからの品種は世界市場では販売が少なくなっている。韓国政府は国産ブドウを保護するために、国産品が出回るシーズンには高い関税を課している。しかし、消費者は古くからの品種に対するニーズは強くない。市場で高いシェアを獲得するためには、新品種の導入が欠かせない」と語っている



NH Trading 社のキム氏は、「社で扱っているのは、まだ大部分がキャンベルである。韓国人消費者は、普通はキャンベルが好きなので、主な海外の顧客は米国に住む韓国出身者や中国出身者だ。輸出時期は8月から11月までだ」という。リー氏と同様、キム氏も東南アジアでは酸味のあるキャンベルが好まれないことは承知している。そこで、これら市場向けには、代わりに巨峰を輸出しているようだ。また、中国が2年前に検疫条件を緩和したため、中国向け輸出は軌道に乗っている。同社の2016年の輸出は200トンとかなり少ない量だった。高温に見舞われ品質が劣ったからだそうだ。「通常の年間輸出量は400トンであり、15%ずつ増加させたい」と意欲を示す。同社の収穫時期は、温室ものが4月下旬から8月で、露地ものは8月下旬から12月までだ。現在シーズンオフであり、市場価格は予想できないが、露地ものでキロ当たり3ドル程度を見込んでいる。「ブドウは夏果実の代表だ。しかし、シーズンオフには安く甘い種無しブドウが毎日輸入されている。幸いにも政府は市場を保護してくれ、果樹経営にも財政支援をしてくれている」とキム氏は締めくくった。

著者:Yzza Ibrahim

8 2 . 欧州市場はパイナップルの供給不足

FreshPlaza 電子版 (2017 年 3 月 28 日)



パイナップル市場では大幅に供給が減少している。「実際、この数ヶ月間、大きな問題を抱えている。12月にはコスタリカは大変に湿潤な気候であった。1月、2月は非常に乾燥し、先週は強風があり、船舶が停泊できない状況であった。ロッテルダム港での通関処理の増加による(入荷)遅れも欧州市場の供給不足の一因となっている」と HillFresh 社のパイナップル販売責任者は話している。

「(コスタリカでは)昨年当初からの降雨は、現在でもパイナップルの輸出に影響を及ぼしている。というのも、パイナップルの樹は毎年1つ(だけ)の果実を実らせるものだからだ。加えて干ばつも被った。このため、糖度が必要なレベルに達せず輸出に適さなかった。最近の2週間で、降雨があり、夜温が低かったため、若干状況は変わった。しかし、これはイースター(復活祭:春分の日の後の最初の満月の次の日曜日)後に市場への出回り量が増える程度の効果しかない。4月の入荷量はまだ少なく、市場への入荷が増えるのは5月、6月になるのではないかと輸入業者は見ている。

「(入荷減のため)年間を通してパイナップルの価格は高い。ただ、特に高いのはここ数週間である。現在の市場価格は大変高い状況にある。多くのバイヤーから取引の電話を受けているが、長年の顧客の注文に応じられる時ほどありがたいことはない」と先の販売責任者は述べている。氏は、「コスタリカはパイナップル供給国として他国と競争しようとはしていない」と見ている。「確かにコロンビア、パナマからの入荷もある。ただコスタリカは60~70%のシェアを持っており、他国はとでも適わないからだ」と語っている。

「幸い、コスタリカの長年の供給業者(取引先)である Tropicales del Valle 社は、これまで供給量の管理を続けてきている。加えて、マンゴーと同様、空輸によるパイナップルの需要もある。高速輸送で品質を高めることができるからだ。Tropicales del Valle 社は味を3つに区分して販売している。最高品はスーパー・スイートと呼ばれ(上図)、糖度が17度に達する。顧客はこれを高く評価してくれている」と氏は締めくくった。

情報源: www.hillfresh.eu

83. カリフォルニア州カンキツグリーニング病に対応した規制を開始

The Packer 電子版 (2017年3月27日)



カリフォルニア州食品農業局(CDFA)は、カンキツグリーニング病を媒介するミカンキジラミの拡散を防止するため、カンキツの輸送(トラック輸送)に当たり新たな規制を導入する。規制は3月に決定され、4月から実施が予定されている。規制自体は3月2日に決定されたが、施行はこれまで延期されてきていたものである。

3月の報道では、CDFAはカンキツ関係業界が新たな規制に対応する準備期間を考慮するため延期する、とのことであった。この規制では、果実の出発地、目的地にかかわらず、全ての輸送が対象となる。

規制の内容は、トラック輸送等に際してカンキツに防水布でカバーを掛けることを義務づけるものである。こうすることにより、カンキツグリーニング病の病原バクテリアを媒介するミカンキジラミの拡散を防止するものだ。

カンキツグリーニング病は、(カリフォルニア州の)商業生産を行う果樹園では発見されていないが、南部の住宅地のいくつかの場所で確認されている。

カンキツ業界団体は、移送に当たっての新しい規制は早く始めるべきだとの意向だ。

「施行が延期されたことには失望している。しかし、実際に防水布が容易に調達できないという現実を鑑みて、施行が延期されたのだろう」、とカリフォルニア・シトラス・ミューチュアルの副社長は語っている。副社長によると、防水布を持っている輸送業者は、既に自主的にこの規制に従っているそうで、州は、4月はじめにも施行すると見ている。

カンキツグリーニング病は主要な高速道路周辺の住宅地に見られることから、防水布を覆うことで、「ヒッチハイキング」をするカンキツキジラミの混入・拡散を防ぐことができるのである。

副社長は、「防水布のアイデアは、ミカンキジラミが輸送中に飛び込み、飛び出すのを防ごうとすることから始まった。カンキツグリーニング病の予防は、唯一ミカンキジラミの拡散を防ぐことだ」と発言している。また、業界としては拡散を遅らせるための手段は何でも行い、南カリフォルニアから(カンキツの主産地である)セントラル・バレーへの拡散遅延を図ろうとしている。「新しい規則を支持しており、できるだけ早く実施をしたい」と副社長は締めくくった。

8 4. 有機褐変防止パウダーでカットリンゴの寿命を延長

FreshPlaza 電子版 (2017年3月24日)



抗褐変防止剤を使用したものとコントロールとの比較。26日経過後。

食品廃棄物及びその環境への負の影響が新聞の見出しとなっている。このため、消費者はより健康的で、便利で、経済的な方法で生鮮農産物を食べる道を探している。この度、食品衛生、食品寿命の延長等、食品に関する特許を取得している Grow Green Industries 社は、eatFresh-FC™という抗褐変剤のパウダーを発表した。これはカットリンゴやその他の農産物の褐変を最大26日間防止し、その間、成分、色、香りを保持するものである。

「米国だけでも、有機性物質廃棄物はゴミ捨て場で2番目に多く、UNEP(国連環境計画)によるとメタンの排出源となっている。eatFresh-FC™は、加工業者及び家庭に対して、生鮮果実、野菜の腐敗や毀損を防止する実行可能で有機的な解決策である」、と同社の CEO(創業者でもある)はコメントしている。「新たに再調査した eatFresh-FC™抗褐変パウダーで貯蔵寿命の試験を行ったが、完璧なものであったことに胸躍らせている。リンゴの試験では26日経過したものが、まるで昨日カットしたように見えた」とのことだ。

eatFresh-FC は植物由来の成分をブレンドしたもので、OMRI(有機材料評価研究所)も承認している。有機農産物及び慣行栽培農産物にも使用が認証されている。水と混合することで、浸漬又はスプレーする使用方法もある。リンゴの他、パレイショ、アボカド、レタス、イチゴにも褐変防止効果があり、日持ちを長くすることができる。

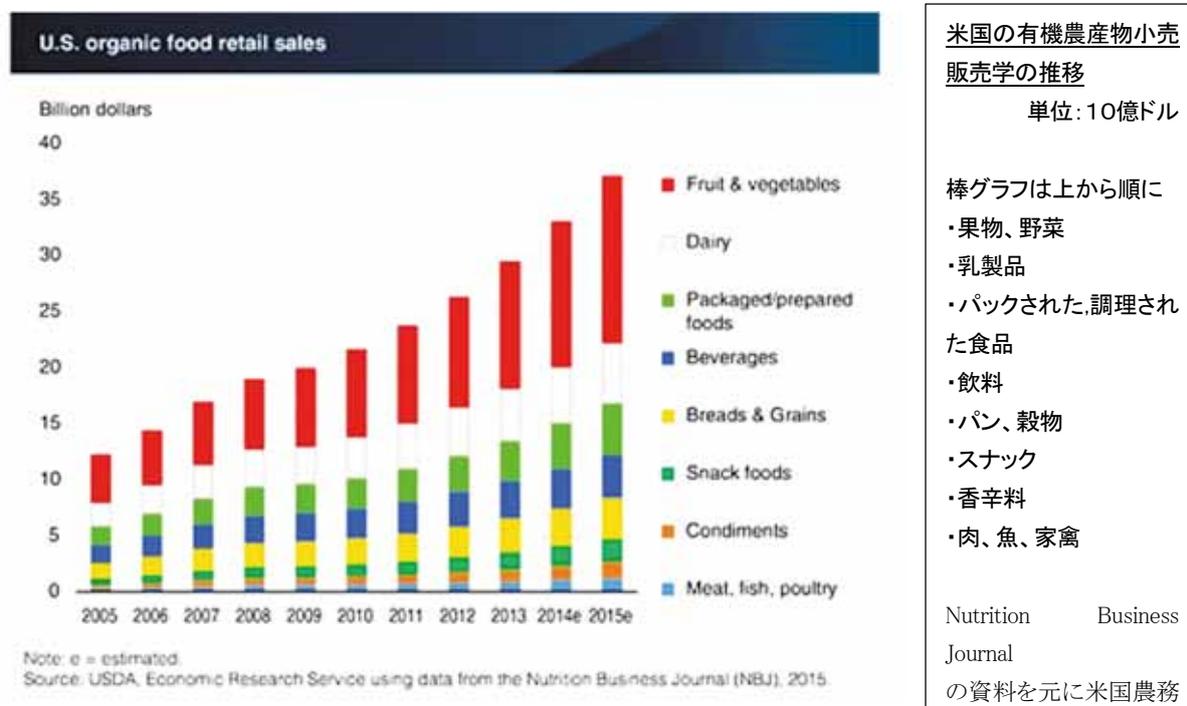
「消費者は新鮮カット食品の便利さを求めており、もっと消費を増やしたいと考えている。当社としては、加工業者、レストラン、学校給食、その他食品サービス業と連携をとりたい。たった30秒の処理で(褐変防止が)できる便利で、経済的で、効果的な解決策ができたのだから、これら業者はより新しい製品の開発が可能となるのではないかと CEO は付け加えた。

eatFresh-FC は、Grow Green Industries 社から一部の流通業者を通じて商業販売されている。

情報源: Grow Green Industries, Inc.

8 5. 米国では有機農産物に占める果物、野菜の割合が多い

FreshPlaza 電子版 (2017 年 3 月 24 日)



米国における有機食品の販売の割合は小さいものの、2000年以降、ほとんどの年で二桁成長を遂げている。2000年は米国農務省が有機食品の基準を定めた年だ。

2015年、Nutrition Business Journal は全米の有機食品の販売高を371億ドルとし、家庭での食品消費に占める割合を5%と推計した。これは2005年に比べると倍増している。

過去10カ年、有機食品の売上高は、全ての食品分野で増加している。この中で、2015年には有機果実、野菜の占める割合が最も高い状況であり、全売上高の40%に達する。これに続くものは乳製品で、15%を占めている。

8 6. チリのサクランボ輸出量は 14%増

FreshPlaza 電子版 (2017 年 3 月 24 日)



チリ果実輸出協議会 (ASOEX) 会長の情報によると、2016/17年の輸出は好調で、94,869トン(18,973,800箱)に達し、昨年より13.3%増加したとのことだ。

会長によると、「増加は良いことではあるが、同国の供給能力である12万トンを下回っている。これは10月11月の天候不順による」、とのことだ。

輸出先に関しては、アジアが主流で全体の86.7%で、中国が82%を占めている。また、2016年1月に市場を開放した韓国は、初年度としては上々の1,341トンであった。

アジアに続く市場は北米(米国、カナダ)で、全体の6.7%を占めており、昨シーズンと同じ割合であった。欧州は2.7%を占め昨シーズンより(割合が)0.5%下回った。この他、ブラジルも重要な輸出先で、2,248トン輸出され、前年(の輸出量)を23.1%上回った。

会長によると、「栽培総面積約3万 ha での生産量は天候不順で少なくなった。減少量は5~7百万箱程度と見られる」とのことだ。

プロモーション活動と物流の改善

今シーズン、チリはプロモーション活動を米国、ブラジル中国で展開した。中国向けは市場への投資及びそのインパクトの強さで特別なものであった。ASOEX のサクランボ部会長によると、「今年はアジアでのプロモーション活動を重視し、5百万ドルを投入した。このお陰で、民間業者とチリ貿易振興局(ProChile)が連携して成果が上がった」とのことだ。

この活動と並行して、中国向けに高速船の運行を始めた。この船は通常よりも7日速く到着することが可能で、品質向上をもたらすことから、輸出業者、生産者共に恩恵をもたらすことになった。

中国市場への関心とチリの可能性

中国の大規模小売チェーンは、チリや他の輸入先国(米国、オーストラリア、ニュージーランド)から直接説購入を始めている。この傾向は他国と同様、年々拡大しており、バリューチェーンの簡素化をもたらしている。

サクランボ部会長は、「チリのサクランボ生産量は、数年以内に15万トンに達する。このことは、中国における物流の改善が必要であることを意味する。特に、冷蔵保管の必要性が高い。とはいえ、もっと重要なことは、中国での需要をより高めることだ。特に、これまでサクランボを消費してこなかった中間所得層に焦点を当てるのが大切だ。中国でのプロモーション活動は30日前に終了したが、消費者に直接働きかけるとは大変に有効であった。消費拡大が期待できる市場に重点的に対応したい」と語っている。

ASOEX の販売部長は、「今シーズンは中国で行ってきた販売促進活動の中で、かつてない規模であった。36の都市でプロモーション活動を行い、その活動対象は1億9千万人に及んだ。新しい消費者を取込み、購入回数を増やすことも可能とした。このように、プロモーション活動は完璧であり、同時に、『チリからのサクランボ』というブランドを普及することができ、潜在的な消費者に主な販売ルートを通じてメッセージを送ることができた」と話している。

プロモーションは、小売店での活動、地下鉄での宣伝、地方都市での LED ポスター、住宅エレベーターでの広告、評価の高いオンライン TV での広告、オンラインサイトへのバナー広告、ソーシャルメディアの活用など多岐にわたったようだ。

87. 世界のナシ市場

FreshPlaza 電子版 (2017年3月24日)



北半球では、貯蔵ナシの出荷が進められている。先月、世界リンゴ・ナシ協会が貯蔵状況を公表した。欧州では昨年よりも貯蔵量が少ない。しかし、米国では販売されている量は結構ある。両地域では生産者は来年産のナシの生産を準備している。しかし、来年の予測をするにはまだ早い。

順調なシーズンを期待する米国



国内のナシ供給量は豊富で、貯蔵量は平年並みである。特に、D'Anjou と Bosc の量は多い。業者によると今シーズンの(出荷の)終わりは6月と見込んでいる。Bartlett と Comice の出荷は既に終了した。Seckel については、間もなく終了する見込みだ。しかし、米国の小売業者はより多くの品種が販売することを望んでいる。需給ギャップはアルゼンチンとチリからの輸入により賄われている。両国からの輸入品種の多くは Packham である。

次第に輸入に頼るイスラエル

冬期の乾燥で、(本年産の)生産量は少ないと見込まれる。イスラエルでは約80%が北部のゴラン高原、高地ガレリアで生産される。同地では降雨量が通常年の40%であった。このため、生産予想量は大幅に減少すると見込まれている。正確な予測をするには時期尚早ではあるが、生産量は3万トンに達しないと見込まれる。

生産の全ては国内向けである。シーズンは6月に始まり、貯蔵分を含めて10ヶ月続く。通常年は収穫前の時期に少量が輸入されているが、気象条件が良くないために過去2カ年輸入量は増加している。今年は輸入が大きく増加すると予測される。このような状況下で、価格にも影響が出ている。現時点では通常と同程度のキロ当たり1.5~2ユーロであるが、直近数年の状況から見ると価格は容易に倍になる可能性がある。輸入量が不十分な場合は、高価格が再現する見込みがある。

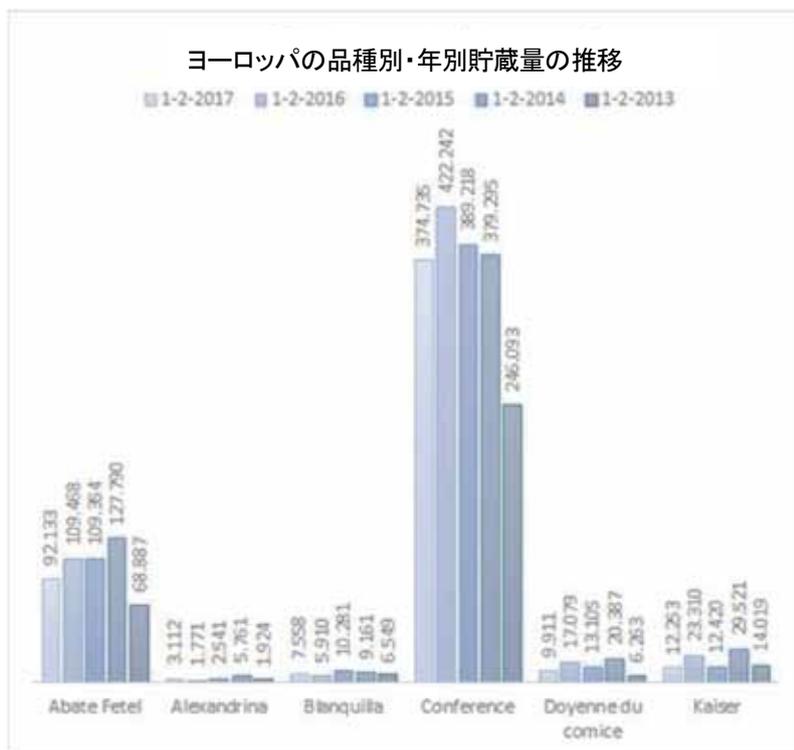
ボスニアヘルツェゴビナ厳しい年を迎える

寒い冬の後、Srpska 共和国では平年以上の収穫量を期待している。栽培面積は3,000ha で、主要な品種は Williams、Santa-Maria、Abate Fetel である、近年は Conference、Carmen も植栽されている。2016年の夏にロシアが輸入禁止を講じたが、この打撃からは立ち直りつつある。輸入禁止期間は10週間であったが、ダメージは大きかった。ロシアの検疫当局によると証明書が不十分であったためとのことだ。去年は4月の霜害で収穫にダメージがあり、大変な1年であった。約1,100ha に被害があり、被害割合は60~90%であったようだ。

貯蔵用が少ないイタリア

3月中旬現在で、貯蔵量は品種別に異なっている。欧州で人気があった Kaiser は消費者の間で人気は低下しつつある。貯蔵量は前年同期に比べて57%減少している。同品種の出荷は4月まで続く。

また、Decana は前年同期に比べて82%少ない。一般にサイズ75+の果実は好調であり、マーケティングも積極的で価格も手ごろなことから好調といえる。Conference の販売は現在加速中だ。貯蔵量は昨年と比べて43%少ない。



Abate はイタリアの旗艦品種であるが、貯蔵量は昨年と同程度だ(-5%)。販売はコンスタントで、価格も安定し、サイズ別の需要に偏りは少ないが、サイズ75+が諸費者に好まれている。棚持ちが良く、品質も良いため、インパクトのある品種だ。輸出は4月中旬まで続き、国内販売は4月下旬まで続く見込みだ。

フランスでは高価格

リンゴの貯蔵量は昨年より少ないものの、ナシは多い。リンゴの生産量は昨年より7%少なかったため、貯蔵量も6%少ない。しかし、ナシは2% (貯蔵量)が多い。とはいえ、長期的平均で見ると、ナシの貯蔵量は昨年より11%の減少と見込まれる。Conference の貯蔵量は昨年より2%少ないが、価格は2012~16年平均と比べると12%上昇してい

る。

農業省の統計によると、シーズン当初の価格は2015年に比べて30%高く、2011～2015年平均に比べて22%高かったようだ。これは、生産量が少なく、需要が高かったためと見られる。しかし、その後の夏果実との競合で、高価格は沈静化したようだ。

秋には Williams の販売が、オランダ、ベルギー産の Conference との競合があったものの順調に進んだ。

貯蔵量が少ないスペイン

現在、カタルーニャとアラゴンだけで貯蔵を行っている。貯蔵量は約4万トンで、昨年に比べて6%少ない。これは生産量が少なく、29.5万トンと見込まれるためだ。通常年の生産量は34万トンである。品種別には Conference が76%を占め、次いで、Blanquilla の13%、Alexandrine の6%となっている。

欧州全体では、貯蔵量は10%少ないが、価格は2016年に比べてやや低い。最近になって、価格は昨年と同程度に上昇している。サイズの大きいものには人気があるが。

スペインの今年のオランダ、ベルギーからの輸入量は少なかった。

ロシアの輸入禁止措置の影響は、リンゴに比べると少ないようだ。輸入禁止前は70カ国に輸出されていたが、現在は73カ国に輸出されている。主な輸出先は、イタリア、モロッコ、フランス、ブラジル、ドイツ、ポルトガル、サウジアラビア、イスラエル、アラブ首長国連邦、ポーランドである。

年初から市場が回復したオランダ

ナシ市場は好調が続いている。年初に Conference の価格が上昇し、その後は安定している。業者は市場がこのまま好調であることを期待している。国内のスーパーだけでなく輸出先でも Conference は引きが強い。今後数ヶ月、価格には大きな変化はない見込みだ。オランダとベルギーで旗艦品種とされる Conference は長期貯蔵が可能であるため、6月には価格が上昇する可能性がある。

著者: Rudolf Mulderij

88. ニュージーランドのキウイ生産者が賦課金継続に賛成

ASIAFRUIT 電子版 (2017年3月22日)

ニュージーランドのキウイ生産者は、NZKGI(ニュージーランド・キウイ生産者法人)の活動に資金を提供するため、強制的に生産物に課金して徴収される制度(賦課金制度)を継続することに賛成票を投じた。



結果は、投票した生産者の85%が課徴金に賛成した。

有資格生産者の49%が投票に参加し、これは同国のキウイ生産量の63%に相当する量であった。

この結果を前回の2011年に行われた投票と比較すると、前回は87%が賛成し、有資格生産者の42%が投票に参加した。

NZKGIの議長によると、「この肯定的な結果は、過去6年にわたる我々の活動への大きな支持の表れである。

前回の投票時はキウイかいよう病の大発生に追われていたが、今回、前回の投票参加率を上回ったことは特に喜ばしい」とのことだ。

「キウイ産業は本格的な成長期を経験しており、明るい将来が待っている。NZKGIは生産者の利益を最優先とするために存在している」とも付け加えた。

賦課金は NZKGI の活動のために使われる。今回は新たに、(消費者・流通業者等との)コミュニケーションや(活動の)実効性の監視にも使途が向けられる。

現在の賦課金の率は1トレイ当たり0.01ニュージーランドドルであり、率を変更するには総会や特別委員会での投票が必要だ。

NZKGIは、投票結果をニュージーランド第一次産業大臣に報告し、2024年までの賦課金徴収命令を要請した。

89. ペルー 豪雨と洪水でインフラ被害

FreshPlaza 電子版 (2017年3月22日)



今年はエルニーニョによりペルーに大きな被害があった。国内の多くの地域で厳しい状況に置かれ、被害のなかった地域は極めて少ない。ペルーの機関 OCEN(全国非常事態行動センター)の情報によると、死者が75名、100,169名が犠牲となり、627,048名が被災し、10,600戸が崩壊した。

農業灌漑大臣は被害があった Piura 地区を視察し、生産者団体と面会して、10日以内に被災地に面積当たりの資金提供を行うと発表した。

「地方行政部局、灌漑事業者と連携し、被災者の登録手続きを行い10日以内に支給を始める。また、法的手続

きの迅速化に務める。作物を失った地域の情報登録は、人口衛星技術を活用し、手早く進めつつある」と語っている。

また、大臣は被災地の農業保険の適用面積の拡大、適用内容の充実にも努め、より多くの生産者が享受できるよう努めているとも語った。

大臣によると、幸い Piura 地区ではブドウとマンゴーの収穫は降雨が始まる前に終了しており、生産者は被害を受けることがなかったようだ。「輸出には大きな影響はなかった。引き続き農産物の市場投入に努めたい」とコメントした。



生産とインフラ

ペルー北部の Piura、Trujillo、Chiclayo では深刻な状況で、インフラに大きな被害があった。一方、リマ南部でも同様の被害があった。



このため、国内の貨物輸送に影響が出ている。大小の道路が損傷し、被害は2,148kmになると推測されている。政府は、通行を維持するため、代替道路を開設している。しかし、地元紙の El Comercio によると、引き続き雨が降っており、大量の輸送には不向きであるため、代替道路は厳重な監視下に置かれているようだ。

「生産に支障があり、少なくとも混乱している。作物はダメージを受け、あるいは収穫できない状態で、出荷施設へも持ち込めない。持ち込めたとしても、電源がなくて稼働できないか、施設そのものが洪水の被害を受けている。つまり、出荷できるかまったく不透明だ」と生産

者は説明してくれた。

社会的側面

このように、国内では多くの人が程度の差こそあれ被害を受け手いる。孤立している世帯も多く、電気・水道へのアクセスもできない。洪水から難を逃れようとして家族が引き離されたものも多い。

90. 果実を巡る米国とメキシコの関係

The Packer 電子版 (2017年3月16日)

メキシコ:クアダラハラ発

過去1年間、メキシコと米国の関係は、かつてないほど注目されている。米国の新政権が、貿易の不均衡、米国の雇用喪失、NAFTAの再交渉に施策の焦点を当てているからだ。

しかし、米国の農業生産部門は、米国外で最も重要なメキシコ市場でシェアを拡大する機会を模索しており、引き続き成果をあげたいと考えている。

両国の関係の重要性は、3月7～9日に開催された Expo Antad y Alimentaria(展示会)で、米国の輸出業者、市場組織、州政府の存在感が際立っていたことから明らかである。

例えば、北西部ナシ協会は、メンバーが生産した果実に「米国産ナシ」のステッカーを貼り、生産量(全品種、全サイズを通して)の20%がメキシコに輸出されている。協会の国際市場部長は、「国内では見られないほど、メキシコはサイズや等級に対してオープンに接してくれる市場だ」と話している。「メキシコは全ての等級、サイズ、品種を柔軟に受け入れてくれるダイナミックな市場だ。もし、大きなサイズの果実があれば、輸出量を押し上げることができ、卸売業者だけでなく、小売業者も1つ2つサイズを追加するよう奨励してくれる。同様に、小さいサイズしかない場合は、他の輸出市場や国内市場では厳しく対処されるが、メキシコ市場では販路の拡大機会を与えてくれる」、と語る。

green anjou(しまった果肉と緑色の果皮を持つナシ)については、メキシコへは昨年330万箱輸出され、米国産輸出の70%に相当した。また品種ボスは20万箱、グリーン・バートレットは15万箱輸出された。

しかし、今シーズン(2016/17年)は生産量が少ないことから、高価格である。(米国の)生産量が3年前の2,000万箱に比べて300万箱少ない見込みだからだ。加えて、ドルとペソの為替レートが変動し、(ペソ安のため)米国産のナシの価格がより高くなると見込まれる。

「最近のFOB価格は上昇しており、高価格帯のナシ価格は更に上昇している。これは生産量が減少したことと関係している。もし、生産量が2,000～2,100万箱の水準に戻れば、価格は下がり、メキシコでの販売機会は増加するだろう」と部長は話している。

ワシントン州のリンゴにとってもメキシコは重要な市場だ。(年により変動するが800万から1,300万箱を輸出)推計であるが輸出の30%はメキシコに向けられている。ワシントン州リンゴ委員会のメキシコ・中米代表は、「このように年々積み重ねてきた成功は、様々な理由による。最も重要なのは両国が隣接しているからだ」と話している。加えて、「成功の要因のとして、輸出に船を利用する必要はなく、数週間の単位ではなく数日の単位で在庫の管理ができるから」とも語っている。

対照的に、リンゴ委員会と展示ブースを共にした北西部サクランボ協会の国際担当マネージャーは、「メキシコは巨大な市場というよりは、成長を続ける市場だ」と考えている。「リンゴとサクランボを混載して輸出していることに商機がある。トラックの場合、輸入業者は満載のサクランボを輸入しなくともよい。これは安くはない果実に適している。我々にとってメキシコは8番目の輸出先国だ。小さい規模とはいえ必要な国だ。2年前に記録的な大豊作だった際、記録的な量がメキシコに輸出された」とマネージャーは語る。北西部のサクランボは96%が航空便で輸出される。しかし、メキシコはトラックで輸出できるので、大豊作の2015年は通常年の輸出量が15万箱であるのだが、この年が25万箱に達したのである。

9 1. リンゴ新品種 KORU が米国向け初輸出

FreshPlaza 電子版 (2017 年 3 月 17 日)



商品名 KORU®の収穫がニュージーランドで進んでいる。生産量は13～15万箱と見込まれている。商業的生産を開始して4年しかたっていないので、まだ生産量は少ない。今シーズンの最初の米国向け輸出が、船便でこの土曜日(3月18日)に始まることだ。

この商標権を所有しているのは Andy McGrath 氏であるが、世界中で生産を拡大しようとしている。現在カナダ、オーストラリアで生産協議が進められている。また、スイス、英国、その他欧州、南アフリカでも生産を行う構想がある。

「ニュージーランドでは計画的に増産が進められている。昨年は8.8万箱の生産量であったが、

今年は13～15万箱だ。米国での生産量はまだ少なく、4～5千箱であるが、2020年までには50万箱まで急速に増加させるべきである。ニュージーランドでの生産は2020年までに28～30万箱を見込んでいる。生産の拡大は2020年以降も予定しており、その時点では米国市場に周年供給が可能となる」と氏は説明している。

現在85%が米国向けに輸出されている。「とても良い市場経路があり、価格も順調だ。KORU®は米国で大きな市場を持ち、米国全州(アラスカ州を除く)の主要小売業者が販売を行っている」とのことだ。ニールセンの調査によると、(昨年は)販売額が230%増加し、販売量は202%増加したそうだ。

氏によると、消費者の反応は類を見ないほどだそうだ。「丁度良い酸味と甘味ということだけでなく、非常に深みのある味わいがある。素晴らしいパリパリ感があり、糖度が乗っている。そして通常は見られない複雑さを持っている」と語る。フェイスブックでの反応は素晴らしく、消費者はKORU®に強い関心を持っているようだ。



KORU®は1998年に Geoff Plunkett 夫妻の庭に生えた実生から偶然発見された。夫妻は腐ったリンゴの実から生まれたことを知り、実生園に移した。自らリンゴ生産者であった夫妻は、好奇心を持って、果実がなるのを待ち、その品質が素晴らしいことに感銘を受けたのであった。

夫妻は腐ったリンゴがフジであることを知っていたので、片方の親がフジであると認識していた。DNA 検査により、花粉親はブレイバーンであることが判明した。これは、発見された実生の位置からも実証されている。

その後ニュージーランド全土で試験栽培が行われた。夫妻はこのリンゴをアボリジニ語で「新しい始まり」を意味する Kotabaru と名付けたが、品種名は Plumac と登録され、登録商標名としてKORU®と命名され、世界中の注目を集めている。

KORU はマオリ語で新しい葉を展開しようとしているシダのことである。デザインはマオリとニュージーランドの文化、新しい生命、再生、成長、平和を現すシンボルである。

著者: Nichola Watson



9 2. カリフォルニアではナツメヤシの消費が増加中

FreshPlaza 電子版 (2017 年 3 月 20 日)



ナツメヤシ(デーツ)業界は、毎年拡大を続けている。Atlas Produce & Distribution 社の社長によると、「毎年20%増加を続けており、来年も同程度増加すると見込まれる」そうだ。主産地は、カリフォルニア州の Coachella Valley で、価格は比較的安定している。「全米で健康食品を求める動きがあることから、素晴らしいことに消費は毎年20%ずつ増加している」と話している。

同社のナツメヤシは Caramel Naturel Medjool Dates というブランドで販売されている。Deglet Noor (品種名) のパッケージで、形態はココナツロール状のもの、アーモンドロール状のもの

含め、やわらかいもの、干したものなど様々だそうだ。

「今年の品質は格別良い。収穫まで雨が降らなかったことはグッドニュースだ」と社長は語っている。有機栽培も増加している。「次期シーズンには生産量の50%以上が有機となるだろう」という。この先の復活祭(3月下旬)や各種祝日には、米国、カナダ、オーストラリア、環太平洋地域で消費の伸びが見込めるようだ。

社長によると、大きなサイズの果実をコンスタントに生産できるそうだ。これは、毎年、摘果の作業を行ってきたからだという。「高品質とサイズの大きさには自身を持っている。今年の場合は、特に、サイズが連年に比べて大きい」そうだ。

同社は、最近新たに二人の社員を受け入れた。



著者: Pieter Boekhout

9 3. 中国のリンゴ市場は徐々に回復

FreshPlaza 電子版 (2017年3月16日)



「中国では2016年に主な産地で価格が低下し、販売は低調であった。今年に入って市場は徐々に回復し、価格は上昇傾向にある。特にフジについてはその傾向が強い。冷蔵出荷の場合は価格が70%上昇した。この勢いは秋まで続くのではないと見ている」と Wang Lao Wu フルーツ・インダストリー社の Wang 氏は取材に応じた。

「2016年の価格低下の要因はいくつかある。第一に市場全体が低迷し、消費も軟調だったことだ。二つ目は、早生品種の市場出荷量が前年に比べて20%減少し、貯蔵に回ったため、市場に

悪影響を与えたことだ。新しい出荷シーズンがスタートした2016年9月下旬には、フジの価格は、生産過剰を懸念して10%下落した。加えて、投機筋はフジの価格を上げようと無理な動きをしたのではないかと思われる」とのことだ。

「現在では、バイヤーは国内市場の潜在的需要を踏まえ、購買量はコンスタントに推移している。また、主要輸出国であるロシア、インドネシア等との間で政治的関係が回復しつつあることから、輸出量はほぼ通常の水準に戻りつつある」そうだ。

「現時点で先を見通すことは困難だ。しかしながら、新しい収穫シーズンである9月までは、価格は堅調に上昇すると期待している」とのことであった。



詳細情報: Wang Lao Wu Fruit Industry

94. ブラジルでカンキツグリーンング病により中小農場が減少

FreshPlaza 電子版 (2017年3月16日)

ブラジルとフロリダは、10年以上にわたりカンキツグリーンング病及び同病がもたらす壊滅的な影響に対し、高額な金を支出しながら戦いを進めてきた。

フロリダカンキツ委員会で水曜日、Tom Spreen氏は、「これまでのところ、ブラジルの方がこの戦いを優位に進めている。しかし、それは単に(戦いを)遂行する余地があるからに過ぎない」と語った。



氏によると、「フロリダに比べ、南アメリカ最大の生産国であるブラジルは、広大な未開の土地を有している。このため、カンキツグリーンング病が蔓延している地域以外の土地にオレンジを新規に植栽できるから」だそうで、「ブラジルの大規模カンキツ生産者はこのことを実行している」という。「こういった対策を講じられないフロリダに比べて、ブラジルは病気から逃れることができる点で有利である」と語っている。

「ブラジルの生産も減少している。これは、中小の生産者(500エーカー以下)が消滅しつつあるからだ。それはフロリダも同じだが」とも述べている。

「両国とも大規模生産者は移転するなどの対策を講じることが可能であるが、それが出来ない中小農場は高いコストを支払って病気に対抗することは困難である」、とのことだ。

氏によると、「2012年から2015年にかけてオレンジの樹木数は18%減少したが、同時期に農場数は38%減少した」と状況を語った。

「多くの農場が消失していく中で、樹木数の回復はできないと考える。この結果、ブラジルは今後10年以内に4億箱の生産規模に回復することはないだろう」と氏は語った。

情報源:newschief.com

95. トルコでリンゴ生産が拡大中

FreshPlaza 電子版 (2017年3月16日)

商業的なリンゴ生産を行っている生産者は少ないものの、トルコのリンゴ生産は拡大している。春先のこの時期、リンゴは最も販売される果物で、夏前まで販売は続く。国産のリンゴが大部分で、輸入リンゴはほとんど無い。

大規模生産者は、国内市場へ出荷するとともに、輸出も行っている。ただ、一部の輸出業者は小規模農家の生産物も輸出している。Anadolu Etap 社の Aysel Oguz 氏は、「トルコでのリンゴ生産は増加している。生産者は新品種についても興味を持っている。トルコはリンゴ生産国の上位5カ国に入っており、生産量は390万トンである」と語っている。



同氏によると、Anadolu Etap 社はトルコの中で最も大きいリンゴ生産会社の一つであり、「同社のリンゴ園は成園に達しており、生産量は3万トンと見込んでいる」とのことだ。トルコはリンゴ消費量が多い上位3カ国に入っている。トルコの(一人当たり)消費量は、年間123kgで、世界平均の74kgを大きく上回っている。2年前にフジ、ピンクレディーのような新品種がトルコ市場に登場し、大きな反響があった。

「新品種の成功の影にはソーシャルメディアがあった。また、小売店で試食を行うなど、プロモーション活動にも積極的だ。トルコの消費者は、スーパーとともに地域のバザールでもリンゴを購入する。伝統的なバザール

は販売ルートとしては重要である。しかし、最新のトレンドであるカットフルーツなどには対応できていない」とのことだ。

リンゴの価格は、通常、シーズン初めは低く、冬の終わりにかけて上昇する。トルコは近隣諸国である中東、インド、アフリカ、アジアにリンゴを輸出している。以前はロシアが有力な輸出先であり、特に、ロシアがEUへ輸入禁止措置を講じて以降は大きな市場であった。しかし、ロシアとトルコの政情が悪化したため、リンゴ輸出は大きな打撃を被っている。

「ロシアへの輸出が再開できるよう、両国間の関係回復を切望している。現在、僅かな品目だけがロシアへの輸出を許されているが、リンゴはその対象となっていない」と同氏は嘆いている。「アジアは代替の有望な市場であるが、課題も多い。「アジア向け輸出に当たっては、手続き上の不備な点がある。現在トルコ政府が懸命に努力しており、間もなくアジア向け輸出が可能となることを期待している」とのことだ。



物流は、特に出荷最盛期や祝日などでは問題になる。しかし、アジア市場が重要性を帯びるにつれ、出荷業者が極東向けの物流を改善してくれることを同氏は期待している。

「トルコのリンゴ業界が近い将来に組織化されることを期待している。カンキツやヘーゼルナッツでは、既に、市場開拓と販売促進を行う組織が存在している」

とも語っている。

トルコのリンゴ業界の組織化が進んでいないことは、業界の発展を妨げている。リンゴは、現時点では世界第4位の生産国である。トルコの生産者や輸出業者は、他の分野、例えばタンゼリン、レモン、サクランボ、ブドウ、アプリコットでは重要な役割を果たしている。リンゴ業界が組織化されれば、両者(生産者、輸出業者)の役割は向上することになるだろう。

Anadolu Etap 社は2009年にトルコの子会社である Özgörkey Holding 社とブラジルの企業 Cutrale Group の合併により誕生した。現在、同社はトルコ国内の Canakkale、Balıkesir、Denizli、Konya、Mersin、Adana、Urfa に7つの農場を所有している。

これら農場は合わせて2,500ha になる。同社は加工工場や選果場も備えている。生産しているものは、リンゴの他に、モモ、ネクタリン、アプリコット、サクランボ、ナシ、ザクロである。

リンゴを生産している農場は Balıkesir で、面積は1,000ha、トルコでは最大級の農場である。この他、Konya では最大級の有機リンゴ園150ha を所有している。

「トルコのリンゴは、アジア、インド、中東の市場では適度なシェアを占めている。近い将来、これらの市場で更に人気があるだろう」と同氏は締めくくった。



著者:Yzza Ibrahim

9 6 . 高温で収穫が集中するチリ

FreshPlaza 電子版 (2017 年 3 月 15 日)

チリでは高温により生育が早まり、品質と市場に問題が生じている。これまでのところ、この傾向が永続的なものか否かは誰にも分からないが、人々は代替方策を模索している。

高温により生育サイクルが通常年よりも随分と早まっており、果樹園には大きなストレスとなっている。Uvanova 社の社長によると、収穫期が例年より少なくとも10日早いそうだ。この傾向は果物全般に当てはまり、輸出にも影響があるとのことだ。

「特にサクランボでこの傾向が見られた。様々な品種を同時に収穫しなければならず、収穫期が大変に集中したため、本来の収穫ピーク期の前から大量の収穫労働力を確保せねばならなかった。同様の現象はナシでもおこり、リンゴやキウイも同様であった。このため、我々は相当迅速に対応する必要が生じた」と第VII州の生産者は語っている(注:チリでは各州にローマ数字の番号が振られている)。Fedefruta 社の前社長は、「これまで、収穫期が予定より早かったり遅くなった年はあったが、これほど予定時期よりも早く収穫が始まり、おまけに収穫期が集中することはなかった」と話している。

このため、果物の品質や市場に大きな影響が生じ、生産者は大いに懸念をしている。

Fedefruta の現社長は、「収穫が早まることで輸出計画や物流の見直しを迫られている」という。サクランボで経験したことは、収穫が10～15日早まり、中国には新年を待たずに輸出された。この時期には現地の需要がなく、急速な価格低下を招いた。この結果、「輸出業者は契約していた航空チャーター便をキャンセルしなければならなかった。価格が低すぎて航空便で出荷することもできなかった」と社長は述べている。

同様のことはコピアポ市のブドウでもおきた。「カリフォルニア州のコーチェラ・バレー産のブドウがまだ市場に残っている中で、ブドウの収穫が始まった。このため第III州では通常の利益は得られない」と社長は付け加えた。

果樹産業界では高温がもたらす影響は予想できないものとなっている。

「この傾向が恒常的になるという確たる証拠はない。しかし、この問題がもたらす新たな次元を誰も予測できなかった。だから、市場や物流網に適応するように警告もできなかった」とAsoex 社の社長は語っている。

この現象は、労働力不足等の別の問題ももたらした。「シーズンを通じて全てが予定より早く進行したため、労働力を確保することができなかった。欲しい時には労働者は他の(品目の果樹)作業に従事していた。しかし、この状況は急いで改善しなければならない」とUvanova 社の社長はブドウ業界を例にしながら語った。

情報源:El Mercurio

9 7. 世界のマンダリン市場

FreshPlaza 電子版 (2017年3月10日)



天候に恵まれたスペイン産の販売シーズンに続き、南半球産のマンダリンの販売が早くも始まる。ペルーとチリの販売は通常より早く始まる見込みである。南アフリカは、晩生種の生産量が大幅に増加して問題が生じるかも知れないが、販売は(現時点で)例年通りである。冬期の乾燥は、特定の地域では悲惨な状況を生み出すかも知れない。中国では生産量は減少する見込みだが、天候に加えてカンキツグリーンング病による影響が大きい。イスラエルでは品種 Orri に期待をかけており、モロッコは世界市場に打って出ようとしている。

スペインでは不安定だったシーズンも終わりが迫る。

スペインでは、主産地のバレンシア、アンダルシアの販売が間もなく終わる。全体的に生産量は例年より少なく、価格は好調であった。

アンダルシアでは、マンダリン、クレメンティンの価格が2月最終週に上昇し、昨年よりもやや上回った。生産量は9%多く、平均価格はキロ当たり0.6ユーロであった。アンダルシアの中では、ウエルバの占める割合が53%と最も高く、次いでセビリアの18%、アルメリアの17%と続いている。生産量は35.9万トンであった。

バレンシアでは、Nadorcott、Ortanique、Orri、マーコットの収穫は既に終了している。晩生種は11月、12月が温暖に経過したことから、例年より3~4週間収穫は早まり、既に収穫適期を迎えている。一方、1月に豪雨に襲われ、クレメンティンの中で最も数量が多い品種である Clemenules の生産量に大きな影響があった。この被害が甚大であったため、晩生種の需要は高まっている。

品種ごとの価格は、最も高いものは、生産量が限られている Orri である。第10週の Nadorcott の産地価格はキロ当たり0.65~0.84ユーロで推移している。Ortanique の価格は0.18~0.29ユーロである。これに対して Orri は0.94~1.20ユーロで取引されている。

品種 Orri に期待を寄せるイスラエル

海外市場の中で最も人気のある品種は Orri である。種無しで皮が剥きやすいこの品種は、スペインやトルコと競合関係にあるが大いに期待される。この品種の栽培ライセンスは3カ国に限られている。しかし、スペイ

ンの生産量は6～7万トンであるのに対し、イスラエルの生産量は13.5万トンと多い。2020年までには生産量は20万トンに達すると見込まれる。

Orri の大部分は輸出に向けられる。生産量13.5万トンに対して輸出量は9万トンである。輸出業者は、今年は潜在需要が高いと見込まれる日本、中国を含めアジア、太平洋地域への販売拡大を望んでいる。

なお、Orri の人気が高いにもかかわらず、今年は、Jaffa ブランドの下で販売されることになっている。

市場の回復を願うモロッコ

輸出業者によると、クレメンティンにとって今年は大変な年であったようだ。生産者が増産に努めてきたにもかかわらず、実際の収穫量は予想を下回ったものであった。収穫量が予想を下回るのは5カ年連続である。今回の生産量は注文に応じるには問題は無いが、生産者は収益が少なくなると見込まれる。

また、予想外のことだが、スペインとの競合が生じている。「スペインでは天候に影響され、収穫期が通常よりも早く、1月には市場に出回った。通常、2月までは市場に出ないはずなのに」と輸出業者は語っている。3月になれば市況は回復すると期待している。業者は、カリフォルニア州で悪天候の影響が出ていることを好機ととらえたいようだ。

カリフォルニア州では降雨の影響にもかかわらず市場は好調

カリフォルニア州の生産者は豪雨の合間の乾燥期間に収穫をせざるを得なかった。セントラルバレーではここ数週間、記録的な豪雨があったため、収穫は遅延した。このため、Tango を含むマンダリンの収穫は、現在最盛期である。同州産のマンダリンはオーストラリア、アジアに向け多く輸出されている。生産者は、豪雨の影響があったにもかかわらず、輸出契約数の多さと国内スーパーでの好調な販売により、最終的には良好な成績を収めることができると確信している。出荷シーズンは4月末まで続く。

カリフォルニアでは、現在、出荷量が限られているため、価格は堅調である。ただし、降雨が終われば価格は低下すると見込まれる。また、出荷量の減少は果実輸入へも影響すると考えられる。

米国では国内生産の他にスペインからの輸入がある。カリフォルニア産の出荷量が増加すれば輸入は減少する。スペインに加えて、モロッコからの輸入もある。北アフリカは、今でも米国市場に足がかりをつけようと努力している。さらに、3～4週間後にはイスラエル産が輸入される。このため、5月末までは供給量は潤沢と見込まれるが、その時点ではペルー産が出回ることになる。貿易業者は、自国産の大部分は輸出に向けられ、国内需要はスペイン、モロッコ、イスラエル産で賄われている、と説明している。

生産者にとっては豪雨だけが悩みの種ではない。サイズの小さいマンダリンの出荷先を見つける必要があるからだ。小売業者はサイズの大きい果実を優先するし、輸出も小玉は不向きだ。生産者は、最善の解決策は学校給食プログラムを構築することだ、と考えている。今年の果実は小玉が多いからだ。

ペルー産は早い出回り

米国の輸入業者によると、ペルーの温州ミカンの収穫は例年より2週間早いそうだ。米国市場ではスペイン産マンダリンと時期が重複する。「今年、ペルー産のブドウの出回りが早かった。マンダリンも同じ道を辿るのではないか」と業者は語っている。

チリ産の出荷も早まる見込み

出荷シーズンは早まると見込まれる。温暖な気候に恵まれているが、収穫までにはもう少し時間がかかる。米国の輸入業者によると、「チリ産は今シーズン好調」の見込みらしい。この要因の一つは生産量が拡大していることにある。栽培面積も増加しており、結果樹齢に達した園地から市場出荷が見込めるからだ。

中国の生産量は5%減少見込み

中国産のマンダリンの生産量は昨年より5%減少するとの予測だ。生産量合計は1,930万トンと見込まれる。減収の要因はいくつかある。一つはカンキツグリーンング病で、特に広東省、広西チワン自治区に被害が多い。また、春先と秋に記録した豪雨の影響も大きい。加えて、昨年は生産量が多かったが、今年は裏年に当

たるからだ。とはいえ、湖南省、四川省などいくつかの省では生産増が見込まれている。なお、栽培面積に変動はない。

価格はシーズン当初は高く、キロ当たり4~12人民元(0.5~1.5ユーロ)であったが、晩生種になると2人民元まで下落した。一方、プレミアム品や輸入品に対する需要は高まっている。しかし、これは東部の大都市におけるものだ。主な輸入先はオーストラリアと南アフリカである。

好調な販売シーズンを期待する南アフリカ

南アフリカでは通常のシーズンを送ると見込まれる。生産の大半はボランドと西ケープにより担われている。収穫は第17週から始まる。来月の気温も生産を左右することになる。南アフリカ北部を襲った豪雨の果実生産への影響は限定的であった。同地域での収穫は遅延したが、果実の肥大はやや良い方であった。

ボランドでは、今週、温州ミカンの収穫が始まった。収穫量は昨年より少ないものの、生産者は満足している。温州ミカンの最大の出荷先は英国であり、サイズの小さい果実も販売される。ロシアにも輸出され、量は少ないがEU諸国にも向けられている。

東ケープと Senwes でも販売状況には満足している。しかし、晩生品種に関しては大きな不安がある。というのも生産量が5倍に増加する見込みだからだ。西ケープでは、到来する冬の気象が業界の行方を決めるものとみられている。まだ、水は十分に確保できているものの、冬期の乾燥は生産者に悲惨な状況をもたらすからだ。

高価格のベルギー市場

輸入業者によると、スペイン産の販売は終期を迎えているとのことだ。Nadorcott の販売は既に終了し、現在最も出回っているのは Orri であり、来月まで販売が続く模様だ。両品種は「優れたマンダリン」と評価されており、価格はキロ当たり2~2.5ユーロという高値で推移している。需要が特に強いというわけではなく、平均的な需要量で高価格を維持している状況だ。

Nadorcott 等の供給量は限定的である。業者によると、「供給量はますます限定されたものとなっているが、需要も同じ傾向を辿っている。ということは、価格は特に高いわけではなく、通常ベースではないかと考える。供給量が少なくなっているのだから、需要があるなら、本来はもっと価格が上昇するはずだ」とのことだ。一方、ある輸入業者は、「価格は需要に影響を及ぼす水準ではない。とはいえ、9月から始まるマンダリンの長いシーズンを通して、消費者は様々な品種を見極めようとしているのではないかと語っている。

国内市場では需要は好調

オランダではマンダリンに対する需要は引き続き好調で、特に高品質な商品に対する需要は大きい。価格は、Tang Gold でキロ当たり2ユーロ、ClemenGold で1.7ユーロ、Orri.で2ユーロである。貿易業者によると Orri.に関しては、ドイツ、フランス、英国からの需要が高いため、今後(価格が)変動すると見ている。輸入業者は、現在、スペイン産の Tang Gold の販売の終期を迎えている。ClemenGold の販売はこの先3ヶ月続く。当面、マンダリンに対する需要は高い水準にあると見込まれる。

著者:Rudolf Mulderij

9 8 . 果樹収穫ロボットで労働力削減

The Packer 電子版 (2017 年 3 月 7 日)



トランプ大統領の移民規制に関する政策は果樹生産者に不安をかき立てているが、同時に生産者は移民に代る「労働力」としてのロボットに高い関心を寄せている。

2 月下旬にワシントン州ウェナチーで開催された国際果樹協会の会合で、2つの企業がロボット収穫機の開発の進展状況が紹介した。

カリフォルニア州に本拠を置く Abundant Robotics 社とイスラエルに本拠を置く FFRobotics は、共に今後数年以内に実用化できると述べている。

ボストンの Luxresearch 社のアナリストは、2016年のレポート「ロボット革命：自動化システムは

どのように精密農業に統合されているか」の中で、農業分野で自動化技術への投資は増加している、と述べている。また、技術の範囲も、トラクターの自動走行から収穫作業の疲労軽減のためのアシストスーツまで幅が広いそうだ。

先のレポートでは、「ロボット技術を利用しようとする原動力は、労働の効率化、各種規制強化への対応、ロボット技術がもたらす正確さ・精密さへの期待である」、とのことだ。

自らもリンゴ収穫ロボットの研究をしているワシントン州立大学の准教授は、「確かに実用化に近づいている。公的機関、民間の研究者ともに取組みを進めている」と述べている。また、「労働コストが増加するにつれ、新技術の価格は相対的に安くなっており、ロボット収穫機が経済的にペイできる時点が訪れるだろう」とも語っている。准教授らはロボットアーム、ハンドの研究をしており、少なくとも今後2年間の研究費は準備されている。リンゴは矮性台木、トレリスの使用などで樹冠が小さく、ロボット化するには適しているそうだ。10年以内に商業ベースでロボット導入が実現するだろうとも考えている。「将来は農作業を完全に自動化する道を目指している」と語った。

幅広い関心

首都ワシントンの農業雇用者協議会の副会長は、「誰もがロボットに関心を持っており、最初に成功したのは酪農業界だ。ロボット搾乳機を購入するまで2～3年だった」と語っている。

副会長によると、精密で繊細な技術を要するイチゴ収穫ロボットの開発にも、公共機関、民間の研究者が取り組んでいるそうだ。この分野では制御された環境が求められる。

この他、水耕栽培や垂直農業の分野では成功の事例があるそうだ。

また、ほ場での作業に関しては、既存の労働を支援する移動型の収穫プラットフォーム、収穫物の運搬システムなどが機械化の対象になるだろうと考えている。

いずれにせよ、副会長は、最大規模の生産者がロボットを最初に導入することになるだろうと語っている。

スイートコーン、セロリ、ニンジンでは既にある程度の機械化が進められている。もし、生産者が(機械による)収穫ロス許容するなら、更に機械化は進展すると見られる。

副会長は、「今年、生産者は、更なる機械化を進めるだろう。(機械化による)収穫物の損傷、廃棄、(品質低下による)販売価格の低下に対しても、生産者は受け入れることになるだろう」と語っている。

著者: Tom Karst

99. キウイベリーは小さいけど人気は絶大(北米)

FreshPlaza 電子版 (2017年3月7日)



キウイベリーは、サイズが大きく「従兄弟」にあたるキウイと味も魅力もそっくりだが、労力をかけずに楽しむことができる果実である。この果物が北米市場で小売を牽引していることは不思議ではない。高品質なキウイベリーの生産は順調で、チリ産が終わりを迎え、ニュージーランド産が出回ろうとする時期だ。

両国の出回り時期は2週間重複している。ニュージーランド産は4月まで出回る。Frieda's Specialty Produce社のCEOは、「年後半にはオレゴン州産、ブリティッシュコロンビア州産が出回る」と話している。

皮を剥く必要は無い

キウイベリーは「ベニーキウイ」、「グレープキウイ」、「カクテルキウイ」とも呼ばれることがある。表皮に毛がなく、キウイより甘く、皮を剥く必要が無いので手軽に食べることができる。加えて、オレンジよりも多くのビタミンCを含み、ビタミンA、E、B2、食物繊維も豊富だ。

CEOによると、輸入品の品質は大変優れているようだ。価格は昨年と同程度であるが、入荷のピーク時には輸入業者は特別のプロモーション価格で販売するらしい。

著者: Pieter Boekhout

訳注: キウイベリーの日本名は「サルナシ」

100. スペインで専門家がカンキツグリーニング病を警告

FreshPlaza 電子版 (2017年3月6日)

一般に「カンキツグリーニング病」として知られているが、病源のバクテリアはカンキツに壊滅的な被害をもたらす。この病原菌は昆虫が媒介しているが、既にスペインのガリシア及びポルトガルで昆虫の存在が認められている。病気に罹患した果樹は伐採するしか手はない。従って、予防が唯一の対策となっている。

これを踏まえ、レモンの専門家組織である Ailimpo は、Koppert 社、Cajamar 社と連携して、近頃、カンキツグリーニング病の予防及び制御等に関する技術検討会をムルシアで開催した。この会では世界的なバクテリアの権威で、ブラジルで働くペーニャ氏が講演を行った。ブラジルはこの病気による深刻な被害を受けている。会議には100名の生産者、企業が議論に参画した。

スペインでは100万トンのレモン生産が危機にさらされているが、うち、ムルシアだけで60万トンに達する。全国の栽培面積は3.9万ヘクタールで、ムルシアは2.2万ヘクタールを占めている。樹木数はスペイン全土で900万本、ムルシアで600万本である。

バレンシアの研究者の一人は、「米国フロリダ州ではカンキツ樹が多く罹患し、危機的な状況だ。治療法はなく、抵抗性品種もない」と発言した。

ペーニャ氏は、ブラジルのカンキツ産業では、これまで4,000万本もの樹を伐採してきたので「生き残る」とし、「しかし、スペインでは何百万もの樹を伐採することは現実的な選択肢とはならない。最良の戦略は予防である」と指摘した。システムを作り、規制を強化して感染を防ぐことが唯一の防衛策である、というのである。

ペーニャ氏が指摘するところによると、「病気を媒介する昆虫がポルトガルやガリシアから飛来する可能性はある。何故なら、飛来を防ぐ手段はないからだ。数年以内に飛来することも考えられる。昆虫と共に罹病した植物が搬入されれば野火のように病気が拡散する恐れは否定できない」そうで、「ムルシア、アンダルシア、バレンシアの脅威は現在のところ、ポルトガルとガリシアにある」とのことだ。

専門家は、地域、国、さらには欧州全体が協力して病気の拡散を予防することが不可欠だと考えている。

「適切な法律や計画が打ち立てられれば、病気はコントロールできる。特に、他国から樹木の持ち込みを禁止すること(既に禁止されているが、厳密に行われていない)に対してより警戒を強めることが必要だ」とペーニャ氏は語っている。というのも、病原バクテリアは低木や観葉植物へも感染するからだ。そして、これら植物に関する移動規制は強く働いていないからだ。

研究者は一般市民に対して、他の国からの植物持ち込みを止めるよう協力して欲しいと訴えた。経済的に重要な産業であるカンキツに大きく不可逆的な損失を与えないためである。

情報源: laopiniondemurcia.es

101. オーストラリアのリンゴ生産会社アジアで新品種を販売

FreshPlaza 電子版 (2017年3月3日)



オーストラリアの Lenswood Apples 社(南オーストラリア州)ではガラと MiApple™の収穫が始まっている。グラニースミス、フジ、ピンクレディー、Rockit™ の収穫は3月中旬から始まるそうだ。

「果実の肥大も品質も良好だが、各生産者にとって、今シーズンはまたもや困難に立ち向かう年になった」と同社の CEO は語っている。「春先が低温で湿潤であり、その後高温被害と鳥害があった。春の低温で開花が最高3週間

遅れ、病虫害も発生した。しかし、これらを何とか克服した」そうだ。

CEO は今年の生産量は2016年より5%減少すると見ている。しかし、果実の肥大が良いため、この数字も変わる可能性がある。「全般に冷涼であったことを考えると、糖度は予測以上に高い。新品種の MiApple、Rockit は既に昨年の糖度を上回っている。だから、シーズン後半にはこれら新品種の糖度基準を見直す可能性もある」とも話している。

同社の中心品種は、ガラ、フジ、グラニースミス、ピンクレディー及びこれら品種の高着色系系統である。かつて栽培されていたゴールドデンデリシャス、レッドデリシャス、ジョナサンは姿を消し、代わりに、MiApple、Rockit、Redlove などの新品種が登場している。加えて、「数年以内に販売が見込まれる更なる新品種の試験栽培を進めているし、2名の有機栽培認証者と2名の有機栽培転換移行者がいる」とのことだ。



同社の主な販売先は Woolworths、Coles、ALDI などの大手スーパーの他、アデレード、メルボルン、シドニー、ブリスベン等の卸売市場を経由して小売店にも販売している。また、輸出も拡大を続けており、英国、東南アジア、アラブ首長国連邦が主な輸出先である。

加えて、最近のトレンドに沿い、Rockit、MiApple などの新品種を中心にアジア市場をターゲットとしている。現在試験中の新品種もアジア市場を狙ったものだ。

「Redlove は20年の歳月の末に生まれた、オーストラリアで初めての果肉の赤い品種だ。食味はグラニースミスに似ており、調理をしても魅力的だ。果汁は赤く、スライスや焼いても赤い色が残る。また、果実が魅力的なだけでなく、樹木としても同じくらい魅力的だ。花はピンク色で、葉と樹皮は濃い赤とピンクの混合色で、花木として珍重されている。栽培も簡単で、病気に強く、矮化タイプとカラムナータイプがある。庭木としてもポット栽培としても適している」とのことだ。





Miapple は2017年の早々にスーパーで販売され、オーストラリアで最も早い早生品種となった。特徴は赤い果皮とクリーム色の果肉で、爽やかな風味を持ち、完璧な「絶妙な美味しさとジューシーな歯ごたえ」を持っているという。

Rockit は「持ち運びに便利な日用品リンゴ」を目標に開発された。既存の-snackであるベリー、チップス、チョコレートに対抗し得る、持ち運びに便利で、手頃で、芯がほとんど無い、小

さく甘くてパリパリ感があるsnackリンゴである。2016年に成功裏に販売促進が行われ、高いブランド認知度、満足度を獲得し、ターゲットとなる消費者を相手に洗練度を高めた。

著者: Nichola Watson

102. 米国の農業政策に関する議論

The World Apple Report 誌 (2017年3月号)

米国では、引き続き有機農産物への需要は供給を上回っている。そして、いくつかの取組みが需給ギャップを埋めるのに役立っている。

米国農務省は、有機農産物の販売額を対象とした徴収金を財源として、既存市場の充実や新規市場の開拓を狙い、新たな有機農業に関する調査、推進活動、情報提供プログラムを実施しようとしており、意見聴取を進めている。しかし、有機農業界には既にこの種のプログラムが存在しているので、農務省の提案に対しては相当な議論が出ると予測される。

有機農業への転換期農産物の表示の動き

米国農務省は上記とは別に、有機農業への転換期(3カ年)に生産された農産物に対する新たな表示制度(「転換期有機」)を提案している。これは、生産者が転換期に必要なかかりまし経費を補うため、農産物にプレミアム価格がつけられると期待するからだ。

これに関する議論は、どのようなプレミアム価格であろうと生産者が有機へ転換するのに役立つとする主張がある一方で、新たな表示は混乱をもたらし既存の有機農産物に対するプレミアム価値を損なうという主張もある。

農家への補助金に対する米国内の批判

アメリカン・エンタープライズ・インスティテュートの最新のレポートによると、毎年200億ドルに上る政府からの補助金は、貧困者の栄養状態の改善や飢餓の回避に役立っておらず、大規模農業者を豊かにしているだけだ、と断じている。

レポートの著者には、国際食料政策研究所の研究者、カリフォルニア大学の研究者、農務省経済研究所の元首席エコノミストも含まれている。ある研究者は、かつてブラジルが米国の大豆補助金に対してWTOへ提訴した際にこれを支持していた。

著者達の主張は、米国の農家補助金は、農産物の価格を引き下げることなく、雇用者の賃金も増加させず、地域経済の発展にも寄与していない、というものである。政府の複雑な政策(例えば酪農への助成金など)は、効果を上げていないとする主張だ。一方で、かつてフードスタンプ事業と呼ばれ、現在では栄養補給支援プログラム(SNAP)と呼ばれる事業などが典型であるが、食品安全・安定供給に関するプログラムは貧困層の栄養改善などに寄与していると主張している。

著者達は、200億ドルに達する農家への補助金を、公的機関の支出による研究開発に回すよう議会に提案している。

新農業法の議論

先のレポートは、現在議会で議論され、2018年に制定が予定されている新農業法の議論のネタになると見込まれる。農業法は、通常は農家への補助制度と貧困者への栄養補給対策の両方が並立している。法案が議会を通るためには、貧困者対策(SNAP)を支持する立法と、農業者の利益を代表する立法とが融合される必要があるからだ。特に、主要農産物が低価格で推移する中で、農業者による後者への指示は根強いものがある。

この記事が公表される頃であっても、トランプ大統領やパデュー農務長官候補は長い歴史を持つ農業法への態度を明確にしていまいだろう。トランプ大統領は議会による融合(妥協)すら認めないかも知れない。

特産農産物関係者は傍観

果実や野菜などの特産農産物のリーダー達は、過去10年間、農業法がこれら作物にも恩恵が及ぶよう努力してきた。政府の支出が研究開発に重きを置くなら果実や野菜にとっては恩恵が及ぶだろうが、現状の体系を大幅に見直すことは混乱に繋がると考えている。

もし大統領が現行の農業法体系に反対すれば、果樹や野菜のリーダー達は、「実を取りたい」とする目論みが外れるかも知れない。先が見通せない不確実な時代だ。

海外果樹農業情報 刊行物一覧

No.	調査報告書名	発行年月日
74	フィリピンにおける熱帯果実の生産・流通事情調査報告書	03. 7
75	台湾における果樹産業事情調査報告書	03. 8
76	中国福建省におけるカンキツ類の生産・流通事情調査報告書	03. 11
77	海外果樹関係データ集 2003年版	03. 12
78	ポーランド共和国におけるリンゴ及びリンゴ果汁の生産・流通事情調査報告書	04. 3
79	西欧のくだもの消費事情調査報告書	04. 6
80	中国山東省におけるアウトウの生産・流通事情調査報告書	04. 7
81	米国における果実消費動向及び生食用果実流通実態調査報告書	04. 8
82	欧米のくだもの消費事情調査報告書	04. 9
83	オーストラリアにおけるリンゴ及びアウトウの生産・流通事情調査報告書	05. 3
84	中国におけるリンゴの生産・流通事情調査報告書	05. 6
85	タイにおける果実の流通・販売の実態に関する調査報告書	05. 6
86	日本におけるフードガイドの新たな動きについて（くだもの編）	05. 7
87	インドネシアにおける熱帯果実の生産・流通事情調査報告書	06. 1
88	海外の果実生産・貿易状況 2006年版	06. 4
89	台湾における果実の生産・流通・消費事情等に関する調査報告書	06. 6
90	スペインにおけるカンキツ類の生産・流通事情調査報告書	06. 10
91	ベトナム・韓国・インドネシア・台湾における果実の生産・流通事情調査報告書（補遺版）	06. 10
92	チリにおける落葉果実等の生産・流通事情調査報告書	07. 2
93	台湾における果実の輸入関連制度に係る調査報告書（付 果実の生産・流通状況）	07. 5
94	アラブ首長国連邦・インド・タイにおける果実の生産・流通・消費事情調査報告書	07. 7
95	ニュージーランドにおける果実の生産・流通・消費事情等調査報告書	08. 3
96	台湾における日本産果実の流通・消費実態調査報告書	08. 6
97	韓国における主要果実の生産及び輸出入等に関する実態調査報告書	08. 7
98	ドイツ・オランダにおける果実・果実加工品の生産・流通状況調査報告書	09. 2
99	台湾における日本産果実の生産・流通・消費実態調査報告書	09. 6
100	世界の主要果実の生産・貿易概況 2009年版	09. 11
101	中国におけるポンカン等の生産・流通実態調査報告書—福建省及び浙江省を中心として—	09. 11
102	米国におけるリンゴの加工品等実態調査報告書	10. 2
103	ロシアにおける日本産果実の販売可能性及び同国の果樹農業・政策基礎調査報告書	10. 7
104	米国連邦行政組織による果実消費拡大に向けた取組みに係る調査報告書	10. 8
105	台湾における日本産果実の流通・消費実態調査報告書	10. 8
106	グローバリゼーション下の米国の果汁産業及び新たな生産流通システム実態調査報告書	10. 8
107	インドにおける日本産果実の販売可能性及びインド産ブドウの対日輸出可能性調査報告書	10. 10
108	カナダの果樹農業・政策実態調査報告書	11. 3
109	米国カリフォルニア州におけるアウトウの生産・流通事情調査報告書	11. 6
110	台湾における果実の生産・流通・消費等実態調査報告書	11. 6
111	中東における日本産果実の販売可能性調査	11. 8
112	ブラジルにおけるオレンジ及びオレンジ果汁を中心とした生産・流通事情調査報告書	11. 9
113	中国の主要都市における日本産果実の販売可能性及び中国のアウトウ産地調査報告書	11. 10
114	世界の主要果実の生産・貿易概況 2012年版	12. 3
115	台湾における日本産果実の流通状況等実態調査報告書	12. 6
116	中国におけるブドウの生産・流通・消費調査報告書	12. 10
117	韓国の対米国 FTA 締結による韓国果樹産業への影響等調査報告書	12. 11
118	台湾における東日本大震災後の日本産果実等流通状況実態調査報告書	13. 3
119	中国におけるモモの生産・流通・消費調査報告書	13. 3
120	世界の主要果実の生産概況 2013年版	13. 10
121	台湾における日本産果実の流通状況及び輸入に関連する規制等に係る調査報告書	14. 3
122	世界の主要果実の貿易概況 2013年版	14. 3
123	世界の主要果実の生産概況 2014年版	14. 10
124	世界の主要果実の生産概況 2015年版	15. 3
125	台湾における日本産果実の流通及び輸入促進に向けた諸課題に係る調査	15. 3
126	ニュージーランドの果樹農業及び香港の日本食品・果実事情調査報告書	15. 8
127	海外の果樹産業ニュース 2015年度版	16. 3
128	台湾における日本産食品の輸入規制強化にともなう日本産果実の流通への影響に係る調査報告書	16. 3
129	海外の果樹産業ニュース 2016年度上期版	16. 10
130	世界の主要果実の生産概況 2016年版	17. 2
131	海外の果樹産業ニュース 2016年度下期版	17. 3
132	台湾における日本産果実の流通状況及び輸入促進に向けた諸課題に係る調査	17. 3

